

---

# Sweet&Cool

みずの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Sweet&Cool

### 【Nコード】

N4144V

### 【作者名】

みずの

### 【あらすじ】

高校一年の冬、ハルカが好きになったのは美人な彼女のいる先輩だった。クールだけど本当は優しいタクミ先輩のを知り、尚も想いを募らせるハルカは、やがて先輩と彼女がワケアリの恋人同士だと知って…？ \*本編は完結済み、番外編をちよこちよここと更新していきます。

## Birthday

…私が生まれた日の空は、一体何色だったんだろう。

「せーんぱい」

自分でも驚きな高い声が出た。思わずといった声音に己で苦笑しながら、階段を3段一気に飛び降りる。

「よつと」と着地してから視線を上げると、ため息まじりに唇を歪めた端正な顔と目が合った。

「…またキミか」

首を竦めながら、私を見下ろしてタクミ先輩はそう呟いた。

\*\*\*\*\*

「キミも懲りないね」

大学受験用の参考書だろうか、タクミ先輩はそれで自分の肩をポンポンと叩きながら小さく言う。

「懲りません」

ニコっと笑って返しながら、私は半歩後ろを小走りですいて行った。

「それに私『キミ』じゃないですよ。ハルカって名前があるんですけど」

「キミは『キミ』で十分です」

言い放つように言葉を投げるけれど、いつも先輩の声に冷たさはない。受け入れはしないけれど拒絶もしないこの距離感が、私はいつも心地よかった。

「ねえ先輩」

だから、改めて呼びかける。

…もっと、この距離感を愉しみたいから。

「？」

顔だけわずかに後ろを振り返った先輩が、声には出さずに先を促す。もう一度笑顔を浮かべて、私はぴょんとわずかな段差を飛び越しながら続けた。

「私と付き合って」

「……却下」

前に向き直りながら、先輩はごく短く切り捨てる。

いつも通りのやりとりをして、いつも通りに私はむくれて見せた。そんなこちらの態度には慣れっこなのか、さして気にする風もなく先輩は構わず歩いていく。

「私、こんなに毎日頑張ってるのになあ」

「努力だけは認めてるよ」

さらっと返して、先輩はとある部屋のドアを開いた。続いて中に

入りながら、私は後ろでバレないように舌を出す。

部屋の中は、いつもより整理整頓されて小ギレイになっていた。数学準備室、この教師と仲が良い為、タクミ先輩はいつもここで放課後自主勉強をしている。先輩の追っかけを始めて1ヶ月、クラスメイトに教えられた情報だった。

先生不在な為に奥まで遠慮なく入りこみ、私は先輩の向かいの席に腰かける。

「邪魔しないから見てていいですか？」

そう聞くと、「どうぞ勝手に」とまたもや短い返事が返ってきた。

先輩のことを知ったのはちょうど1ヶ月前、体育で派手に怪我をした私を不在の保健医に代わって手当てしてくれたのがきっかけだった。決して恩着せがましくもなく、かと言って冷たすぎもしない先輩の優しさに惚れたのは当然だった。さりげない温かさが心地よかったからだ。

正直、私としては運命を感じるほどの出会いだったんだ。女の勘…という大げさかもしれないけれど…。

「タクミっ!!!」

…そう、これさえなければ……。

参考書に向かうタクミ先輩を眺める至福の時は、そんなドスの効いたような声に遮られた。わずかな幸せを邪魔された私は、眉を寄せて数学準備室の入り口を振り返る。同じように向かい側で顔を上げた先輩は、ため息まじりに椅子から腰を浮かした。

そこには、息を切らせて準備室のドアを押し開いた体勢のままの一人の女性。私の天敵、マナミ先輩。

……認めたくないけれど、タクミ先輩の彼女だ。

「ちょっと、どういうことよ!!」

「『どういうこと』って…何が?」

つかつかと中へ入ってくるマナミ先輩に対峙しながら、タクミ先輩はとぼけるでもなく本気でそう聞き返した。

「なんで他の女の子とこんなところでコソコソ会ってるのかって聞いているの!」

ビシッと指を指されて、私は思わず肩を竦める。言い訳は聞いてもらえなさそうな雰囲気だったし、きつと私が何を言っても無駄だろう。沈黙が最善の策だと思い、私は黙っていることに決めた。

「いつも通り数学準備室で勉強しようと思ったら彼女と会って、ここにいてもいいか聞かれたから『どうぞ』って答えた…ただだけど?」

怒るでもなく呆れるでもなく……感情の読めない表情で、淡々と事実を先輩が口にする。端的な真実なのに、その言葉すら彼女の声に一蹴されてしまった。

「そんなこと信じられるわけないでしょっ?」  
肩を怒らせて、マナミ先輩は見たこともないような顔でタクミ先輩に詰め寄った。

「あのことだって、ああ言っておきながら本当はこの子と会ったもりなんでしょっ!」

続けてまくしたてるマナミ先輩の言葉の意味は、もう私にはわからない。2人にしかわからない話のようだった。

「…そんなわけないだろ」

初めてため息をつきながら、静かにタクミ先輩はそう答えた。

「…『あのこと』? 『ああ言っておきながら』? …… 一体、なんの話なんだろう。」

「…もういいわ」

しばらく肩で息をしながら呼吸を整えて、マナミ先輩は必死で高ぶる感情を抑えようとしながら言葉を吐き出した。

「あんたとは別れる」

「…えっ?？」

思わず声を上げたのは、宣告されたタクミ先輩ではなく私の方だった。神様に誓って言うけれど、嬉しかったからじゃない。ただ単に驚いたからだ。

「あんなくだらない嘘までつかれて…もううんざりよ! さようなら

「！」  
一方的に告げるだけ告げて、マナミ先輩はドアをピシヤリと閉めてバタバタと去って行く。思わぬ展開に呆気に取られていた私は、開いた口が塞がらない状態でタクミ先輩を見た。

「……………」  
やっぱり何の感情も読み取れない先輩が、改めて椅子に座りなおります。放っておけばまたすぐに参考書を開き出しそうな彼に、私は慌てて声をかけた。

「せ、先輩、追いかけていいんですかっ？」

「別にいいよ」

「で、でも……っ」

先輩が彼女と別れてくれればラッキー…なんて今までは思っていたはずなのに、この状況を目の当たりにしたらやっぱり手放しに喜べるわけではない。言い淀んだ私に、先輩は初めてフツと笑みをもらした。

「今何を言っただって、耳に入るはずないから」

「そ、それは……………」

そうですね、とまでは言葉にはならなかったけれど、私は口をつぐんで椅子に座り直す。目の前の彼は、またいつも通りの先輩に戻る。

聞くべきではないと思ったけれど、私は溢れ出る好奇心の波には勝てず、恐る恐る再び口を開いた。

「ねえ、先輩、聞いてもいいですか」

「……………」

一瞬の沈黙の後、きちんと顔を上げて「何？」と先輩は正面きつて聞き返してくれる。先輩のこういう他人に誠実なところが私は好きだ。どんなにくだらないことを言っても、ちゃんと受け返してくれる。



「『あのこと』と『ああ言っておきながら』って…何ですか？」

顔を伺うように上目づかいになりながら、私はそう尋ねた。開きかけた参考書を再びパタンと閉じながら、先輩はまっすぐ私を見つめ返す。

「…別に大した話じゃないんだけど」

「それでも聞きたいですっ」

即答して、私は「あ」と慌てて右手を顔の前で振った。

「でもっ、先輩が話したくないことなら、別にいいです」

急に居ずまいを正して背筋を伸ばした私に、やっと先輩はプツと笑う。なんだかよくわからないけれど…気分を害されはしなかったみたいだ。

「…もうすぐ誕生日なんだ、俺」

いきなりそう話し始めた先輩の第一声に、私は「え！！？」と声を上げた。

「そういえば知らなかった！！ファンなのに！」

「知らなかったんだ、ファンなのに」

意地悪く私の言葉をキレイに復唱しながら、先輩は苦笑いしてみせる。すみません…と小さくなりながら、私は肩をすぼめた。

「…いや、で、まあ…その当日にお祝いに遊びに行こうって言われたんだけど」

そりゃあそうだろう。女子高生にとって、彼氏のバースデーは大イベントだ。

「他に用があるって、断った」

サラリと続ける先輩に、私は思わず「えええ」と彼女でもないのに抗議の意を口にしていた。

「なんでですかーっ」

当然予想していたリアクションだったんだろう。先輩は熱くなる私にもう一度苦笑を浮かべた。

「毎年、誕生日には出かけることにしてるんだ」

「……どこに？」

聞き返すと、先輩はギョツと背もたれにもたれながら続ける。

「花屋に」

「……………花??？」

小さく頷き返して、先輩は「うーん」と伸びをした。

「…さて、話は変わるけれど」

「あれ、変っちゃうんですか」

わざとコケるようなフリをした私に、先輩は笑う。急に話を変えた彼は、ゆっくりと立ち上がって私を見下ろした。

「誕生日って聞いたら、何て言う?」

「…は?」

先輩の質問の意味がよくわからず、私は思わず聞き返す。多分…いやきつと、相当変な顔をしただろう。

「それは…やっぱり『おめでとぅ』『じゃないですか?』」

わけがわからないなりに答えると、先輩はそこで大きく頷いて見せた。

「そう、それ」

「『それ』??」

…本当に意味がわからない。きつと苦手な化学の授業の時よりも混乱した顔をしているだろう。そんな私を、先輩は笑ったまま見据える。

「なんで『おめでとう』って言うんだらう?」

「そりゃあ…『お誕生日おめでとう』だから…」

「…それっておかしいと思ったことない?」

「???」

ますます訳がわからない。首を傾げて眉を顰めた私は、きつと滑稽だろ。それでも先輩はバカにもせずに、言葉を継ぐ。

「たとえば17年前…俺が生まれたその日、一体何があったんだらう?」

「何って…先輩のお母さんが…」

きつと痛い思いをして…もしかしたらお父さんも電話で仕事中に呼び出されちゃったりなんかして…。それできつと、頑張って頑張って…先輩を生んだんだらう。

「そう、だから…」

口にはしなかったのに、先輩は私が考えたことを読み取ったらしかった。肯定して、続ける。

「俺は自分の誕生日には、母親に『ありがとう』って言いたいんだ」

穏やかに笑いながら、先輩はそう言った。その横顔は…見たことがないくらいに優しい空気をまとっていた。

「母親は俺の誕生日に、『おめでとう』って言ったことはなかった。いつも…『生まれてきてくれてありがとう』だった」

…そうか…だから先輩にとっては、お母さんへの感謝の日なんだ。  
そして…先輩のお母さんにとっては、先輩への感謝の日なんだ…。

「…まあ、俺がこんな風に思えるのは…もう母親がいないからって  
いうのも大きいんだろっけど」

言外にお母さんが既に亡くなっていることを告げながら、先輩は  
ゆっくりと目を伏せた。…だからこそ、きつと余計に…。

自分の誕生のその日を、感謝できるんだろっ。

「……っ」

なんて深い母子なんだろっ。…なんて、愛だろっ。

そう思っただけで、無言のまま涙がこぼれ落ちていた。

「…っちよ…っ」

さすがに泣かれるとは思っていなかったらしい。珍しく慌てた先  
輩が、焦ったままポケットからハンカチを取り出した。差し出され  
たそれを受け取りながら、溢れる涙を拭う。

「それを彼女にも毎年正直に話してるんだけど」

いつもの苦笑いを浮かべて、先輩は肩をすくめてみせた。

「ああ言われてしまうわけだ」

「……なるほど」

マナミ先輩には嘘っぱく聞こえたのだろうか。そうだとしたらな  
んだかマナミ先輩も、そして嘘だと思われたタクミ先輩も…どちら  
も可哀想な気がした。

「でもまさか…こんなに正反対なリアクションがキミから返ってくるとは思わなかった」

「……そうですか？」

「うん。普通なら『マザコン』って気持ち悪がられて終わりかなって」

そんなことないです、と必死で首を左右に振って、私は強調した。

そう、そんなことあるわけない。だって先輩の想いは、痛いほど伝わってくるから…。きっとこの人は、誰よりも優しい人なんだ。

「ねえ、先輩」

改まった私の呼びかけに、先輩は視線を上げる。

「先輩の誕生日って…何日なんですか？」

尋ねると、珍しく先輩は「…ぐ」と言葉を詰まらせた。

「……先輩？」

思いがけない反応に呼びかけるように見上げると、先輩はわずかにそっぽを向く。その横顔は、耳まで赤くなっている気がした。

「…か」

「え??？」

聞き取れずに身を乗り出すと、意を決したような先輩が大きな声でもう一度言った。

「3月3日!」

「……って…えーっと…」

お、雛様…の、日…だよね???

頭を整理しながら考えてから、私は半拍遅れてプツと吹き出した。

「先輩、かわいいっ！！」

「うるさいなあ、だから言うの嫌だったんだ…」

きつと何度かからかわれたことがあるんだろう。赤い顔を手で仰ぎながら、先輩は抗議するような口調でそう答えた。

3月、3日…。

その日学校は休みじゃないけれど、私も先輩と一緒に先輩のお母さんに感謝をしたい気持ちだった。

大好きな、この人を生んでくれてありがとう…。

「ねえねえ先輩」

再度呼びかけると、先輩はさっきのを引きずっているのか、まだ複雑そうな瞳で振り返った。その表情に笑いながら、私は聞く。

「その日の放課後、一緒にお花買いに行ってもいいですか？」

私が生まれた日の空は、一体何色だったんだろう。お母さんは、

その日何を思っただろう。

家に帰って聞いてみることを決めて、私は数学準備室から見える今日の空を見上げた。

甘いはずのそれを、頬を伝う涙と一緒に飲み込むと、それまでせき止めていた何かが一気に溢れ出した。

「夏川」

不意に声をかけられて、私は頬杖をついていた顔を少しだけ浮かす。呼ばれた方を振り向くと、隣の席でクラスメイトがにこやかに笑ってこちらを見ていた。

「これ、食う？」

おもむろに赤い袋を差し出して、そのクラスメイト…鈴元くんはそう尋ねる。

チラリと見やると、中には個包装されたキャンディ。

「…いい、ありがとう」

小さく答えて前を向き直り、私はまた頬杖をついた。

特に気分を害した様子もなく、鈴元くんもそれまで見ていた雑誌に再び視線を落とす。いつも自分が何かを食べる時はこちらにも勧めてくれるクラスメイトだ。普段なら「ラッキー」と言わんばかりにいただくのだけれど、今日ばかりはそんな気分になれない。



3月14日、今日だけは、私がキャンディをもらう相手は一人だけだからだ。

…もらえれば、の話だけれど…。

「なに暗い顔してるの、ハルカ」

不意に机の上に影が落ちた。教室の端の席からわざわざ来たらしい、親友の華江だ。私の席の前に立ち、苦笑まじりだけれどどこか心配そうに、こちらをのぞきこんでいる。

「最近変よ？ 何かあったの？」

「……何も」

「でも……」

言葉を続けようとした華江を、私は片手で遮った。ため息まじりに、思わず机に突っ伏す。

空いている前の席の椅子に座りながら、華江が私を見下ろしているのがわかった。そんな華江に、私は這うような低い声で続ける。

「…何もないから、へこんでんの」

「??？」

当然だけれど、華江は首を傾げた。要領を得ない説明に自分であざ笑いながら、私は再びゆっくりと顔を上げる。先刻よりもびっくりするくらい大きなため息が出た。

「何も……って、つまりタクミ先輩とってこと？」  
ようやく状況を理解してくれたらしく、華江は少し遠慮がちにそう聞いてくる。弱々しく頷きながら、私は恨めしそうな目で第三者の華江を見据えた。

「だって、3月3日の放課後は約束通り一緒に過ごしたけど……それから何にも発展ナシだよ!？」

「まだ10日しかたってないじゃない」

「恋する乙女には『もう10日』だよ、華江」

八つ当たりまがいのことを力説しながら、私は気づくと拳を握っている。

「しかもあるうことが、マナミ先輩が……」

「ああ、この前タクミ先輩と別れたって言ってた？」

「それが『別れてない』って言い出したのっ」

今思い出しても納得がいかない。拳に更に力をこめて、私は抗議の手を緩めなかった。……ただし、当の本人にではなく華江にだけ。

「あの人、売り言葉に買い言葉だ、って!」カップルが喧嘩すれば別れる「くらい言うこともあるでしょ」って!」

「……うーん、まあそれはそうよねえ」

「……そこで納得しないでよお、華江ええ」

今度は泣きつきながら、私は子どものようにすがりつく。……そう、華江の言っていることも、頭ではわかってるんだけど……。

「でもハルカ、前はタクミ先輩がマナミ先輩と付き合っていたようがあまり気にしてなかったじゃない？」

「……」

「今まで通りでいいんじゃない？同じように頑張れば」

「……それは、違うからだよ」

私の答えに、華江が再び小首を傾げる。椅子の背もたれにもたれながら、私は意気消沈を表すように肩を落としたまま続けた。

「私の、気持ちか」

「……ハルカの気持ち？」

前は、どちらかっていうとタクミ先輩に対して『憧れ』が強かった。…というか…もっと言うなら、恋に恋してたのかもしれない。高校生活で、恋愛を楽しみたいって…。だからこちらを振り向きもしない先輩を追いかけるのが楽しかったし、付き合っている彼女がいたってお構いなしだった。

振り向いてくれたら嬉しいけど、振り向いてくれない彼に恋していたかったのかもしれない。

だけど、今は違う。

タクミ先輩を追いかけ始めて、もうすぐ2ヶ月になる。その間に、知った彼のことは多かった。

無口だけど決して冷たくないところとか…。

どんな時でも他人に対して誠実なところとか…。

それだけで、彼に本当に恋するには十分だったんだ。

だから、今の私はあの頃の私とは違う。タクミ先輩への、想いの重さも。…そして、深さも。

黙り込んでしまった私の肩を、華江がポンポンと軽く叩く。無理に聞き出すことはせずに、ただ励ますようなそれが私はなんだか嬉しかった。顔を上げて「えへへ」と今日初めての笑みを浮かべて、華江にこれ以上心配かけないように振舞った。

「ま、大丈夫だよ。恋愛に切なさはずき物だよね」

「…その楽天的な考えの方がハルカらしいわよ」

揶揄するように返したのは、私を慰めるつもりだったのかもしれない。舌を出してみせて、それから私は華江と顔を見合わせて笑った。

「…でも、それでタクミ先輩は何て言ってるの？」

少しの間その後で、華江は「そういえば」と言わんばかりにそう話を続ける。

「え？」

「だから、タクミ先輩はマナミ先輩と別れてないって言ってるの？」

「……」

問題は、そこだった。

「それなんだよねえ……」

今日何度目だろう。吐息を漏らしながら呟いて、私は落胆まじりに肩を落としてみせる。

「何も、言わないんだ。タクミ先輩」

別れたのか別れてないのかも。それ以前に、何も。

「何にもなかったみたいになってるの。マナミ先輩に『別れる』って言われてた時は今は何言っても仕方ない、みたいなこと言ってたのにさ。今度『別れない』って言われたらその通りにしてるみたい」  
「……ふーん……」

半ば呆れたような表情を浮かべて、華江はさっきまでの私と同じように机に頬杖をつく。黒いロングの髪が、サラリと卓上を流れた。

「……なんだか男らしくない男ねえ」

「あ、そういうこと言う!?」

「だって、彼女の言いなりってことでしょ?」

「……うっ……それはあれよ……きつと、深いわけがあるのよ……。ほら、よっぽどマナミ先輩が怖いとか!」

人差し指をたてて力説すると、思ったより声が大きかったらしい。何人かが振り向いた中、少し離れた席に座っていた真帆というクラスメイトが振り返った。私や華江と大体行動を共にしている、仲の良い子だ。

「なになに、春日先輩の噂話?」

「春日?」

言いながら近寄ってくる真帆の言葉に、私と華江は同時に首を捻る。……そういえば、マナミ先輩の苗字はそんなだったかもしれない。

「……っていつか真帆、あなたマナミ先輩と面識あるの?」

華江が聞くと、真帆は「今更?」という顔をして頷いた。

「だって、春日先輩うちの部の部長でマドンナだもん」

「……マドンナ……」

突っ込みどころがありすぎて、何から口にしていかわからないけれど…。とりあえず真帆の死語には絶句を返しておく。

「モテるんだよー、春日先輩。優しいし強いしかっこいいしかわい  
いし。おまけに美人でスタイルいいし」

「…………ごめん、なんか私、別の人の話聞いてる気になってきた」  
そもそも私はタクミ先輩と一緒にいるマナミ先輩しか見たことが  
ない。確かに美人でスタイルがいいのは一目瞭然だけど…………それ以  
外のところは想像もつかない。

「そもそも、真帆って何部だっけ？」

今更な質問をすると、「あんたそれでも友達？」というがっかり  
した返事が真帆から返ってくる。そういえばそもそも部活の話なん  
てあんまり聞いたことがない気がする。

「剣道だよ。ちなみに春日先輩は県の代表者」

自分のことのように自慢する辺り、真帆はきっとマナミ先輩のこ  
とを尊敬しているんだろう。タクミ先輩に向けて怒鳴っているイメ  
ージしかない私には、想像できないんだけど…。

「…ハルカ、あんた、『信じられない』って思ってるでしょ」

「う、…そんなこと…」

「言っとくけどね、春日先輩はホントに人気あるんだよ？それも学  
年・男女問わずね。あんたには悪いけど、どっちかって言うと私は  
春日先輩の方があんな彼氏でいいのかって疑問だわ」

「ちょっと、どういう意味よ」

「だってタクミ先輩って…影が薄いというかキャラが薄いというか  
……………」

「存在が薄いというか」

真帆の言葉にうんうんと同調しながら、華江までそんな風にたた

みかける。「ひどい！」と頬を膨らませてそっぽを向き、私はふてくされたように腕を組んだ。

「確かに、タクミ先輩は目立つ方じゃないけど…でもそこがいいんだから！」

もういい。この際、タクミ先輩の良さは私だけがわかっていればいいんだから。

…でも、マナミ先輩がそんな人だったなんて…意外というかなんというか…。

心のどこかで、私は妙に小さく感心していた。

\*\*\*\*\*

「そういえば、今日ホワイトデーね」

お昼休みになって購買部にパンを買いに出ている時に、今更思い出したように華江が呟いた。いつもはお弁当を作ってくるのだけれど、今日は寝坊をしまして時間がなかった。タクミ先輩のことを考えていたら、なかなか寝付けなかったからだ。

「そうだね」

買ったパンを購買のおばさんから受け取りながら、私は小さく同意する。バレンタインの時ほどではないけれど、校内にも浮き足立ってる生徒は多かった。

「ま、私には関係ないけど」

続ける華江は、購買部の隣にある自販機でレモンティーのボタン

を押す。ガコンと音をたてて出てきたそれをかがんで取り出す彼女を見て、私は思わず「もつたいない」と口にしていた。

「華江つて、そんだけ美人なのに彼氏とか興味ないよね」

「そういうわけじゃないわよ。ただ今は好きになれる人がいないだけ」

同級生には興味を持てる人がいないのか…。かと言って教師に惚れたりするタイプでもない。人に隠したり後ろめたさを抱えるような恋愛はしたくないんだそう。ゆえに、今の彼女には恋愛チャンスが少ないらしい。…本人談だけど。

「で、ハルカは？ タクミ先輩からお返しもらったの？」

「…え、もらってないよ」

「あれ、でもバレンタインは気合い入った手作りチョコあげてたわよね？」

「…うう、一応ね」

「そう。まあ放課後が一番確率高いだろうしね。楽しみね」

華江はそう言うけれど、彼女のいる先輩がお返しをくれる確率自体がそれほど高くないんじゃないだろうか。

「あ、でも今日は無理かもよ」

そこで思い出したように、それまで黙っていた真帆が声をあげた。え、と華江と2人で振り返ると、真帆は口元に人差し指をあてながら「…確か」と続ける。

「タクミ先輩つて弓道部でしょ？ 今日弓道部つて春の大会で全員公欠だもん」

「…え」

…そう…だったんだ…。

全然、知らなかった。昨日会った時も、先輩は大会があるなんて一言も言っていなかったし…。…ううん、彼女でもない私に言う必要



なんてないはずなんだけど…。

「そっかあ、全然知らなかったよ」

胸の痛みを隠して、私は極力明るく振るまうように言った。制服のりボンの辺りでどこかがチクリとする。

…何を期待していたんだろう、私は。なんだか朝からそわそわしていた自分がバカみたいだ。

「あら？でもあれ…って、タクミ先輩じゃない？」

購買部から教室へ戻る途中、渡り廊下に差し掛かったところで、華江が外を見ながらそう言った。「えっ」と顔を上げて、華江の指差す方を覗き込む。

渡り廊下の窓から下を見下ろすと、そこにある中庭に、佇む後ろ姿を見つけた。

「あれ、ホントだ。大会終わったのかな…」

同じように外を見ながら、真帆もそう呟く。

タクミ先輩は、一人ではなかった。

中庭のベンチでお昼ご飯を食べていたらしい女の子の前に立って、何やら話をしている。

「あれって…A組の子だよね」

真帆の言葉に、思い出す。同じ学年だったから見覚えがある子だ。こちらから見える彼女の顔は、先輩と話してとても嬉しそうだった。

「…あ」

次の瞬間、私は思わず声をあげてしまっていた。先輩が、持っていたカバンから、小さな包みを取り出したんだ。かわいくラッピンがされているらしいそれを、先輩は彼女に差し出している。

「…お返し、かな。バレンタインの」

真帆が呟くと同時に、華江が私の背中をバンツと叩いた。

「行つてきなさいよ、ハルカ！」

「え、え??？」

「ハルカだつてお返しもらう権利あるんだから、もらつてきなさいつて！先輩だつて用意してきてるに決まつてるわ」

「いやいや、だからって自分から行くのはおかしいでしょう。」

「そつだよ。さりげなくいつも通り話してれば向こうも出してくるよ。行つておいで！」

真帆も同じように、私の肩を押す。

「……」

一瞬で、色々な思惑が頭の中で交錯した。催促してるみたいでこっちからは話しかけづらい、とか。あの子にもチョコレートもらつてたんだ、とか。お願いだから他の子と笑つて話をしないで、とか。

だけど、一番胸をしめつけたのは、お返しを受け取つてものすごく喜んでる女の子の笑顔。それを自覚すると同時に、私は走り出していた。

## CANDY 2

私の心の中とは裏腹に、空は晴れ晴れと澄み渡っていた。中庭に降り立つと、花の香りが鼻腔をくすぐる。

「タクミ先輩！」

私と同じ学年のあの女の子と話を終えたらしい先輩は、こちらから少し離れた場所から校舎の中に戻って行くところだった。

大声で呼んだ私を、先輩が振り返る。笑顔も浮かべずにいつも通りの無表情だったけれど……心地よい声で、先輩は言った。

「おはよ」

\*\*\*\*\*

「今日、弓道部って大会じゃなかったんですか？」

先輩に追いつきながら、私はそう尋ねた。廊下の脇に移動しながら、先輩は「ああ」と頷く。

この伏せ目がちの仕草が、好き。生まれつきらしい色素の薄い栗色の髪が揺れる。あまり目立つことをしない人だから周りには知られていないかもしれないけれど、実は結構美形なこと私も知っている。

「初戦敗退。怒った顧問に昼から授業に出るように言われてさ」

苦笑いを浮かべながら、タクミ先輩は壁にもたれながら答える。

「先輩も、試合出たんですか？」

聞くと、先輩は小さく肩をすくめてみせた。

「一応ね。俺は団体戦の方だけど」

答えてから、先輩はじつと私を正面から見据える。その視線に思わずドキツとして、私は斜め下の方向に目を逸らした。

「…なんか、元気ないね」

「そ、そうですか？」

思わず、どもってしまう。取り繕うように私は顔を上げて、作り笑いを浮かべた。

「元気ですよ、いつも通りっ」

ガッツポーズまでおまけしてみると、先輩は無表情のまま私を見つめる。

「…ふうん、ならいいけど」

小さく返した先輩の言葉に、「あ、信じてないな」と見透かされてるのを感じた。

こんなつもりじゃないのにな。先輩の前では、いつも笑っていたいのこ…。

「……………」

思わず黙りこんでしまったせいで、2人の間に沈黙が流れる。一度重い空気が落ちてくると、もうどうしていいかわからなくなる。いつもみたいに、軽口を叩ければいいのに。それすら、今の私の口からは何もでてこない。

どれくらいそうしていただろう。その長い時間を断ったのは、昼休み終了の予鈴だった。いつも通りのチャイムの音に、私はいつもより敏感に反応してしまう。ビクリと肩を震わせた私を見て、先輩は「…あー」と声を出した。

「じゃあ、次移動教室だから」

「…あ、はい」

「それじゃ」

軽く片手を挙げて、先輩は踵を返す。

ゆっくりと離れていく後ろ姿が、段々とぼやけていった。

「…それだけ？」

見えなくなる先輩の姿に眩きを漏らして、私は泣くもんか、と目をこする。

先輩は、本当にそれだけで行ってしまった。あの子には、わざわざ中庭まで行ってお返しを渡していたのに…。あんなに嬉しそうな顔をさせてたのに…。

誓って言うけれど、私は『お返し』が欲しいんじゃない。物が欲しいわけじゃない。彼の心が欲しいなんて贅沢も言わない。

ただ、バレンタインチョコにありったけこめた自分の想い。それを、受け止めて欲しかっただけ。自分の気持ちを、知ってほしかっただけ。どれくらい、タクミ先輩が好きかということ…。

ホワイトデーにお返しがもらえたら、タクミ先輩が私の気持ちを知ってくれた証になる気がしていた。恋人がいる先輩が、私の想いを受け入れてくれるわけではない。だから、ただ『知って』ほしかった。

「泣くもんか」

もう一度呟いて、私はキツと顔を上げる。弱い自分へ叱咤しながら気合を入れなおし、教室へと身を翻した。

\*\*\*\*\*

当然だけれど、5時間目の授業はまったく身に入らなかった。担当の国語教師の解説が、右から左へと素通りしていく。そんな苦痛な1時間を終えた後、予想通り華江と真帆が私の席に寄ってきた。

「ハルカ、どうだった？もらえた？」

当然もらえたものだと思っているんだろう。ニコニコと真帆が聞いてくる。

「……」

また泣きそうになって答えられない私の様子を悟って、華江が真帆の肩をトンと押した。それでようやく私がおかしいことに気づいた真帆も、「…どうしたの」と心配そうに聞いてくれる。

「もらえなかった」

「…え」

真帆が絶句する。何と言葉をかけていいのかわからないのだろう。2人が顔を見合わせる。何を言っていていいかわからずに、私も2人も、しばらくの間黙ってしまった。

さっきのタクミ先輩の時のように、流れる沈黙。それを破ったのは、「鈴木ー」と私の隣の席の彼を呼ぶクラスメイトの声だった。

いつものように雑誌を読んでいた鈴木くんは、その呼びかけに顔を上げる。茶色に染め上がった髪をかき上げて、近寄ってくるクラスメイトに「なんだよ」と返していた。

「お前、B組の染谷にホワイトデーのお返ししたん？」

からかうような調子で、そのクラスメイト：小林くんが尋ねる。

「んー」と首を竦めて、鈴木くんは小林くんを見上げた。

「返してねえよ。元々そのつもりないし」

「え、なんで？」

意外そうに食いつく小林くんに、鈴木くんは少しだけ面倒くさそうに眉をよせる。…それよりも私としては、今はあまり聞きたくない類の話題だった。

「だって俺、あいつと付き合う気ねえし」

あっさりと続けて、鈴木くんは再び雑誌に視線を落とす。長い指でページを捲りながら、淡々と続けた。

「義理チョコなら返すけどさ、本命だってわかってるチョコに返してどうすんだって。付き合う気もねえし、こっちにその気はねえのに重いじゃん？そういうチョコ」

「……………」

「…ハ、ハルカ…」

鈴元くんの話がそのまま私にも置き換えられるものだったので、真帆が気を使ったようにこちらを見る。「ひつでえなあ」と笑う小林くんと一緒になって聞こえる鈴元くんの笑い声が、イヤに耳に付いた。

…そうか、そうだったんだ…。

タクミ先輩が、A組のあの子にお返しして、私には返さなかったワケ。先輩が鈴元くんと同じように考えた確証はないけれど、確率は高い気がした。

…そうだよね、重いよね…。ここんとこ毎日毎日「好き」だの「付き合って」だの言ってる私のチヨコなんて。

なんで、そんなことにも気づかなかったんだろう。

「ハルカ！」

遠くの方で、華江と真帆が一生懸命私を呼ぶ声がする。

それが段々と聞こえなくなって、私の目の前は真っ暗になった。





意識を失うほどまではいかなかったけれど、その後私は視界が真っ暗になるのを何度か味わった。それは一瞬のことだけれど、止まない眩暈に頭痛も併発してくる。元々貧血気味な体質な上、昨日は睡眠不足だ。当然と言えば当然かもしれない。

6限目が体育でなかったのが救いだっただけで授業内容はやはり頭に入らなかったけれど、何とか1時間やり過ごす。授業が終わり、心配そうに駆け寄ってくる華江と真帆に大丈夫だからと念を押して、私はすぐに帰宅することにした。付き添いを申し出る2人に、かろうじて笑顔で首を振る。心配してくれるのがありがたかったけれど、1人になりたい気持ちも大きかったからだ。

「……………」  
こめかみの辺りに感じる鈍い痛み、思わず手をやる。ため息交じりに昇降口を出ようとしたところで、私は不意に足を止めた。

そこには、部活の時間になって集まっている弓道部の群れがあった。これからまとまって弓道場に行くのだろうか。その中に見慣れた後ろ姿を見つけて、胸の奥がまたズキリと痛んだ気がした。

「……………」  
くるり、と踵を返して、私は校舎の中に戻る。靴だけを持ってそのまま、裏門の方の出口へと向った。

今あのままあそこを通つたら、タクミ先輩と顔を合わすハメになる。こんな暗い顔を見られたくなかつたし、何より今は彼の顔を直視できるはずがない。

…先輩には、きっと私の気持ちなんて迷惑なんだから。そんなことにも気づかずに毎日会いに行っていた自分が恥ずかしい。

いつもの数学準備室でも、廊下で会った時でも…。先輩は、内心で嫌気がさしていたんだろうか。

3月3日 先輩の誕生日、一緒に過ごさせてもらえて私は調子に乗っていたのかもしれない。

…これは、きっと罰だ。

彼女がいるってわかってる人に、相手の気持ちも考えずに追いかけた自分への。毎日好きだのなんだのと伝え続けたくせに、バレンタイン当日には改まった場面での勇気が出ずに、チョコを先輩の席に置いてくることしかできなかった自分への…。

「…っ」

たまらずに駆け出した私は、裏門へさしかかる角を曲がろうとしたところで何かにぶつかった。

「う、ごめんなさいっ」

ぶつかった相手の人が持っていたカバンを落としてしまい、中に入っていた教科書類が散らばってしまう。謝りながら慌てて拾おうとかがむと、「こちらこそ」と口にして同じくかがんだ相手が「……あら」と声を上げた。

その声にも顔を上げ、相手を見て思わず絶句してしまう。

「……マナミ…先輩」

肩より下まで伸びた髪を揺らして、マナミ先輩が私を見つめていた。

\*\*\*\*\*

「どうかした？」

再び教科書を拾う作業に戻りながら、マナミ先輩はそう口を開いた。今まで聞いたことがない穏やかな声だった。思えば、私はマナミ先輩にはタクミ先輩と一緒にいる時にしか会ったことがない。しかも決まって、そういう時はマナミ先輩は彼に対して怒鳴っている時ばかりだった。……なんか、旦那を尻に敷く妻のように。

「……え？」

マナミ先輩の問いに、私は小さく聞き返した。思わず手を止めてしまい、教科書拾いの手伝いを忘れてしまう。

「目が真っ赤」

言われて、私はバツと自分の顔を覆うように隠した。そんな様子に、マナミ先輩は苦笑いを返してくる。

「具合でも悪いの？」

拾った教科書を全てカバンに入れ終え、マナミ先輩は小首を傾げた。一後輩を心配してかそう声をかけてくれる穏やかな笑顔は、なるほど、真帆が言っていた「春日先輩」像と違わなかった。

「…いえ、ちょっと寝不足で」

答えると、マナミ先輩は「そう」と少し安心したように笑った。立ち上がりながら、「…あなた」と私を正面から見据えながら言葉を継ぐ。

「夏川さん、だったっけ」

「……はい、夏川 悠花です」

「そう、ハルカちゃん」

私の名前を復唱して、先輩はこちらに手を伸ばす。かがんだ時についたらしいスカートの汚れを、軽く払ってくれた。

…なんなんだろう。なんで先輩は私に笑顔向けられるんだろう。彼氏につきまとうっとうしいはずの後輩なのに。…でも、先輩の笑顔はどう見ても裏があるとは思えなかった。

「一度、あなたとは話をしてみたいと思ったのよね」

「……」  
「嫌味……ではないみたいだった。」

「……タクミ……先輩のことですか？」

牽制球を投げられる前に、恐る恐る私は聞いてみた。

「タクミ？ ……違う違う」

今度はマナミ先輩は、声をたてて笑う。右手を顔の前で横に振って否定し、言葉を継ぐ。

「単に個人的に、私があなたに興味があっただけ」

「……え？」

聞き返すと、マナミ先輩は少しだけ目を細めた。遠くを見ているような…ちよつとだけ、切なそうな目。

「あなた、数年前の私にそっくりだから」

「………？」

意外な返答だった。答えて、マナミ先輩は視線を私に戻す。訳がわからずに首を傾げる私を、クスツと笑って見つめた。

「それと、一つ聞いてみたいこともあったの。…あなた………どうしてバレンタインの日…」

言いかけたマナミ先輩は、そこまで言ってハツと口をつぐむ。角の向こうから、誰かがこちらへ歩いてくる気配がしたからだった。

「ホントお前ってひでえ奴だよなあ」

マナミ先輩が黙ったことよって訪れた一瞬の沈黙に割り込んだのは、近寄ってくる誰かのそんな声だった。擲掬するような響きを含んだそれは、聞き覚えがある。さつきまでも教室で聞いていた、小林くんのもだった。

「夏川もかわいそうに」

他にも男子生徒が一緒らしい。誰かはわからなかったけれど、クラスメイトのようだった。5人分くらいの足音が聞こえてくる。その集団から出た名前に、私はハツと息を飲んだ。

……私が……『かわいそう』？

私の名前が出たことで、マナミ先輩も大きな目を更に見開く。もうすぐこちらへ近づいてきそうな角の向こう側の気配と、私の顔とを何度か見比べていた。そんな私たち2人の様子になんて気づくわけもなく、小林くんが言葉を続ける。

「まさか好きな男へのバレンタインのチョコを鈴元に捨てられたなんて思わねえだろうなあー」

……え？

今……なんて……？

「えー、鈴元、そんなことしちゃったんかよー。なんで？ お前って夏川のこと好きだったっけ」

また別の誰かが、初耳、と言った感じで尋ねている。

「んーまあ、ちよつといいかなーくらいに思ってたかな」

「うわ、ひでえ。それだけでそんなことするんかよー」

言葉は非難しているけれど、その相手の声はちつとも鈴元くんを責めてはいない。私は真っ白になる頭で、呆然と立ち尽くしていた。

「まあそれだけっつーか…相手の男が気に入らなかつたのもあるし」  
鈴元くんの言葉に、今度はマナミ先輩が息を飲む。

「夏川の好きな男ってあれだろ？ 2年の冴えない感じの…」

「あー、なんかよく一緒にいるよな」

「で、なんで鈴元がそいつのこと気に食わないんだよ」

周りに畳みかけるように聞かれて、鈴元くんは「あー」と何かを思い出したのか苛立ちの声をあげた。

「2月頭くらいにCD屋でちよつとパクろうと思ったらよ、いきなり後ろから手掴まれたんだよ。店に突き出すわけでもなく警察に突き出すわけでもなく、ただ止められたただけ。スカしてんじゃねえって感じ」

思い出してイライラしている様子の鈴元くんの言葉に、クラスメイトたちは思わずプツと吹き出す。

「それだけかよー、鈴元。店にチクられなくて良かったじゃんかよ」  
「なんかそんな時の目がムカついたんだよなー、かつこつけやがってで、バレンタインの時たまたま2年の教室の前通ったら夏川があいつの席の中にチョコ入れててさ」

「それで、旧校舎側のもう今は使われてない焼却炉に捨ててやった、と」

「そーゆーこと」

得意げに聞こえる鈴元くんの言葉に、私はまた目の前が真っ暗に



なる。

ああ、また眩暈だ…。

冷静にそんなことを思ったけれど、視界は暗さと共に込み上げてきた涙で潤む。

タクミ先輩に…、そもそも私のチョコは届いてなかったんだ。先輩はどう思っただろう。いつもいつも「好き」と言っておきながらチョコも持ってこないなんて…、やっぱり私の想いなんてそんなもんだと思った？それとも、重い気持ちをぶつけられなくて良かった…、って、安堵した？

そんなことを考えていたら、ショックで視界が本格的に暗くなった。

…いや、なりかけた。

「…ちよつと！」

私の遠のきかけた意識を呼び戻したのは、マナミ先輩の大きな声だった。潜んでいた角から飛び出し、すぐそこまで近づいていた鈴元くんたちに対峙する。話を聞かれた気まずさからか、誰かが「や

べえ」と呟いたけれど、そんなマナミ先輩の後ろに私がいるのに気がついて今度は絶句したようだった。

「聞き捨てならないわね、色々と！」

さっきまでの穏やかさはどこへやら、タクミ先輩に怒鳴っている時とも比にならない雰囲気でもナミ先輩は5人を見据える。

最初は驚いていた鈴元くんも、目をわずかに見開いた数秒後には「ふん」と開き直った笑みを浮かべた。

「あんだ、あの男の彼女だろ？ 感謝してほしいね。彼氏へのチョコが1個減ったんだからな」

そう口にした途端、マナミ先輩の顔色がサツと変わったのがわかる。冷静ではいるけれど、怒りを隠せない…本気で鈴元くんを軽蔑しきったかのような目。

「大きなお世話よ」

吐き捨てるように、彼女は言った。

「笑わせないで。あんたにそんなこと言われる筋合いないわ！タクミのことは私とこの子の問題であって、他人にどうこう言われることじゃないのよ！」

肩を怒らせて、マナミ先輩は怒鳴りつける。そんな彼女をなだめることも、私にはできなかつた。

目の前に広がるのは、全く反省も焦りもしていない様子の鈴元くんの姿。

そしてやがて訪れた、私の心を映したような闇、  
ただだった。

「…気がついた？」

目を開ければ、そこには見慣れない天井があった。白いそれにはところどころ少し濃い染みがある。それを覚醒しきらない頭で眺めてから、私は視線を横へ移した。

そこには、白衣を着た校医がいた。どうやらここは保健室みたいだ。なんとなく意識を取り戻しながら、私はどこか冷静な頭でそう認識する。

「貧血ねえ。クマもできてるし、ちょっと無理したんでしょ」

50代手前くらいのその校医は、「気のいいおばちゃん」といった感じだった。撫でるわけでもなくおでこの辺りに当てられた手が、ひんやりとして心地よかった。

「クラスメイトらしい男の子と2年の春日さんが運んできてくれたのよ」

続けて告げられ、思い出す。そうだ、校舎裏で、マナミ先輩と喋ってた…。

…そして、鈴元くんが……。

「……っ」

思い出しただけで、涙が出そうになってくる。それをこらえようとしたのがわかったからか、先生はクルリと踵を返して机の方に戻った。…見ないように、してくれただろう。

「ちょっと落ち着いたら、帰りましようか。車で送っていくから」  
ベッドに横たわったままの私から遠ざかりながら、先生はそう続ける。遠慮しても無駄なことがわかっていたから、私はその言葉に甘えることにした。

それに、今は歩く気力さえあまりない。

力の入らない上半身をなんとか起こして、私は先生に深く頭を下げた。

\*\*\*\*\*

…一体、今日はなんだったんだろう。

短時間に、色んなことが起こりすぎた。頭がついていけないのに、感情だけが複雑に渦を巻く。

「……………」

考えたくなくても、今日の場面場面が思い出される。鈴元くんの顔とか、マナミ先輩の言葉とか…。

…タクミ先輩の、後ろ姿とか。

家に着いて制服のままベッドに倒れこみ、両手で顔を覆う。涙

を必死に堪えていると、喉の奥をツンとした痛みが走った。

届いていなかった私のチョコレートと想い。1ヶ月、その現実も知らずに過ごしていた自分がバカみたいだ。

タクミ先輩に、会わせる顔なんてない。

でも、一番辛い気持ちを抱えている今…。

「…会いたいよ…」

矛盾した想いを呟くと、独白は部屋のひんやりとした空気に溶けて消えた気がした。

胸中が混濁した気持ちで飽和状態になる。顔を覆っていた手を胸の辺りにやって、締め付ける痛みを和らげるためにギュッと制服をつかんだ。

…その時、だった。

「……？」

鞆の中から、携帯電話のバイブ音が聞こえた。まだ力の入らないけだるい手でそれを取り上げると、そこには真帆の名前がある。

心配して電話をかけてきてくれたんだろうか。ベッドに座りなおして、私は通話ボタンを押した。

「……はい」

『あ、ハルカ？』

出ないと思っていたんだろうか、真帆は少し驚いたように私の名前を読んだ。

うん、と小さく答えると、真帆は一番に私の体調を気遣う言葉を与える。なんとか「大丈夫」と声を絞りだして、私は彼女を安心させようとした。

『そっか、倒れたって聞いてびっくりして…』

「うん、ごめんね」

もう大丈夫だと嘘をつく、真帆は遠慮がちに『そんな時に悪いんだけど』と言葉を継いだ。その声がただことじゃない響きを含んでいる気がして、私は先を促す。

『ちよつと華江が大変なことになってて…』

「え？」

一瞬何を言われたのかわからなくて、私は小さく聞き返した。

『電話じゃ話せない内容なんだけど…ホントにごめん、今から出てこないかな？』

申し訳なさそうな真帆の声が、電話越しに私の耳に届く。

『もちろんハルカも今体調よくないし、こちらがハルカの家近くまでいくから…。実は今、ハルカの家から一番近い公園まで来てる

「…ただけど…そこでもうかな？」

確かに真帆の言うように、体調だって良くないし今は何をやる気力もない。華江に何があったかわからないけれど、今の私で力になれる気もしない。

でも、あの華江に何かがあったなんて…ただごとじゃない気がした。

「…わかった。今からいくね」

真帆を安心させようと思えるだけいつも通りの声で、私は答えた。

ボタンを押して、真帆との通話を終わらせる。立ち上がって皺になった制服を手で伸ばしてから、私は部屋を後にした。

\*\*\*\*\*

「……………」

外はもうすっかり暗くなっていった。そのせいか、公園は全く人の気配がない。それほど大きな公園ではないけれど、夜になると不気味さからかなり広く感じてしまう。慰み程度の街灯が、切れる間際なのか何度も点滅を繰り返している。

「…あれ…？」



公園の中、全体を見渡せそうな砂場の近くに来てみたけれど、どこにも2人の姿は見えない。先に来ているはずなのに……、そう思っ  
て、私はもう一度ぐるりと辺りを見渡した。

ちょうどその時、手にしていた携帯が着信音を鳴らした。真帆か  
らのメールだった。

「……」

そこに書かれている一言に、私は思わず目を疑って絶句する。

『ハルカ、騙してごめんね』

騙す……？ 一体、どういうこと？

わけがわからずにしばらく頭が真っ白になったせいか、私はそんな自分に誰かが近づいてきていることになんて気づかなかった。

目の前に一つの影が落ちて、携帯を見ていた視界が暗くなる。

バツと顔を上げた私に、その誰かが小さく呟いた。

「……こんばんは」



3月とはいえ、夜はまだ少し冷え込む。冷たい風が頬を撫でていたけれど、私は目の前の人を呆然と見つめ返すしかなかった。

「騙してごめん。キミの友達に頼んで呼び出してもらったんだ」  
そう言っつて、タクミ先輩は私に近くの本手を指差して座るように促した。

「どう…して…タクミ先輩が？」  
タクミ先輩が…真帆に私を呼ぶように頼んだってということ？そんな必要性が、どこにあるというのだろうか？

会いたいと思ったせいで幻でも見ているんじゃないかという気になって、私は何度も瞬きを繰り返した。

「これ、渡そうと思って」  
立ち尽くす私をベンチに座らせてから、タクミ先輩は鞆の中から取り出した何かを私に差し出した。それは、キレイにラッピングされたプレゼントらしいものだった。私の好きな、黄色のリボンがかわいらしく結ばれている。

「…………先輩…？」  
状況が解せない私は、目の前に立つ先輩を呼ぶことしかできなかつた。苦笑まじりのようないつもの笑みを浮かべて、先輩は私の隣に腰を下ろす。それから、静かに答えてくれた。  
「ホワイトデーのお返し」

テナーの心が心地よくて、そんな思いがけない言葉を私は思わず聞き逃しそうになっていた。

「……え？」

驚きを隠せずに、私は隣の先輩を勢いよく振り返る。

鞆を私と反対側の脇へ置きながら、先輩は依然としてポーカーフ  
エイスを返すだけだった。

「あの…私…タクミ先輩にバレンタインのチョコは…」

鈴元くんに捨てられて、届いていないはずだ。チョコどころじゃない。一緒に入れたカードも、想いすらも。

「……これ…」

言いかけた私の言葉を遮るように、タクミ先輩は再び鞆に手を伸ばした。開けて中から出してきたものに、私は思わず目を見開く。

「……なんで…」

先輩が手にしていたものは、あの日私が先輩の机の中に忍ばせたものだった。凝ったつもりのラッピングは汚れてよれていたけれど、見間違うはずはない。

「旧校舎の焼却炉から、もらってきた」

拾った、という言葉を使わない辺り気を遣ってくれたんだろう。そういえば鈴元くんが、そこに捨てたと言っていたっけ…。でも、それをタクミ先輩が知っているということは…。

「…もしかして、マナミ先輩が…？」

今日の出来事を全部、タクミ先輩に話したんだろうか？

「……」

タクミ先輩はその問いに、肯定も否定もしなかった。ガサガサとチョコレートのラッピングの中から、一枚のカードを取り出す。

「チョコはさすがに…一ヶ月放置されてたから形が変わってるけど…」

言いながら、先輩はそのカードを目の前で扇ぐように動かした。

「こっちは大丈夫だった。…ありがとう」

ありったけの想いを書いた、私のカード。旧校舎の焼却炉が今は使われていなくて助かった、と思った。

だって、タクミ先輩は私の想いを受け止めてくれている。『大好き』と、そこに書かれた字は少し滲んでしまっていたけれど…。

「先輩……迷惑じゃないの？」

今まで心配だったことを、聞いてみる。視界は涙で徐々に潤んでいくのがわかった。今日一日こらえていたそれが、意志に関係なく溢れていく。

先輩は少しだけ笑って、「なんで？」と首を横に振った。

「じゃ、じゃあ…バレンタインにチョコも持ってこないで…私の想いなんてそんなもんだと思わなかったの？」

もう一つ、心配だったこと。口にすると、更に目頭が熱くなつていくのがわかる。

「気持ちなんてチヨコレートに表すだけのものじゃないよ」

カードを胸の内ポケットにしまいながら、先輩はそう答える。代わりに白いハンカチを取り出して、私に差し出した。

「でも私…いつつも軽く『好き』だのなんだの言つてたから…信じてもらえないかと…」

受け取ったハンカチは、石鹸の匂いがした。それで涙を拭いて、私はそう続けた。

「言葉の重さじゃない。…そういうのは…目を見れば本当かどうかわかるから」

「…先輩……」

やっぱり、タクミ先輩は私の知ってるタクミ先輩だ。

他人と真摯に向き合い、どんな言葉もちゃんと正面から受け止めてくれる。クールなように見えて、実はどこまでも誠実な人。

「先輩」

やっぱり、この人が好きだなあと思った。改めて呼びかけて、私は自分もちゃんとタクミ先輩の顔を見つめ返す。

「今は、我儘は言いません。見返りなんて求めない。…だから…せめて好きでいさせてください」

マナミ先輩と別れてなんて言えないし、そんなことまで考えてない。ただ、タクミ先輩を好きでいたい。素直に、そう思った。

「……………」

先輩は、答えなかった。マナミ先輩がいる以上、タクミ先輩は私にどうすることもできない。だから、何も答えられないんだろう。代わりに、優しい穏やかな笑いだけ返してくれた。

今は、それでも十分。

私のこの想いが、伝わるだけで十分。

否定されたり無視されたりしない、それだけが今の私の望みだった。

「ね、先輩、これ開けてもいいですか？」

黄色いリボンをつまんで、私はうってかわって元気に尋ねる。さつきまで流れていた涙を拭いて、隣の先輩を見上げた。

「いいよ」という声が返ってきて、私はクリスマスプレゼントで

ももらつてはしゃぐ子どものようにリボンを引く。するつと抜けた  
それはずして包装紙を取ると、中からはきれいなグラスが出てき  
た。そのグラスの中には、個包装されたキャンディ。

「…かわいい」

思わず呟いて、笑みがこぼれた。

「ねえ先輩、もしかして、マナミ先輩に今日の話を聞いて慌てて買  
いに行ってくれたんですか？」

半ばからかうように尋ねると、タクミ先輩は私からふい、と視線  
をそらす。その表情が無表情に戻っていたので、私は「…先輩？」  
と呼びかけ直した。

この先輩の表情を、私は知ってる…。無表情に隠れた、本当の顔  
は…。

(…先輩…照れてる?)

内心で首を傾げると、先輩は前を見据えたままいつになく小さく  
答えた。

「ちょうどこの前…買い物中に見つけたから」

「え？これをですか？」

指差して確認すると、先輩はゆっくりと頷く。それ以上説明はし  
なかつたけれど、言外に含まれた言葉を私は何となく読み取った。

「えーっと…それはつまり…私にとって？」



先輩は答えなかったけれど、無表情の横顔の耳が、今までにないくらい真っ赤になっているのがわかった。

嬉しくなって、ふふっと思わず私は笑みを漏らす。バレンタインにチョコは届いてなかったのに、やっぱり先輩に想いは届いていたんだ。

そう思うと、なんだかまた目が熱くなってくるのを感じる。でも、さっきまでの辛い涙とは違っているのがわかった。

かわいく包装されたキャンディの包みを一つ開け、私はそれを口に入れる。

甘いはずのそれを、頬を伝う涙と一緒に飲み込むと、それまでせき止めていた何かが一気に溢れ出した。

優しい微笑み      side : Manami

長い校長の話をうんざりしながらもやりすごし、一年を締めくくる終業式が終わった。これから、学校は春休みに入る。長くもなく短くもない中途半端なそれを終えれば、また学年が一つ上がる。

次は、受験の年だ。避けて通れないその学生の運命に抗おうとは思わないけれど、面倒くさいと感じることは否めない。…やりたいことが、制限されてしまうからだ。

遊びに行くことも、大好きな買い物へ行くことも。だから、この春休みのうちに遊んでおこうと思った。終業式を終えた時点で、気分はもう春休みだ。今日もこの後街まで行って、新しくできたショップへ行く予定。帰りに駅前のカフェに寄って…と、柄にもなく浮かれる足取りでそんな計画をたてる。

「あ、マナミ」

さすがにスキップまではしないけれど、いつもより機嫌の良いのがわかるのだろう。声をかけてきたクラスメイトの瑞穂は、そんな私の様子に苦笑い気味だ。

「今日さ、いつものお店に行かない？ 前からマナミが欲しいって言っていたいっつも売り切れのコスメ、新しく入荷したみたいよ」

「え、ホントに？」

瑞穂の言葉に、私はパツと顔を輝かせる。だけど「…あー」とす  
ぐに申し訳ない顔をして、目の前で両手を合わせてみせた。

「ごめん、今日先約があるの」

「えーっ、売り切れちゃうよ?」

「うーん…ごめん…」

謝り倒すように言っていると、瑞穂は「仕方ないなあ」と呟く。

「彼氏との約束もいいけど、たまには私とも遊んでよねー」

膨れっ面で瑞穂はそう続けたけれど、実際に怒ってはいない。「  
ごめんね」と最後にもう一度謝ってから、私は瑞穂と別れた。

人気のコスメも惜しいけれど、それよりも大事なものだってある。

長い廊下を奥へと進み、私は一番端の教室のドアに手をかけた。  
もうほとんどの生徒が帰ってしまっている。教室を出ようとしてい  
た生徒とうまくすれ違いながら中へ入っていくと、一番後ろの席か  
ら窓の外を見下ろしている一つの影を見つけた。

「…タク……」

教室の前の方から近づきながら、その名を呼びかけようとした私  
は思わず口をつぐむ。

「……」

椅子に座って窓枠と壁に肩を寄せたタクミは、外を眺めていた。

その横顔が、少しだけ笑みを浮かべているのに気づいて、私は足を止める。いつも穏やかな笑顔を浮かべるタクミだけど、今日のそれは少し違っていた。…うまく言えないけれど…いつもより、優しい微笑みに見える。

不意に、何を見ているのだろうかとう気になった。私が来たことに気づいていないタクミにバレないように、私も窓の外に目をやる。次の瞬間、その彼の視線の先にあるものに気づいて、私は思わず息を飲んだ。

「……」

そこにいたのは、…夏川ハルカちゃん。友達と楽しそうに校門へ向かっているから、帰るところなのだろう。私とタクミより1学年下で、数ヶ月前からタクミを追いかけている女の子だ。

はじめは人の彼氏にちょっかいを出してきてうつつとつしいと思っ  
たし、気に入らなかつたのも事実だ。だけど彼女自身はまつすぐで  
明るくて、憎めない性格をしていた。加えて、タクミに「好き」だ  
のなんだのとつきまといっている姿は、数年前の自分と被る。そのせ  
いで懐かしくも愛しくも感じられ、私自身今はあの子が嫌いではな  
かった。

でも……。

私にだって、譲れないものはある。離したくないものもある。たとえ、そのせいで誰かを傷つけているとしても…。

「タクミ」

窓の外は見なかったフリをして、私は未だこちらに気づかないタクミに呼びかけた。ゆっくりと振り返ったタクミが、私を見ていつもの笑みを浮かべる。さっきまでの優しい微笑みとは、やっぱり違っていた。ただ、穏やかなだけの笑顔だった。

「行くか」

立ち上がって、タクミは鞆を持ち上げる。こちらへ近寄って来ながら、私の頭にポン、と軽く手を置いた。いつもの大きくて温かいタクミの手だ。

「……」

なんとなく、足が重い。動けずにいた私を、先に歩き始めていたタクミが不思議そうに振り返る。

「…どうかした？」

尋ねながら、タクミは小首を傾げた。

そんな言葉に、私はハッと我に返る。なんでもないとしように首を横に振ってから、それでも私はついていこうとした足をやっぱり止めてしまった。

「ごめん、タクミ」

突然の私の言葉に、タクミはわずかに目を見開いた。さつき瑞穂にしたように、私は目の前で両手を合わせる。そして努めて明るい声を出した。

「さつき瑞穂が教えてくれたんだけど、私がずっと欲しかったコスメが入荷したらしいんだ」

嘘ではない。自分に言い聞かせながら、言葉を継ぐ。

「すぐに行かないとまた売り切れちゃうって言われて…今日行ってきたいんだけど…」

謝る私の言い訳に、タクミはしばらく沈黙した。

嘘だと見透かされただろうか？

タクミとは長い付き合いだけど、こういう時はやっぱり緊張してしまう。タクミの目は、全てこちらの思惑なんてわかっていそうな気がするからだ。

「そっか」

思わず目をそらした私に、そんな咳きが投げかけられる。

「わかった。行ってらっしゃい」

続けたタクミは、約束を反故にされたことを怒る素振りもなく笑顔でそう言った。

「うん…ごめんね」

もう一度謝った私に、今度は少しだけ声をたてて笑う。

「いいよ。別に俺との買い物はいつでも行けるだろ」

早く行くように手で促されて、私は先に教室のドアへ向かった。

そのまま出ようとしたところで、タクミが「愛海」と私の背中に呼びかける。

振り返った私に、タクミは続けた。

「遅くなるんだったら電話して。迎えに行くから」

最近繁華街では女子高生を狙った変質者が多いという噂がある。

そのせいで気を使ってくれたんだろう。そう言ったタクミに、私はニコッと笑ってみせた。

「うん、ありがと」

じゃあねと手を振って、私は教室から廊下へ歩み出る。

後ろ手にドアを閉めて、慣れない嘘をついた緊張感から解き放たれて大きなため息をもらした。

「……………ごめんね……………」

思わず、胸の痛みと共に小さな咳き漏れる。誰の耳にも届くことのないそれが、空しく自分の中で響く気がした。

約束を反故にしたことにじゃない。

嘘を、ついたことにでもない。

「……………別れてあげられなくて、ごめんね……………」

タクミに聞こえないように告げて、私はゆっくりとそこを後にした。



桜舞う春: 4月。

「…げ」

うららかで陽気な天気とは裏腹なそんな声で、私の高校二年生の生活が始まった。

昇降口前の掲示板を見上げて、がっくりと肩を落としてしまう。

「担任、名取だ…」

「きゃーっ、担任、名取先生だー」

私の重々しいセリフと正反対の声が上がリ、私は思わず自分の隣に目をやる。そこには、一年の時に同じクラスで仲の良かった真帆の歡喜する姿。

「今年こそ名取先生のクラスになりたいと思ってたんだよねー。ラッキー」

そう嬉しそうに続ける真帆の言葉に、これ以上ないほどの深いため息が漏れる。そんな私の様子にやっと気づいたのか、真帆は「あれ」というような顔でこちらを振り返った。

「ハルカは嬉しそうじゃないね。せつかく私と同じクラスなのにどこか論点のずれたことを言いながら、真帆は小首を傾げる。」

「…いや、真帆と同じクラスなのは嬉しいんだけどさ…」

「そうよね。ハルカがイヤなのは真帆じゃなくて担任だもんね」  
ため息まじりに私が言うのと、後ろからの声が重なった。

真帆と同時に振り返ると、そこには同じく1年の時に仲の良かった

た華江がいた。サラサラのロングの髪をなびかせて、華江は苦笑いしている。

「えーっ、ハルカ、名取先生のこと嫌いなのっ!？」

華江の言葉を受けて、真帆は驚きの声を上げた。それが辺りに響いたため、近くの生徒が何人も振り返る。慌てて「しーっ」と言いながら手で真帆の口を塞ぎ、私は「もうっ」と怒り気に肩を上げた。

「声が大きいよ、真帆っ」

私の手の下で、真帆がモゴモゴと苦しそうに口を動かす。

しばらくの間の後に真帆から手を離すと、彼女は「ぷはっ」と大げさな息をもらして顔を上げた。それでも懲りていないのか、「ねえねえ、なんでよー」と頬を膨らませて抗議する。

「名取先生、かっこいいじゃーん。なんで嫌いななの？」

真帆が1年の時から名取先生のことを気に入ってるのは知ってる。だから、私は自分が彼のことを苦手だとは言ったことがなかった。

「嫌いなんで言ってないよ。…苦手なだけで」

言い訳がましいことを言っ、私は真帆からのそれ以上の追求を避ける。

そう、何が苦手なのかと聞かれると困る。確かに真帆の言うとおり数学の名取先生はかなりカッコイイ部類に入る。まだ25歳だし、女子高生の私たちからは憧れの的になるのもわかる。教師という立場だけれど型破りな感じで、一部では「不良教師」なんていわれるのも逆に人気の要因になってたりする。

…だけど、何故か私はこの先生が苦手で…

理由なんてわからない、ただの直感だった。

「まあまあ、別にいいじゃん。好みじゃないだけだよ」

「ごまかすように言っと、真帆は納得いかないと言わんばかりに再び頬を膨らませる。

「えー、やっぱりハルカの好みっておかしい！イケメン先生はダメでクールなヘタレは好きだなんて」

続けた真帆のそんな言葉に、私は「ん？」と眉を寄せた。

「何それ、どういうこと？」

「だってハルカ、タクミ先輩のことは大好きでしょ？」

「ちよつと！『クールなヘタレ』ってタクミ先輩のこと！？ひどい真帆！」

声を上げて抗議する私と、膨れっ面の真帆と。そんな2人を「はいはい」と仲裁したのはやっぱり華江だった。

「それより、早く行かないと始業式もHRも遅れちゃうわよ」

言われて、ハツと我に返って私と真帆はにらみ合いそうだった至近距離からパツと離れる。

「ほんとだ、早く行かなきゃ！」

揃って走り出した私たちの姿が面白かったらしく、「やっぱり仲良いわね」と華江が後ろで笑っていた。

\*\*\*\*\*

「…以上、何か質問のある人」

始業式を終えて、形だけのHR。教壇に立つ名取先生は、確かに

真帆の言う「イケメン」に違いなかった。既にクラスの半分くらいの女子は、目がハートになっている気がする。

誰からも手が挙がらないのを確認して、名取先生はHRを締めくくる。だけど、今日から早速指名された日直が号令をかけようとした時に、「あ」と小さく声を上げた。

「そうだ、1年の最後に一応進路希望調査書を出してもらったわけだけど……」

グルリと教室中を見渡したその視線が、何故かピタリと止まる。  
……私の、前で。

「夏川」

「……は、はい」

一番後ろの席で、私は急に名前を呼ばれてわずかに姿勢を正す。  
「この後数学準備室へ来なさい」

なんで私？と思わなくもなかったが、よくよく考えてみれば納得がいった。

(……そう言えば……ほぼ白紙で出したな……私)

高校1年生で進路なんて決められない。そう思って、何も書かないまま出したことを今更思い出した。

面倒くさそうな顔をしただろう。私の表情を見て、名取先生は苦笑いをかみ殺すような顔をした。

仕方ない。HRが改めて終了した後、私は重い腰を上げて椅子から立ち上がった。

\*\*\*\*\*

「で？」

数学準備室に着いて勧められるまま椅子に座った私に、窓枠に腰をかけたその不良教師は第一声にそう言った。

「…『で？』と言われましても…」

無意味なほど丁寧に返して、私は肩をすぼめる。小さくなった私に、名取先生はため息まじりに一枚の紙を見せた。…以前私が提出した、進路希望調査書だ。

「なんで白紙なんだ」

ピラピラとそれを扇いでみせて、名取先生は不思議そうに首を傾げる。だから、思ったままを言ってみた。「決められなかったからです」と。

その言葉を受けて、名取先生は「…ふむ」とわざとらしく真面目ぶって返す。

「なるほどね」

意外な答えが返ってきて、私は俯いていた顔を上げた。

これを書かせた時の去年の担任は、こんなリアクションはしなかったはずだ。進路希望を書け、夢を持って、自分の進む道くらいきちんと見極めろ。聞き飽きたセリフを思い出せば思い出すほど、名取先生の反応は異色だった。

「まあ、そりゃそうだわなあ。俺だって高校1年の時なんてなーんも考えてなかったぜ」

急に口調まで崩した名取先生の言葉は、高校生の私と目線を合わせてくれた気がした。急な変りようにわずかに面食らいながらも、コクリと私は勢いで頷いてしまう。

「ま、でもな、夏川。お堅い教師共はバカだからこういうことでしか生徒を把握できねえんだよ。仕方ないから、付き合っただけくれよ。もちろん決定じゃなくていいんだ。今少しでも興味のありそうなおところを書いてみねえ？」

…この人が不良教師と呼ばれるのがわかる気がした。言葉使いがまるで教師らしくない。でも、目線を合わせてくれるところは私でも好感が持てた。生徒に人気があるのがわかる気がした。

コクコクと促されるまま頷いて、私は差し出されたその紙を受け取る。ボールペンでその紙に文字列を書こうとして、一瞬躊躇した。

「…どした？」

そのためらいがわかったからか、先生はそう声をかけてくる。顔を上げて先生を見つめ返し、私は真面目な面持ちで質問した。

「興味のあること……って言っても、さすがに『お嫁さん』はマズイですよ？」

「……………」

小学生かお前は、という声が聞こえてきそうな顔で、名取先生は私を見下ろす。半ば本気の冗談だったんだけど……。首を竦めて、私は改めてペンを握った。

「じゃあ先生、代わりと言ってはなんなんですけど……」

呆れて言葉を返す気にもならないのか、何も返答しない先生に私はそう切り出す。苦手なはずのこの先生に対して、ニッコリとできるかぎりの笑みを浮かべてみせた。

「タクミ先輩の、進路教えてください」

ハートがつきそうな語尾で言うと、先生は今度は本格的にため息をもらす。そして何を考えているのか、生徒を前にしたこんな状況で机の引き出しから煙草を取り出した。

「…お前ホントに……」

一本取り出したそれに火をつけながら、不良教師はどこか遠い目をする。

「バカだなあ」

言葉とは裏腹に、ある意味感心したようにしみじみと言った。生徒にバカだという教師も信じられないけれど、なんだかそれも名取先生らしい気がする。

抗議するようにわざと頬を膨らませると、先生は煙草の煙をフーッと吐き出しながら視線を私に戻した。

「大体、生徒のそういう個人的な情報は教えられるわけねえだろ」

それはそうだ。だから別に本当に答えてもらえるなんて期待していない。ただ、名取先生はタクミ先輩と仲が良いから聞いてみただけだ。

…そう、そう言えば、どうしてこの2人が仲良しなんだろう？タクミ先輩は部活がない放課後…もしくは部活が終わってから、よくこの数学準備室に入り浸って受験勉強をしていた。真面目…とは少し違うけれど型から外れないタイプのタクミ先輩と、この不良教師では接点が見つからない。

「まあ、今のお前じゃ入るのは難しい大学だっただけ教えといてやる」

わざとらしく唇を尖らせていた私に、先生は譲歩したようにそう告げた。

「……先生、タクミ先輩ってやっぱり頭いいの？」

おそろおそろ聞くと、先生は煙草を口から離してニヤリと笑ってみせる。

「お前よりはな」

返ってきた答えに、私はまた膨れっ面を返してそれに応じた。

これ以上粘ったって教えてもらえるわけもない。諦めて、私は目の前の紙にペンを走らせる。とりあえず、適当に家から一番近い4年生大学の名前をそこに書いた。



書き終えて椅子から立ち上がり、先生に「はい」と手渡す。受け取ってそれを見た先生は、もう片方の手で煙草を灰皿に押し付けながら「お前、適当だろこれ」と口にした。

「どこでもいいから書けて言ったのは先生ですよ」  
すまして答えて、私は踵を返す。二の句を告げない先生の空気を背中に感じながら、私は思わず笑みをこぼした。

あんなに苦手だと思っていたのに、たった数分話をしただけでそんな先入観は全く消え去っていた。不思議な先生だな、と、思う。

「あ、夏川」

帰ろうとした私の足を、先生の呼ぶ声が止めた。

「？」

ゆっくりと振り返った私は、そこにさっきまでと違った少し真面目な表情をした先生を見る。

「一つ、聞きたいことがあるんだけど」

「…？ はい」

その少し緊張を持った空気を感じ、私は体ごとそちらを振り返った。少しだけ、居ずまいを直す。

「教師らしくない質問だから、教師じゃなく一人として聞くけど

…」

前置きをして、先生はわずかに言葉を切った。そして、続ける。  
私をまっすぐに見据えて。

「お前、タクミのこと本気で好きなのか？」と。

本当に先生に聞かれるとは思っていなかった問いだったため、私はわずかに目を見開いた。

だけど…。

「はい」

答える義理はないけれど、なぜかごまかしてはいけない気がした。まっすぐに視線を返して正面きって答え、私は先生を見据える。

「…春日がいても？」

続いた先生の声に、一瞬だけ息を飲んだ。

春日…マナミ先輩。タクミ先輩の、彼女だ。

「……」

答えに詰まった私に、先生は「…どうした？」と重ねて尋ねてくる。

「わからないんです」

正直な今の気持ちを、私ははっきりと告げた。

「私ははじめ、多分タクミ先輩のことが好きというより…タクミ先

輩を追いかけてる自分が好きだったんだと思います」

思春期によくあるという、恋に恋するという状況だ。ゆっくりと話し始めた私を、先生は少しだけ目を細めて見つめていた。

「だから、マナミ先輩の迷惑なんて考えずにただタクミ先輩を追いかけてました。それどころか、別れればいいのになんて思ったことだってあります」

「……」

先生は、口を挟まなかった。…どうして私はこんなことをこの人に話しているんだろう？ 答えはわからなかったけれど、どういいうわけか言葉は止まらなかった。

「…でも、タクミ先輩を追いかけてるうちに本当に先輩のことが好きになって…。そうして冷静に先輩を想えるようになってから、先輩が一番近くにいるマナミ先輩のことも見えるようになりました」  
タクミ先輩抜きで会ったマナミ先輩は、こちらが「なぜ」と思うくらい優しくかった。それはそれまで抱いていた印象すら払拭するほどで…。面食らう私に、彼女は「自分に似ている」と言っていた。

「マナミ先輩を知れば知るほど、私はこの人が嫌いじゃないなと思えました。そうしたら、自然と『別れればいい』とは思えなくなっ  
て…」

あのホワイトデーの後、マナミ先輩と一度だけ話をした。彼氏につきまとううつとうしいはずの私の味方を、どうしてしてくれたのかと尋ねたのだ。鈴木くんの暴拳をマナミ先輩はタクミ先輩に話し、

そうしてタクミ先輩は私のところへ来てくれた。私は嬉しかったけれど、どうしてマナミ先輩がそこまでしてくれるのかわからなかったから…。

『フェアじゃないことは嫌いな』

一言だけそう言って、マナミ先輩はニッコリと笑った。その言葉に、ああ、この人は私をライバルとして戦う気持ちでいてくれるんだと思った。タクミ先輩の彼女なのはマナミ先輩であって、私なんて相手にする必要はないはずなのに…。

そう気づくと、きつとこの人はどこまでもまっすぐな人なんだろうと思った。

「キレイごとと思われるかもしれませんが、私は今あの2人に別れてほしいとは思っていません。でも、いつかタクミ先輩がこつちを振り向いてくれたら…」と思ってしまうのも本当です」

矛盾してますよね、と付け足して少しだけ笑うと、先生は意外にも真面目な顔で首を横に振ってくれた。

そうして、伏せ目がちに長いため息を吐き出す。しかし、そこに呆れなどの負の感情は見受けられなかった。

「…よく、わかった」

先生の私を見る瞳の色が、さっきまでと少し違って見える。私の答えが…彼の望むそれとかけ離れていなかったということだろうか？

「さて、引き止めて悪かったな。そろそろ帰れ」

さっきまでの不良教師の表情に戻り、先生は「しっし」と手で私を促す。自分が質問したくせに、と眉を寄せて、それでも私はどこか憎めないまま再び踵を返した。

「失礼します」と声をかけてドアに手をかけようとした…その時だった。

コンコンと外からノックの音がして、こちらの返事を待たずにドアが開かれる。そこにいた人の姿を見て私は思わず驚きの声を上げた。相手も、わずかに目を見開く。

「…タクミか」

名取先生だけが、普通にその名前を呼んだ。

私がここにいることが意外だったんだろう。先輩は数回私と名取先生を見比べた。そして何かを納得したように頷いてから、「もしかして…」と私に声をかける。

「担任？」

「……はい」

残念そうな声をわざと出すと、名取先生が部屋の奥から「おいおい」とツッコミを入れてきた。不満そうな顔をして、先生はもう一本煙草を取り出す。それに火をつけて一息吸うと、煙を吐き出しながら目を細めてタクミ先輩を見た。

「タクミ、悪いが今日はここ自主勉強で使えねえぞ。俺も帰るか」

一瞬だけ目を見開いたタクミ先輩が、「そうですか」と小さく息を吐く。

「珍しいですね、こんなに早く帰るの」

「まあな。今日うちのカミさん、ちよつと体調壊してんだわ」

続いた先生の言葉にタクミ先輩が何か答えるより早く、私は「えっ」と声を上げてしまっていた。

「先生、結婚してたんですかっ?」

「俺が結婚してたらおかしいのかよ」

相変わらず不満そうな顔をして、先生はそう漏らす。…別にそこまでは言っていないんだけど…拗ねた先生も面白いので放っておくことにした。

「てわけでタクミ」

先生が、改めてタクミ先輩に呼びかける。呼ばれて顔を上げた先輩は、まっすぐに先生を見つめ返した。

「一個頼みがあるんだけどよ」

ニヤリと笑った先生の表情に、先輩は嫌な予感がしたのか半歩だけ後ずさる。

「お前のバカな後輩が、この前の年度末の実力テストで目も当てられない点数取りやがったんだよ。ちよつと補習分の宿題出したところだから、せつかくだから今から見てやってくれよ」

先生が顎で何かを指し示しながら、先輩にそう言った。その顎の示す先は……、

…私？

実力テストで目も当てられない点数なんて取ってません、とか、補習分の宿題なんて聞いてないとか、言いたいことは色々あったけれどそれは全て飲み込んでしまった。こちらを振り返った先輩の向こう側で、先生が私に向けてウィンクして見せたからだ。

…そういう、ことか。

不名誉なやり方だけれど、先輩と2人つきりになれるチャンスを与えたことは感謝しようかな、と思う。

「じゃあ、図書室でも行く？」

いつも通り読めない無表情で、先輩はそう言いながら私を見た。コクコクと慌てて頷いた私は、「鞆取つてきます！」と急いで廊下へ踊り出る。とりあえず先輩をそこに残して、私は長い廊下を全力で走った。

先生に、感謝しながら。

それでもそんな私は、先生の真意なんてもちろんこの時は知るはずもなかった。





長い校長の話が終わり、大半の生徒が眠気を噛み殺した始業式が終わった。今朝発表されたばかりの新しいクラスへ赴き、そこでまた眠気を誘うHRが始まる。

窓際の一番後ろという特等席を得て、春の陽気を感じ……。例に漏れず、俺は担任の話の途中で目を閉じてしまっていた。

「クミ…タクミ…」

温かい気温の中、遠くで誰かが呼ぶ声がある。

「拓巳准一！」

遠のきかけていた意識が、大声でフルネームを呼ばれたその瞬間に戻ってきた。顔を上げると、教壇で年配の担任教師がこちらを見下ろしている。どうやら、目を閉じているだけのつもりが半ば本気で眠ってしまったらしい。出席を取っていたらしく、名簿を持った担任は眉を寄せて怒り気に見据えてきた。

「…すみません」

小さく謝って首を竦めると、担任は出席を取る作業に戻る。去年から同じクラスだった連中が、「ボーっとすんなよ、タクミ」とこちらを振り向いてニヤニヤ笑ってきた。…ボーっとしていたわけではなくて寝ていたんだけれど……それは敢えて言わないでおく。

やはり眠いことに変わりない担任の話は、今年一年を受験生とし

て充実させるといふ説教じみたものだった。何度もあくびを噛み殺しながら、俺はそれを担任に見つからないように顔を伏せる。そうしてやりすごしたHRの後、さっきのことをからかってくる奴らを笑いながら軽くあしらって、俺は鞆を持って立ち上がった。

教室のすぐ横にある階段を下りて、別の教室へ向かう。始業式だけを終えた生徒たちは、部活へ向かう者やもう帰宅する者と散り散りに分かれていった。帰る人とすれ違いながら、俺は階下の一番奥の教室まで歩いていく。

「あ、タクミ」

その教室の中にいた愛海が、俺を見つけて振り返った。ニコッと笑ってこちらへ寄ってくる辺り、今日は機嫌がいいらしい。

「ねえ、ちよつと帰るの待ってもらっていい？ 部活に寄って来たいんだけど…」

この学校では、部活動は大抵2年までとなっている。一応進学校であるため、3年は受験に備えるための学校側の配慮だ。大会等ではよほどの成績を収めているとか、特別の事情がない限りは2年の春の大会が最後だった。

だから、弓道部に所属していた俺も例外じゃない。ただ、愛海は関東大会でも成績を残しているくらいだし、部長を務めていたためまだ後輩たちの面倒を見ているらしい。

「いいよ。じゃあいつものところにいるから」

「…いつものって…また数学準備室？」  
眉を寄せた愛海が、少し不満そうにこちらを見上げた。

静かに受験勉強したいから、俺は放課後に数学準備室へ行くことが多かった。だけど、愛海は以前からそれを快く思っていない。その主のことがあまり好きではないからだ。だから、あえて俺も名取先生の話は愛海の前では出さないようにしている。

「終わったら電話で呼び出してくれればいいよ」  
そう言うと、「わかった」と愛海は一つ頷いた。剣道場へ向かう愛海と廊下の途中で別れ、俺はそのまま別校舎の数学準備室へと向かう。

いつものように軽くノックをするだけでその扉を開くと、そこに思いもよらない人影があった。わずかに目を見開いた俺を認識して、彼女の方も驚いて声を上げる。

「…タクミか」  
部屋の置くにいた名取先生だけが、冷静に俺を呼んだ。

一瞬、彼女がなぜここにいるのか疑問に思う。…夏川、悠花。1年後輩の女の子だ。いつも俺について来ることはあっても、単独ではここに来たことがないはずだった。しかも来る時というのも名取先生のいない時に限ってのことなので、この2人が一緒なのはどこか異色だ。

それでも2人の顔を見比べているうちに、「もしかして…」と思う。

「担任？」

彼女に向けて尋ねると、「……はい」とわざとらしい残念そうな声が返ってきた。落胆したような返事に、「おいおい」と名取先生から間髪入れずにツツコミが入る。そんなやりとり苦笑いを浮かべると、先生は煙草に火をつけながら改めて俺を見た。

「タクミ、悪いが今日はここ自主勉強で使えねえぞ。俺もう帰るか」

先生の意外な言葉に、俺はわずかに目をみはる。いつも遅くまで何かに没頭している先生にしては、珍しい。まあその没頭しているものというのも…授業準備などではない…気がする。

「珍しいですね、こんなに早く帰るの」

息を吐きながら言うと、先生は続けた。

「まあな。今日うちのカミさん、ちよつと体調壊してんだわ」

そんな言葉に再び目を見開いた俺が何か答えるより早く、隣にいた彼女が「えっ」と声を上げた。

「先生、結婚してたんですかっ？」

「俺が結婚してたらおかしいのかよ」

拗ねた子どものような口調で、先生は眉を寄せる。それから、「てわけでタクミ」と、改めて俺に向き直った。思わず俺は、無意識のうちに半歩だけ後ずさってしまう。先生とは長い付き合いだ。何かたくらんでいるんだろっつてことがわかった。この人のこの笑みは嫌な予感がする。

「お前のバカな後輩が、この前の年度末の実力テストで目も当てられない点数取りやがったんだよ。ちょうど補習分の宿題出したところだから、せつかくだから今から見てやってくれよ」

先生が顎で彼女を指し示しながら、そう言う。そうして名指しされた彼女の方は、少し驚いたように先生を見ていた。

「……」

何か言いたそうな彼女は、それでも言葉を飲み込んだようだった。「じゃあ、図書室でも行く？」

ここが使えないんだっいたらそれくらいしか選択肢がない。顔を覗きこんで尋ねると、彼女は慌てて2、3度頷いた。

「鞆取つてきます！」

叫ぶように言って、急いで数学準備室を飛び出していく。

その後ろ姿を見送ってから、俺は改めて室内に視線を向けた。そこに、何食わぬ顔をした先生がいる。

窓枠に腰をかけて、悠然とこちらを見ていた。

「何、企んでるんですか」

ため息まじりに問いかけると、先生は片眉をあげて面白そうに笑う。

「何のことだ？」

尋ねなくても、先生の考えそうなことは本当は分かってる。だけど、抗議する意味を込めて俺は質問していた。はぐらかした先生はそれでも俺の睨み据えた目を見て半ば観念したかのように肩を竦める。そうして、唇の端は持ち上げたまま告げた。

「お前と夏川がくつつきゃいいのに、とと思って」と。

予想していた通りの答えすぎて、深いため息が出る。呆れたように首を振ってから、俺はこれ以上何を言っても無駄だと思って自分も数学準備室を出ようとした。

「奥さん、体調崩してるんでしょう。早く帰ったほうがいいですよ」先生の言葉には答えず、それだけ言って俺はドアに手をかける。

そのままそれを開こうとした俺の後ろで、先生が立ち上がる気配がした。

「准一」

彼女がいた時とは違って下の名前で呼ばれ、俺はゆっくりと振り返る。…そこに、いつになく真剣な顔になった先生がいた。

「前から、言ってるだろう」

そう前置きをして、先生はまっすぐに俺を見据える。『不良教師』なんて呼ばれている時とは裏腹の、真面目な目だった。

「春日とは、早く別れろ」

警告するように、先生はそう告げる。今までに何度も聞いてきたはずのその言葉が、最近はやけに重く聞こえるようになったのは気のせいだろうか？

「先生、油売ってないで早く帰った方がいいですよ」

苦笑い気味に言っってはぐらかし、俺は今度こそ本当にドアを開いた。

「准一！」

珍しく大声を上げて俺を呼んだ先生の声が、いつもより切羽詰まって聞こえる。

「今のままじゃお前のためにならないんだよ。だから…」

言いかけた先生の言葉を、俺は首を横に振って遮った。

「前から、言ってますが」  
さきほどの先生の言葉をなぞって、俺は静かに言う。

「愛海とは別れません。…俺からは、絶対に」  
肩越しに振り返ったままそう告げると、先生は今度こそ本気で大きな息を吐き出した。

そんな彼にそれ以上言うことも見当たらず、俺は廊下へ歩み出る。

先生にああ言われたおかげで、逆に改めて覚悟が決まった気がした。  
た。

「……別れられるわけがない」  
自分の言葉を改めて決意したように顔を上げ、俺は図書室への道のりを踏み出していた。

数学の問題集を、いつでも持ち歩く癖をつけていて今日ほど良かったと思ったことはない。タクミ先輩が数学準備室に通っているのを知ってから、隙あらば便乗できるようにと持ち歩くようにしていた。始業式の今日なんて特に持っている必要もなかったものだけだ、先生に感謝だ。

鞆を取って走って図書室へ向かうと、タクミ先輩はもう先に来ていた。新学年になって初日、さすがにまだ図書委員も決まっていなかったために受付に人の影すら見えない。そんな誰もいない鍵だけが開いた図書室に入ると、先輩と並んで窓際の席に座った。

「出された宿題って、どれ？」

問題集を鞆から出すと、先輩は少しだけこちらに身を乗り出す。こんなに近くにいたことがなくて、思わず胸がドキッと高鳴った。真帆がいつも言うように、先輩は目立たないけれど…。やっぱり、近くで見ると見惚れるくらい美形だ。

先生に出された宿題っていうのは嘘だから、私は適当にそれらしいページを開いて先輩に見せる。家で勉強していてわからなかったところだから、完全な嘘ではないと自分に言い聞かせた。問題集を自分と私の間に置いて、先輩はシャーペンを取り出す。

「どこがわからない？」

耳の近くでするいつもの声に、かぁと顔が赤くなる気がした。



「えっと、ここまでではわかるんですけど…」

そんな緊張感をごまかすかのように、慌てて私は数式を連ねていく。いきづまったところを示すと、先輩はノートにシャーペンを走らせながら細かく説明してくれた。

先輩の教え方は驚くほど上手かった。その辺の教師よりもわかりやすいかもしれない。頭の良い人は教え上手って言うけれど、本当だなと思う。お願いした問題集数ページ分も、あっという間に消化できてしまった。

「タクミ先輩と名取先生って、仲良しなんですね」

居残り学習のようなその先輩の講義を終えて、誰もいないのいいことに図書室でそんな雑談をする。椅子の背にもたれかかった体勢で、先輩は「うーん」と小さく苦笑した。

「仲良し…っていうとなんか違うけど。まあ尊敬はしてるかな」  
不良教師だけだね、と言って先輩は笑う。

「きっかけて何だったんですか？ 1年生の時担任だったとか…？」

重ねて聞くと、先輩は少しだけ天井を仰ぎ見た。少し何かを考え巡らせたようで、しばらくの間の後に「実は」と再び口を開く。

「俺が中学の時の、家庭教師だったんだ」

「えっ!?!」

思いがけない言葉に、私は思わず大きな声を上げる。今日が始業式でなく普通の日で、図書室にいつも通りの人がいたら間違いないと睨まれていただろう。そんな私のリアクションに、先輩はもう一度苦笑いする。あまりにも大声を上げてしまったので、私は慌てて自分の口を手で覆った。

「その時、あの人は大学生で…教育学部に通ってた」

「そう…だったんですか…」

なんだかすごく意外だった。でもそれならこの一見合なそうな2人がよく一緒にいるのもわかる気がする。

「それと…」

何かを続けようとした先輩は、ふと言葉を止めた。

「？ 『それと』？」

小首を傾げて聞き返すと、先輩は何かを思いなおしたかのように頭を振って笑う。

「いや、なんでもない」

何を言おうとしたのか少し気になったけれど、先輩の雰囲気からそれ以上聞いても無駄なようだったので私は言葉を飲み込んだ。代わりには聞かない雑談をする。先輩の担当が去年の私の担任だった学校一不人気教師だったこととか。今日私が名取先生に呼び出されたのは進路希望調査書を白紙で出したこととか。でも、肝心の、先輩がマナミ先輩と同じクラスになったのか…とか、密かに気になっていることは聞けなかった。

なんだか、ここでマナミ先輩の名前を出すと今の空気が一変しそうだったから。

笑ってくれる先輩の表情が、少し曇りそうな気がした。

そこでどれくらい談笑していただろう。いつまでも幸せな時間が続けばいいと思っていたけれど、それも長くはなかった。先輩の鞆の中から、携帯のバイブ音が聞こえる。メールだったらしくすぐに静かになったそれを取り出して、先輩は中を確認していた。

表情からは、何も読み取れないけれど…。

それが誰からのメールなのか、すぐにわかってしまう自分に嫌気がさした。

「ごめん、用ができたからもう行くね」

白い携帯をゆっくりと閉じて、先輩は鞆を手に立ち上がる。急な言葉に「あ、はい」と慌てて立ち上がり、私は先輩に向けて頭を下げた。

「先輩、ありがとうございます」

今日のお礼を言うと、先輩は首を振って笑う。そのまま、ゆっくりと図書室を出て行った。

きっと、メールの相手はマナミ先輩だろう。

チクリと胸が痛むのを感じて、私は制服のリボンをギュッと握った。

仕方がないってことはわかっているのに……。タクミ先輩の彼女は、マナミ先輩なんだから。今日与えられたここでの夢みたいな出来事のせいで、そんなことを一瞬忘れてしまっていた。

去って行く先輩の後ろ姿が、瞼に嫌に焼き付いている。そんな残像を追い払うように頭を振って、私はうなだれるように再び椅子に座った。

『数学準備室にいるって言ったくせに、どこにいるのよ!?!』  
開いたメール画面から、愛海の怒鳴り声が聞こえてくる気がする。  
部活に顔を出すのが終われば電話をくれればいいと言ってあったの  
に、どうやらわざわざ数学準備室へ赴いたらしい。名取先生を快く  
思っていない愛海が直接訪れるなんて、珍しい。

図書室を出て、すぐに電話をかけ直す。コール音で待たされるこ  
となく、若干不機嫌そうな愛海の声が応対した。

『どこにいるの?』

「今から昇降口に行くよ」

答えになっていない答えを返すと、愛海はブツブツと文句を言い  
ながら通話を切った。心なしか早足で、俺は言葉通り昇降口へ向か  
う。長い廊下を抜けて辿りついたそこには、愛海が先に来ていた。  
靴箱にもたれかかって、俺のクラスの分の前で待っている。

「図書室に行ってた」

聞かれる前に、先にそう告げた。

「図書室?」

小首を傾げる愛海に、軽く頷く。

「名取先生が今日はすぐに帰るって言うから、ちょっと」

俺の答えに、愛海は納得したように「ふうん」と小さく頷いた。

「待たせてごめんね」

それから、ようやく気持ちを落ち着けたのかそう素直に謝ってく  
る。

笑って首を振って、俺は自分の靴箱に手をかけた。蓋を上を引いて開くと、そこには靴と一緒にあるはずのないものが置かれていた。

「…あら」  
後ろから覗きこんできた愛海が、どこか面白そうにそう声にする。そこにあつたピンク色の封筒を手にとって、俺は小首を傾げた。

「最近モテモテねー、タクミくん」

揶揄するように笑って、愛海は自分の靴を履く。開けないままそれを鞆にしまい、俺もその後続いた。

「どつするの？それ」

「どつするって？」

答えの分かりきっている質問に、俺は復唱しただけではぐらかす。書かれている内容にもよるけれど、どちらにせよ断るだけだ。

「モテモテの彼氏を持つと辛いわー」

「…よく言つよ」

俺の告白される頻度とは比にならないほど、愛海はモテる。それこそ学年問わずだ。

「それよりタクミ、お昼パスタにしない？ 駅前においしいお店あるって教えてもらったんだ」

「いいよ」

短く返事を返して、俺たちは並んで昇降口を出る。校舎の外に出るから、なんとなく振り返って図書室の辺りを仰ぎ見てしまった。

「タクミ？」

呼ばれて、ハツと我に返る。少し先を歩いていた愛海に追いついて、そのまま学校を後にした。

\*\*\*\*\*

友達に聞いてきたというパスタ屋の料理を、愛海は終始絶賛していた。その後いつも通り買い物に付き合い、それから家へと向かう。父親と二人暮らしの俺の家で受験勉強するのも、今日のように学校が半日の時や休日の過ごし方の一つだった。

「それでね、瑞穂がねー」

愛海の友達の話聞きながら家の鍵を開け、中に入ろうとした、その時だった。玄関にある物を見つけ、俺は思わず目を見開く。それに気づいたからか愛海も一瞬言葉を失い、俺の顔を見上げた。

あるはずのない女物の靴が、そこに並んでいる。驚きはしたが瞬時にそれが何を指し示しているのか理解して、俺は自分も靴を脱ぐ。後についてくる愛海と一緒に、そのままリビングへ向かった。

「あ、お帰りい」

ソファに体を横たえた女が、俺と愛海を見て力なく笑った。

「…何してんの」

「お久しぶりです」

俺の言葉と、愛海の声が重なる。声をかけられた張本人は、どこか辛そうに上体を起こしながら俺を無視して愛海に「久しぶり」と言葉を返した。

それからようやく俺の方を見て、わざとらしく頬を膨らませる。

「久しぶりに帰ってきた姉にその態度？ 相変わらずクールな弟ね

」

言葉ほど責める響きはない。そう言って、彼女はまたソファに横になった。

数年前に結婚してこの家を出ていった、姉の理沙だ。性格は男まさり…というか、サバサバしている方だと思う。愛海と俺は幼馴染なので、当然2人も昔からの顔見知りだ。

「具合が悪くてさあ…本気で辛いから、帰ってきた」

確かに本当に辛そうに、姉はそう言う。冷やしたタオルをおでこに乗せながら、大きくため息を吐き出した。

「家にいても良かったんだけど、旦那に殺されそうだからこっちに来たの」

「『殺されそう』？」

大げさな言い方に思わず吹き出して、俺はそう姉の言葉を繰り返した。

「そう。だってね、あいつ、具合が悪い私に昨日の夕飯何を作ってくれたと思う？カツ丼よカツ丼！」



思い出しても腹が立つのか、吐き出すようにそう言う。

「いっぱい食べて元氣出した方がいいから、だって。それで今日の朝はウナギよ？殺す気がって！」

ここにはいない旦那への不満を並べながら、姉は続けた。

「それより准一のお粥食べたいーと思ってさ」

「あ、私でよかったら今作ってきます」

愛海が慌ててそう言って、台所の方へと消えていった。

その後ろ姿に「ありがとう」と声をかけてから、姉は乗せた夕オ  
ルを取る。そしてじっと俺を見据えてきた。

「まだ付き合ってるのね、2人は」

「…それがどうかした？」

今日名取先生に言われたことを思い出し、姉にも同じことを言わ  
れるのかという予感がした。眉を寄せてそう不機嫌そうに聞き返す  
と、姉は意外にも首を振る。

「別に。仲良くね」

力なく笑って言ったその言葉に、俺はわずかに目を見開いた。そ  
う言われるとは思ってなかったからだ。

「それよりさ」

姉の体調の悪さがどれくらいのものなのかわからなかったので、  
とりあえず体温計を手渡ししながら俺は話を変える。

「旦那さんにここに来ること言うてから来てるわけ？」

尋ねると、姉はとんでもないというように大きく頭を振った。

「言えるわけないでしょ！連れ戻されて今度はステーキでも出され  
たらどうすんのよ」

「いや、さすがにそれはないと思うんだけど」

苦笑いしてツッコミを入れながら、俺は続ける。

「でも向こうは『今日は早く帰る』って言ってたから、今頃家にいないのに気づいて心配してるんじゃない？」

携帯すらチエックしてなさそうな姉にそう言つと、「…准一、あんたから連絡しといて」というやる気のない返事が返ってきた。

ため息まじりに携帯を取り出して言われたようにしようとした時、「…ねえ」という控えめな声が俺を呼んだ。

携帯をいじりながら「ん？」と返事をする、姉がどこか真剣な顔をしているのに気づく。それに気づいたから、俺は携帯から視線をはずしてそちらを見つめ返した。そんな俺に、姉は言葉を紡ぐ。

「准一、今幸せ？」

思いがけない問いかけに、俺は一瞬目を見開いた。姉の視線が、じつと俺に注がれる。

「うん」

と頷くと、姉は「…そう。ならいいの」と少しだけ微笑んで再び目を閉じた。そんな姉を見つめてから、俺は愛海のいる台所を振り返る。

少しだけ、胸の痛みを感じながら…。

\*\*\*\*\*

その日の夜中ずっと姉の看病をさせられ、気づくと朝になって睡眠不足のまま学校へ向かうハメになった。昼休みになって、購買へ向かおうとした廊下で名取先生に出くわす。

「…理沙、具合どう？」

看病を俺に任せたことを謝りながら、先生は俺にそう尋ねた。体調の悪い人間にカツ丼やらうなぎやらを食べさせようとした間違った愛情を注ぐ旦那は、他ならないこの人だ。

俺たちは周りに聞かれないように、互いに声を潜める。

「ちよつと辛そうですけど、熱も微熱だし大丈夫だと思います」

「風邪？」

「…さあ」

正直にわからなかったので、軽く小首を傾げて応える。

微熱の割りには悪寒はないようだし、吐き気がするという割りに愛海のお粥は平らげていた。近頃急に暖かくなってきたところだから、少し体調を崩しただけかもしれない。

姉がうちに来ていることを連絡すると先生は昨日すぐに駆けつけると言ってくれたけれど、それを断固拒否したのもやはり姉だった。おかげで先生は心配で仕方がなかったみたいだ。目の下にうつすらクマができています。

それに気づいて思わず笑った俺に、先生はその理由に気づけずにとただ首を傾げた。

「それより准一、今日は俺も放課後すぐに学校出てそっちに行くか

ら……」

「ああ、はい。父も楽しみにしてますよ。娘が体調悪い時に不謹慎ですけど」

俺の父親と先生はとても仲が良い。それは結婚前からのことで、大学時代2人が付き合っている時からだった。

「じゃあ、車に乗せてってやるよ。…放課後に、いつもの場所で  
そう言い置いて踵を返そうとする先生を、俺は慌てて呼び止める。  
「すみません、ちょっと放課後用があるんで……」

言葉を濁すように言いかけた俺に、先生は振り向きながら意外そうに眉を上げた。

「何、時間かかる用事？」

「……いえ、多分すぐ終わると思いますけど」

部活ももう引退したし、先生には俺の言う「用」が思い当たらなかったんだろう。しばらく眉を寄せて俺を見た後、何かに気づいたらしく「ああ」と手を叩いてみせる。それからニヤニヤと笑い、俺の肩をわざとらしく抱いてきた。

「モテる男は大変だねえ、准一くん」

「……そんなんじゃないですから」

ため息まじりに先生の手を肩から離させて、俺は呆れ気味にそう応えた。

\*\*\*\*\*

用が終わるまで車で待つてくれているという先生に感謝しつつ、俺は放課後旧校舎へ続く渡り廊下に行った。この学校は校舎が新しく建てられたばかりで、旧校舎は今では特別授業を行うくらいにしか使用されていない。きっと、そのうち取り壊されることになるんだろう。

そんな校舎の渡り廊下で何の用があるのかというと、昨日下校時に見つけた靴箱の中の手紙のせいだ。

ピンク色の封筒の中には、今日の放課後にここで待つているということと差出人の名前が書かれていた。どうやら二年生の女の子らしいけれど、名前を見てもピンと来ることはなかった。

「先輩、来てくれたんですね」

先にそこに来ていた女の子は、俺が来たのを見て嬉しそうにその声を上げた。わずかに目が潤んでいる気がする。

「こんにちは」

とりあえずどう切り出しているかわからなかったので、笑顔で挨拶を試してみた。

「あ、あの、先輩。手紙にも書いたと思うんですけど…」

少し俯き加減に、もじもじしながらそう話を切り出してくる。そんな彼女を見つめながら、頭の中では「…やっぱり見覚えもないな」と冷静にそんなことを考えていた。名前を見てもわからないはずだ。ショートカットのこの彼女と、会ったことのある記憶すらない。

「前からずっと、拓巳先輩のことが好きなんです！良かったら付き

合ってください！」

下を向いたまま思い切つて……という感じで、彼女は大きな声でそう言い切つた。真つ赤な顔で俯く彼女を見て、俺は逆に自分の中の何か冷たい部分があるのに気づく。この手の告白をされる時は、大体そうだった。

……きつと、あの子ならこんな言い方はしない。俺の目を見て、いつだつてまっすぐに迷いのない言葉をくれる。

……そう思つてしまつている自分にハツと気づき、俺は目の前の彼女にバレないように頭を振つた。……何を、考えているんだろう俺は。

「ありがとう」

地面を見据えたままの彼女にそう声をかけると、ゆっくりと顔を上げる。ようやく目が合つて、俺は少し困つたように笑つた。

「でもごめん。俺、付き合つてる人がいるから……」

「春日愛海先輩ですよ」

俺が言い終わらないうちに、彼女はさっきまでとはうってかわつて低い声でそう口にした。その変わりように一瞬驚いて、俺は小さく目を見開く。

「それでも構いません」

「……………え？」

瞬時には彼女の言っている意味が理解できなくて、俺は思いつき返事が遅れてしまった。さっきまでのいじらしい風な彼女の言葉

とは、到底思えないセリフだ。

「それがダメなら、愛海先輩と別れたら私と付き合ってください！  
それまで待つてますから！」

「……いや……あの……」

勢いづいたらしい彼女は、まっすぐに俺を見据えてそう言う。

思わず気圧されそうになったけれど、こつこつタイプははつきり  
と言わないとダメだろう。そう思って、わずかに背筋を伸ばすと俺  
も改めて彼女とまっすぐに対峙した。

「ごめん、それはできないんだ」

「……愛海先輩と別れることはないっていうことですか？それとも、  
別れても私とは付き合えないってことですか？」

「……ごめん」

答えになっていないことは自分でもわかっていたけれど、そう謝  
るしか俺にはできなかった。

「じゃあ……期待しないで好きでいるくらいはいいですよ？ 私が  
勝手に想ってるくらいなら」

今までに何人かに言われた言葉が、彼女の口から漏らされる。

実際、そんなことはあり得るんだろうか。見返りを求めずに何も  
期待せずにただ相手を想うだけ……そんなことが、人間に可能なんだ  
ろうか。

だから、俺はいつもの言葉を返す。

「…ごめんなさい」

傷つけるとわかっていても、そこから拒否しないと彼女だって前に進めないだろうから。

頭を下げた俺に、彼女はついに涙を零したようだった。ヒクツと涙まじりの声をあげながら、たまらずに駆け出して行ってしまふ。

泣かせたいわけじゃなかったんだけど……。なんともいえない罪悪感に苛まれながら、俺は自分も踵を返した。彼女とは別の方向に向けて、ため息まじりに歩き出す。

そうして数歩歩いていったところで、ザツと物陰から目の前に人影が現れた。こんなところに誰もいないと思っていたので、俺は驚いて目を瞪る。俺の前に躍り出たその人物は、眉を寄せて俺を睨み据えていた。会ったことがあるようなないような…記憶が曖昧な女子生徒だった。

「拓巳先輩、今ちょっといいですか」

低い声で告げる彼女についてわかったことと言えば、とにかく俺に対して怒っているらしいことだけだった。

「…君は？」

尋ねると、彼女はこちらを睨んだまま「小野寺といいます」と唸るように言った。

「小野寺真帆です」



フルネームを続けた彼女に、俺はようやく思い当たる。そつだ、確か愛海の剣道部の後輩で……。

「ハルカの、友達です」

続きは彼女が直接そう告げる。黙然と見つめ返す俺に、彼女は低い声音を搾り出すように言った。

「お話があります」

タイミングよく吹いた風が、俺と彼女の髪を掻き乱していった。

始業式の放課後、私は部活の集まりで剣道場に来ていた。今日はさすがに本格的な練習はまだ始まらない。今年度の予定の確認と、ちよつとした話し合い程度の顔合わせだ。

この春引退した3年生から部を引き継いだ私は、自分でも意外なことに主将の座を任されてしまった。半ば独断と偏見で私を選出したという春日愛海先輩が、引退した身でありながら様子を見に来てくれたことがありがたい。

「春日先輩、今日はありがとうございました」

毎日とはさすがにいかないけれど、引退しても先輩はちよくちよく部活に顔を出してくれることを約束してくれた。それも含めて、部員たちが帰り支度を始めた道場で私は先輩に御礼を言う。笑って首を横に振った先輩は、やっぱり私の憧れだった。

「それより真帆ちゃん、頑張ってるね。やることはたくさんあって大変だと思うけど」

「…先輩ー、今からプレッシャーかけないでください」

泣きまねをしながら答えると、先輩はフフ、と笑う。親友の恋敵ではあるけれど、春日先輩は女の私から見ても魅力的だった。才色兼備、容姿端麗、文句のつけようがない。

「愛海先輩ー」

遠くから、男子剣道部の連中が何人か、先輩へ向けて大きく手を振っているのが見える。非の打ち所のない先輩に、こうして男たちが声をかけてくるのも当然と言えば当然だった。

「これから、昼飯でも一緒に行きませんか？ 駅前にうまい店見つけたんです」

デレデレと鼻の下を伸ばす連中をだらしないと思いつつも、春日先輩が相手じゃ仕方のないことだと思おう。

「うーん、ごめん。先約があるんだ」

申し訳なさそうに顔の前で手を合わせて、先輩はそう連中に応じる。そう言われるのも半ば予想していたんだろう。彼らは大してシヨックを受けた様子もなく、わざとらしく肩を竦めてみせた。

「たまには彼氏とだけじゃなくてかわいい俺ら後輩とも飯ぐらい食いに行ってくださいよー」

「うん、考えとく」

ニツコリ笑って、春日先輩は連中の誘いをいとも簡単に退けてしまった。こんな感じで、奴らは以前から先輩に振られっぱなしだ。

そう、先輩はモテるのに男に全くなびかない。彼氏がいるから当然と言えば当然だけど、私からしたらその彼氏が問題だった。

…拓巳、准一先輩。

春日先輩の中学時代からの彼氏らしく、私の親友ハルカの想い人でもある。だけど、『完璧』を絵にしたような春日先輩にはどうしたって釣り合わない男だろうと、学校内でもっぱら評判だった。

タクミ先輩はタクミ先輩なりにモテることもあるようだけれど、どちらかと言えばオーラがない。見るものを引きつける春日先輩とは正反対で、大勢に紛れてしまえば見つけるのも困難なほど、普通

の人だった。

だから、春日先輩とタクミ先輩では不釣合いと噂されている。だけどハルカは、そんな『普通』なタクミ先輩が好きなんだと思う。ハルカだってそれなりにモテたりもするんだから、何も完璧な彼女のいる冴えない男を追っかけなくたっていいんじゃないかと思うのだけれど、こればかりは本人以外どうしようもない。

だから、私は黙って見守ることにしていた。……そう、あのことがあるまでは。

\*\*\*\*\*

部活を終え教室へ一旦戻ろうとした時、前を素通りしようとした図書室の中にハルカがいるのが見えた。どこの部活にも所属していないハルカがこんな時間まで残っているとは思わなくて、私はせっかくだしお昼ごはんにでも誘おうと図書室の中へ踏み入った。まだ図書委員も決まっていなかったため、鍵が開けられているだけのそこはハルカ以外の人はいなかった。

私が入ってきたことに気づいて、ハルカが少しだけ目を見開く。

「よっ」

片手をあげて挨拶し、窓際の机についているハルカに近づいた。

「まだ残ってたんだ、ハルカ。ねえ、このままランチに行かない？」

軽い男がナンパする時のように軽いノリで声をかけると、ハルカは苦笑い気味に「いいね」と小さく返してくる。その表情がどこか作っているっぽくて、私はこの時やっとハルカの元気がないことに気づいた。

「…ハルカ？」

そうして私が傍へ行こうとすると、少し慌てたようにハルカは机の上の物を片付け始める。ちらりと見えたその手の物は、数学の問題集。それが見えた瞬間に、私は何となくハルカの暗い表情の原因がわかった気がした。

「…ねえ…ここにさっきまで誰かいたの？」

『誰か』なんて聞かなくてもわかっていたけれど。遠慮がちに、私はそう尋ねていた。

「…ああ、うん……」

筆記用具も鞆にしまいながら、ハルカは小さく頷く。

「…タクミ先輩が、ちよつとだけね。すぐに用事があるって帰っちゃったけど」

予想通りの答えが、ハルカの唇から弱々しく漏れてきた。

それから思い出す。さつき、剣道場で男子部員の誘いを断っていた春日先輩の姿を。…タクミ先輩との先約がある…みたいだったっけ。

そう気づくと、私は自分のことでもないので少しだけ胸が痛んだ気がした。

…恐らく、ハルカもそのタクミ先輩の『用事』というのが春日先輩に会うことだと気づいているんだろう。そうじゃなきゃ、きっとこんな顔しない。元気が取り柄のハルカが、こんな表情でいるのはそれしか考えられないから。

「…仕方ないよね」

私が考えていることがわかったんだろう。また傷ついた苦笑いを浮かべて、ハルカは言った。

「…それでもいいって思ったのは、私なんだから…」  
小さく呟くように、ポツリとそう言う。

「愛海先輩がいても…、タクミ先輩を想い続けるだけでいいって言ったのは…私なんだから…」

ハルカの言葉に、ズキン、と私の胸が痛みを訴えた。…そうか、これは…ハルカの痛みだ。

今にも泣き出しそうな顔をしたハルカは、それでも涙を零しはしなかった。どこかこらえた表情で、眉間に必死で皺を寄せる。そんなハルカを力いっぱい抱きしめ、姉が妹を宥めるように、私はハルカの頭を撫で続けた。

\*\*\*\*\*

…そう、だから私は非常に怒っていた。

それでも自分の出る幕なんてないとわかっていたから、私は何があってもハルカが傷ついた時はただ傍にいてあげようと思った。自分ができるのは、それしかないと思っていたから…。

…だけど、そんな私の考えが覆ったのは、翌日の放課後のことだった。その日は、朝から元気なハルカに復活していた。一日で何とか気持ちを切り替えただらう。こういうところが、この子のすごいところで愛しいところだと思う。本気で心配する華江と私に、それ以上気を使わせないように無理しているところもあるんだらう。

そんなハルカと別れ、放課後、部活の為に剣道場へ向かう途中。旧校舎へ続く渡り廊下に、2つの影を見つけてしまった。

「……………」

ただならぬその雰囲気は、どうも漫画でよくある「告白シーン」ってやつみたいだった。告白しているらしい女の子の方は、去年隣のクラスだったショートカットの子だった。…名前は……思い出せない。

私が目を見開いた理由は、その相手の男の方だった。低くも高くない身長に、あの覇気のない後ろ姿。私の思う、「普通」の代表格のあの男だった。

…そして今、私が一番許せない存在。

盗み聞きなんて良くないことはわかっていたけれど、どうしても気になってしまった私は音を立てないようにそちらへ向かった。2人からは見えないように、でもあちらの声は何とか聞こえる距離で…物陰に身を潜める。

「…愛海先輩と別れることはないっていうことですか？それとも、別れても私とは付き合えないってことですか？」

聞こえてきたのは、彼女の方のそんなセリフだった。

「……ごめん」

漫画や映画のヒーローのような爽やかな断り方もできないらしいその「普通」な男は、ただそう言って頭を下げた。…聞いているこっちが、情けなくなる。

「じゃあ…期待しないで好きでいるくらいはいいですね？ 私が勝手に想ってるくらいなら」

どうしても退きたくないらしい彼女は、最後に継るように男にそう言った。

……ああ、まただ。

漠然と、そんな風に思う。



こつしてきつと、昨日のハルカのような思いをこの先彼女もするんだろ。陰で勝手に思うだけでいい、そう願ったはずなのに、やっぱり何かを期待して裏切られて傷つく…なんて思いを。

自業自得、そう言われてしまえばそれまでかもしれない。でも私は、ハルカやこの彼女が悪いとは思えない。だって、人間ならそれは当たり前だから。

思うだけでいいと…報われなくてもいいと思いながらも、振り向かない相手に傷つくなんてこと…人間の感情じゃ当たり前のことだから。

だから、私は思う。悪いのは、はっきりしないこの男の方だ。

相手が少しでも期待してしまうことを知りつつ…はっきりした態度を取らない、この男の方だ。

……そう、私は思ったのだけれど……。

「…ごめんなさい」

再度頭を下げたタクミ先輩のそんな声が、私の耳に届く。その言葉を確認してから、私は「…え？」と物陰で目を見開いた。

…確かに、タクミ先輩は謝った。勝手に好きでいると言った彼女を…彼は、はっきりと拒んだんだ。

ついに泣き出したらしい彼女は、たまらずに駆け出して校舎の方へと消えていってしまふ。その後ろ姿を見送つてから、ため息まじりに身を翻したタクミ先輩が、こちらへ近づいてくる気配がした。

…正直、私の怒りはこの時に最大限を迎えていた。

許せない、この男だけは…。

そう思うと、考えるよりも早く私は潜んでいた物陰から飛び出していた。もう目の前まで来ていたタクミ先輩は、私の姿に驚いて半歩だけ後ずさる。

「拓巳先輩、今ちよつといいですか」

自分でもびっくりするくらいの低い声音で、私は目の前の男を睨み据えた。

「…君は？」

尋ね返されて、私は「小野寺といいます」と静かに名乗る。

「小野寺真帆です」

そうフルネームを続けると、彼は何か気づいたように少しだけ眉を持ち上げた。きつと、春日先輩から何度か私の名前は聞いたことがあつたんだろう。春日先輩のことに思い当たつたらしい彼に、付け加えるように私は言う。

「…ハルカの、友達です」  
続けた私を、タクミ先輩は黙ったまままっすぐに見つめ返してきた。

「お話があります」

私の背中を押すようにタイミングよく、力強い風が2人の間を吹き抜けていった。

\*\*\*\*\*

「…この前はどうもありがとう」

物陰という狭くて第三者から見たら怪しいその場所から移動して、開口一番。この上ないくらいに私が睨み据えた相手は、意外にもそんな言葉を返してきた。わずかに面食らって、私は「…え？」と眉を寄せる。

「…ホワイトデーの時」

短く言うタクミ先輩に、私は「ああ」と思い当たった。あの時…鈴木くんの暴拳にシヨックを受けて倒れたハルカ。そんなどん底からハルカを救ってくれたのは、認めたくないけれどやっぱりタクミ先輩だった。

春日先輩から事情を聞き、その春日先輩を通して私にハルカを呼び出すように彼は頼んで来た。結果、それでハルカが元気になったし、私もそれでよかったとその時は思っていた。だけど……。

「あの時、拓巳先輩に頼まれた通りにしなければ良かったです」  
今の本当の気持ちを、私は唇を噛み締めながら呟いた。

私の言っている意味がわからないんだろう。わずかに目をみはつて、彼は私をまっすぐ見つめ返す。……認めたくないけれど、間近で初めて見る彼は確かにハルカの言うように「目立たないけどよく見たら美形」に違いなかった。

「聞きましたよ。あのホワイトデーの時の話は。ハルカ、嬉しそうでしたから」

届いてなかったと思っていたチヨコと気持ちを受け取ってもらえて、ハルカは本当に喜んでた。そして……見返りなんて求めないから、今はせめて好きでいさせてほしい』と言ったハルカを、タクミ先輩が拒まなかった、と。

「さっきの女の子との話、聞いてしまいました。すみません」  
先にそう前置きして、私は続ける。

「先輩、あの子が『期待しないで勝手に好きでいるくらいならいいですよ』って言った時……はつきり、拒みましたよね」

私の言わんとしていることがわからないんだろう。じつとまっすぐ、先輩は黙って私の言葉を聞いていた。

「私、それは正しいと思います。恋人のいるタクミ先輩が、少しでもあの子が諦めきれなくなるようなことしちゃいけないと思いますから」

ぎゅ、と、私はスカートの裾を掴む。そうしていないと怒りがとめどなく溢れ出しそうだったから……。

「だったら、どうしてハルカにもそう言ってくれないんですか！どうしてさっきの彼女と同じことをハルカがホワイトデーに言った時、先輩は拒まなかったんですか！このままじゃ、ハルカはあなたのことと忘れられないじゃないですか！」

一気にそこまで言い切ると、初めてタクミ先輩の瞳が揺らいだ気がした。そう見えたのは一瞬で、彼はすぐに私からこの日初めて目を逸らす。

「タクミ先輩、ハルカにもチャンスはあるんですか？先輩は、いつか春日先輩と別れるつもりでもあるんですか？」

「……………それは……………」

もちろん、「ない」んだろう。言い淀んだタクミ先輩は、少しバツが悪そうに……それでも再び私をまっすぐ見つめてきた。

「だったら！ハルカにも少しでも期待させてしまおうようなことはやめてください！ハルカだって、さっきのあの子みたいにはつきり拒まれた方がいいに決まっています！今は傷つくけれど、その方がきつといつか前に進める！春日先輩と別れるつもりもないタクミ先輩を諦めきれない今のこの状態が一番かわいそうです！」

まくしたてるように言うと、さすがに息があがってしまった。肩で呼吸して、私は相手を見た。私の言葉を黙って聞いていたタクミ先輩が、静かに一瞬だけ目を伏せる。

その刹那、私は怒り任せだったとは言え、相手が曲がりなりにも先輩という立場であることを思い出した。少しだけ、冷静に意識が

現実に戻った気がする。

「……すみません、少し言いすぎました」

目を逸らし気味に謝ると、タクミ先輩は「……いや」と小さく首を振った。そうして、再び顔を上げてまた私を正面から見据える。その瞳に、さっきまでとはどこか違う色が宿っている気がした。

ぞくり、と、嫌な予感が背中を駆け抜ける。

「……おかげで目が覚めたよ」

小さく微笑んで言う先輩の声に、私を責める響きはない。けれど、どこか…何かを決意したような声音。

そのトーンに、私は自分がとんでもないことをしてしまったんじゃないかということにようやく気づいた。後戻りなんて、もうできるはずもなかったけれど…。

今までになく傷つき悲しむハルカの姿が、一瞬だけ脳裏を駆け抜ける。それは、今後起こることの予感だった。

今傷ついたとしても、はっきり拒まれた方がハル力はきつと今後前へ進める。さっきそう言ったのは、嘘じゃない。でもそのハル力が傷つく状況というのは、私が作り出しているものではなかったんだ…。そう気づいた時には、もう何もかもが遅すぎた。

「…ありがとう」

最後にそう続けたタクミ先輩は、私の横をすり抜けて校舎の方へと戻っていく。

「待……っ」

呼び止めかけた私の声は、頑として振り向きそうにない彼の背中に拒絶された。

最初は、先輩に彼女がいようがなんだろうが関係ないと思っ  
た。

でも本気で先輩を好きになるにつれて、「彼女」の存在が私の心  
を苦しめるようになった。

そしてその後、マナミ先輩自身と向き合うようになって…ただ恋  
敵だから邪魔だとは思えなくなった。

だから、ただ思うだけでいいと思ったはずなのに。やっぱり、自  
分と一緒にいてくれても結局マナミ先輩のところへ行ってしまっ  
る姿に、傷ついてしまう。

ずっと繰り返される、矛盾した想い。

このループする泥沼から、私はいつか救われるんだろうか…。

始業式の翌日は、半日授業だった。委員会やらなんやらを決める  
HRと担任の名取先生の数学だけを終えて、あっという間に下校時



間を迎える。昨日の陰鬱な気分を何とか晴らしたくて、私は放課後になって華江を誘った。

「買い物？うん、いいわよ」

ロングの髪を耳にかけながら、華江は二つ返事でOKしてくれた。真帆も誘いたかったけれど、帰宅部の私たちとは違って部活があるから仕方がない。しかも、今年から主将に選ばれたようだし…。

「何か買いたい物でもあるの？」

尋ねられて、小さく首を横に振る。

「でもほら、たまにはブラブラしようかなーって」

「一週間前にも付き合った気がするけど？」

そう返しながら、「いいけどね」と華江はニッコリ笑う。家に帰って早い時間から一人にはなりたくなかったし、華江に感謝しないと。

そうして学校を後にして、ランチから始まったショッピングは延々と続くことになった。

\*\*\*\*\*

「あ、お母さん？今から帰るね」

思ったより遅くなってしまうと、帰る時に私は家にいる母親にその電話をした。さして珍しいことでもないから、母親も別に怒る気もないらしい。まだ9時前だから、父親が帰るまでに戻れば多分大

丈夫だろう。

駅からの道を、早足で急ぐ。そうして家に続く最後の角を曲がったところで、私は思いがけず不意に足を止めた。

「……え……？」

自分の目を疑って、思わず見開いた。角を曲がったそこには、一つの人影があった。

「……タクミ……先輩？」

壁にもたれて道路に座り込んでいた先輩は、私の小さな呼びかけにゆっくりと顔を上げる。それから、無表情のまま「……こんばんは」と小さく声を出した。

121

「ど、どうしたんですか？こんなところで！」

状況を理解するのに、余裕で数分はかかった気がする。夢でも見ているんじゃないかと思っただけれど、我に返った私は慌てて先輩にそう声をかけた。

立ち上がった先輩が、こちらを見下ろしてくる。その表情がいつもと違う気がして、私はばれないように小首を傾げた。

「あ、あの、とにかく……上がってくださいっ」

私の家がこのすぐ先だというのは、先輩も知っている。ホワイト

デーの時近くの公園まで会いに来てくれて…その帰りに送ってもらったから。4月とはいえ夜はまだ肌寒いため、私は慌てて自分の家を指差した。

「…いや、さすがに遅いし家族に迷惑だから…」

首を振ってそれを拒む先輩の声のトーンが、やっぱりいつもと違う。ただごとじゃない雰囲気を感じ取って、私は思わず息を飲んだ。

「その代わり数分でいいから…時間ももらえるかな」

先輩の申し出に、私はどこか嫌な予感を感じながらコクコクと頷いた。

\*\*\*\*\*

道端というのもなんだったので、すぐ近くの公園へと移動する。例のホワイトデーの時の公園だ。夜9時にもなるとさすがに人はいなく、消えかけそうな街灯がチカチカと闇の公園を自信なさそうに照らす。

「突然ごめん」

前置きのように謝った先輩は、私をベンチに座らせた。その前に立ったままの先輩は、いつもとは違ってまっすぐにこちらを見ない。いつだって、他人への誠実さを表すかのようにじっと見つめ返してくれる先輩にしては珍しい。

「…どうか、しましたか？」  
恐る恐る尋ねると、先輩は小さく息を吐き出した。そうして、何かを告げようと彼が口を開いた…その瞬間。

鞆の中の私の携帯電話が、けたたましい音で流行りの着メロを鳴らした。

「す、すみません」

話を遮ってしまったその音を消そうと携帯を出すと、「出たら？」と先輩の声が降ってくる。謝るように頭を軽く下げてから、私は携帯を開いた。

ディスプレイに浮かんだ相手の名前は………真帆？

どうしたんだろう、と思いながら、通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『……ハルカ？』

携帯の向こうから聞こえてきた声音がいつもと違って、私は思わず目を見開いた。

「え、どうしたの？…泣いてるの？」

真帆が泣きながら電話をしてくるなんて、今までになかったことだ。驚きを隠せずに関いかけると、真帆からは『ハルカ……ごめん』という弱々しい声が返ってくる。

「『ごめん』って…どうしたのよ？何かあったの？真帆!？」

慌ててまくしたてるように尋ねると、その名前を出した瞬間に目の前のタクミ先輩がバツとこちらを振り返った。そのリアクションに驚いた私が一瞬目をみはった刹那、先輩は何も言わずに私の携帯電話に手を伸ばす。

タクミ先輩らしくなく、乱暴にひったくるようにその電話を取り上げると、有無を言わさぬままボタンを押して通話を切ってしまった。

「…っ、タクミ先輩!？」

そんな振る舞いが先輩らしくなくて、私は面食らいながらその顔を見上げる。

「…聞かなくていい、今は。多分彼女が謝りたいのは…俺のことだから」

静かになった携帯電話を私へ返しながら、先輩はそう言った。え、と声を漏らすと、先輩はわずかに目を伏せる。

「…俺の話が終わったら、かけ直してあげて」  
そう言っつて、先輩はゆっくりと話し始めた。

\*\*\*\*\*

「…ホワイトデーの時の話なんだけど」

少しだけ目線を逸らしたまま、先輩はそう口火を切る。その仕草もらしくなくて、私は逆に食い入るように先輩を見つめてしまった。

「あの時、ちゃんと答えてなかったから…」

続いた言葉に、私は目を見開く。ホワイトデーの時のことと言え  
ば…。

私が、見返りを期待しないからせめて先輩を好きでいさせてほしい、って言ったこと？

そう思い当たった私の予想は当たっていたらしかった。先輩はそれを肯定するように、今日初めて正面から私を見つめる。

まっすぐな眼差しがいつにも増して真剣で、思わず胸が緊張で震えた。

そうして、先輩は言う。

私の好きな声で、一番嫌いな言葉を。

…一番、聞きたくなかった一言を…。

「じゅめん」

頭を鈍器か何かで殴られたような衝撃だった。ショックで瞬時に真っ白になった視界が戻ってくるのに、数秒かかる。

そうして何とか意識を取り戻した私は、「…なんで…」と声を絞り出した。

「何で、今更…っ？先輩あの時、何も言わなかったじゃない！拒まなかったじゃない！」

堰を切ったように、叩きつけるように言葉を投げる。それを真正面から受け止めて、先輩は目を伏せた。

「…だから…ごめん」

『今更』なことと、あの時ちゃんと拒否しなかったことと…。先輩は、全てにおいて謝っているようだった。

「……嘘、ですよね、先輩」

「………」

「大丈夫、私、何も望まないから…好きでいるだけでいいから！」  
心臓がキリキリと悲鳴を上げる。痛みには耐えられずに、私は言葉を継ぎながら胸の辺りを押さえた。

「だからお願い。好きでいることもダメだなんて言わないで…」

視界が潤んでくる。溢れ出した涙が収まりきらずに滴となって落ちるまで、時間はそうかからなかった。それを拭うことすらできない私を、先輩は黙って見下ろしていた。

「………」

しばらくの沈黙の後、先輩がハンカチを差し出してくれる。受け取ったそれは、いつもの先輩の匂いがした。ホワイトデーの時もこれと同じことがあったのに、あの時とは真逆の意味の涙を拭くこと

になるとは思わなかった。

「…すぐに、誰が見つかるよ」

ハンカチを目頭に押し当てた私に、優しいようで冷酷な言葉が降ってくる。

誰かって、誰？

私には、タクミ先輩以外いないのに…。たとえ先輩が振り向いてくれなかったって、私は先輩以外誰にも惹かれないのに…。

「…迷惑、なんですか？」

しばらくの沈黙の後に、私は静かにそう問いかけていた。気づくと発していた言葉。タクミ先輩は、少し目をみはった。

「ホワイトデーの時、先輩は「迷惑じゃない」って言ってくれた…。でもそれは、私に気を使っただけだったんですか？本当は私が想っただけでも、タクミ先輩は迷惑なんですか？それだったら、私…」

言いかけた私は、先輩の射抜くような瞳に思わず続く言葉を飲み込んだ。真っ直ぐに私を見下ろす先輩の眼差しから、本気の決意みたいなものを感じたから…。



「…迷惑なんだ」

続くその言葉に、気を失いそうになる。

再び訪れた沈黙が痛い。そうして静かな夜の闇が、私の心まで真  
っ暗に覆ってしまった。

あの後、どう家に帰って家族とどういう会話をしたのか、全く記憶がなかった。ただ気がつくとき自室のベッドに横になっていて、窓の外は白々と明るくなり始めていた。

制服のまま倒れこんだらしく、スカートのひだがすこし乱れてしまっている。それを気にしながら立ち上がった私は、自分の目が腫れていることに気がついた。

意識を失うように眠りながらも、尚も泣き続けていたらしい。目尻から耳の方へ向けて、涙の流れた跡がある。

それを自覚すると、昨日の胸の痛みがぶり返してきそうだった。

ごまかすように頭を振り、意識が昨日のことへ集中してしまう前に熱いシャワーを浴びることにする。何も見たくないし、何も聞きたくない。意識を閉ざして、私は心に蓋をするようにして学校へ行く身支度を整えた。

失恋くらいで学校をサボるわけにはいかないし、何より自分のことだけでなく昨日の真帆のことも気になる。あの子の記憶が全くないから、もちろん真帆にも電話をかけ直してない。何を謝っていたのかわからないけれど、普通じゃない様子の真帆と、話をしなく

てはいけないと思った。

真帆はほとんど眠れなかったらしい。まだ誰もいないはずの時間帯に教室へ向かうと、もう自分の机に座っていた。私を待っていたのかもしれない。教室の入り口に立った私に気づくと、泣きそうな顔を向けてきた。

「ハルカ…っ」

「電話、昨日ごめんね」

微かに笑うと、真帆は本格的に泣き出す。弱々しくても、私の笑顔を見て少し安心したのかもしれない。

「…何かあったの？」

尋ねると、真帆は申し訳なさそうに顔を顰めた。

「ハルカこそ…何かあった？目が真っ赤」

真帆の前の席に座りながら聞いた私に、彼女はそう返してくる。

うん…と小さく頷きながら、私は昨日タクミ先輩が自分に会いに来たことと、どんな話をして行ったのかをかいつまんで話した。

「ごめん…それ、私のせいなの」

聞き終えた真帆は、青ざめた顔で第一声にそう言った。真帆のせい…という意味がよくわからなくて、私は小首を傾げる。机に肘をつけて手で顔を覆った真帆は、後悔の念に駆られたようにゆっくりと話し始めた。

真帆が見た、女の子からタクミ先輩への告白シーン。そして、タクミ先輩がその子にどういふ返事をして、真帆がそれをどう思ったのか。真帆が、抑え切れない怒りをどうタクミ先輩にぶつけたのか…。

「真帆のせいじゃないよ」

気を使ったわけでもなく、私は一連の話を聞いて自然とそう口にしていた。

「でも…」

言いかけた真帆の言葉を、私は首を振って遮る。

「真帆が言ったことがきつかけにはなつたかもしれない。でも、あれは先輩の本心だよ。遅かれ早かれ、どうせこうなつてたに違いないんだから…」

思い出すだけで、涙が溢れそうになる。それをこらえるために、眉間に皺を寄せた。そんな私の表情を同じように泣きそうな顔で見る真帆に、微かに笑顔を向ける。もちろん、無理した作り笑いだとはお互いに十分すぎるほど承知していた。

「私のために怒ってくれて、ありがとう」

そう言うと、真帆も同じように無理して笑顔を浮かべた。

そこで、段々と教室にクラスメイトたちが登校してくる時間になった。騒がしくなり始めた校舎内の様子に、私たちはお互いに口をつぐむ。黙ったままそれぞれ物思いにふけるように、ただHRが始まるのを待った。

\*\*\*\*\*

いつも私のことを心配してくれているもう一人の親友・華江にもこのことを話さなくちゃいけないと思った。だけど、同じことをもう一度自分の口で説明するには私には打撃がありすぎた。だから、甘えかもしれないけど昨日の事情を華江に説明するのは真帆に頼んだ。

タクミ先輩のことはもう諦めると、付け加えて…。

「ハルカはそれでいいの？」

一日そのことに触れないでいてくれた華江は、放課後になってようやく私に尋ねてきた。

「それでいいも何も…迷惑だって言われちゃったら、どうしようもないよ」

無理した苦笑いを浮かべながら、私は鞆に荷物を入れながら帰り支度を始める。部活へ向かう真帆が教室の前の方から手を振ってきたので、「バイバイ」と笑顔で振り返した。

「でも…」

「夏川、ちよつといい？」

華江が何か言いかけた言葉は、後ろから不意にかけられた声に遮られる。振り返ると、そこには去年も同じクラスだったクラスメイトの宮川くんが立っていた。

「…何？」

首を傾げながら尋ねると、宮川くんは少しためらいがちに「えー

つと…」と頭を掻く。スポーツマンで爽やかな感じの彼は、去年もそれなりに仲良くしていたクラスメイトの一人だった。

「あのさあ、お前、今日これから暇？」

どうして自分の予定なんかを聞かれているのかわからなくて、私は少しだけ訝しげな顔をする。その表情に宮川くんは少し慌てて、顔の前で手を振って見せた。

「いや、無理には言わないんだけどよ…。実は今日、隣のクラスの長谷川が誕生日でさ。仲間でお祝いにカラオケでもパーツと行くかって話になったんだけど…。お前にも来てもらえないかと思って…」

「……何で私？」

確かに1年の時は宮川くんとグループで遊びに行ったことは何度もあった。でもその今日の主役らしい「長谷川くん」とやらと私は面識すらない。そもそも、宮川くんと違って私がタクミ先輩を好きになってからは遊んだこともない。

「いや、それは……」

言いくそな宮川くんが、口ごもる。その様子に、私の隣で華江が「ふうん」と意味ありげに呟いた。

「その長谷川くんが、好きなんだ？ハルカのこと」

「え？」

「え！」

疑問符をつけた私と、驚いた様子の宮川くんの声が重なる。凶星だったらしく、また参ったように頭を掻いてから宮川くんは拝むように私の前で手を合わせた。

「実は…好きっていうか、気になってるみたいで…。頼む、ちょっとだけ付き合っただけよ」

「無駄よ」

友達のためを思つてか、必死で頼む宮川くんに向けてそう言ったのは華江だった。「え」と顔を上げて、宮川くんが華江を見る。

「だつてハルカには好きな人が…」

「いいよ」

言いかけた華江の言葉を遮るように、私は宮川くんにもう返事をした。「マジで!？」とパアツと顔を明るくした宮川くんと、「ハルカ？」と怪訝な顔をした華江とが同時に私を見る。

華江は好きな人がいるつて言うけど、もうタクミ先輩にこだわっているわけにはいかないし…。何より、今日も一人になるのが嫌だった。誰でもいいから、一緒にいてくれる人がほしい。浅はかな考えだとは自分でもわかっていたけれど、どうしようもなくそれが私の本音だった。

「その代わりに、華江と一緒に来てくれるなら」

続けると、宮川くんはバツと華江を振り返った。お願いするような眼差しで見られて、華江は小さく息を吐く。多分、華江は私が彼らと遊びに行くのは反対なんだと思う。私が逆の立場でもそう思うだろう。だけど、きっと私の今の精神状態もわかってきている。だから、はっきり拒むことができない。華江はそういう優しい人だから…。それがわかっていてそれに甘える私が一番間違っているんだろう。

小さく息を吐いて、諦めたように華江は言った。

「いいわよ。その代わりに、向井と一緒に来てくれるならね」

それまで話にも加えていなかった第三者の名前を、華江が口にす  
る。自分の名前を呼ばれて、華江の向こう側の席で何やら雑誌を読  
んでいた向井くんが「え？俺？」と面食らったように顔を上げた。

私や真帆以外にあまり友達を作らない華江は、最近なんだかこの  
向井くと仲が良い。確かに、宮川くんはともかく面識もない他の  
面子と密室になるカラオケに行くには少し勇気がいる。

華江のそんな気配りを受けて、可哀想な向井くんは道連れにされ  
るハメになった。

\*\*\*\*\*

「ハルカ、聞いている？私の話」

帰り支度を整えて、昇降口に集合。宮川くんのそんな指示を受け  
て、私は華江と向井くとそこへ向かった。

「うん、聞いている」

「ホントに？今ハルカが辛い時だっというのはわかるけど、勢いで  
長谷川くんと付き合ったりしちゃったらダメだからね」

釘をさすように華江はそう言う。向井くんに聞こえないようにヒ  
ソヒソと言ってくれる辺り、気を遣ってくれているみたいだった。

確かに、漫画やドラマならここで私は長谷川くんになびいちゃい  
そうだ。でも、今はそんな気力すらない。ただ、一人にならなけれ  
ばそれでいい。…そんな気分だった。



「お、来た来た」

昇降口に着くと、宮川くんたちはもう既にそこに集まっていた。隣のクラスの面子と合わせて、男子5人。そこに向井くと、女子は私たち2人だけ。傍からみれば相当不思議な組み合わせだろう。

「夏川、こいつが隣のクラスの長谷川。今日誕生日の主演」

宮川くんに紹介されて、その中にいた一番人の良さそうな背の高い男子が笑顔で頭を下げた。

「よろしく、夏川。なんか今日は宮川が無理言っただみたいでごめん」  
「ううん。お誕生日おめでとう」

我ながら心のもっていかない言葉だったが、長谷川くんはそれでも笑ってくれた。…いや、こちらの感情には気がついていなかっただけかもしれない。

「長谷川、せっかくなんだからもうちょっと自己紹介がてら自分をアピールしろよ」

からかうように、他の男子が言う。えっと困ったように声を上げてから、長谷川くんは笑って「そうだなあ」と続けた。

「趣味は散歩で、得意なのは囲碁かなあ…」

長谷川くんの言葉に、「じじくせえ」と周りがどつと笑う。作り笑いとは感づかれないように、私もニツコリ笑ってみせた。

「あ、あと弓道部に所属してる」  
続いた長谷川くんのセリフに、そんな私の笑顔は本格的に凍りついた。

弓道部、と聞いて、よぎるのはタクミ先輩のこと。

どうしたってタクミ先輩のことがふわっと浮かんできってしまうこ

の頭が、本気で今は恨めしかった。

「そんじゃ、移動しようぜ」

靴に履き替えて、昇降口を出る。ワラワラと談笑しながら移動する集団の中、長谷川くんはずっと私の隣にいた。そして、そんな私のすぐ後ろには心配そうな華江と向井くんがついてきてくれる。

「……あ」

校門をくぐろうとしたところで、不意に長谷川くんが私の隣で声を上げた。それにつられて、全員が長谷川くんの視線を追う。そうしてたどり着いた先にあるものに、私は自分が固まってしまつのに気づいた。華江が、そつと後ろから私の肩に手をかけてくれる。大丈夫だと言うように……。

「タクミ先輩、今帰りですか？」

校門のところまで出くわした彼に、長谷川くんはニコニコと声をかける。その隣にはマナミ先輩もいて、私は2人を見ないように顔を背けた。

……胸が、痛い。

心が、キシキシと悲鳴をあげる。

「うん」と小さく答えるタクミ先輩の声が聞こえる。

「そうですか！先輩、引退してもまた部活に遊びに来てくださいね」

そう言う長谷川くんの隣で、私はずっと顔を上げられないでいた。

見たくなかったし、見られたくもなかった。

「行こうぜ、長谷川」

少し先に行く宮川くんたちに促されて、長谷川くんは「それじゃ失礼します」と頭を下げているようだった。

タクミ先輩とマナミ先輩の脇をすり抜ける時、マナミ先輩の方が私に何か言いかけるように口を開くのが心配でわかった。でもそれも顔を上げないままの私の空気を汲んでか実現せず、彼女は口をつぐんだようだった。

\*\*\*\*\*

「さっきの3年ってさあ、お前の弓道部の先輩だったんだ」

カラオケボックスについてから談笑している間に、誰だかがそんな余計な話題を長谷川くんにつ引張り出した。

「タクミ先輩？そうそう。結構カッコイイ先輩なんだぜ」

「いや、俺はどっちかっていうとあの男本人より、あんな美人を彼女にできるところが羨ましい」

「噂で聞いたことはあったけど、春日先輩の彼氏ってホントにふっつーな男なんだな」

誰かが悪気もないようにそう言うと、長谷川くんは「だから、タクミ先輩はカッコイイって！」とかばうように抗議していた。

…よっぽど、タクミ先輩を尊敬しているんだろう。

でも今の私には、聞きたくない話に違いなかった。

「でも、最低な男だわ」

耳を塞ぎたくなるくらい気分な私の様子があったんだろうか。カラオケの歌本をめくりながら、華江が一蹴するようにそんな一言を放った。その一言で、場がしんと静まり返る。さすがの長谷川くんも抗議するのも忘れるほど、呆気にとられていた。

「ま、まあまあ、せっかく来たんだし、パーツと騒ごうよ」

慌てて場を取り繕うように、向井くんが言う。その一言に我に返った皆は、「おお」と話題を変えて再び盛り上がり始めた。

その様子に、ホッと安堵の息を漏らす。それと同時に、私は真帆だけでなく華江も相当タクミ先輩に対して怒っているらしいことを、この時初めて知った。

\*\*\*\*\*

カラオケに来てから、3時間ほど経過した。その間宮川くんはずっと盛り上げ役に徹していたし、人見知りしない向井くんは他の男子とすっかり打ち解けていた。華江はそんな向井くんの隣でずっと私を気にしてくれていたし、長谷川くんは終始私の隣で色んな話をしてくれていた。

だけど、申し訳ないけれど長谷川くんのどんな話も頭に入っていない。愛想笑いと相槌だけを返す自分が、とんでもなく嫌なヤツに思えた。

それからまたしばらく時間が経った頃、宮川くんが誰とはなしに  
向けて口を開いた。

「あ、なんか鈴元たちがこれから合流したいって」

メールが届いたんだろう。携帯を見ながら、宮川くんが言う。

鈴元くん…。その名前を聞いた途端に、体が硬直するのがわかつた。

「ほら、夏川、去年同じクラスだった鈴元」

何も知らない宮川くんは、悪気もなく笑顔でそう続ける。

「う、うん…」

口ごもりながら頷く私は、一瞬にして先月の出来事をフラッシュバックするように思い出した。…私のチヨコを捨てた、鈴元くん。あれから会話なんてしたわけもなく、顔を合わせたい相手でもなかった。

そう、思った瞬間。

「あ」

向井くんが、華江の隣で声を上げた。その声に、全員が慌てて振り返る。

「俺忘れてた。風紀委員の仕事で名取に呼ばれてたんだった」

急なその言葉に、皆が一瞬静まり返った。それから、一斉にプツと吹き出す。

「向井ー、そりやお前もう手遅れだろ。名取だってもう諦めてるよ」

「いや、名取、結構しつこいから絶対待ってると思うんだよね…」。

夏川、お前も風紀委員じゃん？戻った方がいいと思わない？」

「こちらを振り返った向井くんが、そう言った。そう言えば、私も昨日のHRで風紀委員になったんだ。…そっか、一緒に委員をやる相手の名前を確認してなかったけれど、向井くんだったんだ。」

「そうだね。名取しつこそうだし…」

「まだ5時前だから、先生たちは学校にいるだろう。特に呼び出しをすっぱかしたなんてことになったら、あの不良教師に何を言われるかわかったものじゃない。」

「ごめんね、今日は戻るね」

「宮川くんや長谷川くんたちに謝ると、彼らは残念そうな顔をしてくれたけれども快く送り出してくれた。」

「じゃあ、私も帰ろうかな」

「そうやって華江も腰を浮かす。」

「夏川」

「華江の隣で立ち上がった私に、長谷川くんが声をかけた。」

「今日はありがとう。また誘っていい？」

「言われて、私は曖昧に笑顔だけを返しておいた。」

\*\*\*\*\*

「うまくいった？」

「カラオケボックスを出て、向井くんは開口一番そう言った。なんの事を言われているのかわからなくて、私は首を傾げる。」

「上々」

「私の隣で、華江が代わりにニッコリと笑ってみせた。」

「どういうこと？」

目をパチパチさせて問い返すと、向井くんは向井くん小首を傾げる。

「俺はよくわかんないけど…夏川、鈴元と顔合わせたくないの？あいつが来るって話になった途端に、片桐に足踏まれてさ」

『片桐』…とは、華江の苗字だ。なんのことかわからずに瞬きを繰り返しながら、私は華江と向井くんを交互に見る。

「なんかよくわかんないけど、カラオケから夏川を連れ出せってことかな、と勝手に解釈してああいう話を…」

「えっ、風紀委員の話って嘘なの？」

驚いて声をあげる。つまりは、鈴元さんと私を会わせるのがマズイと思った華江が向井くんに何とかしてもらおうとしたってこと？しかも、足を踏まれたただけでその意図を汲み取れる向井くんがすごい。

「さすがねー。その調子で、もう一個頼まれてくれる？」

華江は普段誰に対しても優しくて穏やかなのに、なんだか向井くんに対してだけ女王様風に見えるのは気のせいだろうか。「何？」と聞き返す向井くんに、時計を確認しながら華江は言う。

「私、これからバイトがあるんだ。だからハルカのこと家まで送ってあげてくれる？」

華江の言葉に、私が驚いて声を上げた。

「え、いいよっ。向井くんに悪いし、まだ明るいし」

「ダメ。今のハルカー一人で放っておくと何するかわからないもの。変な男についていきそうだし」

言われて、ぐ、と私は返答に詰まる。変な男についていくつもりはないけれど、今の自分が不安定なのは認める。

「俺は別にいいよ」

ニコッと笑ってナイト役を申し出てくれる向井くんは、私は降参して頭を下げた。

\*\*\*\*\*

向井くんは、思ったとおりとてもいい人だった。去年も同じクラスだったけれど、ほとんど私は絡んだことがない。年度末くらいから急に華江と親しくなってきたなあって思っていたところだった。

「ねえ、向井くんって華江のこと好きなの？」

遠慮なく何気に尋ねると、向井くんは一瞬目をみはってから、「そう見える？」とニヤリと笑って見せた。

「うん、見える。なんか女王様と家来って感じ」

「…それなんか違うくない？」

てつきり恋人っぽいとも言われるのを期待していたのか、向井くんはがっくりと肩を落とす。

その様子がなんだかわいくて、私は声を上げて笑った。そんな私に、向井くんは「…なあ」と改まったように呼びかける。



「なに？」

今日初めての無理しない笑顔のまま振り返ると、向井くんは少しだけ真剣な表情に変わっていた。

「違ったらごめん。夏川の好きな人って…さっき校門で会った3年の人？」

言われて、私は瞬時にまたタクミ先輩のことを思い出す。思い出さないように蓋をしていたつもりなのに、不意打ちをくらってとめどなく脳裏をよぎった。

「……何で？」

笑顔を消して、私は問い返す。もう向井くんの目は見れなかった。

「いや…あの時、夏川顔を上げなかったし…片桐があこの3年のこと『最低な男』って言ってたし。それに…」

「……『それに』？」

遠慮がちになった向井くんの言葉を、私は復唱した。半歩だけ後ろを歩いてくれるのは向井くんの気遣いなんだろう。

「…傷ついた、顔してた」

「………え？」

「あの人…タクミ先輩だっけ？」

何を言われているのかわからなくて、私は向井くんの言葉にただ目を見開いた。

「………」

しばらく、沈黙が訪れる。その重苦しい空気を破るように、私は息を大きく吐き出した。

「そんなわけないよ。私がタクミ先輩に振られたんだから」

「でも……」

「そんなわけないの！」

叩きつけるように……でも、八つ当たりでしかない言葉を向井くん  
に放つ。頑として聞き入れない私の背中に、向井くんはため息を漏  
らした。

「でも夏川……顔上げなかつたんだから、見てないだろ？」

「……………」

「顔上げないお前見て……傷ついた顔、してたよあの人」

呟くように、小さく向井くんはそう言った。背中に響くそんな言  
葉を、私はまだ受け止めるだけの勇気が持てなかった。

『…迷惑なんだ』

……………一世代の、嘘。

泣かせたかったわけじゃないけれど、そうする以外に術がなかった。

傷ついた彼女の横顔に、胸が軋むような音をたてる。張り裂けそうなその痛みをバレないようにやり過ごしながら、俺はギリ、と唇を噛み締めた。

傷つけたかったわけでもないけれど、彼女の顔を見て自分で自分の言葉に傷つけられる。口から出た一言を後悔するわけにもいかなくて、ただ胸の痛みを完全に自覚する前に押し込めるしかなかった。

「…ただいま」

家に帰り着いた頃には、後1時間ほどで日付が変わる頃だった。心配していたらしい姉と名取先生が、一緒に玄関まで出てくる。

「准一、どこに行つて……………」

パタパタと走ってきながら尋ねかけた姉の言葉は、玄関先で俺の

顔を見るなり飲み込まれた。

…それくらい、今の自分はひどい顔をしているんだろう。

「…ごめん、もう寝るから」

一度学校から先生と一緒に帰ってきて、それから出かけて…。こんな時間まで帰ってこなかったんだから、心配かけて当たり前だと言えば当たり前だ。それでも事情を説明する気になんてなれるわけもなく、俺はそのまま2人の脇をすり抜ける。

2階へと続く階段を上り、自室へ向かう途中、階下で2人が心配そうにこちらを見ているのがわかった。

\*\*\*\*\*

「准一」

軽いノックの音がしたのは、それから1時間ほど経った頃だった。寝ると言いつつ、眠れるわけもない俺は真っ暗な部屋でベッドに横になったままでいた。小さく返事を返すと、遠慮がちにドアを開けて、先生が入ってくる。

「悪いな、ちょっと付き合ってくれよ」

お酒の入った瓶を少し持ち上げて、先生は笑った。俺の分はしっかりとソフトドリンクを持ってきている辺り、この人は教師だと思っ。さっきまで父親と飲んでいたようだけれど、酔っている素振りは見られなかった。

「理沙の具合も大分良くなったみたいだから、明日学校帰りに連れて帰るわ」

今日は先生も泊まっていくことになったらしい。既にラフな格好に着替えた彼は、勝手知ったるように俺のテーブルで酒とつまみを広げる。

「…で？」

グラスにビールを注ぎながら、先生は不意にそう言った。え、と尋ね返すと、苦笑い気味にウーロン茶を差し出される。

「夏川と何があつたんだよ？そんな顔するくらいなら話して発散してみろって」

受け取ったウーロン茶は、冷蔵庫から出したばかりらしく冷え切っていた。それを両手で包みこむと、今の冷めた俺の感情と同じ温度で溶け合う気がする。

「…話して発散するタイプじゃないか」

口を開こうとしない俺を見て、先生は吐息まじりにそう呟いた。

先生を信頼していないわけじゃない。

…だけど、この件に関しては誰に何を言っても返ってくる言葉は同じだとわかっているから。

……愛海と、別れると。

十人に聞けば十人がそう返すに違いない。

「…なあ、准一」

俺の考えていることがわかったんだろう。先生は、少しだけ譲歩するような響きを含んだ声で改めて言った。

「知ってると思うけど…俺、大学の時進路に迷ったことがあっただろ」

昔を思い出しながらなのか、まだそれほど『過去』ではない思い出を振り返りながら、先生は目を細める。…はい、と小さく返すと先生は立てた片膝に肘を置いて、尊大な態度でグラスを揺らしながら続けた。

「俺は昔から、どうしても教師になりたかった。だけど…どうしても大学を出てすぐ理沙と結婚もしたかった。ちょうど卒業間際にお腹に子どももできてたから…かなり急いでたと思う」

その時のことはよく覚えている。

学生の身分でできちゃった結婚をすることになりそうで、先生は実家の親に散々怒られていたから。勘当されてもおかしくないくらい騒ぎになったけれど、先生はそこで姉を諦めたりはしなかった。

「子どもと理沙を養うために、新米教師じゃ食っていけないと思った。後々は公務員である方がいいかもしれないけど…今すぐに家族を扶養するには、それなりの企業に就職した方がいいんじゃないかって」

だから、先生は夢を諦めようとした。姉を手放すことができなかつたからだ。

「だけどな…」

一度言葉を切って、先生は少しだけ伏せ目がちに俯いた。

「理沙が、言ったんだ。『あなたが自分を犠牲にして得た幸せじゃ、私はきつと幸せになれない』って」

…だからか。先生が、結局夢を諦めずに済んだのは…。

その後残念なことにお腹の子どもを姉は流産してしまっただけで、当初の予定の通り2人は籍を入れた。そして2人共が教師になるという夢を叶えたんだった。

「あの言葉がなかったら、やっぱり今お互い幸せじゃなかったと思うよ」

初めて聞く話に、俺は黙って耳を傾ける。そこまで話してグラスのビールを呷った先生は、ふう、と息を吐いた。

「…お前は？ 准」

尋ねられて、俺はえ、と顔を上げる。こちらを向いた先生が、真摯な眼差しで見据えていた。

「お前の感情とか…希望とか…そういうもの犠牲にして守ろうとしてるものって、何？」

「……………」

「お前が自分を犠牲にして得られる幸せって、本物だと思う？」

「……………」

返す言葉もなく黙り込んだ俺は、先生のまっすぐな視線から目を逸らすしかなかった。

…胸が、ズキズキする。

痛みをぶり返したそれに、俺は小さく眉を寄せた。

\*\*\*\*\*

「タクミ、どうかした？」

翌日の放課後、半日の授業を終えた俺は愛海の言葉でハッと我に返った。

「なんでもない」

「ごまかすように少し笑うと、愛海は「ふうん」とだけ呟いて小さく頷く。

「今日はどこ行く？」

俺の家はまだ姉がいるだろうし、今日は受験勉強には不向きだ。腕を絡めてきた愛海に適当にどこかの場所を返そうと口を開きかけた瞬間、俺たちの後ろで「あ」と大きな声上がる。

ゆっくりと振り返った俺と愛海は、そこにいる集団を目にして思わず目を見開いた。瞬時に、昨日の胸の痛みが鮮烈に蘇る。

……呼吸をするのも苦しいくらいに、鷲掴みにされたような痛みが走った。

「タクミ先輩、今帰りですか？」

ニコニコと笑顔を浮かべて、その中の一人が俺に声をかけてくる。先日まで所属していた弓道部の先輩、長谷川だった。



「うん」

小さく答えると、彼は人懐こい笑顔で続ける。

「そうですね！先輩、引退してもまた部活に遊びに来てくださいね」  
そう言う彼の隣に、あの子の姿があった。こちらを見ないよう  
しているらしく、決して顔を上げようとはしなかった。

その姿に、ズキ、とまた鈍い痛みが走る。

彼女が昨日苦しんだ痛みに比べれば遥かにマシなはずなのに、あ  
まりの痛さに眩暈まで感じる。頑なな横顔は前を向くこともなく、  
俺の横を素通りしていった。

……俺は、心の中で甘えていたのかもしれない。

いつも明るくて前向きな彼女のことだから、今回のことがあつて  
も乗り越えてくれると……。俺への想いを断つたとしても、会った時  
は笑顔で声をかけてくれるんじゃないかとさえ心の奥で期待してい  
たのかもしれない。

振り向きもしないその後ろ姿に、締め付けられるような感覚に襲  
われる。

「……タクミ……？」

愛海の呼びかけさえ、この時届くことはなかった。



…あれから、何日たっただろう。

正確にカレンダーでも数えればわかるのだろうけれど、それすら億劫で仕方がない。タクミ先輩の姿すら見かけないまま、ただ私は沈んだ気分のまま日々をやり過ごしていた。

…そう、先輩とはあれ以来顔を合わせるどころか、すれ違うことすらない。同じ校内にいるとはいえ学年が違って校舎も違うし、広い学校でそう何度も偶然があるわけでもなかったから…。

私から会いに行かなければ、顔を見ることもできない。それくらい遠い存在なんだと認識すると同時に、どれだけ自分たちの関係が脆いものだったのかを実感させられた。

華江と真帆は相変わらず心配してくれているけれど、私の気分が浮上する気配はない。泣いてばかりもいられないから学校をサボったり部屋にこもったりすることはないけれど、気分は塞ぎこみたいくらいだ。それでも私は周りに恵まれているから…これ以上、友達に迷惑をかけるわけにもいかない。

今日は真帆は変わらず部活があるし、華江はバイトがある。仕方がない、まっすぐ帰ろう…そう思って鞆を手に教室を出ようとしたその時だった。

「…どこ行くんだ」

廊下側から私に通せんぼするように、一つの影がたちはだかった。背の高いその影を見上げて、私は「…帰るんですけど…」と小さく返す。その答えを受けて、目の前の名取先生は「ほーお」と意味ありげな声を出した。

「いい根性してんじゃねえか、お前。黒板見たか？」

言われて先生の指差した先を見ると、そこには今日の予定が書かれていた連絡黒板。何を言われているのか分からずにとりあえずそこに記された字を目で追うと、『風紀委員、放課後2・F』と書かれていた。

…つまり、風紀委員は放課後に2・F…この教室まで集まるようにということらしい。朝から書かれていたはずのそれを一日全く見ていなかった事実に関心しながら、「…すみません」と先生に素直に謝った。

「おら、わかつたら席つけ」

ポン、と背中を押されて、私は促されるままに教室内へ引き返した。それと同時に、他のクラスの風紀委員たちもゾロゾロと中へ入ってくる。

「窓側の列から1年、2年、3年の順で座れー。後は学年ごとにクラス順で前からな」

集まり始める風紀委員に壇上からそう指示する先生は、何で風紀委員の担当になったのか不思議なくらいの教師らしからぬ口調だった。

2・Fだから、真ん中の列の前から6番目…。その場所に行くと、

ちょうど同じ風紀委員の向井くんもそこへたどり着いたところだった。

「…教えてくれれば良かったのに、今日委員会だったわざと少し膨れっ面で言うよ、向井くんは苦笑いを浮かべた。

「…いやまさか、帰るとは思わないでしょ。朝からあんなにデカデカと書いてあるのに」

私の隣の席に座りながら、向井くんはそう答える。…そう、今の私はそれくらい注意力が散漫になってしまっている。下手をしたら目の前の人の話も聞いていないことがあるくらいだ。

それから10分もしないうちに、風紀委員たちがほとんど顔を揃えた。そろそろ始まる雰囲気になって、先生が前から順にプリントを配り始める。左隣にいた向井くんと何気ない会話をしていた私は、前から配られてきたそれを後ろへ回すために振り返った。…その時、だった。

ガラ、と教室の後ろのドアが開く。そうして入ってきた人に気づいて、私は思わずハッと息を飲んだ。

……タクミ、先輩。

何日ぶりかに見た彼は、相変わらず内面が読めない無表情だった。

…だけど…そのクールな無表情も、一瞬だけ揺らぐ。先輩も私に気づいたからだ。一瞬だけ交差した視線を、お互いにパッと逸らしてしまう。

「あ、タクミ、こつちい」

私の隣の空席のもう一つ向こう側で、3年生の女子がそう言っ  
て手を振った。この学校ではめずらしい、ギャルっぽいメイクを派手  
にした女の人だった。下着が見えそうなくらいのミニスカートで、  
けだるそうに足を組んでいる。名取先生と同じく、風紀委員とは思  
えない存在感だった。

呼ばれて、タクミ先輩はまっすぐにこちらに歩いてくる。…そっ  
か…先輩もF組だったんだ……。目が合わないように前に向き直る  
と、隣の向井くんが小声で私の耳元で囁いた。

「……席、変わる？」

向井くんなりに気を使ってくれたんだろっけれど、そこまでする  
のも気が引ける。

「…ううん、大丈夫。ありがとう」

少しだけ無理して笑うと、私の隣でタクミ先輩が椅子を引く音が  
した。ドキンと、胸が一度跳ね上がる。

この前の胸の痛みと、緊張と…それでもやっぱり先輩が好きだと  
いう複雑な思いが交錯して、悲鳴を上げた。

「タクミさあ、もうすぐマナミの誕生日じゃね？」

見た目通りギャルっぽい言葉で、タクミ先輩の隣に座る彼女はそ  
んなことを口にした。髪をクルクルと回しながら言う彼女の言葉が  
聞こえていないのか…先輩は前から送られてきたプリントを黙々と  
後ろへ回す。…聞きたくない。即座にそう思ったけれど、こんな  
ところで耳を塞ぐわけにもいかなかった。

「確か再来週の日曜日じゃなかったっけ？ねえねえ、何あげんのー

「？」

塞がない耳の代わりに、何故か自分でもわからなかったけれど目は固く閉じる。そうすれば思考を少しでも遮断できるかも、と思っただけかもしれない。

「ねえタクミ、聞いてるー？」

「うるせえぞ、3・F！」

尚も返事をしない先輩に、その彼女が膨れっ面になった時。そう言っただけ怒鳴ったのは、教壇にいた名取先生だった。

「委員会始めるつつってんだろ。やる気ねえなら帰れ！」

不良教師と言われるぐらいだからいつも言葉使いは乱暴だけれど……。そんな普段とも比にならないくらい怒鳴り方で、先生は彼女にそう言った。

「はあい、すいませえん」

膨れて甘ったれたような声を出しながら、彼女は反省していないのか肩を竦める。そんな彼女の話それ以上聞きたくなかった私は、少し名取先生に感謝した。偶然とは言え、彼女の話を守ってくれたのはありがたい。

……そう、思っただけけれど……。

「……」

一瞬だけ、先生がこっちを見た気がした。……少しだけ心配そうな目で。

……そうか、もしかしたら、先生は私の為に彼女話を止めてくれたのかも……。きっと彼女の大きな声は、教壇まで聞こえていただろうし。

そう気づくと、私は本格的に先生に感謝する。向井くんといひ先生といひ…私はやっぱり優しい周りに恵まれている気がする。そんな周りの為にも、へこんでばかりはいられない…そう思うけれど、やっぱり隣にいる先輩を振り返る勇氣はなかった。

拒まれたことは事実だから…。チリ、と焦げ付くような胸の痛みを抱えたまま、私は右側を見ないようにしながら風紀委員の会議をやり過ごした。

\*\*\*\*\*

翌日の土曜日は休日だった。特に予定もないけれど、家にいても家族が絡んでくるから外に出た。うちの家族はとても仲が良いけれど、こういう沈んだ気分の時はそれが半ば迷惑に感じられる時もあった。

いつも明るいお母さんたちに絡まれる前に、街へ繰り出す。買いたい物も見たい物もなかったけれど、燦々と降り注ぐ日の光には幾分か心が慰められるようだった。それだけで、少しだけ出てきてよかったなと思える。部屋にこもって泣いてばかりでなくて良かったと、初めて思えた瞬間だった。

適当に雑貨屋さんや本屋で時間を潰すと、いつの間にか時計は昼過ぎを指していた。ただ一人でランチを取ろうという気分にもなれ



ず、お腹が空く気配もなく駅前広場の噴水の近くに座っていた。近くのコーヒーショップでキャラメルコーヒーを買い、一口飲むと甘ったるい感覚が舌を刺激する。

そうしてボーっと、何十分も行きかう人々を何とはなしに眺めていた時だった。

「きゃあっ！」

大きな叫び声と共に、バシャっという音がした。一瞬、何が起きたのかわからずに私は茫然とする。

目の前で転んだらしい女性の姿と、ようやく「冷たい」と感じた感覚に意識がゆっくりと現実に戻ってきた。

「ごめんなさいっ」

慌てて立ち上がった彼女が、自分の持っていたはずのアイスコーヒーをかぶった私を見て青ざめたようにそう謝る。

「あ、いえ…」

ボーっとしていたせいもあり、返事も思わずスローになる。肩から下にかかったコーヒーは、私の白いシャツを見事に染め上げられた。

「本当にごめんなさい…っ、やだ、どうしよう…」

慌てる彼女は、焦ってハンカチを差し出してくれたけれどそれがあまり意味を成さないと気づいたらしく、また申し訳なさそうな顔をした。

「大丈夫ですよ。もう帰るだけですし…」

とは言ってみなければ、さすがにこれで電車に乗るのは気が引ける。それでも謝り続けるその女性に悪い印象は持たなかったし、責める気すらなかった。

「でも…っ」

彼女が困惑したように何かを続けようとした時、「おい、どうし

た？」と後ろから低めの声がした。

「!!!」

「…夏川？」

彼女の後ろから顔を出した人物に驚いて、私は思わず目を大きく見開く。相手も驚いたようで、私の苗字をそう呼んでから同じような顔をした。

「…え、知り合いなの？」

彼女が、その男を振り返りながら尋ねる。「ああ」と小さく答えてから私を見た彼は、その一瞥で全てを理解したらしく、「派手にやったなあ、お前」と彼女に苦笑いを返した。

「悪いな、夏川。大丈夫か？」

「あ、はい…」

そう返事をする、彼はようやく自分の連れのその女性を振り返る。

「俺の生徒。夏川悠花っていうんだ」

私を紹介するように、名取先生はそう彼女に告げた。何となくペコリと頭を下げると、その彼女も慌てて頭を下げる。

「そうなんだ。初めまして、ハルカちゃん。いつも主人がお世話になってます」

そう挨拶をしてくれる彼女の言葉に…私は今度は、目を丸くした。その変化が面白かったのか、「なんだその顔」と先生はプツと噴出す。

「え、え！先生の奥さんですか…!?!」

「そうなの。名取理沙といます。よろしくね」

ニッコリ笑う理沙さんは、ものすごく美人だった。

ロングの艶やかな髪をアップにし、服も雑誌に載っているような

おしゃれな感じで…。私たち高校生じゃ相手にならないくらいの、大人の女性という感じだった。

…それこそ、こんな不良教師に似合わないくらい…。

「お前今、『先生に似合わない』とか思っただろ」

横目でチラリと睨みながら先生に言われて、私は思わず肩を竦める。

「わかりました？」

「わかる。わかりやすすぎる」

呆れたように言う先生を見て笑ってから、理沙さんはハッと我に返ったように表情を固くした。

「そつだ、そんなことより…ホントにごめんなさい、ハルカちゃん」

私にアイスコーヒーをかけてしまったことを思い出したらしく、理沙さんはもう一度謝る。本当に大丈夫です、と言おうとしたその時、理沙さんは「そつだ」とポンと手を打った。

「ね、ハルカちゃん。今からうちに来ない？今すぐ洗えばシミにならずに落ちるかもしれないし…」

「そつだな。そつしろよ、夏川」

先生にも背中を押されて、私は「…でも…」と言葉を濁す。さすがに押しかけるのは悪い気がしたのだけれど、「つべこべ言わずついて来いっ」と先生に腕を引っ張られた。

確かに、このまま帰るのにも勇気はある。

そつ思っつて、私は先生夫婦の厚意に甘えることにした。



乗せてもらった車がたどり着いた先は、駅から少し離れた住宅街に立つマンションだった。真つ白い壁が色褪せることもなく太陽を照り返していて、新しく建ったばかりだということを物語っていた。

地下の駐車場に車を止めて、五階の一番奥の部屋まで促される。

カードキーでロックを解除し、理沙さんは玄関のライトを点けると「どうぞ」と笑顔で私を招き入れてくれた。

「こんなのしかないけど…洗って乾くまで着てくれる？」

リビングのソファに通されて、理沙さんは一枚のトレーナーを持ってきてくれる。シンプルなピンク色のそれを受け取って、私はお礼を言って頭を下げた。脱衣所と洗面所の方を貸してもらい、茶色く染まった白いシャツを脱ぐ。借りたトレーナーは理沙さんの物らしく、ふんわりと優しい匂いがした。

着替えてリビングに戻ると、いつも通り尊大な態度で先生がソファで足を組んでいる。カウンターキッチンでは理沙さんが湯気の立ち上る紅茶をカップに注いでいた。

「あ、じゃあシャツ洗うわね」

出てきた私から汚れたシャツを受け取り、理沙さんはそのまま洗濯機の方へパタパタと歩いて行く。何となくどこにいていいか迷って立ち尽くしたままだった私に、先生は「座れば？」と自分の向い側のソファを指差した。

促されるままに「すみません」と遠慮がちに座ると、丁度戻ってきた理沙さんが紅茶を運んでくれる。

「洗って乾くまでちよつと時間かかるから、待っててね」  
につこり笑って言う理沙さんにもう一度お礼を言っ、私は差し出された紅茶のカップを両手で覆った。伝わってくる温かい温度が心地良い。

「夏川、お前さあ、最近なんか元気ないだろ」

運ばれてきた紅茶を一口飲みながら、先生はいきなりそんな風に口火を切った。「え」と面食らったように返す言葉に詰まると、隣で理沙さんが「…ちよつと」と先生をジロツと睨む。

「なんなの、その急な話題の振り方。ハルカちゃんもビックリしてるじゃない」

「タクミとなんかあったのか？」

理沙さんの言葉を聞いているのか聞いていないのか、完全にスルーして先生はそう畳みかける。

「……」

じんわりと伝わる紅茶の熱に一瞬目を閉じてから、私はゆっくりと顔を上げた。

「そう見えますか？」

尋ね返すと、先生は無言で小さく頷いたまま紅茶を啜る。

それはそうだろう。

あんなに押しかけていた数学準備室にも、あれから一度も訪れていない。だから必然的に名取先生に顔を合わせる回数も減っていた。あれだけタクミ先輩にまとわりついていていた私が急に顔を見せなくなったのだから、何かあったと思われても当然だ。

「……『迷惑だ』って……言われちゃいました」

名取先生のごことは苦手だったけれど、今はそうでもない。むしろ、

いつも乱暴な口調でも正しいことを言う先生なら、今の沈んで芯を失った自分に喝を入れてくれるかもしれないという期待があった。私の一言を受けて、先生は少しだけ眉を上げる。理沙さんは自分の紅茶にミルクを注ぎながら、口を挟むこともなくただ黙っててくれた。いた。

先生が黙したまま耳を傾けてくれているのをいいことに、私はこれまでのタクミ先輩とのやり取りを話す。真帆や華江に話した時とは違って…私の口は堰を切ったように、息継ぎもそこそのまま話を続けた。まるで、何かに縋るように。

「…そうか」

真剣に私の目を見ながら話を聞いてくれた先生は、一通りを聞き終えて小さくそう呟いた。少しゆるくなった紅茶の残りを一気に飲み干して、緩慢な動作で顔を上げて私を見る。

「それで、お前はどうするんだ？」

「…どうするって…」

小さく先生の言葉を復唱して、私は眉をひそめた。

「どうしようも…ないです。諦めるしか…」

小声で続けて、私は膝の上で握った拳にぎゅっと力をこめる。

「私は…マナミ先輩がいても、今はタクミ先輩を想えるだけで良かったんです。だからホワイトデーの時、想うこと自体は拒絶されなくて…ホツとしてました。なのに今回迷惑だつて言われて…あれが先輩の本音なんだと思うと、諦めるしか…」

なんとなく先生の顔が見れなくなって、私は斜め下に視線を逸らした。黙って聞いていた先生の口から、深いため息が漏れるのが聞

こえる。呆れられたのかと思ったけれど、意外にも先生は「…どう思う？理沙」と理沙さんの方を振り返った。

急に振られた理沙さんは、「え」と一瞬驚いたけれど、すぐに「…そうね」と小さく呟く。少しだけ考え込む仕草をしてから、ゆっくりと唇を開いた。

「結論から言うと…私は、『迷惑』っていうのは本音じゃないと思うけどな」

口をつけた紅茶のカップをソーサーに戻しながら、理沙さんはそんな一言を口にする。

その根拠がわからずに視線を理沙さんに移すと、彼女は少しだけ苦笑いを浮かべた。

「だって、ハルカちゃんの話によると…他の告白してきた女の子にははつきり『ごめんなさい』って断ってるんでしょ？想うだけでも、自分はそれにこの先も応えられないからって…。でもハルカちゃんには、一度は拒まなかったわけよね？本当に迷惑だったら、一回目で拒絶してると思うけどな」

「でも…ホワイトデーの時は、タクミ先輩もはつきり断れなかっただけかもしれないですし…」

小さく反論すると、理沙さんは「…うーん」と再び苦笑気味に続ける。

「そんなことないと思う。ああ見えて、迷惑なら『迷惑』ってはっきり言える子なのよ。私の弟」

「…そうなんでしょうか…って、ええっ!？」

さらっと流すように言った理沙さんの最後の一言に、私は聞き間違いかと思っただけの耳を疑った。思わず大声を出してしまうと、向い側の先生も苦笑いを浮かべている。

「ごめんね。黙ってるつもりはなかったんだけど…言うタイミング



がなくて」

そう言って、理沙さんは改めてと言った感じにわずかばかり姿勢を正した。

「旧姓、拓巳理沙です。准一はたった一人の実の弟なの」

微笑んでそう告げる理沙さんの言葉に、一瞬頭が真っ白になる。それから、タクミ先輩が前に名取先生との関係を尋ねた時に答えかけていたのはこのことだったんだ…とか、ゆっくりと思考回路が現実に戻ってきた。そうして我に返った私は、キッと先生を睨み据える。

「…先生、わかってて私にタクミ先輩の話させたでしょ」

言われて、先生は露骨に私から視線を逸らして誤魔化した。

「…ねえ、ハルカちゃん」

理沙さんの改まった呼びかけに、私はそちらを振り返る。真剣そうな声音と違うことなく、理沙さんはさっきまでとは違ってまっすぐに私を見据えていた。

「准一はね、ハルカちゃんに惹かれてるんだと思うの」

ゆっくりと…だけどはつきり、理沙さんは私にそう告げる。

「でもね…」

続ける理沙さんの声は、そこで少しため息交じりのものに変わった。

「ハルカちゃんも気づいてると思うけど…准一が愛海ちゃんと付き合ってるのには、理由があるの。好きとか嫌いとか…そういう根本的なことよりも、少しはずれたところに理由があるのよ。だから、きつと…」

一瞬だけ目を伏せて、理沙さんは少し悲しそうに眉を寄せる。

「ハルカちゃんに惹かれていても、愛海ちゃんとは別れられないっていう葛藤が、准一にはあるんだと思う。だからハルカちゃんには曖昧な対応をしちゃう時もあると思うのよね。好きだから、拒めない。でも愛海ちゃんと別れられないから、付き合えない……って」

……そう…なんだろうか。

確かに、タクミ先輩とマナミ先輩には不思議なところがある。幼馴染で彼氏なのにマナミ先輩は未だに「タクミ」と苗字で呼んでいるし、カップルにしてはあまりラブラブな気配も感じない。だから2人が付き合っているのに何か理由があるかもしれないというのは、少し納得できるけれど…。

「でも、先輩が私に惹かれてるなんてことは…」  
それはない気がする。  
だけど……。

「あ、ごめん。電話だわ」  
キッチンのカウンターに置いてあった携帯電話が鳴って、話を中断して理沙さんが立ち上がった。言葉を嚥んだ私の向こう側で、理沙さんは電話に應對しながらリビングの外へ出て行く。それを見送ってから、先生は少しだけソファから身を乗り出した。私の方へゆっくりと手を伸ばし、大きな手で頭をポンポンと軽く叩いてくる。

「ま、諦めるなんて言わずに頑張れよ。お前のやり方で」  
無責任なことを言ってくれる。そう思って、私は小さくため息を吐き出した。そんな私を見て、先生は少しだけ意地悪くニヤツと笑う。

「俺も、理沙と同じ意見だけだな」

「…………え？」

「准一は本当に迷惑だと思ったなら一回目で拒む奴だし、本当はお前に惚れてるんだろってこと」

「……………」

返す言葉もなく私は思わず黙り込んだ。それをごまかすかのように、カップに残された紅茶に口をつける。すっかり冷たくなってしまったそれを飲み込むと、なんだか体中にじんわりと染み入っていき気がした。

「ごめんね、話の途中だったのに」

謝りながらリビングに理沙さんが戻ってくる。通話を終えた携帯電話を元の場所置きながら、ソファに座ろうとした彼女に先生が「俺が話をまとめといたから大丈夫」と勝手なことを言った。それに「そう」と頷き返してから、理沙さんは「あ、そろそろ乾いたかしら」と私の洗濯物を思い出したのか再び席を立つ。

もうそんなに時間が経ってしまったていたらしい。時計を確認していると、すっかりコーヒーの色が落ちたシャツを手に理沙さんが戻ってきた。

「本当にごめんね。でも良かった、シミにならなくて」

言いながら手渡されて、私はそれを受け取る。再び洗面所の方で着替えなおして、私は借りていたトレーナーを丁寧に畳んだ。リビングに戻ってそれを理沙さんにお礼を言いながら返し、近くに置いてあった鞆を手にする。

「すみません、ごちそうになった上に話まで聞いていただいて…お邪魔しました」

そう言っって頭を下げると、慌てたように理沙さんが顔の前で手を左右に振った。

「あ、もう少し待ってくれる？送っていくから」

「え、いえ、大丈夫です。まだ暗くもないですし…」

「いいの！お願いだから少しだけ待って。すぐそこに来てるって言うてたから…」

続けた理沙さんの言葉に、誰がとか問い返そうとした時、不意にインターホンが鳴り響く。そうして「はいはい」と理沙さんがパタパタと玄関の方へ走っていった。

「…そういうことか」

理沙さんの後ろ姿を見て、先生が小さくそう呟く。「え？」と眉を寄せて先生を振り返ると同時に、リビングのドアが開いて理沙さんが戻ってきた。

「用事って何」

そんな彼女の後ろから、聞き慣れた声が聞こえてくる。

思わず目を見開いて、私はそちらをただ凝視して固まってしまった。理沙さんにそんな問いをしながら、声の主であるタクミ先輩が続いてリビングに入ってくる。そうして、彼も私の姿に気づいて目を大きくみはって硬直したのがわかった。

「今日ね、ハルカちゃんに街中でコーヒーかけちゃって…」

申し訳なさそうに言いながら、理沙さんはタクミ先輩にそう説明する。

「…何やってんの」

呆れたように理沙さんに言うタクミ先輩は、それでも決して私の方を見ようとはしなかった。

「そうしたら貴弘の生徒だって聞いたから、お詫びにウチまで来てもらったの。」

准一の後輩みただし、家まで送ってあげてほしいのよ」

「……………」  
何も答えないタクミ先輩は、小さく吐息を漏らす。それが理沙さんに対してか私を送ることになった境遇にかは、わからなかったけれど…。

「…あの、私一人で帰れますから…」  
鞆を持ち直してそう言いかけると、タクミ先輩が片手を上げてそれを遮る。私が唇をつぐむと、ようやくこちらを振り返って「…行こう」と小さく呟いた。

「よろしくね、准一」

ニッコリ笑って言う理沙さんに返事もせず、タクミ先輩は私を促してそのままリビングを後にした。

その日は疎ましいくらいに空が晴れ渡っていた。4月も下旬にさしかかり、気温も暖かいというよりは少し動けば汗ばむほどで。漠然と温暖化という言葉が脳裏をよぎるけれど、それを細かく吟味するほどの興味はない。そんな風に頭の中に浮かんだ事柄をすぐに消し去っていく作業を、今日どれくらい繰り返しただろう。

それだけ、今の自分には思考力と注意力がない。陰鬱な気分が、何も考える気にさせてくれなかった。

あの嘘をついた日から、どれくらい日数が経ったんだろう。数える気にもならず、ただ何も考えないように必死になったまま、月日が経過するのを漠然と感じるだけだ。

あの日から、委員会で顔を合わせたことを除けば彼女には一度も会っていない。それどころか姿を見かけることもなくなってしまった。意識的に避けているというよりは、彼女が自分の方へ来なければ全く会えなくなるほど、接点のない二人だったんだと実感させられる。

「……………」

これで良かったんだと自分に言い聞かせながら、俺は英単語帳を開く。胸のどこかが痛んだ気がしたけれど、立ち止まって気にして

いる資格は自分にはなかった。

休日の土曜日、受験勉強をする場所を選んだのは県立の大きな図書館だった。これと言った趣味もない自分が、これほどつまらない人間だと自覚したことはなかった。こんな時に、勉強以外にすることが見つからない。

ただし何かを考える気にはなれないので、専ら暗記ものに専念する。それならばわざわざ図書館に行く必要もなかったのだけれど、あえて「典型的な受験生」という立場に自分を置くことでそれ以外の思考を遮断したかった。それでもしないと、あの時の彼女の泣き顔がすぐに蘇ってきそうだったからだ。

昼を過ぎた頃、周りの受験生や社会人たちがバラバラと昼食を取りりに一旦外へと出て行く。その流れに反するように、空腹もろくに感じていない俺はそのままその場所に居座ることに決めた。だけどその瞬間、ズボンの後ろポケットに入れていた携帯が振動したのに気づく。取り出したそれが示したのは、メールではなくて通話着信だった。

席を立って、俺はそのまま出口へ向かう。その間にコールは切れってしまった為、外に出ると同時にこちらからかけ直した。

『今忙しかった？』

第一声、少し遠慮がちな愛海の言葉が耳に届く。「いや」と小さく答えると、電話の向こうで軽く頷いたようだった。

『今瑞穂と勉強してるんだけどね、前にタクミが使ってた赤い表紙の参考書のこと……っ！』

言いかけた愛海の言葉が、小さな悲鳴に変わる。何事かと一瞬目をみはったけれど、電話の向こうではガサゴソと物音がした後で『准一？』と第三者の声がした。

「何」

自分でも無愛想だと自覚するほどの声で、俺は問い返す。俺のことを下の名前で呼ぶ女子なんてそうはいない。冷たい返事を受けた瑞穂は、それでも慣れているから気にした様子はなかった。ただ瑞穂の向こう側で、「急に電話取らないですよ！」と愛海が文句を言っているのが聞こえてくる。

『どーしてもその参考書見せてほしいんだけど！今すぐ持ってきてきて』

「今すぐって……」

『今うちで勉強してるからさ、持ってきてよー。あ、ちなみに准一はどこにいるの？』

「こちらの返事なんてお構いなしなのか、瑞穂はまくしたてるように続ける。

「今すぐは無理」

きっぱりと返事をして、俺は瑞穂のリアクションを待たないまま「愛海にかわって」と告げた。

口の中でブツブツと文句を転がしながら、瑞穂は電話を愛海に譲



る。

『もしもし?』

と再び出てきた愛海に、俺は吐息まじりに説明した。

「その参考書だったらちようどこの前、姉が持っていったよ」

姉も他校でだが高校教師をしている。俺の部屋で見かけたそれを気に入ったらしく、俺に有無を言わさず持って行ってしまった。

『理沙さんが?それじゃあしょうがないね』

「今近くにいるから、返してもらいに行ってくる。瑞穂に明後日学校に持っていくって言っというて」

『でもそれじゃ面倒でしょ?瑞穂の我儘だし、無理しなくても...』  
「いいよ。後でうるさそうだから」

苦笑い気味にそう言つと、電話の向こうで「それもそうね」と愛海も少し笑う。そうしてそのまま通話を終わらせて、俺は図書館の中へと戻った。

それにしても、どうして瑞穂もそれほどあの参考書にこだわるんだろう。ふっと浮かんだそんな疑問も詳細に頭を捻るほどの興味がなく、俺はそのままそれを次の瞬間には忘れてしまっていた。

\*\*\*\*\*

それから2時間ほど図書館で勉強をして、俺はようやくそこを後にした。鞆を肩から提げて、反対の手で携帯電話を操る。歩いて図書館の門をくぐりながら、俺は電話をかけて相手が出るのを待った。

『もしもし?』

いつもより長く待たされた後、相手の声が耳に届く。

「今、家?」

尋ねると、姉は少し考えたような間を空けた後に「そうよ」と答えた。そのほんの少しの間に、些細な違和感を感じる。

「この前持って帰った参考書なんだけど…」

『ああ、うん。助かったあ、あれ。参考になったわ』

半ば勝手に持って行ったことには悪びれた様子もなく、姉は平然と「ありがとう」と礼を言った。

それを同級生が見たがっていることを告げて、俺は近くにいるから今から取りに行きたい旨を伝える。

『え、そう!? そうね、それがいいわ! お友達も早く見たいだろうしね!』

マンションまで行くと伝えた瞬間、姉の声とテンションがワンランクアップした気がした。やっぱり今日の姉に違和感を感じながら、俺は密かに眉を寄せる。

『じゃあ今から待ってるわ。ちょうど頼みたい用事もあるし』

語尾に確実にハートでもついているような声で、姉はそう続けた。

その一言に、とてつもなく嫌な予感がする。だけど今更、断れるわけもなかった。

姉のマンションはここから歩いて数分程度だ。覚悟を決めて、俺は吐息混じりに携帯電話をしまいながら少しだけ早足で目的地へと向かった。

\*\*\*\*\*

たどり着いたマンションはもう何度も訪れたことがあったけれど、なんだか今日は違って見えた。姉のあの言葉で嫌な予感がしているからだろう。エレベーターホールでちょうど来たそれに乗り込み、5階のボタンを押す。一番奥の部屋まで行って、インターホンを鳴らした。

「いらつしゃい」

含み笑いをした姉が、にんまりと顔を出す。嫌な予感を通り越して、背筋が凍る思いだ。今更ながらにここへ来たことを後悔すると共に、少しだけ責任転嫁をして瑞穂を恨む。

「ごめんねえ。借りたのこっちになのに取りに来てもらって」

玄関を入って一番近くにある部屋のドアを開けて、姉はそこへ入って行く。すぐに出てきたと思ったなら紙袋に参考書を入れて手渡してきた。

「…どうも」

短く言って、俺はそそくさと踵を返す。そのままどそくさ紛れに帰れないものかと思っただが、あるうことが姉は俺の襟をぐいと掴んだ。

「頼みたい用事があるって言わなかったかしら、私」

「…頼みごとのある人間のセリフとは思えないんだけど」

肩を竦めながら言っていると、姉はにっこりと笑いながら俺から手を離れた。どうしたって俺が逃げられないと踏んだんだろう。

「こつち来て」

リビングへと促して、姉は先を歩いて行く。一般的なマンションよりは少し長めのその廊下を歩いていき、俺はリビングのドアをくぐると同時にしびれを切らした。

「用事って何」

逃げるのを諦めたとは言え、どうせろくなことじゃない。尋ねながらふと顔を上げて、俺は思わずその場で硬直してしまふ。

「……………」

そのリビングにいたのは、名取先生ともう一人…。幻覚でも見ているんじゃないかと思うくらい信じられなくて、俺はただ目を見はった。

彼女の方も俺が来ることは予想していなかったらしく、同じように目を見開いている。まるで鏡を見ているように、互いに息を飲んだ。

「今日ね、ハルカちゃんに街中でコーヒーかけちゃって」

さすがにそこは申し訳ないと思っっているのか、姉は彼女の方を見ながら苦笑まじりにそう言う。そう言えば玄関に姉の趣味じゃない靴があったことに、ここへ来た時点で気づくべきだった。

「…何やってんの」

相変わらずドジな部分のあるらしい姉に呆れたように言っただけで、今の俺にはコーヒーがどうのは所詮どうでもいい話でしかなかった。ただ、平静を装うのに必死なだけだ。

「そうしたら貴弘の生徒だって聞いたから、お詫びにウチまで来てもらったの。准一の後輩みたいだし、家まで送ってあげてほしいの

「よ

「……………」

こっちの気持ちなんて知ってか知らずか…………いや、知っているに  
違いない。姉は何食わない顔で、そんな横暴なセリフを吐く。

「……………」

今更、断れるわけもない。このおせっかい夫婦にかかれれば反論の  
余地すら与えてもらえないんだから。その証拠に、奥のソファでは  
名取先生がニヤニヤと不良教師の名に恥じない嫌な笑みを浮かべて  
いた。

小さく吐息を漏らすと、それまで黙っていた彼女が「…あの」と  
小さく声を出した。

「私一人で帰れますから…」

鞆を持ってそう言いかけたその言葉を、俺は片手を上げて遮る。  
それを受けて口をつぐんだ彼女を見て、俺は「…行こう」と呟くよ  
うに促した。

ここで意固地に断るのもおかしいし、何よりそこまで邪険にする  
のも本意じゃなかったから…。

リビングを出て行く俺の後ろ姿に姉が何事かを投げかけたけれど、  
俺はそれに応じる気もなかった。怒っているわけではない。それ  
でも、姉のしたことに感謝をする気なんてもちろんない。

「……………」

無言のまま部屋を後にする俺の後ろを、ためらいがちに彼女がついてくる気配だけが感じられた。

……沈黙が、ただ痛かった。駅へ向かう途中も、電車に乗ってからも…先輩は一言も口を開かなかつた。そんな後ろ姿を見つめる勇氣すらないまま、顔を伏せて私は1歩後ろを歩いて行く。

言うべきことも言いたいことも見つからず、ただこの空気に耐えるしかない。その間、頭の中を巡り巡るのは理沙さんと先生に言われた言葉ばかりだった。

『迷惑』は先輩の本心じゃない…？先輩が私に惹かれてる……？

そんなことあるはずがない、と思いながらも、「もしそうなら」と淡い期待を抱いてしまっそうで…。葛藤する思惑に、頭を振って吐息を漏らした。

私の自宅の最寄り駅で電車を降りて、ホームへ流れる人の波に乗る。そうして階段付近までたどり着いた時に、私はついにこの空気に耐えかねて先輩の前に躍り出た。思い切って、精一杯の勇気を振り絞って…。

「あのっ、もうここで大丈夫です。まだ暗くないし…」

顔を見ることはできなくて、少しだけ視線を逸らしがちにそう口にする。

家まで送ってもらおうのも凶々しい気がしたし、何よりこれは理沙さんの作戦なだけだ。送ってもらわなくてはいけないほど外が暗いわけでもないし、何か事情があるわけでもない。

立ち止まった私たちの脇をすり抜け、ホームからほとんど人がいなくなる。決して田舎なわけではないけれど、次の電車が来るのは10分後だ。刹那の間静まり返ったそこで、私は「それじゃ」と言いかけた。

だけど、その瞬間…。

「……ごめん」

言いかけた私の言葉よりも早く、先輩がそんな呟きを漏らす。少し伏せ目がちな彼の顔を見上げて、私は「え」と目を見開いた。

「…姉が、余計なことして」

続けた先輩は、何かの痛みに耐えるような…少しだけ、苦しそうな表情をしていた。…まるで、最後に話したあの日の夜のように…。

「…謝らないで」

気づくと、無意識のうちに私は震える声でそう口にしていた。今度は逆に、先輩が目をはる。伶俐な瞳が今日初めて私をまっすぐ見据えてくれた気がした。



「どんな理由にせよ…先輩のその言葉、もう聞きたくないんです」

『ごめん』なんて…。忘れたいのに、あの日の痛みが熱を持って蘇ってきてそうだった。

「……………」

何かを言おうとした先輩は、それがまた謝罪の言葉だったのか、苦い顔をして飲み込んだ。

再び訪れた沈黙が、ピリ、と空気を強張らせる。冷たさを携えたそれが、頬をひんやりと撫でていくようだった。

「…タクミ先輩」

私は、もう目を逸らさない。見上げた先輩は、少しだけ戸惑ったようにこちらを見つめ返してくれる。眉を寄せて何かに傷ついた表情をした彼は、ただ私を見下ろしていた。

…フラれたのは私なのに…………。

どうして、先輩がそんな顔をするんだろう…？

「私、これで最後にします」

口から漏れた声は弱々しくて小さかったけれど、それでも確実に先輩の耳に届いていたはずだった。微かな声でも、言葉に込めた決意のようなものは凜とした響きを持っていたから……。

「諦めが悪くてすみません。…だから、最後にもう一回言ってください」

見つめた目は泳ぐこともなく、ただ互いを捕らえて離さなかった。…私も先輩も、ここで逸らしたら全てが終わってしまうのが分かっていたからだ。

「『迷惑』だつて」

思い切つて言った最後の一言は、私のありつただけの勇気だった。

『ごめん』はもう聞きたくないから……。あの日のように逃げ腰じゃなく、正面から、最後にその一言を受け入れようと思った。

「……………」

先輩の瞳が、少し揺らいだ気がした。ただ私は、来るべき一言を待ってその瞳を見つめていた……はずだった。

「……………！」

一瞬後に、泣きそうな目をした先輩の腕に、グイと引かれるまでは。

引き寄せられて、次の瞬間にはそのまま先輩の体温を全身で感じていた。

つまり今自分が先輩の腕の中にいるんだということ…抱きしめてくれるその腕がびっくりするほど力強いことを、ゆっくりと認識する。それでも混乱する頭はついていかずに、私はきつと目を白黒させていただろう。

「…2回も言えるわけない」

ぎゅっつと抱きしめられて耳元で囁かれた声は、少しだけ掠れて震えていた。

「…あんな嘘」

付け足すように、だけど確かに先輩はそう言った。その言葉を受けて目を大きく見開いた瞬間、先輩がより一層腕に力をこめる。

まるで、何かに耐えるみたいに。

まるで、何かに怯えるみたいに…。

「先輩、先輩…」

思い出したのは、理沙さんの話。私に惹かれてる先輩が、愛海先輩と別れられない事情があつて苦しんでる…。ろくに信じていなかったそれも、今のこの人を見ていたら何となく受け入れられる気がした。

「泣かないで、先輩…」

どうして、先輩が泣いていると思ったんだろう？顔も見えなかったし、声だつて震えるようだっただけで泣き声ではなかったのに。感染するように目に涙を浮かべながら、私は祈るようにそう続けた。いた。

ホームには、徐々に次の電車を待つ人たちが集まってくる。けどそんなことを気にする余裕もなく、ただ私は先輩の背中に腕を回し返した。ぎゅっと、それに力をこめる。

「タクミ先輩」

呼びかけた私の方が、完全に泣き声だった。鼻をすん、と鳴らしながら、私は彼の腕の中で改めてそう呼びかける。

「…もし、先輩が私のこと少しでも気にしてくれてるなら…」  
付き合つて、なんて言わない。

愛海先輩と別れて、なんて絶対言わない。

「ただ、私が先輩のこと好きでいるのは拒まないで…」  
真帆が見た、先輩に告白してフラれた女の子のように。想うことも拒絶しないで…。

私が願うのは、今はそれだった一つだから。

「……」  
先輩は、何も答えなかった。ただ私の後頭部に添えられた手が、ぎゅっと更に引き寄せてくれる。

「それでたとえ先輩が振り向いてくれなくても…私、後悔しないから。どうせ後々傷つくなら今…なんて、先輩が私のことそんな風に気遣ってくれなくていいの」

顔を埋めた先輩のシャツから、柔軟剤の優しい匂いがした。その香りに少しだけ落ち着きを取り戻しながら、私は続ける。

「そういう道を選んだのは…私だから」

…そう、全ては私自身の問題なんだ。それにここで二股なんて、先輩にそんな器用な悪い男の真似事をさせたくない。なによ、そうできずに葛藤してしまうこの人が、私は好きなんだから…。

「だから、先輩。信じて待ってる。先輩がいつか振り向いてくれるかもしれないこと…」

先輩が、いつかその身に背負っている全てを話してくれることを…。

背中に回した手を少し緩めると、先輩も同じように力を解放してくれた。顔だけ少し離して、近距離で互いにまっすぐ見つめ合う。

先輩は、やっぱり涙を流してはいなかった。でもその顔を見ると、やっぱり痛みを堪えるような…泣きそうな顔。

そこで、やっと気づく。ああ、泣いて悲鳴を上げていたのは先輩の心の声だったんだ、と。

「…ありがとう」

『ごめん』でもなく、先輩は静かにそう言った。今の私には…一番嬉しい言葉だった。

微笑んで見上げた先輩は、つられたように…でも少し困った顔で笑った。今は、それだけで十分だった。

認識したのは、この人が好きだという改めての実感と…。先輩が少しでも同じ気持ちでいてくれるかもしれないという、さっきより現実味を帯びた淡い期待だった。

ここから、きっと本当の関係が始まるんだろう。やっとスタート地点に立てたような感覚で、私は大好きな先輩の顔を見上げた。

短かった春が過ぎれば、季節はすぐに初夏へと移り変わる。まだ夏を実感する前のそれは、いち早く衣替えをさせられる制服でようやく認識するもので…。

そうして半袖の生徒が増えてきた頃に、梅雨入りしたうっとうしい空が広がっていることによりやく気づく。…そう、季節は中間テストを終えて、6月に入ったところだった。

「研究室に潜入した時にいたあの博士が怪しい」

じめじめして鬱々とした外の天気を「見る」わけでもなく眺めながら、数学準備室で名取先生はそんな呟きを漏らした。降りだした雨が、先生の視線の先の窓を冷たく叩いては落ちて行く。

「何言ってるんですか」

ようやく解き終わった数学の問題集を閉じながら、私は不満げに先生に向けて抗議した。

「絶対親友のあの男が裏切ってるんですよ」

さつきから延々と繰り広げられているこの論争。私の一步も譲らない答えを受けて、先生はむっと眉を寄せる。それが本当に子どもっぽくて、とても教師と会話しているようには思えない。

「これだからお子ちゃまは困るぜ。大体親友が犯人だったらトリックがだな…」

真面目に言い争いをしているけれど、話の大元は単なるサスペン

スドラマだ。最近人気の海外ドラマで、残り2回で最終回を迎えるそれに、先生共々私もハマってしまった。

「先生こそ、わかってないですよ。大体博士にはアリバイが…」

「だからそれは、いくらでも偽装可能だろうがよ」

くだらないこんなやり取りが、どれほど続いているだろう。長々と続けられるそれに苦笑いを浮かべた目の前のタクミ先輩に、私はさすがのように視線を向けた。

「先輩はどう思います？絶対親友が怪しいですよね」

「だから、博士が怪しいって！」

尋ねる私の声にかぶせながら、先生までタクミ先輩の方へ身を乗り出す。

ついに自分の方へ矛先が向いた先輩は、苦笑したまま構わずノートにシャーペンを走らせた。そうして私たち2人を見ないまま、身も蓋もないことを言う。

「あと2週間待てばわかるんじゃない？」

思わず、今は敵なはずの先生と互いの顔を見合わせてしまった。

「…あのな、准一い」

「先輩、それはナシですよー」

名取先生と同時にがくつと肩を落とすと、先輩は今度は少しおかしそうに笑う。

私はともかく大人なはずの先生まで、なんだか先輩にあしらわれているようだった。



「…あ、先輩、6時ですよ」

そこで不意に見やった室内の時計に気づき、私はそう言う。話題を変えて時刻を教えたその私の声に、先輩は同じように時計を見上げた。それに「ああ、うん」と返事をしながら、先輩は使っていたシャーペンを机に置く。開いていた問題集とノートを閉じて、帰り支度を始めた。

引退しても未だ剣道部の面倒を見ている愛海先輩が、部活を切り上げるのが決まって6時だった。それまで数学準備室で名取先生の元で受験勉強をし、そしてタクミ先輩は愛海先輩と帰る時間を合わせている。

だから私にとっては、毎日この時間が先輩といられる貴重な時間だった。途中で愛海先輩のところへ行ってしまうのは少し切ないけれど、以前のように胸が痛むことはなかった。

それが、自分の望んだことだから。好きでここへ来てるんだから…。

それに、先輩に抱きしめられたあの日から…2人の関係は何も変わっていないけれど、心の距離は互いに近づいていることを感じていたから。

華江も真帆も向井くんも、今のこの不思議な関係をなんとか納得してくれた。タクミ先輩のことを「最低」と評していた華江さえも、私を感じた先輩の苦しみを打ち明けると、特に何も言わなくなった。…まあ、だからと言って華江が先輩を認めてくれたとは思えないの

だけれど…。

『第三者には理解できない事情つてあるものだからね』  
最後に華江がタクミ先輩のことを口にしたのは、そんな一言だった。

『ま、そこにどうこう言うつもりもないし。私はハルカの味方なだけだから』

続いた言葉に、私は苦笑する。タクミ先輩のことは認めていなくても、私の想い人だから彼女なりに譲歩してくれているらしい。

真帆も向井くんも、2人なりに今は私の応援をしてくれているよ…。良い友達に恵まれたな、と、最近ではひしひしと実感している。

「…じゃあ、お先に」

席を立った先輩が、鞆を手に立ち上がる。先輩の後ろ姿に手を振って、私も「さて」と問題集を片付け始めた。

「じゃあ私も帰りますね。先生、さよーなら」

「…お前、わかりやすいなホントに」

「だって先生と2人でいたって仕方がないもん」

べ、と舌を出して言うと、先生は「ふん」と鼻で笑う。ガタンと椅子から立ち上がりながら、再び窓の外を見上げた。

「雨降ってるから送ってつてやるよ。ついでだから」

車の鍵を見せて、先生がそんなことを言う。今までそういう風に言ってくれたこともなかったたので、私は意外そうに眉を上げた。

「…明日雨降るのかな」

「おう、梅雨だからな」

私の嫌味を分かっているのか、分かっている受け流したのか…  
押し量りにくい顔で先生が答える。

それに苦笑いを返して、私は先生の言葉に甘えることにした。

\*\*\*\*\*

「理沙さんお元気ですか？」

車の助手席に乗り込んで少し他愛ない話をした後、私はそう話を先生の方へ振った。

あれから一ヶ月半ほどが経ったけれど、理沙さんとは会っていない。色々話を聞いてもらったり励ましてもらったりしたことに關しては、先生づたいでお礼を言っただけだ。

「おう、今度遊びに来いって言っただけ。来月か再来月辺り」

「あ、それはぜひ！名取先生のいない時にでも」

「……お前、俺のこと嫌いなわけ？」

「あれ、先生つてそんな小さいこと気にする人？」

返した言葉に、先生は「む」と返事に詰まる。いつもやられっぱなしだからたまには反撃しないと気がすまない。心の中で笑いながら、私は話題を変えた。

「で、何で『来月か再来月辺り』なんですか？」

さっきの先生の言葉を繰り返して尋ねると、先生は運転しているために前を向いたままだったけれど、少し不思議そうに首を傾げた。

「あれ、准一から何も聞いてない？」

「え？何がですか？」

全く話の示す方向が分からなくて、私は瞬きを繰り返す。ちょうどそこで信号が赤に変わり、先生はすーっと静かに車を停車させた。そうして、窓枠に片肘をついた体勢で前を向いたまま、続ける。

「理沙、妊娠してんだわ。安定期に入るのが来月か再来月辺りってこと」

「あ、そうなんで……ええええっ!!?」

思わず、驚きのあまり叫びに似た声を上げてしまった。ここが車という密室で良かった。

外だったら確実に周囲が何事かと振り返っている。

「この前お前に会った辺りの頃、ずっと体調が悪いつて言ってたんだよ。それで実家に帰ったりしてただけ……」

「え、そうしたらおめでただったんですか？」

「ま、そーゆーこと」

理沙さんがママになるなんて……なんだか私の方が感動してしまつて、ポーッと赤ちゃんを抱く理沙さんを想像してしまう。きつといいママになるんだらうなあ……なんて思った瞬間、私はハッと我に返った。

「あ、おめでとうございます、先生！パパになるんですね！」

「付けたしのように言うな、付けたしのように」

苦笑いした先生は、どこか照れを隠しているようだった。再び車を走らせながら、先生はこちらを見ないようにしている。

絶対に口にしないけど、先生だっていいパパになるに違いない。意外に子煩悩な気がするし……。

「それより話変わるけど、お前、片桐たちに俺の話はしたのか？」  
不意に出てきた華江の名前に、私は「ああ」と居ずまいを正す。  
少し真剣な話をする時の先生の顔に戻ったからだ。

「はい。びっくりしてました、三人共」

「だろうなあ」

クツクツク、と笑う先生は、どこか楽しそうだ。

タクミ先輩と色々あったあの後、先生から「華江たちには先生とタクミ先輩の本当の関係を話してもいい」という風に言ってもらっていた。学校では義兄弟だということはあえて隠しているのに、華江たちのことは信用できるからという理由らしい。

「あれだけお前のこと心配してんのに、一部隠して説明なんてできないだろ？」

先生は、そう言ってくれた。確かに、タクミ先輩との間に不思議な着地点を設けた今の私の状態を説明するのに、先生と理沙さんというきつかけなしでは話ができない。そこを隠してごまかしながら話すのも、華江たちを裏切るようで嫌だったので先生の提案は嬉しかった。

「真帆なんてちょっとショック受けてましたよ、先生のファンだから。結婚してることも初めて知ったって」

「おお、あいつはあれだな、男を見る目があるな」

「え、私は全然ないと思う」

笑いながら言うと、前を向いたままの先生からげんこつが飛んでくる。それをすい、と避けて私は今度は声をたてて笑った。

「ま、あいつらなら信用できるし大丈夫だろ」  
話を戻して、先生はそう言う。アクセルを踏み込んだまま、私の家の方向へとハンドルを切った。

「華江たちは口が堅いですし、絶対大丈夫です」  
そこは私も自信がある。力いっぱい言った私に、先生はチラ、と一瞥を投げ寄越した。

「？」

その視線に小首を傾げると、先生は感心するように改めて口を開く。

「お前のすごいところだと思うよ、そういうところ」

「え？」

意味がわからずに、私は尋ね返した。

「お前、友達に恵まれてるよな」  
急にそう言われて、私は目をパチパチさせる。確かに、それは最近特に実感していることだ。先生の言う意味がわからないまま、とりあえず力強く頷いた。

「気づいてるか？それはお前がそういう人間を引きつけるからなんだよ」

いつになく真面目な面持ちで、先生はそう続ける。答えるべき答えも持たない私は、ただ先生の話に真摯に耳を傾けるだけ。

「どんなに片桐たちがイイ奴らでも、お前がダメな奴だったら友達でなんていないだろ」

最近煙草を辞めたらしい先生は、信号待ちの間に手元が寂しいの

かハンドルをトントンと指で叩く。その動きを何となく眺めながら、私はじつと聞き入った。

「お前の明るさと前向きなところが、周りの人間を引きつけるんだろっな」

先生がそこまで言った時、ちょうど車は私の家の前に着いた。再び静かに車体を止めながら、先生は少しだけ笑う。

「そんなお前にだから、期待してることがある」

「……え？」

シートベルトを外しながら、私はそこで初めて聞き返した。眉間に皺を寄せると、先生にそこを思い切りデコピンされる。

「明日をお楽しみに」

ニツと笑った先生は、私を車から下ろして走り去っていった。

\*\*\*\*\*

先生の言葉の意味を考えて、何だかすつきり眠れなかった気がする。わからないものは考えてもわからないんだから、と思うけれど、それでも気になってしまっ。……。だけど先生が言っていた意味を理解するのは、そう後のことでもなかった。

朝から教室がざわついていたら、何だか嫌な予感がした。

「ハルカー、今日ね、転校生が来るんだって」

ウキウキと楽しそうに、教室に入った私の席まで真帆がやって来る。真帆はこういうのが大好きだ。新しいクラスメイトなんて、浮かれる要因の一つになるに違いない。

反対にさして興味がないらしい華江は、私の前の席で向井くんといつも通り話をしてるだけ。私もそれほど興味があるわけではなかったけれど、真帆には「そうなんだ」と返しておく。

「それがね、めっちゃめっちゃイケメンらしいよ」

それでクラスが浮き足立っているのか。納得して、私は「ふうん」と小さく相槌を打つ。きつとこのクラス内で、イケメンに興味がない私と華江は貴重な存在だろう。

いや、決して全く興味がなわけではないけれど…。タクミ先輩以上に興味が持てるはずもなく、そちらへ気を向ける余力が自分ないだけだ。

「良かったね、真帆。念願の出会いかもね」

棒読み寸前の口調で、私は真帆にそう続ける。それに気づいた様子もなく、真帆は「いやん」と妙な声を上げた。

「超好みだったらどうしよう」

「…真帆さん…?」

ダメだ、完全に世界に入ってしまった。真帆は惚れやすい性格だから、イケメン転校生に心を奪われるなんてこともありえないことじゃない。

…そう…思っていたのだけれど……。



「柴田一真くん。彼は中学卒業後、両親の仕事の関係でアメリカへ…」

朝のHR、噂通り名取先生が連れてきた転校生を見て、クラスに小さな悲鳴が上がった。もちろん、歓喜の悲鳴だ。確かにそれだけ、転校生の「柴田一真」は噂以上に美形だった。

180センチくらいある長身に、細身の体。アッシュ系に染められた髪を揺らして、彼はクラスメイトたちに一礼しただけの挨拶を返した。両耳に開いたピアスが、嫌味がなく似合っている。しかも帰国子女とくれば、女子の好奇の眼差しに晒されないわけはなかった。

「席はあそこな」

名取先生が、柴田くん私の隣の空席を指す。そこでようやく、私は「…もしかして」と不意にあることに思い至った。

先生が私に期待しているっていうのは…もしかして、転校生のお世話役だろうか？嫌な予感に背筋が凍る思いで、私は思わず身震いした。

冗談じゃない。こんなに彼に興味を持っている人がいるんだから、他の子がやればいいのに…。そう思ったけれど、当然柴田くんは私の思惑なんて知る由もなく隣の席の椅子を引いた。

「よろしくね」

とりあえず、無視するわけにもいかなくて声をかける。柴田くんは軽く頭を下げてだけで、声を発することもなかった。

「柴田、わからないことは隣の夏川に聞けな」

「……………やっぱり。先生のダメ押しが聞こえてきて、私は柴田くんに聞こえないように吐息を漏らす。」

そうして私は、クラス中の女子の羨望の眼差しを浴びながら柴田くんのお世話役を押し付けられたのだった。

\*\*\*\*\*

自分の置かれたとんでもないかもしれない境遇に気づいたのは、1時間目の休み時間だった。私の出る幕なんてなく、柴田くんの周りにはお世話をしたらしい女子がワイワイと群がってくる。

その波に乗り切れない真帆が、後ろの方でもみくちやにされていた。その周囲の様子に、前の席の華江共々ため息を漏らす。

「ねえねえ、柴田くんのおうちはどの辺なの？」

「アメリカからはいつ帰ってきたの？」

そんな質問を立て続けにするクラスの女子たちを見ながら、私は漠然と「本当にあるんだな、こういうの」と思う。漫画でよく見る光景だけれど、実際に見たのは初めてだった。

「ねえ柴田く……………」

「……………えな……………」

それまで一言も発しなかった柴田くんが、ある女子がしつこくよびかけた時に何事かを小さく呟いたようだった。初めて聞く声に、

それまで遠巻きに見ていた男子たちもがこちらを興味ありそうに振り返る。「え？」と聞き返したその女子の周りの子たちも、柴田くんの呟きに耳を傾けようと静まり返った。

ところが、その次の瞬間…。

「うるせえつつつてんだよ」

静寂に聞こえた彼の声が告げたのは、そんな思いもよらない一言だった。

椅子に座ったまま両手をズボンのポケットに突っ込み、柴田くんはその女子を見上げる。それからぐるりと、周りの人間を見渡した。「ピーチクパーチク、ブヒブヒブヒ、人の周りでガタガタ言つてんじゃねえよ！ヒヨコかブタか！てめえらは」

名取先生も顔負けの口の悪さで、柴田くんはそう吐き捨てる。しん、と冷え切った教室内の空気の中、彼は嫌気がさしたように不機嫌な顔でガタンと椅子から立ち上がった。

「おい、お前」

高圧的な態度で、そう私を見下ろす。急に圧力を感じて、私は柴田くんを見上げて「はい」と情けない返事をした。初対面で「お前」と失礼な呼び方をされたことはこの際どうでも良かった。

「校内案内しろ。うつつうつしいブタがついてこねえとこな」

「え、でももうすぐ授業が…」

反論しようとしたけれど、ジロ、と睨まれて私は身を小さくする。逆らえる雰囲気でもなく、私はそろそろとゆっくり立ち上がった。

幸い、2時間目は名取先生の数学だ。機嫌を損ねて完全にサボる気である柴田くんにつき合わされても、名取先生なら文句は言わないだろう。何より、面倒な役を私に押し付けたのは先生に他ならないんだから。

柴田くんは腕を引っ張られながら、私は茫然とするクラスメイトたちに見守られて教室を後にする。華江だけが、「ご愁傷様」とでも言うように私に向けて合掌していた。

授業をサボったことなんてない私に、良いサボり場所なんてわかるわけもなかった。どこに行ってもこのルックスの彼を連れていけば目立つだろうし、潜む所すらない。仕方なく、行ったこともない屋上へ続く階段を上ってみる。漫画なんかではサボり場所と言ったら屋上が定番だったからだ。

長い階段を上った先の重い扉を、ギイツと押し開く。鈍い音をたてながらだっただけけれど、それはゆっくりと開いた。

「へえ、結構イイとこじゃねえか」

うーん、と伸びをしながら、柴田くんは感心したように言ってニツと笑った。屋上から見える校庭では、2クラスほどが体育の授業をしている。そこにいる教師に見つからない場所へ彼を誘導して、私は大きく息を吐いた。今の自分のこの境遇に、だ。

柴田くんはというとそんな私の様子に気づいた素振りもなく、その場にゴロンと横になる。新しい制服が汚れるかもしれないことは、微塵も気にしていない様子だった。

「…あの…」

昨日の雨が嘘のように、今日は久しぶりに太陽が顔を覗かせていた。照りつけるようなそれにまぶしそうに瞼を閉じて、柴田くんはそのまま眠ってしまいそうだ。そんな彼に遠慮がちに声をかけると、

目を閉じたままだけれど顔をこちらへ傾ける仕草をする。私の声が、聞こえてはいるようだった。

「2時間目終わったら起こしに来るから……私、戻ってもいいかなあ？」

ためらいがちに言うと、柴田くんはふい、と顔を元の位置へ戻す。それから、小さく呟いた。

「却下」

即答されて、私は思わず眉を寄せる。

「大体、今戻ったら目つけられて授業中指されまくるぞ」  
ゆっくりと目を開けながら、柴田くんはそう続けた。その一言に「ぐ」と返すべき言葉に詰まって、私は所在なくキョロキョロする。初めてサボったことと、その相手がこんな得体のしれない粗野な転校生であることに、そわそわと落ち着かない。しばらくどうしていいかわからず立ったままだった私に、柴田くんは眉を顰めた。

「あーもうっうぜえなあっ！いいからそこ座れ！」

怒鳴られて、私は慌ててそこにちよこんと腰をおろす。それを見て満足そうに頷いた後、彼はまた自分の腕を枕に瞳を閉じてしまった。……うざいというくらいなら、帰してくれればいいのに……。そう思ったけれど、逆鱗に触れるかもしれないので黙っておく。

「……あの……」

しばらくの沈黙の後、やはり静かな空気に耐えかねて私は再びお

そるおそる声をかける。耳だけ傾けてくれているらしい柴田くんは、話しかけられること自体には機嫌を損ねそうもなかった。

「…何で…私だったの？」

クラスメイトたちをうつとうしそうにしていた彼が、どうして私を連れ出したのか。そこがふと気になって、そんなことを尋ねてみた。

そう聞かれて、柴田くんは少し不思議そうな顔で私を見る。小首を傾げながら、目を細めてこちらを見つめ返してきた。

「…お前が、担任に俺の面倒見るように頼まれてただろ」

「…それは…そうだけど…」

他人と関わるのが嫌そうだったのに…。柴田くんの教室での態度と今の言動に、どうしても矛盾を感じてしまう。そのことを、理解不能のような顔をしていたのかもしれない。チラリとそんな私の様子を一瞥してから、柴田くんは少しだけ口元を緩めた。私の考えていることが、全て透けてでもいるかのようにお見通しのようにだ。

「あのな、俺は別に誰かと関わるのが嫌なわけじゃねえよ。ただ興味本位で近づいて来られるのが嫌なだけだ」

続いたそんな言葉に、私はわずかに目を見開く。確かにさっきまでの教室での乱暴な口調とは違って、穏やかな話し方をしていた。

「それに、お前とその前の席の女だけだっただろ。俺の周りでピーチクパーチク言わなかったの」

華江のことを言っているらしい。確かに、イケメン転校生に騒いでいなかったのは私と華江だけで…。それを、柴田くんはきちんと認識していたらしい。

「…柴田く…」

「一真」

呼びかけた私の声を遮り、柴田くんは自分の言葉を重ねる。言われた意味が一瞬わからず、私は小さく首を傾げた。

そんな私を見上げながら、柴田くんはゆっくりと上半身を起こす。ニツと笑いながら、「ファーストネームの方が呼ばれ慣れてる」と帰国子女らしいセリフを口にした。

「じゃあ…えつと、一真は…」

言われた通りに呼ばせてもらいながら、何だかやつぱり照れて口ごもってしまう。大体、男子を下の名前で呼び捨てにするなんて、私のキャラじゃないからだ。それでも本人がそう言う以上拒むことも不自然なので、慣れない呼び方で私は一真を呼んだ。

「イケメンだとか転校生だとか、もてはやされるのが嫌ってこと？  
尋ねると、一真は少しだけ考える素振りをする。

「だって、面倒くさくねえ？顔だけ見て近づいてくる女って、結局俺の内面見てがっかりするんだぜ」

…確かに、あの罵声を浴びせた後の女子生徒たちの引き方を見ると、それは一目瞭然だ。…だけどあれは、明らかに一真が悪いと思う。

「それは、一真が乱暴な言い方するから…」

「じゃあ『お前』は、イケメンだけど乱暴で口の悪い俺と関わりたくないと思ってる？」

尋ね返されて、私は少しだけ眉を寄せた。…それは…と、逡巡するよつに顔をあお向ける。



「…そこまでは、さすがに思わないよ」  
「そうだろ」

何を自信満々に答えてるんだか…一真は、軽く満足そうに頷いてみせた。

「俺の素を知ってドン引きする人間か、そうじゃない人間か…それくらい見ててわかる。だからこそ、ああいう外見につられてくる連中とは関わりたくねえんだよ」

社交的ではないかもしれない。でも、そう言う一真は…自分が選んだ人間とだけはきちんと付き合える人のように思えた。

「…えつと、じゃあ…」

一真の斜め前辺りで座っている私は、一瞬考えてから再び口を開く。何を言えはいいのかわからなかったから、とりあえず一番に思いついたことを聞いてみる。

「一真の好きなものって何？趣味とか…食べ物とか」

もしかしたら正面から友達付き合い合いをすれば、ただの乱暴者というわけではないかもしれないという気がした。素を知ってみる必要があると思ったから…そう尋ねる。

だけど、一真は少し真顔になった後、それからプツと噴き出した。

「…やつぱり、思った通りだ」

漏らされた呟きに、私は「え」と顔を上げる。目が合うと、一真は笑っていた。…クラスメイトたちが見たらビククリするんじゃないかという、笑顔。

「大体の女が俺に尋ねることは…『彼女はいるのか』とか『どれくらいアメリカにいたのか』とか…そんなとこだ」

あぐらをかいて、一真は少し長めの前髪をかき上げる。

「俺のこと」じゃなくて、「俺に付随するもの」についてしか聞かない。だから、俺の人間性よりも自分の恋愛対象になるのかどうかとか、そういうことばかり気にしてる」

一真の言葉に「……なるほど」と小さく納得して、私は軽く頷く。そう言えばさっきのクラスメイトたちもそうだったかもしれない。一真が嫌気がさすのは、そういう扱いをされるところなのだろう。

「俺の好きなものねえ」

話を戻して、一真は一瞬考える。それから「わからねえと思うけど」と前置きして、続けた。

「音楽は『Azure sky』が好き」

「え!？」

一真の答えに、私は即座に大きな声を上げてしまう。彼が挙げた名前は、確かに一高校生にはあまり知られていないマイナーなバンドだった。

ロックとジャズを融合させたような音を繰り広げる、知る人ぞ知るバンドで……。実は私が何年も前から惚れ込んでいるバンドだった。もちろん、私も『Azure sky』が好きという同志に出会ったことはまだない。

「私も好きなんだ〜!この前出たアルバムも毎日聴いてる!」

「マジで?」

答えると、一真の表情も私と同じくパアツと明るくなった。どんなにイケメンで大人っぽくても、こういうところはなんだかわいらしい感じがする。

「すげえ、初めて会ったかも。マイナーだから皆知らねえんだよね」

笑って言う一真は、本当に嬉しそうだった。それから残りの授業時間、一真とずっと音楽の話で盛り上がったことは言うまでもない。

2時間目終了のチャイムが鳴り響いた瞬間、「さて」とようやく一真は立ち上がる。

「悪い、聞いてなかった。お前の名前」

うーんと大きく伸びをしながら、一真は今頃気づいたらしく軽く謝りながらそう尋ねてきた。

「夏川悠花」

「ハルカね。お前のおかげで少しは楽しくなりそうだね、学校」

ニツと笑いながら言う一真に、私も微笑み返す。

そうして並んで屋上を後にして、教室へと戻って行った。

\*\*\*\*\*

教科書の揃っていない一真に見せてあげたり、ランチも華江と真帆と向井くんの中に入れてあげたりして、慌しく1日が過ぎて行った。帰りのHRを終える頃には、そんな私はクラスメイトたちに「猛獣使い」というあだ名をつけられたようだ。

そんな私に、帰りの号令を終えた後、教壇の上から名取先生がニヤリと笑みを投げかけてくる。どうやら、先生の思惑通りだったようだ。

元々、美人な外見につられて近寄ってくる男たちに「中身を見てくれない男は嫌」という考えを持っている華江は、どこか一真と通

じるところがあつたらしい。意外に気が合つようだった。

向井くんは言わずもがな、誰とでも仲良くできるタイプだし、転校生だからって一真に変な遠慮をしたりしない。一真もその自然体が気に入ったのか、彼とは抵抗なく話ができるようだった。

そうして真帆はというと、朝はイケメンイケメンと騒いでいたけれど、あの罵声を聞いて「あれは無理」と一真を恋愛対象から外したらしい。今では普通に一真とクラスメイトとして接している。

こんな私たちの輪を、他のクラスメイトたちは一日中遠巻きに眺めていた。

「おら、帰るぞ」

HRを終えて、一真は立ち上がりながら隣の私を見下ろす。いきなりな言葉に「え」と私は眉を寄せた。

「ダメよ、ハル力は放課後用事があるんだから」

前の席から、華江が助け船を出してくれる。その言葉を受けて、一真は軽く小首を傾げた。

「何、お前部活でもやってんの？」

尋ねられて、私は小さく首を振る。否定すると、一真は「だっていいじゃねえか」と構わず続けた。

「CD屋とか本屋の場所くらい案内しろ」

私の腕を引っ張って、一真は強引に立たせる。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

確かに一真はイイ奴だということがわかったし、クラスメイトとして仲良くするのはいい。だけど、タクミ先輩との貴重な放課後の時間まで譲るわけにはいかない。

必死で腕を振り払おうとするけれど、こういう時の男子の力は抗

えるものでもなかった。

「部活はやってないけど、用事はあるの！私にだって自由な時間は必要なの！」

「ふざけんな。お前の時間は俺の時間だ」

横暴なセリフを吐いて、一真は真顔でそんなことを言う。

「え、じゃあ一真の時間は？」

「俺の時間は俺の時間だ」

「………このジャ アン！！」

当たり前のように言いながら私を引きずっていく一真にそう返したけれど、向こうは全く気にする素振りもない。

連れ去られていく私を眺めながら、向井くんが華江に「…結構いいコンビだなあ」と言っているのが空しく聞こえてきた。

\*\*\*\*\*

アメリカから家族と別れて一足先に帰ってきた一真は、この街で一人暮らしをしているらしい。まだ街の散策が終わっていないらしく、CD屋や本屋など、細かいところの案内をさせられた。かわいいカフェでお礼にとコーヒーを奢ってくれたけれど、周囲の女の子たちが一真の風貌に振り向くので少し落ち着かない気分だった。

タクミ先輩と会えなかったのは残念だったけれど、一真といえる分には結構楽しかったのも事実だ。男の子と2人で出かけるなんて今までほとんどなかったけれど、一真となら男女の友情もありえるなんてなんて漠然と思う。口は悪いしジャイ ニズムを振りかざす男だけ

れど、悪い人間ではないから…。

「昨日どうだった？」

翌日の休み時間、真帆と華江にそう聞かれたのは言うまでもない。

「まあ結構楽しかったよ？話してて面白いし」

真帆と華江も、昨日一日一緒にいて一真がただ乱暴なだけの男じゃないことはわかっていようだ。

「でもハルカとしては、残念よね。放課後の貴重な時間なもの」

華江が笑いながら言うので、私は「そうだよ」とその部分については泣きつく。あの横暴な俺様男に付き合っていたせいで、昨日はタクミ先輩の顔を拝むことすらできなかったんだから…。

「1日会えないだけで辛い…」

がくりと肩を落として言うと、2人は苦笑いする。

…その時、だった。

「ハルカちゃんー」

教室の入口の方から、クラスメイトの女の子が私を呼ぶのが聞こえた。そちらを振り返ると、手招きされる。

「3年生が呼んでるよー」

そう続けた彼女の言葉に、思わず華江と真帆と顔を見合わせてしまった。

ちなみに、今まで私を訪ねてくる3年生がいたことはない。誰な

のか見当もつかずに首を捻ると、真帆が「怖いお姉さんだったりして」とからかうように言った。

「集団リンチの呼び出しとか？」

うちの学校では見たことのない光景を予想しながら、華江も笑う。2人の冗談はさておいてドアの方へ向かうと、そこにいたのは思わぬ人だった。

「ごめん、呼び出して」

1日ぶりに見るタクミ先輩は、私が大好きないつもの無表情でその声をかけてくれた。

「た、タクミ先輩っ!？」

まさかタクミ先輩が私のところまで来てくれるなんてことが信じられず、私は思わず夢じゃないかと疑ったほどで…。瞬きを繰り返して茫然としていると、彼は少しだけ笑った。それから、手にしていた何かを私の前に差し出す。

「これは…?」

促されるままにそれを受け取って、私は聞きながら先輩を見上げた。

それは、分厚い文庫本だった。

「この前読みたいって言ってたやつ。ちょうど家にあったから」

「え、お借りしていいんですか?」

ただの物の貸し借りなのに、私は思わず飛び上がりたいほどの気分になれる。

先輩に貸してもらえることだけじゃなく、私が読みたいと言っていたことを覚えていてくれたことが嬉しかった。

「それでわざわざ教室まで？すみません」  
文庫を両手でぎゅっと大事に持ちながら、私はペコリと頭を下げる。そうすると先輩は、少し黙った後「…いや」と小さく首を振った。

「昨日、どうしたのかと思ったのもあって」  
…昨日？

先輩の言葉に、私は首を傾げる。

「いや、別に約束してるわけじゃないからいいんだけど…。来ないことが最近は珍しかったから、何かあったのかって心配になって」  
口ごもるようにいつもより更に小声の先輩の言葉は、耳を澄まさないで聞き逃しそうだった。

『約束』…？『来ない』…？

そうやって先輩の言葉を反芻して、ようやく私は「あ！」「と気づく。

「昨日の放課後のことですか！？すみません、昨日は…」  
慌てて、私は思わず大声になってしまった。

「転校生が来たんですけど、無理やり街案内に借り出されて…」  
「……そう」

答えるとタクミ先輩は、小さくそう呟いて少し息を吐いた。それがホッとしたような…安堵の息に聞こえたのは、私の勘違いだろうか？



「…携帯、出して」

続いて降ってきたそんな急な声に、私は「え？」と目を見開く。それでも見上げた先輩の顔は普段通り思惑が読めなかったので、「あ、はい」と慌てて言われたとおりにした。私がポケットからそれを取り出すと、先輩は口頭で何かの電話番号を伝える。

促されるままそれを自分の携帯電話に入力すると、タクミ先輩は読めない無表情のまま言った。

「…俺の番号。来られない時はメールでもして」  
同じ会社の携帯電話だから、電話番号だけでメールもやり取りができるらしい。初めて教えてもらったその番号に、私はまた夢でも見ているんじゃないかという気になる。

「それじゃ」と踵を返して去って行く先輩の後ろ姿を、ポーッと火照る顔でただ見送るしかなかった。

まさか、先輩の携帯番号を教えてもらえるなんて…。きつかけもないしそこまで図々しくもなれず、今まで聞けずにいたのに。

入力した番号をすぐに「登録」して、私はスキップ気味に浮かれる足取りで教室の中へと戻った。

「随分ご機嫌ね、ハルカ」

呼び出した相手のことはとっくに想像がついていたらしい。華江がそんな言葉で迎えてくれる。

「うん」

えへへ、と笑って、私は席に着いた。先輩から借りた文庫本を、大事に鞆の中にしまう。

「今日はなんかイイ日になりそうな気がするよ」

上機嫌に浮かれる私を見て、真帆も笑う。…ちょうど、その時だった。

「へえ」

頭上から、低い声が降ってくる。何事かと思って振り返ると、そこには向井くんとどこかに行っていたはずの一真が、戻ってきて立っていた。

「そりゃいいことだ。そんなお前の一日を更に有意義なものにしてやる」

「……は？」

意味がわからず眉間に皺を寄せて聞き返すと、一真はあの俺様笑顔でニツと笑う。

「今日は日用品買いに行くぞ。俺の家、まだ色々揃ってねえんだよな」

「はあっ!？」

一人暮らしだから生活するために物を揃えるのは大変だろう。それはわかる。わかるけれど……!!!

「やだ!今日は無理!」

「なにおうっ?俺を誰だと思ってんだ」

「……ジャイン……」

「わかってんじゃねえか」

ジャ アン路線で行くらしい一真は、けなしたはずなのに満足そ

うだった。

そうして今日も、一真に拉致られることが否応なく決定する。

さっき教えてもらったばかりのタクミ先輩の電話番号は、早速「今日も行けません」という連絡に使うハメになった。

「……」

開いていた携帯電話を閉じると、俺は無意識に大きく息を吐き出していた。八つ当たりするわけではないけれど、電話を机に置く動作が少し乱雑になる。そんな様子を見ていたらしい名取先生が、自分の場所から「…どうした？」と尋ねてきた。

その声にハッと一瞬我に返り、「…いいえ」と首を振ってごまかした。

意識していつも通りの自分に戻り、受験勉強の参考書に向き直る。それを見てから、先生も同じように生徒の課題をチェックする作業に戻った。ただ、頭を使わない作業らしく、口はいつも通り動く。

「遅いな」

誰のことを言っているのかは、尋ね返さなくてもわかった。

「…今日も来れないって言ってましたよ」

さっきの彼女からのメールを思い出したけれど、俺は胸の中で燻る濁った感情を押し込みながら、平然としたフリで答える。参考書を捲る指を、名取先生が「…ふうん」と呟きながら眺めていた。

「いつ聞いたわけ？」

「？ さっきメールで」

素直にそう答えると、先生は「ふううん」と今度は嫌な笑みを浮かべる。…知っている。この笑みは、ろくなことを考えていない。

「いつの間に携帯番号教えたんだよ？」

「今日ですよ。別にどうでもいいでしょう」

無関心を装って答えたつもりが、先生のしつこい追求に感情が少しばかり露出したらしい。先生は笑ったまま、「イライラしてんなあ」と茶化すように続けた。

…イライラ…？

自覚のなかったその濁った感情の正体を、言い当てられた気がした。

「お前がそういうの外に出すの珍しいな」

からかうわけでもなく、ただ今度は本当に感心したかのように…先生はそう言った。

「それにしても、何をおいても『タクミ先輩第一』の夏川が2日連続で来ないなんて…珍しいな」

わざとなんだろうか？先生は、わざわざ俺の中で何かかひっかかってしまうような言い方をする。口は動かしていても赤いペンの動きは止めず、彼は何でもないことのように平然としているけれど。

「転校生に街案内してるらしいですよ。面倒見が良い彼女らしいけど…どうせ先生がその役目押し付けたんでしょう？」

反撃するつもりで、俺は尚もノートにシャーペンを走らせながら  
そう答える。少しは自分のせいだと思わせるつもりだったが、先生  
にそんな思惑は通じないようだった。変わらない表情のまま、小さ  
く肩を竦め返されるだけ。

「俺は別に、学校内のわからないことを教えてやれって言っただけ  
だぜ？放課後まで拘束されてんのは、転校生の方に無理矢理連れま  
わされてんだろ。強引そうな男だし」

「……え？」

先生の言葉を聞いていた俺は、思わず手を止めて顔を上げる。そ  
のリアクションが意外だったのか、先生も半ば驚いたように目線を  
上げて俺を見た。

「…今…なんて言いました？」

「『転校生に無理矢理連れまわされてる』？」

「その後です」

「『強引そうな男』？」

答えながら、先生は俺の表情から何かを読み取ったようだ。「…  
もしかして、准一…」とようやく少し遠慮がちに呟いた。

「聞いてなかったのか？転校生が男だって」

「……………」

そう言えば、どうして思い込んでしまっていたんだろう？彼女は  
別に転校生の性別についてまで話していなかったのに。放課後まで  
付き合ったと聞いて、勝手に女子だと思い込んでいた。

さすがに先生も悪いことを言ったと思ったのか、少しだけ気まず

そんな顔をした。

「…悪かったな、余計なこと言って」

そう謝られたけれど、実際自分には彼女が今一緒にいるのが男だからと言ってそれを気にする資格すらないはずで…。黒く渦巻く内面の感情が、つまり嫉妬から来るものと気づいた時には、逆に自己嫌悪に陥りそうだった。

…その権利すら、ないはずなのに…。

そうわかっているはずなのに留められない感情のせいで、自分すら嫌気がさす。

「…帰ります」

こんな気分で勉強なんてできるわけがない。ガタンと席を立つ俺を、「…おお」と先生が気まずそうに見上げる。そうして複雑な気分のまま、俺は数学準備室を後にした。

\*\*\*\*\*

「今日は先に帰る」旨を愛海にメールし、俺は学校を出た。

昨日までの暗い雨模様とは違ってかわって、そこには青空が広がっている。これから遊びにでも繰り出すのか、楽しそうに下校していく生徒たちの波に乗る。そうして駅までたどり着いてから、乗り込んだ電車の揺れに身を任せた。

学校の最寄り駅から自宅近くの駅まで、電車を乗り継いで1時間

半ほどかかる。高校生が通うにしては少し長いその距離も、3年になつた今はすっかり慣れ切つてしまつた。人の少なめの車両も熟知するようになり、長すぎる通学時間も既に苦痛ではなくなっている。

そして自宅のある駅にたどり着いた頃、すっかり夕方になり日は紅く傾いてしまつていた。眩しそうに目を細めてから、駅の階段を下りる。そこでも人の流れの波に乗ると、改札を越えた出口まで押し出されるようにしてたどり着いた。

そこを抜けて、さて自宅までの道のりを帰ろうと方向転換した…その時、だつた。

「タークミン」

違和感のある作られた高い声と共に、ドスツと後ろから何か覆いかぶさるような重み。

「!?!」

驚いて一瞬声が出なかつたけれど、すぐに何ごとかを理解して自分のにのしかかるそれを振り払う。

「…梶っ」

振り向きざまにその重みの正体の名を呼ぶと、そこに立っていた男はニツと笑つた。

「久しぶり、タクミ」

さっきのふざけた呼び方を改め、その男…梶祐太は敬礼でもするかのように額に右手を当ててみせた。



「俺、怒ってんだけど」

近くのファーストフード店に移動すると、梶は第一声にそう言う。いつものおちゃらけたハイテンションを抑えての低めの声に、向い席で俺は小さく息を吐いた。

「だから奢っただろ、それ」

梶が手にするコーラを指差して、俺は肩を竦めながらそう言う。その答えに、「こんなんで許せるかつ」と梶は息巻いた。

…梶、祐太。地元の友達で、小学生の頃から一番仲の良い親友だった。高校に行つてから会う機会は減つたものの、それなりに連絡を取り合っていた。……………そう、ここ数ヶ月前までは。

「最近は何話してもメールしてもらくに返事返つてこねえし！薄情にも程があるだろ、タクミい」

「ごめん。……………ポテト食べる？」

「あ、悪いな……………って、こんなんだ俺を釣ろうとするなー！！！」  
相変わらずのテンションに、俺は思わず笑つてしまった。昔から野球に打ち込んでいる梶は、日焼けした肌が健康的なスポーツマンだ。短く切りそろえられた髪をガシガシと掻きながら、「……………くそう、見てろよ」と訳のわからない復讐心を燃やしている。

「連絡返さなかったのは悪かったよ。……………ちょっと色々あつて」

アイスコーヒーを一口飲み込んで、俺は梶の顔は見ないままそう告げた。ふざけた一人芝居をしていた梶は、俺の言葉を聞いて少し

真面目な面持ちに戻る。まっすぐにこちらを見つめ返してくるその目は、どこか俺を探るようだった。

「…なんか、悩みごとあるんだろ」

「……え？」

急な梶の言葉に、俺は思わず目を見開いてしまう。それを肯定と受け取った梶は、「凶星か」と肩を竦めてみせた。

…梶の、こういうところは変わっていない。いつも人前でお調子者のように振舞っていても…実はよく人間を見ている。観察力と洞察力も優れているから、大抵のことは見透かされる気がする。

「愛海とはまだ続いてんの？」

ポテトに手を伸ばしながら、梶は不意にそんな話を振ってきた。愛海と俺は幼馴染なので、自然と愛海と梶も長い付き合いになっていた。小さく頷いて返すと、「ふーん」と意味ありげな呟きを漏らす。そうしてピシッと俺の前に、人差し指を突きつけてきた。

「当ててやろうか、お前の悩み。『本当は他に好きな子ができた』」  
「……」

紙コップを静かにテーブルへ戻しながら、俺はまっすぐに梶を凝視する。逸らしてはいけない気がしたからだ。

「しかもその子は…そうだなあ、同じ学校の女子で愛海とも面識がある。多分愛海もその子のことは嫌いなタイプじゃない」

勝手な分析を始めた梶だが、あながち外れてもいない。片方の眉を持ち上げて、俺は不思議そうに梶を見た。

「それで愛海とは正反対なタイプ。愛海が正統派美人ならその子は明るく元気なかわいい系」

「……なんで……」

不思議、というより、そこまで言われると驚きでしかない。目をみはって梶を見据えると、目の前の梶はニヤリと笑った。そうしてそれから、その笑みは苦笑へと変わる。

「ごめん、タクミ。実は見ちゃったんだよな」

「……え？」

言われた意味がわからなくて、俺は小さく聞き返した。そんな俺に、梶はどこかすまなそうな顔で答える。

「ちよつと前に、とある駅のホームでかわいい女の子をギュ・してるタクミを」

「……!?!?」

頭を何かで殴られたかのような衝撃だった。そして一瞬、目の前が真っ白になる。どうしてそこに梶がいたのかとか、見られた恥ずかしさとか、色々な思いが自分の中を駆け抜けて行くのが感じられた。

大体、あれはあの子の家近くの駅で……。彼女の家は学校からさほど離れていないので、ここが地元の梶からも相当遠いはずなのに。そんなことを考えたけれど、意外にもその答えはあっさりと梶の口から得られた。

「俺、今あそこの駅にある予備校に通ってたよな」

受験対策で3年になってから通い始めた、と、梶は付け足した。そう言えば、あそこには受験生に評判の予備校がある。鈍い頭痛と、

俺は眩暈すら感じた。

「反対ホームだったから全然何言ってるのかとかは聞こえなかったけどな」

フォローのつもりなのか、梶はそんなことを言う。大きくため息をついて、思わず肩を落としてしまった。

「…なあ、タクミ」

改まった呼び方で、梶は再び口を開く。いつになく真剣な表情は、古くからの親友を労わるものだった。

「俺には本当のこと話してみるよ。大丈夫、俺はお前の味方だからさ」

「……………」

続く梶の言葉が、すっと耳に届く。…だからこそ、思わず呟いてしまっていた。

「…だから、嫌だったんだ」

俺の小さな声を、それでも梶は聞き逃さなかった。え、と不思議そうに俺を見る。

「だから、梶には連絡しないようにしてたんだ」

言い直して、俺は梶から視線を逸らした。窓の外を見やると、帰宅ラッシュらしく学生やサラリーマンたちが駅から出てきて方々に散っていつている。それを何気なく眺めて、俺はテーブルの上に頬杖をついた。

…そして、続ける。

「梶に会ったら…自分の本音が全部出てしまうから」

「……………タクミ…」

いや、下手をしたら、自分の意識していない深層心理のようなものまで吐露してしまうかもしれない。あの子のことを好きだと認識するのも、今よりずっと早い段階で自覚してしまっていただろう。それだけ、俺は昔から梶のことを信用しているから…。

俺を心配してくれる姉や名取先生に言えないことでも、きつとすぐに話してしまっただろう。

「嬉しいこと言ってくれるじゃねえか、タクミい」

うれし泣きの真似までして、梶はズズツと鼻をすすするフリをする。…このテンションさえなければ、言うことはないんだけどな。そう思ったけれど、俺は苦笑いを返したただけでようやく本題を口にした。

今まで…誰にも話したことのない、自分の中を満たしてしまっている想いを。

「……………好きな子が、いるんだ」

\*\*\*\*\*

「…なるほどね」

これまでの数ヶ月の間にあつたできごとを、俺は多分全て梶に話せたと思う。彼女と出会ったところから、それこそ本当に全てを…聞き終えた梶は、どこか納得したように大きく2、3度頷いた。

梶は、愛海と俺のことを全て理解している。俺たちがどういう想いで付き合っているのかも、その始まりも。

梶は、訳ありの俺と愛海の間係を知っている人間の中で、それを否定しなかった数少ない人間だ。名取先生でさえ、俺のことはかわいがってくれているけれど愛海との付き合いは否定しているのに。

「でもさ、それってしょうがないよな」

一通りの話を聞くまで黙っていた梶は、そんな風に俺の話に対する感想をもらった。今日も梶は、言葉通り俺を否定しないでいてくれる。

「人を好きになるのに理屈なんて通用しない。でも普通なら、彼女がいるのに誰かを好きになるなんて許されることじゃない。だけど…」

一度そこで言葉を切って、梶はもう大分炭酸の抜けてきたコーラを口にする。そうして、はっきりと言葉を継いだ。

「お前と愛海は、恋愛感情で始まった関係じゃない。それなら他の誰かを好きになっただって責められない。愛海だって、それくらいのことわかってるだろ」

所詮、どちらかが誰かを本気で好きになるまでの関係だったんだ…と、梶はそう付け足す。

…そうかもしれない…だけど…。

「でも、俺が先にそれをやっちゃいけないかったんだ」

「せめてこの関係が終わるのは、愛海が誰かを好きになった時じゃないといけないはずだった。そうして向こうから別れたいと言わない限り、終わらせるつもりはなかった。…少なくとも、今までの俺は。」

「タクミがさ、『好きな子ができたから別れてくれ』って愛海に言えば…」

「言いかけた梶は、けれど俺の苦い表情を読み取ったらしく、…無理に決まってるか」と続く言葉を言い換えた。

「そう、それは無理だ。俺から別れを切り出すのは、愛海との最初の約束違反だから。」

「わかってるんだ、本当は」

「俺の痛みが伝わったのか、梶もまるで自分のことのように眉を寄せていた。そんな梶に、俺はそんな一言を告げる。」

「本当は、今の状態が一番最低だって。二股かけるみたいな状態じゃないから…」

「今の俺のしていることは、愛海もあの子も傷つけることで…。」

愛海はきつと、俺の本当の想いに気づいているけれど知らないフリをしている。そうして俺は、きつと余計に愛海を傷つけているんだろう。

…あの子に関してもそうだ。

彼女は、俺がいつか振り向くかもしれないことと、全てを話す日が来ることを信じて待っていると言った。そうまでしてくれる彼女を、俺はただ傷つけているだけだ。放課後数学準備室で会っていたって、結局は時間がたてば俺は愛海のところへ行かなければいけないんだから…。

そう思うと、ズキと胸の奥が鋭い痛みを訴えるようだった。

「…タクミ」

俺の考えていることは全て読み取れるらしい。梶は、そう改めて呼びかけてきた。

その声にゆるりと顔を上げると、「…それは違う」と低い声が告げる。

「それは、お前じゃない。愛海と、そのハルカちゃんが選んだ道だ」  
梶のその答えは、どこかで聞いたことがある気がした。

…そうだ。あの時、確か彼女が…。



『それでたとえ先輩が振り向いてくれなくても…私、後悔しないから』

『そう…道を選んだのは…私だから』

…そう…確かに彼女は言った。

「ま、ここでタクミが開き直ってハルカちゃんにチュー以降のことをしたらさすがの俺も二股認定するけどな」

少しいつものテンションに戻して、梶はニツと笑う。その空気に少し救われた気がして、俺も少し笑みを漏らした。

「…ありがとう、梶」

改めて礼を言つと、梶は少し目を見開く。それから、「やめろよ。照れるだろ」と笑って俺の肩を叩いた。

話を聞いてもらえただけでも、随分気持ち晴れた気がした。こんなことなら最初から梶を頼っていれば良かったかもしれない。

「何かあつたらすぐ電話しろよー」

話こんでいるうちにすっかり外は暗くなってしまっていて、俺と梶はそろって席を立った。そうして別れ際に、梶がそんなことを言ってくれる。

笑って頷いて、俺は応えた。それに満足そうにした梶は、「じゃあ、またな」と店を出たところで手を振って踵を返す。それから俺を残して数歩進んだところで、「…あ」と何かを思い出したように立ち止まった。

ゆっくりと、こちらを振り返る。

「そっだ、思い出した」

再び俺の方へ戻ってきたながら、梶は言った。

「別件だけど」と前置きする。

「この前、中学の時の後輩に会って聞いたんだけどよ」

「…？うん」

野球部の後輩だろうか？首を捻って、俺は梶の続く言葉を待つ。

もったいぶるわけではなさそうだが…梶は、少しだけ言いにくそうに言葉を選んでいた。

「…あいつ…戻ってきたらしい」

「あいつ？」

すぐに誰のことを言っているのかわからなくて、俺は眉を寄せる。梶は、少し間を開けて…だけどはっきりと聞こえる声で、俺に言った。

「柴田一真」

「……！！？」

梶の口が告げた名前に、俺は驚愕の色を浮かべて目を見開く。そ

んな俺の様子を見て、梶も苦々しい表情を浮かべた。

「アメリカから、親と離れて戻ってきたらしい。こんな時期にだけど、こっちの学校に編入したらしいぜ」

「……………」

「気をつけるよ、タクミ」

忠告するように言ってから、梶は俺の肩をポンと叩く。再び身を翻して去って行く梶の後ろ姿を、茫然と見送るしかなかった。

そうして、嫌な予感が胸をよぎる。

柴田一真の急な帰国。そしてあの子が言っていた、時期はずれの転校生。

「……………まさか…な」

いくらなんでも、それはないだろう。

ふと脳裏をよぎった可能性を否定したけれど、俺の中の胸騒ぎは何故か治まる気配がなかった。

一真のお金の使い方は、良く言えば「豪快」、悪く言えば「ただの浪費」だった。あくまでも私の予想だけれど、結構恵まれた家の生まれなんだろう。気に入った物は高校生にしては高級なものでも、「どうせ親の金だ」と遠慮なく購入していた。

それを否定する気もないけれど、真似したいとも思わない。私は今の分相応の生活で十分満たされているからだ。ただ、価値観の違いなんだと思う。

そんな2人が一緒にいることは不思議にも思えたけれど、それ以外のところでは意外に一真とは相性が良かった。音楽の話だけじゃない。物事の考え方が、根本的には似ている気がした。

「直も連れてくりゃ良かったなあ」

男の子でも抵抗なく見れそうなインテリア雑貨のコーナーへ来たところで、不意に一真はそんなことを言う。直とは向井くんの下の名前だ。女の私たちが知らないところで、すっかり2人は仲良くやっているようだった。

「向井くんは今日は華江と出かけるって言ってたからねえ」

かわいいコースターを見つけて、私は「これいいね」と一真に見せながらそう返す。真っ赤な花の形をしたそれを見て、一真は「…そうか?」と一瞥しただけで興味を示さなかった。

∴物の趣味は合わないらしい。

「なあ、あの2人って付き合ってたの？」

「え？向井くんと華江？付き合ってたないよ」

多分、向井くんは華江のことが好きなんだろうけれど∴。華江の方は、いつまでたっても真意が読めない。

「∴華江はね、昔イジメにあってたの」

少し間を開けて考えた後、私はそんな風に再度口火を切った。

私と華江は小学生の頃から友達だった。同じクラスになったのは小学校の高学年が初めてだったけれど∴華江はその時、既にクラスメイトたちからいじめられていた。

その時華江はぼつちやりしていて∴（私はそれが逆にかわいいと思っていたんだけど）、それがイジメの原因でもあった。子どもってというのはそんなくならないことで残酷になれるものなのだ。

「だけど高校受験の時にストレスで激ヤセして∴今ではすごい美人でしょ？急に周りの華江を見る目が変わってね」

手にしたコースターを元の場所へ戻しながら、私は一真にそんな説明をする。隣で一真は、黙って聞いたままだった。

「高校に入ってから、男女問わずごくモテるようになったの。」

だから、華江は周りの人間に本当に心を開いてない。『自分は何も変わっていないのに、外見が変わっただけで近寄ってくる』人たちが、信用できないから」

「……」

「似てるでしょ、一真に」

少し微笑みながら言つと、一真は隣で「…ふうん」と小さく呟いた。

「だけど周りの人間は、華江が本当に心を開いてないことにも気づかない。華江は、合わせるのもうまいから。…それに気づいたのは、多分私と真帆以外では向井くんが初めてだったなあ」

だから華江は向井くんには遠慮なく色んなことが言えるし、強い態度にも出られる。それは彼女なりの甘えでもあり、心を許している証拠だと私は思う。

「だから、付き合ってくれたら嬉しいなーと私は思うんだけどね」

ニッコリ笑つて言つと、一真は「…なるほどね」と同じように少し笑ってくれた。

「結構お似合いなんじゃねーの。直はちょっと男としては頼りねえけど」

「でも優しいよ。華江には、向井くんみたいな人が必要だと思う」

近くにあつたボックスティッシュのカバーを手にしてみせると、一真はそれも趣味じゃないらしくただ首を振つて拒否してみせる。

ふうつと頬を膨らませながらそれを戻して、私は不意に思いついて尋ねてみた。

一真の、ことを。

「ねえ、一真は彼女いないの？ブロンドの子とか」

聞くと、一真ははつきりと横に首を振る。それから、近くにあったマガジンラックを手にしてみせた。ウッド調のそれは確かにシンブルでおしゃれだったけれど、私が求めるかわいさはないのでお返しに首を振って否定してやる。むっと眉を寄せてそれを戻しながら、一真はしばらく黙した後ふと呟くように言った。

「俺さ、彼女いたことねえんだよな」

「えっ！！？」

続いた言葉があまりに意外で、私は驚きの声を上げてしまう。なんだか私のイメージでは、女の子をとつかえひっかえ遊んでいるような感じだったから…。

「なんだよ、イケメンは遊び慣れてねえとダメなのかよ」

「…『イケメン』は否定しないんですね、一真さん…」

膨れっ面で答える一真に、私は少し呆れ気味に言う。自分は格好良いということをはひけらかすわけではなく普通に自覚している辺り、タチが悪い。調子にでも乗っていればツッコミ様もあるのに…。

「中学の時に好きな人がいてさ」

お店の中を移動しながら、一真は言う。それについていきながら、私はただ耳を傾けた。

「中1の時に好きになったんだけど…それから、ずっと忘れられな  
い」

「えっ！？今でも！？」

「おう、今でも」

答えた一真は、ただ真顔で私の問いに応じている。5年目に突入したその想いは…きつと相当の深さを携えているだろう。

「告白とか…しないの？」

好きになつたら猪突猛進…いや、もしかしたら襲い掛かるくらいかも…と想像していたので、私は意外そうに尋ねた。聞かれて、一真は肩を竦める。

「してる。何回もフラレっぱなし」

苦笑いを浮かべたそのセリフに、私は思わず「…ごめん、変なこと聞いて」と謝ってしまった。「別に」と答えた一真は、今まで誰にも話したことがなかったのか…急に堰を切ったように「実はさ」と言葉を継ぐ。かつこつけてクールぶっていても、誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

「中学卒業してアメリカに行けば、忘れられるんじゃないかと思ってた」

「…無理だった？」

「無理。それどころか、余計に会いたくなっちゃった」

店内を移動した先は、小さなシエルフが並んだ辺りだった。意外にも本が好きだという一真は、こういうのも趣味なのかもしれない。

「…だから、帰ってきたんだ。反対する親を振り切って、一人だけ日本に」

続いた一真の言葉に、私はなんだか胸がいつぱいになる思いだった。

「会いに行こうよ!」

「……は？」

一真の両腕をつかんで真正面から言った私を、彼は眉を寄せて見



つめ返してくる。私はというと、一真のそんな一途な想いに少なからず感動して、思いつきでだけれどそんなことを口にしていた。

「せっかく日本に帰って来たんだから！その子に会いに行こう！」

「…いいよ、まだ。そのうち会えるだろ」

何か根拠でもあるのか、一真は小さく否定する。俺様で自信家な彼にしては、珍しいリアクションに思えた。会いたいというわりには…未だ勇気が出ないとでも言うような…。

「それに、その為にこの学校に転校してきたんだから…そのうち嫌でも会える」

「…え？」

一真がそう言うので、私は小さく目を見開く。

「何、それ。好きな子ってうちの学校にいるの？」

聞くと、一真は少し目線を逸らして「…ああ」と答えた。

「えーっ！なんていう人？私知ってる子かなあ！」

「……お前には絶対言わねえ。俺が何か言うより先に本人に余計なこと言いそうだから」

「…そんなことしないよ…」

「自信なさそうに言うな！」

一真は私の頭にげんこつを落とすフリをして、やっと声をたてて笑う。こういう顔を見ると、イケメンともてはやされるタイプというより、ただの一高校生って感じがするのだけれど…。

「で、お前は？」

ふと一真は、今度はこちらに話題を転換してきた。「え」と目線

を上げると、私を見下ろす一真と目が合う。少しだけ、意地悪い笑みを浮かべていた。

「ハルカは好きな奴いねえの？」

聞かれて、瞬時にポンツとタクミ先輩の顔が浮かぶ。脳裏に浮かんだそれに、ボボツと顔が赤くなってしまつのを実感する。「すげえ、タコみてえ」と一真が笑った。

「いるんじゃないか、どんな奴？」

「っつ、一真には教えないっ」

「なんでだよ」

「本人に余計なこと言いそうだから！」

一真のさっきのセリフを真似ると、一瞬きよんとしたけれど彼は次の瞬間にはぷつと吹き出した。

「ま、お前の顔見てればそのうちわかりそうだな」

「…う。それは否定できない…」

自分でも、そう思う。私は、タクミ先輩を見ればきつとわかりやすいくらいに顔が明るくなってしまつだろうから…。

きつと次に一真の傍でタクミ先輩に会ったりしたら、瞬時にバレてしまつんだろうな。…そんな予感がしていた。

\*\*\*\*\*

その日に一真が購入したものといえば、いくつかのキッチン用品（自炊をするとは思えないけれど）とゴミ箱という、実用的なもの

だった。引越しの片付けも徐々に目途がついてきたらしく、そろそろコンビニ弁当にも飽きてきたらしい。

後は個人的な趣味で欲しいという雑貨を買うだけだと、翌日の休み時間にはその日の放課後の予定を立てていた。また付き合わされるんだらうか、と横目でチラリと隣の席を見やると、そんな一真と目が合う。

「……、

「あ、お前今日はいいから」

ふともたらされた一真の呟きに、私は意外そうに「え？」と首を傾げてしまった。

「大体2日間案内してもらって、買い物できそうな場所もわかったし」

確かに、駅近辺のビルやらデパートやら……かなりの店に付き合わされた。一真の好みに合う場所も限られるだらうから……3日目もなれば自分ひとりでも行けるだらうけど……。

「さつきあいつに聞いたんだけどよ」

椅子の背もたれにもたれながら、一真は長い足を前に投げ出す。顎で示した「あいつ」とは、少し離れた席の真帆だった。

「お前、放課後は好きな奴に会いに行くことになってんだって？」

「……え……」

続いた一真の言葉に、「余計なことを……」と思わず真帆の方を振り向いてしまう。でも真帆としては、一真から私を解放させるために言ってくれたのかもしれない。

「知らなかったとはいえ悪かったな。今日はそっち行っていいぜ」

「……そんな時でも俺様口調なのね」

「おう、俺様だからな」

なんだか一真と話していると、あの不良教師と話している感覚に襲われる時がある。はは、と乾いた笑いを返したけれど、実際一真の申し出はありがたかった。これで今日は、確実にタクミ先輩に会える。

「直、今日放課後付き合えや」

前の席の華江と話している向井くんは、一真はそんな風に声をかけている。

…もしかしたら、一真は一人で行動ができないんだろうか。

意外に寂しがりやなのかもしれないことに気づいて、私は思わず吹き出してしまった。

\*\*\*\*\*

放課後になつてすぐ、私はまだ教室に残っていた4人に手を振って慌てて廊下を駆け出した。2日間も先輩に会えなかったんだから、妙に気が急いでしまっている。前に先輩と色々あった時は何週間か顔を合わせなかったのに…。今ではそれが信じられないくらいだ。

「廊下は走るな」

数学準備室のドアをノックもせず乱暴に開けると、一番奥の椅子に座っていた名取先生がそんな言葉で出迎えてくれる。

「すみませーん」

悪びれもせずと答えて、私は中に入ってしまった。いつもの定位置に鞆を置いたけれど、正面の席に先輩はまだ来てなかった。

「お前、2日間柴田と一緒にたんだって？」

珍しくパソコンに向かっていている先生は、キーボードをカタカタと打ちながらそんな風に声をかけてくる。

「え？あ、はい。街案内してました」

タクミ先輩に聞いたんだろうか？首をかしげながらも、私はそう返しながらギイツと椅子を引いた。

「…お前もやるなあ」

どこか感心したような言葉が、先生の口から吐息と一緒に漏れる。先生の性格を考慮するとそれを嫌味としてしか取れず、私はむっと眉を寄せた。

「そんなんじゃないですよ。だって買い物できる場所とかもわからないって言うし、仕方ないじゃないですか」

「…いや、そうじゃなくてよ…」

エンターキーを少し強めに押してから、先生はそう私の言葉を否定する。どうやら、さっきのセリフは嫌味ではなく本当に感心していたらしい。

「准一にあんな顔させた人間、初めて見た」

「……は？」

「すげえ怖かったんだぞ、お前のせいで。あんなの俺のかわいい義弟じゃない」

少しわざとらしく拗ねたようにして、先生はそう言う。何のことを言われているのか全く理解できず、私の頭の上にはクエスチョンマークが大きく点滅していたに違いない。

「お前が2日連続で柴田と一緒にここに来なかったから、准一がヤキモチ焼いてたってこと」

私にわかるように、先生は説明してくれたようだった。それでも一瞬何が何だかわからずに、頭の中でその言葉を噛み砕くように考える。それからその意味を理解して、「えええっ」と苦笑いを浮かべてしまった。

「それはないですよ。先生の考えすぎ」

「…お前なあ……。まあいいや、そう思っとけ」

タクミ先輩が私のことでヤキモチを焼くなんて、まったく想像ができない。なんだかそつという感情を抱くところすら思い浮かばなくて…。

どうせ先生がそつやって私をからかっているんだろうと結論づけて、私は机に置いた鞆を開ける。そして参考書を出そうとしたところで、先生が「あ」と思い出したように声を上げた。

「准一なら、今日来ねえぞ」

「…え？」

「さっきお前にそう言っといってくれて、伝言頼みに来た」

「……………」

先輩の顔が見れるとウキウキしていた気分が、一瞬にしてどん底に追いやられた思いだった。信じられない気分、私は先生を見る。その目は、少し八つ当たり交じりのものだったかもしれない。

私と目が合った先生が、少し苦笑いしたから…。

「……………」  
来られない時はメールしてって、先輩の方が言ったくせに…。自分  
が来ない時は、私にメールもくれないなんて。

「…携帯の電源が落ちたって言ってたな」

私の考えていることがわかったのか、タイミングよく先生がそんな  
ことを言う。

「……………え？」

「授業中に電池切れしたんだと。それでわざわざここに来たみたい  
だったぜ」

「……………そうですか…」

それが、本当かどうかはわからないけれど。少なくとも私の心を  
浮上させるほどのものではなくて、仕方なく私は椅子から立ち上が  
った。

「…帰ります」

鞆を持ちながら立つと、先生が目線を上げる。

「勉強してかねえのか」

「……………前に言ったじゃないですか。先生と勉強したって意味ないも  
ん」

失礼きわまりないセリフだけれど、私の言葉に先生は「そりゃそ  
うだ」と苦笑をもらっただけだった。

2日ぶりに会えると思っていた先輩に会えず、私はため息混じり  
に数学準備室を後にした。

\*\*\*\*\*

教室に戻ったところで、真帆は部活だろうし華江はバイトに行つた後だろう。向井くんと一真だつて、もう下校しているに違いない。仕方なく昇降口に向かったけれど、足取りは重かった。

気分が乗らない為に動作の全てが緩慢になっている気がする。下駄箱から履き慣れたローファーを出して、代わりに履いていた上履きをしまった。

自然と顔が下を俯きがちになる。そんな風に、昇降口を抜け出ようとした…その時、だった。

「…あれ？」

頭上から降ってきた声に、私は思わずバツと顔を上げる。聞き慣れたその声は、今一番聞きたいはずのものだったから…。

「今帰り？」

ちょうどバツタリ出くわしたタクミ先輩は、肩から提げた鞆を持ち直しながらそんな風に尋ねてきた。

「ははは、はいっ」

もう帰ってしまったっているだろうと思っていたし、まさかこんなところで会えるとは思っていなかったから。声が、数段上ずってしまった気がする。

「せ、先輩は…もう帰ったかと思ってました」

言つと、先輩は「ああ…」と小さく頷いた。



「数学準備室に行った後、ちょっと剣道場に寄ってたから……」  
昇降口を出て、何となくそんな会話をしながら並んで校門の方へ向かう。

剣道場……きつと、愛海先輩のところだ。

もしかしたら、本当に携帯の電池が切れていて愛海先輩にも先に帰ることをメールで伝えられなかったんだろうか。

「……先輩は……今日は用事ですか？」

少し遠慮がちに尋ねると、先輩は少しだけ眉を寄せた。もちろんその表情が示す相手は私ではないだろうけれど……。

「脅迫メールが来たんだ」

「脅迫？」

聞き返して、私は真面目な話だろうかと先輩と同じように眉間に皺を寄せる。その真剣な表情を見てから、先輩は少しだけ笑った。

「本屋で本買って来いって」

「……それが脅迫なんですか？」

「そう。『言うとおりにしないと昔のあんなことやこんなこと、あなたの周りにバラすわよ』って」

「………理沙さん？」

「そう。しかもそのメールを受信したせいで携帯の電池が切れたんだ」

尋ねると先輩が困った顔で肯定したから、私も思わず笑ってしまった。本当に脅迫してるつもりもされていないつもりもないんだろうけれど、それで言われた通りにする辺り先輩らしい気がする。

「…まあ、こき使われるのはつわり中だから仕方ない」  
譲歩するように、先輩は呟いた。

「理沙さんつわり大変そうですか？」

尋ねると、先輩は「うん」と少し考える仕草をする。そこでちよつと校門にたどり着いてしまったけれど、先輩が本屋に行くなら駅までは同じ道のりなはずだ。このまま何気なく…ただ隣にいたかった。

先輩の方はそんなこと気にしてもいないのか、いつも通りの無表情。隣にいることを咎められないことをいいことに、私はただついていった。

「そんなに大変な方ではないんじゃないかな。普通に仕事には行けるし」

まあ確かに、つわりについて先輩に聞いてもわからないだろう。それでも少しホツとして、私は安堵の息を漏らした。

うちの学校は駅からそれほど距離がないので、少し他愛ない話をしていればすぐに着いてしまう。目的地にたどり着いてしまったことに内心でがっかりしながら、私は駅の改札の方に足を向けた。先輩は、駅ビルの中の本屋に行くのならその先のエレベーターを上げるだろう。

「…それじゃ、先輩」

ペコリと頭を下げると、先輩は「うん」と答えながらもしばらくそこから動かなかった。

「？」

小首を傾げて見上げると、先輩は少しだけ微笑んでみせる。その笑顔にフワッと、心の中で何かが浮上する感覚がした。同時に胸がキュンと締め付けられる。

「良かったら一緒に行く？」

駅ビルを指して、先輩はそう言った。「え？」と目を見開いた私は、もしかしたらそれまでもものすごく名残惜しそうな顔をしていたのかもしれない。別れるのが嫌で嫌で仕方がないのが顔に出ている。そう声をかけてくれたのかもしれない。

「いいんですかっ？」

それでも格好つけている場合でもなく、私は思わずその場で飛び上がりそうなほど喜んでしまう。

そんな私を見た先輩は笑って頷くと、先にあるエレベーターの方へと向かって歩き出した。

離れがたいのは自分も同じだったけれど、それは自分の勝手な感情だから押し留めようとした。だけど名残惜しそうな彼女の表情を見ていたら、気づくと声をかけてしまっていて…。一緒に行くか尋ねた時の彼女の嬉しそうな顔に、胸がキュッと締め付けられるような感覚に襲われる。

駅ビルの中の本屋は、ポイントWデーかなにかでこったがえしていた。確かに、つわり中の姉がこの中買い物に来るのは辛いものがあるだろう。姉からメールで送られてきた本の名前をメモした紙を握って、俺は思い当たるジャンルの棚へ移動する。

後ろからついてきていた彼女が、興味のあるような本をたまに手に取っている。名取先生といつも本の話をしているから、結構読書好きなんだろう。

「先輩、ありました？」

こんなに混雑した本屋に連れてこられても気分を害した様子もなく、彼女はご機嫌な顔でそう尋ねてくる。「…いや」と頭を振って答え、俺はメモをもう一度開いてみた。

大体、どのジャンルのどんな本かくらい教えておいてほしい。と

言っても自分の携帯電話は充電が切れてしまっているから確認もできない。ため息まじりに内心で姉へ毒づきながら、俺はそのメモに書いてある字を恨めしく眺めてしまう。

「あ、それってもしかして……」

後ろからその紙を覗きこんだ彼女が、ふとそんな言葉を口にした。「先輩、こっちかも」

俺の後ろをすり抜けて、彼女は先に行く。振り向いて手招きをしては、思い当たるといふ分野の本棚まで移動した。

その先で、平積みになされているハードカバーの一冊。それを手にとつて、彼女は俺に渡してくれた。

「これですよ。誰でも知ってるってわけじゃないけど、一部で今有名なんです」

ニッコリ笑って、彼女はそう続ける。かなりのページ数がありそうなのは、受け取るとズシリと重量があった。

「……そんなのよく知ってるね」

感心したように言つて、その本のタイトルとメモの字を見比べる。確かにそこにある表題は全く同じものだった。

「私、音楽とか本とか結構マイナー路線なんです」

少し誇らしげに言う彼女に、俺も「なるほど」と笑ってみせた。

その本を持って、うんざりするほどの長蛇の列へ並ぶ。レジで会計するまでに相当時間がかかりそうだった。

「ごめん、ちょっと時間かかりそうだけど」

言つと、彼女は「いいえ」と首を振つた。いつの間にも手にしていたのか、雑誌を1冊胸に抱えている。

同じように並んでくれる辺り、もしかしたら気を遣つてそうしてくれたのかもしれない。

長い列をなんとかやり過ぎ、会計を終えてから並んで本屋を出る。それぞれ買った本の袋と鞆を持ち直しながら、駅ビルのフロアへ戻つた。来た時とは違うエスカレーターを利用しながら、俺は下の段から彼女を振り返る。

「お茶でも奢るよ。付き合わせたお礼」

「えっ？」

聞き返した彼女が、慌てて声を上げた。俺を見下ろしながら、ぶんぶんと首を横に振る。

「いえ、いいですよ。そんなつもりじゃなかったし……」

「俺がそうしたいだけだから」

重ねて言つと、彼女は少し考える仕草をした。「うーん」と心の声が聞こえてきそうな表情をした後、やがて顔を上げるとニッコリと笑つた。

「じゃあ、お言葉に甘えます」

ペコリと頭を下げる彼女に、何故か俺は内心でホッと胸を撫で下ろしている自分に気がついた。

……なぜ…だろうか？

考えたけれど答えを見つかるより先に、彼女が「あ」と小さく声を上げる。

何事かと思つて彼女の顔を見上げると、その視線の先はエスカレーターがたどり着いた階下で一番に目に入った、CDショップだった。

「先輩、お茶の前に少しだけ寄つてもいいですか？」

その店を指差して言いながら、彼女はエスカレーターから少し跳ねるように降りた。「いいよ」と答えると、嬉しそうに俺を抜かしてその店へと入つて行く。ついていくのにワンテンポ遅れた俺に、少し離れた先で彼女は振り返つて手招きをした。

「欲しいのがあるの？」

迷わずに歩いて行く辺り、目当てのものがあるらしい。後に続きながら尋ねると、彼女は「はい」と大きく頷く。

「今日発売のはずなんですけど……あ、あつた」

彼女が探した先には、CDではなくライブ映像などが収録されたミュージシャンのDVD。満足そうに笑顔でそれを手にして、ジャケットの確認をしている。

黒と赤だけでスタイリッシュにまとめられたジャケット。彼女のイメージからはそういうのが好きそうには思えなかつたので、少しだけ意外だった。

「好きなバンド？」

聞くと、彼女は俺を振り返る。ニツコリ笑って「はい」と返事を寄越した。

「やっぱりマイナーなんですけどね。先輩、知ってます？『AZU re sky』っていうバンドなんですけど」

「……いや……」

正直聞いたこともない名前だったので、素直にそう答える。彼女の方は気分を害した様子もなく、「そうですね」とやっぱり明るく応じた。

「どんなジャンル？」

話を切るつもりもなかったけれど、放っておくと彼女の方はその話を終わらせそうだったから。そんなことを尋ねて、少し話題を延ばしてみた。

ジャケットの印象からじゃ、抽象的でそこまでは読み取れない。明るいJ-POPでないことだけは確かだったけれど。

「ロックとジャズを融合させたような感じ……ですかね。元々、どちらも大好きなんで」

「じゃあBIG BANDとかも好き？」

「好きです！先輩も聴くんですか？」

「そんなに詳しいわけじゃないけど、俺は基本的に雑食だから」どのジャンルが好き、とか、どのバンドが好きとかいうこだわりまではないけれど。基本的に枠に捉われずに聴いて、そのバンド自体が気に入るかどうかだ。

一つ頷いて、彼女は話を戻す。

「私今まで、このバンドを好きっていう人に会ったことないってい



うくらいマイナーなんですけど…」

買うことは元々決めていたようで、DVDコーナーから一枚手にするとそのままレジの方へ向かって歩きだした。

「この前来た転校生が、同じファンらしくて。初めて得た同志みたいでなんだか嬉しかったんですよ」

ニコニコと笑って言う彼女は、言葉通り本当に満面の笑顔だった。半歩後ろをついていきながら「そう、良かったね」と答えながら、俺は不意にその転校生が男だったことを思い出す。

それから少しだけ胸がチリと焦げ付くような気がしたけれど、気づかなかつたフリをしてそれを押し込んだ。最近になって露出気味のこの感情を、抱くたびに自己嫌悪に陥るのはわかっているから。

「待っていてください、買ってきますね」

ニコリ笑って言う彼女は、そう言ってレジへ近づく。自分でも無意識のうちに、俺は不意にそんな彼女へと再び口を開いていた。何かを自覚する前に、自分でも驚くほど勝手に口が動く。

「…今度、CD貸してくれる？」

「…え？」

レジに行きかけた彼女が、ゆっくりとこちらを振り返った。一瞬だけ何を言われたのかわからないというように信じられない面持ちをした後、段々とその表情が笑顔に変わる。さっきまでとは比にならない、パアツと明るい笑顔だった。

「先輩も、聴いてみてくれるんですか？」

「うん。聴いてみたい」

素直に言うと、彼女は「家にいっぱいアルバムあるんで、ちょっとずつ持ってきますね」と答えて今度こそレジへと向かった。

周りに花が咲いたような明るいオーラに、俺は思わず口元をほころばせてしまう。どうやらそれまでのアルバムも全部貸してくれるつもりらしい。彼女の後ろ姿が、瞬時にそれまでよりご機嫌になったことを物語っていた。

「お待たせしましたー」

こちらへ戻ってきた彼女と、並んでそのCDショップを出ようとする。その時も彼女は、いつか飛び跳ねるんじゃないかと心配になるくらい上機嫌な笑顔だった。

いつも明るくて笑顔を絶やさない子だけれど、今日はその普段以上だ。それがどこか嬉しくて、いつもは無表情なはずの自分まで表情が柔らかくなってしまっているに違いない。

そうして、そこを後にしようとした…その時だった。

「あれ、夏川？」

店を出た瞬間に、少し離れたところから声をかけられる。彼女と一緒に振り返ると、そこには背の高い男子生徒が立っていた。

180センチは…超えているようだ。背の丈に見合った大き目の制服はうちの学校のもので、胸についた校章は2年生であることを示していた。黒い髪は清潔感ある長さに切りそろえられていて、第一印象で好感を持たされるような男だった。

どこかで見た気がするけれど、はつきりとは思い出せない。声をかけられた彼女の方は、「向井くん」とその名を呼んでいた。

こちらに近づいてきたその彼は、すぐ傍まで来て俺の方を向いた。

「こんにちは、タクミ先輩」

「? …… こんにちは」

内心で怪訝そうにしたけれど、失礼なので表には出さないようにする。刹那に相手を観察したけれど、その名前を耳にした今でも彼が誰なのかはわからなかった。

「クラスメイトなんです」

彼女が、俺にそう彼を紹介するように言う。……そう言えば、一度彼女が仲の良さそうな集団で下校している時に……彼もその中にいた気がした。

彼が彼女と仲の良い友人だとしたら……俺の名前を知っていてもおかしくはないかもしれない。

「あれ、向井くん一人? 理不尽大王様は?」

彼の後ろを覗き込むようにしてから、彼女が少し不思議そうにそう言う。言われて、向井くんは「ああ」と小さく笑った。

「王様なら、向こうのショップで長時間見入ってるよ。あまりにも長いから、少しだけ別行動にした」

それからこのCDショップで待ち合わせをしているらしい。そう告げた彼に、彼女が声をたてて笑う。

「大変でしょ? 一真、女の私より買い物長いんだもん!」

「そうそう。青と水色で迷ったりして、『どっちでもいいじゃん』」

って言いたくなるし」

楽しそうな2人の会話に口を挟まないようにして立っていた俺だけれど、そこでふと顔を上げた。ひっかかったのは、さっきの彼女の一言。向井くんの連れらしい誰かのことを、彼女が名前で呼んだ…その時だった。

瞬時に思い出す、昨日の梶との会話。

最後に忠告された…あいつからの一言。

『…あいつ…戻ってきたらしい。柴田一真』

いきなりな柴田一真の帰国と、時期はずれの転校生。

まさかと思って考えないようにした可能性が、色を濃くして再び脳裏をよぎった。

まさに…その瞬間、だった。

「あれ、ハルカじゃん」

向井くんの後ろの方から、別の声が降ってくる。背の高いシルエット。

アッシュ系に暗く染められた髪に、嫌味がないくらいに似合っているピアス。チャラチャラしているというよりは、その全てが似合

ってしまったっている男。

こんな至近距離でその姿を見たのは2年ぶりだったけれど、見間違っはすなんてなかった。

「…柴田…」

思わず口から漏れた俺の呟きに、柴田一真が「？」とこちらを振り返る。そしてそれから、大きく目を瞠った。だけどその目も、やがて鋭くなる。射抜くような眼差し。不機嫌に顰められる肩。そのどれもが、俺の記憶にある彼と寸分の狂いもなかった。

「…久しぶりつすね、タクミセンパイ」

嫌味を含んだような声で、彼は俺を呼んだ。

一瞬にして不穏な空気が変わったのが分かったのか、彼女と向井くんは「え、え」と俺と柴田とを見比べた。

「……………」

どれくらいそうしていただろう。

長い沈黙の中、俺と柴田はただ正面から互いを見据える。そしてやがてそれを破ったのは、向こうの方だった。

「2年ぶりくらいですかね…お元気そうだなニヨリです」

わざとらしい棒読み口調で、彼はそう言う。こちらをあざ笑うような笑みを浮かべて、口元は嫌味っぽく歪められていた。その全てが、以前と変わっていない。

…俺だけに向けられる、彼の顔。

「そう言えば、まだ愛海先輩とは続いてるんですか」

敬語が逆に、向こうの殺気を物語る。問いに答えるつもりはないので黙ったままいると、彼は今度は本格的な嘲笑を浮かべた。俺を蔑むような笑みだった。

「まだやってんですか、『恋人ごっこ』なんて幼稚なこと」

重ねられた言葉に、俺はゆっくりと目線を上げる。眉を寄せて彼を見上げたけれど、向こうも睨まれたところで怯む素振りもなかった。

「ちょっと、一真…」

俺と柴田の関係性を理解できないなりに、彼女も空気で何かを読み取ったらしかった。柴田に半ば慌てて制止するような声をかけながらも、向井くんは何事かを合図する。

それに軽く頷いた向井くんは、「一真、行こう」と柴田の腕を引っ張った。グイと掴まれて踵を返させられた柴田は、最後に一度だけこちらを振り返る。だけどその目が捉えたのは、俺じゃなくて彼女の方だった。

「ハルカ、まさかお前の好きな奴ってその男？」

「……」

彼女は、答えないままに柴田をじっと睨むように見据えている。

その反応を問いの肯定と受け取ったらしく、柴田はそれから意地悪

い笑みを口元に張り付かせた。

「お前のことはイイ奴だと思ってるけど…男の趣味だけは最悪だな。そんな偽善の塊みたいな男に惚れるなんて」

「…一真…っ」

「じゃーな、ハルカ」

言い捨てて、柴田は今度こそ身を翻す。尚も引つ張ろうとする向井くんの腕を振りほどいて、「自分で歩ける」と抗議していた。

「……タクミ先輩……」

柴田が去った後、彼女は青ざめた顔で俺を振り返る。

「すみません、一真が…失礼なこと」

言いかけた彼女の言葉を、俺は片手を上げて遮った。

「別に君が謝ることじゃないよ」

「でも……」

彼女は、少しだけ泣きそうな顔をしていた。だから、ちょっとだけ微笑んでみせる。大丈夫だと言うように。

「柴田とは、昔からああなんだ。だから君が気にすることじゃない」  
そう告げた俺に、彼女は「どうして」とか「何があったのか」とか、余計なことは何も尋ねなかった。それが彼女なりの配慮であり、考えた結果だったんだろう。本当は気になるはずなのに、聞かないでいてくれることがありがたかった。

「迷惑かけついでに、一つ頼みたいことがあるんだ」  
彼女の気遣いに甘えて、俺はそう再び口を開く。首をかしげてこちらを見上げる彼女の方を、ゆっくりと振り向いた。少し心配そうにした目と、近くで見つめ合う形になった。

「何ですか？」

尋ね返されて、俺は一度深く息を吐く。それから、少しだけ視線を落として目を伏せた。

「…もし…学校内で柴田と愛海が接触することがあったら…」

伏せ目がちの俺から、それでも彼女の方は目をそらさずにいてくれているのがわかった。ただ、途切れた俺の言葉の続きを待つ。

「すぐに呼びに来てほしいんだ、俺を」

一瞬だけ目を見開いた彼女は、それから大きく頷いてくれた。その素直さに、逆に申し訳ない気にもなったけれど…。

「ごめん、君に頼めた義理じゃないんだけど…」

「いいえ、そんなこと言わないでください」

謝る俺に、彼女はそこでやっと少し笑う。フワツとした笑みを浮かべて、大きく首を横に振ってくれた。俺への気遣いの微笑みだったのだろう。

この日を境に、俺は今まで築いてきた全てがどこかで変わっていつてしまう予感がしていた。胸騒ぎにも似たそれが、どこかでチリチリと俺の内部の何かを焼いていくような気がする。



そうしてその予感、そう遠くない未来に当たることになった。

「『恋人ごっこ』？ そう言ったの？ 一真が」

翌日の1時間目は、担当の現代文の教師が出張で休講になった。真面目に自習をする生徒なんてそうはいない。例に漏れず不真面目に屋上へと移動して、私は華江からそんな問いを受けた。

… 昨日の、一真とタクミ先輩の会話について話していたところだ。

私と一緒にその一部始終を目撃していた向井くんから、昨日大体の話は聞いていたらしい。心配そうにしてくれていた華江と、まだ何も知らない真帆に話をする為、2人をここへ連れてきた。

「ここならそう人は来ないだろうし… こういう話をするのもってこいだと思ったから。」

華江の問いに、私は大きく頷き返す。反対側の隣で、真帆も軽く小首を傾げて見せた。

「… それって… どういうこと？」

「… … さあ」

考えたってわかるわけではない。タクミ先輩から何か説明してもらえたわけでもないし、何より先輩に何かを尋ねてはいけない気がした。聞きたい気持ちは、もちろんあったけれど…。

ただ私にもわかったのは、一真とタクミ先輩が昔からの顔見知り  
…ということ、恐らく同じ中学出身なのだろうということ。そこ  
から推測されるのは、前に一真が「ずっと好きな人がいる」と言っ  
ていた相手がマナミ先輩なんじゃないかということ。

タクミ先輩とマナミ先輩の自宅（それと出身中学）は、この高校  
からは相当離れた距離にある。そのせいで、毎年彼らの中学からこ  
の高校へ進学してくる人はほぼ皆無だと聞いたことがあった。だか  
ら、今の在校生の中でも一真を除けば2人以外にはその中学出身の  
生徒はいないはずで…。そうになると、一真の想い人はマナミ先輩以  
外にありえなくなる。

「一真が春日先輩をねえ…」

意外そうに呟いて、真帆はどこか感心したように息を漏らす。

「でもそれだけでタクミ先輩にそんな態度？ …何かあるわよね」  
華江も推理する探偵かのように…口元に長い指を当てて呟いた。

…そう、きつと一真は何かを知っている。だからこそ『恋人ごっ  
こ』なんて言ったんだろうし…。恐らく、私たちには未だ知る由も  
ない…タクミ先輩とマナミ先輩の秘密を知っているんだろう。

「ねえ、それだったらさあ」

持っていたピーチティーに口をつけて、真帆が改めて口を開く。  
華江とそちらを一緒に振り返ると、ストローを弄びながら続けた。

「一真に聞いてみれば済む話じゃない？そうしたら、何でタクミ先輩がハルカのこと気になりながらもマナミ先輩と別れられないのか……とか、『恋人ごっこ』の本当の意味とか……全部わかるんじゃない？」

「……」

真帆の言葉を受けて、華江は何も言わずに私を振り向く。私の意見を尊重しようと、口を挟まないスタイルを通すようだった。

「それは……いいや」

少しだけ考えてから、私は小さくそう答えた。

多分、真帆の言うとおりだろう。一真なら……私の気になっていることの大半を答えられる気がする。ただ……。

「……それじゃ、意味がないんだ」

ポツリと呟くように言うと、2人はただ私の言葉に耳を傾けてくれる。そんな2人を見つめて……私は、答えた。

「私が知りたいことは、確かにいっぱいあるよ。でも、その答えの全ては……タクミ先輩の口から聞かないと意味がないの。……あの時、私……先輩が全部話してくれるの待ってるって言ったし」

「……ハルカ……」

他人の口からなんて聞きたくない。それはきつと……タクミ先輩の本意でもない。

「当たり前だ」

華江が何か言いかけた時、私たちの後ろから不意に声が降ってきた。驚いて3人で振り返ると、そこに立っていたのは機嫌の悪そうな一真。それとその後ろには、私たちがここにいることを一真に話してしまつたらしい向井くんの申し訳なさそうな顔。…恐らく、理不尽大王に脅されたんだろう。

「いくらムカついてるって言ったって、他人の話を俺がベラベラ喋るわけねえだろ」

…それは確かにそうだ。いくら一真でも、言っていていいことと悪いことはわかっているはずで…。

きつとタクミ先輩とマナミ先輩の事情というのは、そんな秤にかけるまでもないくらいに深刻なものなんだろう。

「でもな、一個言つといてやる」

不機嫌そうに前髪をかきあげながら、一真はまっすぐに私を見下ろした。

「お前がいくら待ったって、拓巳准一はお前に本当のことなんて話さない」

「……………」

きつぱりと言い切った一真を、私は睨むわけでもなくただ見上げる。そんな一真の瞳に映った苛立ちは、私へ向けられたものではなかった。

「…何だよ。何でそんなことわかるのよ！」

答えない代わりに、真帆が一真の方へ一歩進み出る。大声で問われた一真は、そんな真帆をチラリと一瞥した。

「『何で』？…そんなの、決まってる」

鼻で笑うように、嘲った。

「あの男は、自分が一番かわいい『偽善者』だからだ」

地を這うような、一真の低い声。それだけタクミ先輩への憤りが深いことを物語っている。けれど、私はそれをどこか遠くで聞いている感覚に陥ってしまっていて…。ただ眉をひそめて、一真をまっすぐに見た。

「…誰の…話をしてるの？」

一真に、そう問う。

「一真の言ってるタクミ先輩の話は…私は別の人の話にしか聞かない」

どうしても、信じられない。タクミ先輩が、そんな風に言われるべき人とは思えないから。

先輩が抱える真実がどんなものであるかなんて、知らない。だけど、それがどうあっても…私が知るタクミ先輩は変わらない気がする。

無表情で無口で、ちよつとクールだけど…。

でも、フワツと柔らかく笑ってくれる時があつて。

いつもさりげないところで優しく気遣ってくれる人。

「お前が信じるかどうかなんて、どうでもいい」  
吐き捨てるように、一真は言う。どうしてそこまで冷たい声が出るのか…私はどこか冷静に疑問を抱いていた。

「だけど俺にとっては、それが事実だ」

…かわいいそうな人。

…ただ、そんな風に思ってしまう。

一真の言ってることは、恐らく正しい。『偽善者』で『自分が一番かわいい』タクミ先輩、それが一真の中での事実だ。

270

誰かが、昔言っていた。

事実は、人の数だけある…と。

人によって、考えや感じ方は違う。同じ物事や人を見ても、それに対する印象は十人十色だ。

だから、タクミ先輩にそういう負の印象を持っている一真を、誰も責めることなんてできない。それは一真の感じ方であって、そこに正しさは不問はずだ。

彼の中でのそんなタクミ先輩像が『事実』であり、私にとってはそうじゃないだけのこと。…それが、ただ一つの『真実』だ。

「…よし」

そこまで考えて、私はポン、と手を打った。それまで肩を怒らせていた一真が、スツと眉をひそめる。

周りの3人も、不思議そうに私を見た。

「一真の言いたいことは、よくわかったよ」

一歩彼に近づいて、私は再びその整いすぎた顔を見上げる。

「一真、今日の放課後、皆でカラオケ行こう」

「……は？」

突拍子もない私の言葉に、4人が同時にそんな間の抜けた声を上げた。

「だって、よく考えたらタクミ先輩とマナミ先輩のことで私たちがケンカするなんておかしいでしょ？」

ニツコリ笑って、そう言ってやる。

「だから、仲直り」

続けた言葉に、4人はそれまでの流れも忘れてしまったかのようにキョトンとしていた。



それから一瞬後、華江と真帆と向井くんが、同時に吹き出す。

「ハルカ、何を言うかと思っただらう」

「や、でも夏川らしい」

笑う3人を前にして、一真は「はあ」と大きくため息を吐き出した。呆れたような吐息の後に、改めて私を見下ろす。

その目にはさっきまでの苛立ちは消えていて、代わりに「仕方ねえなあ」と言いたそうな色。

「お前ホントにバカだよなあ」

嘆息したような呟きを漏らした。

「…聞き捨てならないんですけど」

笑って言うと、そこでようやく一真も苦笑いを零す。

タクミ先輩が抱えていて、一真が知っている『真実』。

一真が言うように、私がそれを知ることができる日はもしかしたら来ないかもしれない。

それでもその道を選んだのは他でもない私で…。

今更、それを後悔するはずもなかった。

その日は雨も降らず、朝から晴れ渡っていた。梅雨に入って2日連続で晴れることも初めてだ。雨は嫌いなので、自然と私のテンションも少し上がり気味になる。

…それなのに…。

「何、その機嫌悪そうな顔」

昼休みの中庭、他の生徒のいないところでお弁当を広げながら、私は隣に座るタクミにそう声をかけた。恐らく、タクミの表情は他の誰かが見たらいつもと同じ無表情にしか見えないだろう。

だけど、私には長年の付き合いでその気分が読み取れてしまう。

まあ、タクミの機嫌悪さが私に分かるほど出てしまうこと自体珍しいんだけど。

「…別に」

答えながら、私が作ってきたお弁当を口にする。昨日の夜の電話でも何となくいつもと違った雰囲気だったから、今日のおかずはタクミの好きなものばかり入れてきている。いつもは私は友達の瑞穂と、タクミはクラスの男子と昼食を取るのだけれど、毎週金曜日だけは2人で食べるのが習慣になっていた。父子家庭のタクミは私よ

り料理は上手だけれど、週に1回くらいはとお弁当づくりを申し出たのは自分からだった。

「どうでもいいけど、食べる時くらいおいしそうに食べなさいよ」

「おいしいよ」

「顔がそう言っていないの！」

ピシヤリと言い放って、私はお弁当箱を取り上げるフリをする。そこでようやくタクミが苦笑いを返してきた。その表情に少しだけホツとして、私はお弁当箱をタクミの手に戻す。

「ねえ、何かあったの？昨日」

尋ねると、筑前煮を口に入れながらタクミは首を横に振る。

「別に、何も」

相変わらずつれない答えだった。

「じゃあ何で昨日先に帰ったの？」

「…昨日電話で言わなかった？ 姉に本買って来いって頼まれたって」

「…聞いたけど…」

私が思わず、口ごもった時だった。

「なーにー？ 痴話ゲンカー？」

後ろから、場にそぐわない明るすぎる声が降ってくる。2人で振り返ると、そこにはニンマリと嫌な笑みを浮かべた瑞穂の姿。「別に」と答えると、「なあんだ」と不満そうに瑞穂は私の隣に断りもなく腰を下ろした。

「私と同じ境遇かと思ったのに」  
頬を膨らませて、瑞穂は拗ねたように言う。大体、「金曜日は彼氏とご飯食べるから」と瑞穂が言い出したくせに、ここに来ていては何の意味もない。

「聞いてよ、マナミ。一臣の話なんだけどさあ」  
一臣とは、同じクラスの瑞穂の彼氏だ。1年の時から付き合っているから、結構長い方だと思う。そんな彼への不満が爆発したのか、瑞穂は不機嫌そうにそう話し始める。

そこで女同士の話に遠慮したのか、タクミがお弁当箱を手にしたままベンチから腰を浮かした。席をはずそうとしてくれたらしい。

…そう思ったけれど…。

「あ、いいの。准一もそのまま聞いて」  
離れようとしたタクミに気づいて、瑞穂がそう声をかける。その瞬間、タクミが一瞬眉を寄せた。

…どうやら気を遣ってくれたわけではなくて、瑞穂の話に巻き込まれなくなかったからのようだ。それがわかったから思わず笑いを噛み殺していると、瑞穂に睨まれてしまった。

「准一はさあ、浮気ってどこからが浮気だと思う？」  
タクミが座り直したのを確認して、瑞穂は急にそんな風に声をかける。尋ねられて、タクミは「さあ」と首を傾げただけで再びお弁当を食べる作業に戻った。そんなつれないタクミには慣れている（というか全く気にしない）瑞穂は、「マナミは？」と話をこちらへ

振る。

ないがしろにするわけにもいかず、私は「…うーん」と一応考え  
てみせた。

「デートしたらかなあ？　一緒に買い物行ったり、お茶したりとか」

「うんうん！」

「…っ、ぐほっ」

私が答えた次の瞬間、大きく頷く瑞穂と、おかずを喉に詰まらせたタクミの妙な声が重なる。2人してタクミを振り返ると、軽く咳き込んでしまっていた。

「何やってんのー。大丈夫？」

背中をトントンと叩いてやると、タクミは半ば涙目で頷きながら瑞穂と私に「続けて」と話の先を促す。

「でもね、マナミ、私はそれ以前だと思っわけよ」

話を戻した瑞穂に、私も再びそちらへ向き直った。

「私はメールするだけで浮気だと思っの！」

「！げほっ」

力いっぱい抗議口調で瑞穂がそう言った瞬間に、反対側の隣でタクミが再び何かを詰まらせる。怪訝な顔でそちらを振り向くと、本気で咳き込んでいたために私はタクミにお茶を差し出した。

「ホントに大丈夫？」

小首を傾げながら聞くと、お茶を流し込みながらコクコクとタクミが頷く。そんな私たちの様子を見ながら、瑞穂は「…まさか浮気の心当たりでもあるんじゃない？　准一」とからかうように言った。

涙目のままブンブンと首を横に振るタクミに、瑞穂は「どうかなあ」と笑う。そんなやり取りに苦笑いをして、私は「…それで？」と瑞穂に話を戻すように促した。

「だってさあ、男女間でメールなんてそうそうする必要はない？」「うーん…」  
場合にもよるだろうけれど…考えて、私は小さく唸る。

「一臣がB組の子とメールしてたの！しかもここんとこ毎日だよ！？浮気でしょ！」

決め付けて力説する瑞穂は、本気で頭にきているらしい。握りこぶしをつくって、ググツと力をこめている。さすがにメールの中身までは見ていないらしいが、瑞穂は完璧に浮気だと決め付けている。

「B組の誰？彼が仲の良い子なの？」

「B組の紺野！知ってる？」

「あー、あのショートカットのかわいい子？」

尋ね返して、失敗したと思った。私の発言に、瑞穂が余計にムツとする。

「かわいい？やっぱりかわいいよね？やっぱり浮気だよね！？」

「…いや、そうとは限らないんじゃない？」

言い淀んだ私の隣で、タクミが立ち上がる気配がする。いつの間にか食べ終わってちゃんと元通りに片付けたお弁当箱を、「ごちそうさま」と私に返してきた。それから、ベンチに座ったままの瑞穂を見下ろす。

「来週、風紀委員で登校指導があるけど……」

急なタクミの言葉に、瑞穂がきよとんと目を丸くした。

「委員長と副委員長になってたから、その打ち合わせじゃない？」  
さらっと言って、タクミは「じゃあ」と踵を返して校舎の方へと戻っていく。

その後ろ姿を見つめながら何事かを考えていた瑞穂は、「……そういえば」と小さく呟いた。

「一臣、風紀委員で副委員長になったって言ってたかも」

「……………バカ」

思わず苦笑を漏らして、私は瑞穂にそう言った。

なあんだ、と納得した瑞穂は、怒りもすっかり収まったのかさつきよりも尊大な態度でベンチに座りなおす。

……大体、一臣自身に「何メールしてたの？」って聞けばすぐにわかった話じゃないんだろうか？

まあ、そういうはやとちりなところも瑞穂らしいのだけれど……。

「ところでマナミ、今日の放課後ヒマ？」

急にコロツと話も表情も変えて、瑞穂はそう尋ねてくる。

瑞穂も、私と同じく剣道部に所属していた。この前の春引退したけれど、私と瑞穂だけは未だに後輩たちの面倒を見に道場に顔を出



している。今日はたまたま剣道部自体が休みなので、私も瑞穂も放課後はフリーだ。

「特に何も無いけど。何？」

「じゃあさっ、ちよっと2年生の教室に付き合ってくれない？」  
言われて、私は思い切り眉を寄せる。

「…2年生の教室？何しに行くの？」  
尋ねると、瑞穂はさっきまでとは違ってかわった表情で爛々と目を輝かせた。

「イケメン拜みに行くのっ」

「…は？」

さっきまで彼氏の浮気がどうのと言っていた人の言うことだろうか？

「知らないの？2年に転校してきたイケメンの話！」

「…いや、それは私も聞いたけど……あのね、瑞穂」

「絶世の美男子らしいよ！楽しみーい」

…ダメだ、これは。そう思って、思わず吐息を漏らしてしまう。  
こういう身勝手なところも、瑞穂のかわいいところでもあるんだけれど…。

「でも残念ながら、私興味ないから」

「えー、そんなこと言わないでよー。さすがに一人では見に行けないよ」

「彼氏いるのにそんなことできるわけないでしょ？」

瑞穂は自分に彼氏がいても気にしてないみたいだけ。

「マナミ、彼氏と目の保養は別もんだよ？ マナミも目の保養していた方がいいよ？」

「どついう意味よ、それっ」  
遠まわしにタクミをけなされる。それでも怒鳴りながらも、思わず笑ってしまった。

「うそ、うそ。准一よく見ると男前だもんね」

「フォローになってないから」

即答して、私は苦笑する。…まったく、瑞穂には敵わない。

そうして結局のところ放課後には無理矢理引っ張っていかれるんだろうな、と、予感がしていた。

\*\*\*\*\*

「もうっ、マナミがさっさと用意しないからー」

放課後、HRを終えて余裕で30分は経ったところで、瑞穂は廊下を早足で歩きながら私に抗議した。イケメンを拝みに行くのによっぱり乗り気じゃなくて、散々渋った結果がたった30分だ。…まあ、もう少し粘ったとしても瑞穂が諦めたとは思えないんだけど。

「もう帰ってるかもよ、イケメンくん」

意地悪く後ろから言うと、瑞穂は更に早足になる。

「そう思うなら早くしてよおー！」

喚くように言うそんな言葉に、思わず声を立てて笑ってしまった。

「真帆ちゃんのクラスらしいんだよね」

もう半ば小走りで、瑞穂は不意にそう言った。真帆ちゃんというのは…剣道部の後輩で、今年度から私に代わって主将を務めている

子だ。明るくて何事にもまっすぐだから、部員たちからも好かれて  
いる。

「だからとりあえず、真帆ちゃんがいたら声をかけてそこから…」  
何やら一人でブツブツ作戦を立てている瑞穂を、私は思い切りス  
ルーしておく。…大体、もうこんな時間にはほとんど残っていない  
と思うんだけど…。

2・Fの前まで来ると、やはりもう教室内はシンとしていた。そ  
れでも数人は残っているらしく、時々声が聞こえてくる。

「いるかなあ、イケメンくん」

中を伺おうと瑞穂が少し背伸びをすると、中から真帆ちゃんの声  
がした。

「もうっ、向井が日誌書くの遅いからっ。早くカラオケ行こうよ  
」

「ちよつと待って、今日の3時間目って何だったっけ…」

「ダメだこりゃ、華江、代わりに書いてあげなよ」

「余計な労力は使いたくないの、私」

何やら楽しそうな声が聞こえてくる。瑞穂は真帆ちゃんがまだ残  
っていたことにホッとしたらしく、遠慮がちに教室のドアを開けた。  
その音で、中にいた全員がこちらを振り返ったようだ。

「あれ、瑞穂先輩っ？」

瑞穂に気づいて、真帆ちゃんが嬉しそうにこちらに駆け寄ってく  
るのがわかった。廊下で待っている私は中の様子まで見えないけれ  
ど、真帆ちゃんのパタパタと走る音がする。

「どうしたんですか？今日部活ないですよね？」

尋ねながらニコニコとドアのところまで来た彼女は、そこでようやく私が瑞穂の後ろにいるのに気づいてハッと大きく見開いた。

……………？

私、彼女にこんな顔をさせること…何かしただろうか…？

「…春日…先輩…」

私の名前を呼んで驚いた後に、何か「マズイ」とでも言いたげな表情をする。その意図がわからずに眉を寄せた時、真帆ちゃんの私を呼ぶ声に反応したのか、教室の中で誰かがガタンと席を立つ音がした。

「…ちょっと、待…っ」

中から、ハルカちゃんの声もする。そこにいる誰かを、制止するような声だった。

そうしてガタガタと教室内の机をかきわけながら出てきた、一つの影。

「……………愛海先輩…」

黒い影が漏らした私を呼ぶ低い声に、思わず大きく目を見開く。

…何が、起こっているのかわからなかった。

ここにいるはずのないと思っていた人が、そこにいたから。

「愛海先輩、覚えてますか…俺のこと」

見上げるほどに長身の影。逆光でもわかるくらいに整った顔立ち。懐かしそうに、少し切なそうに細められた目。

そのどれもが、記憶にあるそれと一致したその瞬間…。

284

「っ、いやああああ…！」

大声で叫び声を上げて、私は思わずその場にうずくまった。瞬時に思い出される、過去の日々。

いや！考えたくない！見たくない……！！

耳を塞いで、私は全身が震えるのを感じる。立っていられないく

らいに、力が入らない。

「…真帆、華江！タクミ先輩探して、呼んできて！早く！」  
ハルカちゃんが慌てて友達に叫ぶのだけが、頭のどこか遠くで聞  
こえた気がした。

放課後になつてすぐ、私たちは5人連れ立って学校を後にしようとした。けどそこで、向井くんが不意に日直だったことを思い出す。周りからのブーイングを受けながら、彼はそれでも普段通りのんびりとした調子で机に向かった。日誌を広げて、今日の授業と出来事を思い出しながら書き始める。

「直一、早くしろよ」

放課後にはいつも通りの機嫌に戻った一真が、からかうようにそう言った。「うん」と返事をしつつも、マイペースな向井くんはスピードを改める気はないらしい。その様子に、真帆も痺れを切らしたように頬を膨らませる。

「もっつ、向井が日誌書くの遅いからっつ。早くカラオケ行こうよ」

そんな風に真帆に言われても、向井くんは相変わらず自分のペースを崩さない。

「ちよつと待って、今日の3時間目って何だったっけ…」

一つ一つ思い出しているカメ並の速度に、真帆はガクリと肩を落とした。

「ダメだこりゃ、華江、代わりに書いてあげなよ」

「余計な労力は使いたくないの、私」

サラリと答えて、華江はすまし顔だ。そんな4人の様子に、私は思わず声をあげて笑ってしまう。

ちょうどその時、だった。

カラカラ…と、どこか遠慮がちに音をたてて教室の前扉が開かれる。もうすでに教室内には私たち以外に残っていなかったため、誰か忘れ物を取りに来たのだろうか？誰だろう、と思い、私たちは揃ってそちらを振り返った。

そこから顔を覗かせたのは、見覚えのある一人の女生徒だった。

そう、確か……。

「あれ、瑞穂先輩っ？」

思い出しかけたその時、私のすぐ傍で真帆がそう声を上げた。

…そうだ、中嶋瑞穂先輩。確かマナミ先輩と仲が良い人だった気がする。真帆の剣道部の先輩らしい。

「どうしたんですか？今日部活不是吗？」

真帆はマナミ先輩のことも瑞穂先輩のことも相当尊敬している。懐いている、という言葉もぴったりなくらいに、ニコニコと笑顔で彼女の方へと小走りに駆け寄って行った。けどその次の瞬間、ドアのところまでたどりついた真帆がヒュッと息を飲むのが空気で伝わってくる。

「……？」

後ろ姿なので真帆の表情まではわからなかったけれど、何かに驚



いているようだった。それまで瑞穂先輩と真帆の方に興味も示していなかった一真と向井くんも、その雰囲気にもこちらを見やる。華江も、小首を傾げて教室の入口の方を振り返っていた。

真帆が声を失っていたのは一瞬の出来事だったのだけれど、それでも私たちに異変を感じさせるには十分だった。そうしてその正体が、真帆の口から漏らされる。

「春日先輩……」

どうやら瑞穂先輩の後ろには、マナミ先輩もいたらしかった。無意識のうちに零れたその呟きに自分でも驚いたのか、真帆が「しまった」という感じに口に手を当てる。私と華江も「まずい」と思ったその瞬間、隣の席でガタンと乱暴に椅子から立ち上がる音がした。

「……ちょっと、待……っ」

立ち上がって今にもマナミ先輩の方へ走り出しそうな一真を、制止する。それでもそんな声を振り切って、一真は周りの机を邪魔そうにかきわけてこちらへ向かった。止めても無駄なことは、一真の顔を見れば明らかだった。それはそうだろう。ずっと、会いたかったはずなんだから……。

そう悟った時、私はタクミ先輩との約束を思い出す。

『……もし……学校内で柴田と愛海が接触することがあったら……』

目を伏せながらの先輩の言葉が、はっきりと脳裏に蘇ってきた。

『すぐに呼びに来てほしいんだ、俺を』

理由なんて知らないけれど。

それでも私にとって重要なのは、その約束を守ることだった。

「……愛海先輩……」

慌てて入口まで走っていった一真が、マナミ先輩の前で立ち止まる。懐かしさと、そしてどこか切なさ……複雑に入り混じった感情を込めて、一真はその名前を呼んだ。それを見やりながら、私は慌てて鞆から携帯電話を取り出す。タクミ先輩の番号を呼び出して、今のこの状況を急いでメールで送り出した。

「愛海先輩、覚えてますか……俺のこと」

送信完了のメッセージを確認したのと、一真がそんな問いを投げかけたのがほぼ同時だった。携帯電話を握りしめて、私は息を飲みながらそちらを見やる。一真の問いの一瞬の後、ごくごく短いけれど不自然な間があった。

「……」

空気が、一瞬で凍ったのがわかる。

そして、そのすぐ後……。

「っ、いやああああ……!!」

一真を見上げていたマナミ先輩の口から、悲鳴にも似た叫び声が漏らされた。

耳をつんざくような、聞いたことのないような人の声。

そうして先輩は、そのままそこにうずくまってしまふ。何かに怯えるように小さく身を縮めて、耳を塞いでいた。

その普通じゃない様子に、私はハツと我に返る。

「…真帆、華江！タクミ先輩探して、呼んできて！早く！」

タクミ先輩がメールに気づかなかった時のことを考えて、2人に  
そう叫ぶように声をかけた。

大きく頷いた2人と同時に、向井くんも席を立って廊下へと走り  
出てくれる。残された私は同じように驚いている瑞穂先輩と一緒に、  
マナミ先輩に手を触れようとしたけれど…。その手は、何かに怯え  
きった彼女に完全に拒絶されてしまった。

「……………」

タクミ先輩を待つしかない。そう思って、私はそこでようやく一  
真を振り返る。

「……………」

そこに立ってマナミ先輩を見下ろしていたのは、いつもの俺様な  
男ではなかった。…ただ、叫び声まであげて好きな人に拒絶された  
…傷ついた男の顔。こんなに泣きそうな表情をしている一真を…私  
はこの時初めて見た。

「…一真…」

小さく呼びかけたけれど、一真は当然それに答えない。ただ、切  
なそうに目を細めてどうしていいかわからないままマナミ先輩を見  
下ろしている。

「…ハルカ、いたよ、タクミ先輩！」

そこで丁度、走りながら戻ってきた華江が私にその声をかけてきた。彼女の後ろには、同じように息を切らせながら走ってきたタクミ先輩の姿。私のメールを見てこちらへ向かうところ、華江と遭遇したようだった。

「タクミせんぱい…」

「…准…？」

呼びかけた私の声が、不意に下から遮られる。うずくまっていたマナミ先輩が、タクミ先輩の姿を見つけて少し顔を上げた。

「准…！准…！！」

駆け寄ってきたタクミ先輩に、それまで私たちの誰をも拒否していたマナミ先輩がガバツと抱きつく。その表情は何かに怯えているようで…極端に青ざめていた。ガタガタと震える全身を抱きしめ返しながら、タクミ先輩は言い聞かせるように彼女の頭を撫でる。

「大丈夫、ここにいますから…」

耳元で囁くように言ってから、タクミ先輩はそのままの体勢で傍にいた瑞穂先輩を振り返った。

「数学準備室に名取先生がいるから、裏門に車回すようにお願いしてきて」

言われて、瑞穂先輩はただ頷く。どうして、とか、聞きたいことは沢山あっただろうけれど、そのどれをも尋ねてはいけないような気がしたんだろう。タクミ先輩に指示された通り、名取先生のいる方へと身を翻して行った。

その後ろ姿を見送ってから、続けて先輩は私を見やる。口には出さなかったけれど、自分の腕の中にいるマナミ先輩にも気づかれないうように、口パクで言葉を伝えてくれた。

『ありがとう』と。

お礼を言われて、私は大きく首を横に振る。

なんだか泣き出しそうな気分だった。辛そうなマナミ先輩にも、それを支えるタクミ先輩にも…。そして、誰より傷ついた顔をした一真にも…。

ぐつとあふれ出しそうな何かを堪えるのと、先輩が未だ震えが止まらないマナミ先輩を抱きかかえるのが同時だった。そのまま、廊下を歩き出す。踵を返すその時、先輩は一真の方を一瞬チラリと見やったようだった。それでも何も言葉を告げず、歩いて行ってしまふ。

そこへ真帆と向井くんも戻ってきて、残されたのは元の私たち五人だけになった。

嵐のような出来事の去ったその後、誰も口を開けないまま空気の重さだけを感じていた。

\*\*\*\*\*

一連の出来事に驚きと戸惑いを覚えたのは、私だけではなかった。真帆と華江、向井くんも言葉をなくすほどの衝撃を受けていて……。人が、あんな風に壊れたように叫ぶのを初めて聞いたからだ。

もちろん当初予定していたカラオケになんて行く気分になれるはずもなく、私たちは教室に戻ってただ沈黙していた。それぞれ、考えることはあったと思う。だけど皆、「どうして」とかいう疑問よりも、ただ一真のことを心配していた。

「…一真」

長い長い沈黙の後、一番に口を開いたのは真帆だった。不意にポケットから真帆好みのかわいいハンドタオルを出して、ずっとそれを一真に差し出す。それで私も初めて気がついた。一真は、無表情のままただ涙を流していた。

「……………」

華江も初めて気づいたのか、驚いたように顔を上げて少し椅子から腰を浮かす。声を殺すわけでもなく、流れる雫を拭うでもなく……ただ静かに、一真は泣く。窓際に座った向井くんだけは、それを見ないようになっているのか窓の外を眺めていた。

「…こんなつもりじゃなかったんだ……」

やがて、一真は小さくそんな呟きを漏らした。

真帆から受け取ったタオルを、一真はキュツと握り締める。それを使って涙を拭くことはしなかった。

何かの痛みに耐えるように…ただ固く力を込めるだけ。

「会つと、愛海先輩がああなることはわかってたのに…」

独白のような呟きは、すぐに消えてしまいそうなほど弱々しかった。

…だから、…だったんだ。

一真が、マナミ先輩に会いたくて仕方ないはずなのに、行かずにいた理由。行動派で俺様の一真が、足踏みしていた理由…。

ただ、マナミ先輩を傷つけたくなかったからなんだ…。

一真が傷ついて泣くのは、マナミ先輩に拒絶されたことでもなくて…。自分が、マナミ先輩を傷つけたからだったんだ。

「…何か…あったの？昔、愛海先輩と」

遠慮がちだけれど…ごくストレートに、華江が不意に一真に尋ねた。面白半分で聞いているわけでもないことがわかっていいるから、一真は小さく頭を振る。それから、机に肘をついた体勢のまま、大きな両手で顔を覆ってしまう。

「…何も」

小さく、答えた。

「何も無い。何かできるほど、俺はあの人に近づくことさえできなかったから」

痛々しい声で、一真は応じる。言葉の重さに、私は自分のことのように胸のどこかがキリと痛む気がした。

…その一言で、一真の痛みが伝わってくる。

自分はマナミ先輩に近づくことさえできないもどかしさ。そしてパニックになったマナミ先輩が、自分の目の前で救いを求めたのは誰だったか…。その一真の心の痛さは、私にもわかる。マナミ先輩を抱きしめるタクミ先輩を、見たくなかったのは私も同じだったからだ。

そして、彼女のそんな大変な時にくだらない嫉妬をしてしまう自分にも嫌気がさす。きつと、私と一真はそんなところが似ているはずだった。

「…あの人は…」

そんな痛みに耐えながらなのか、一真は再び小さく口を開いた。顔を覆っていた手はずし、ようやく涙は止まったようだった。視線だけは私たちに向けないまま、ただ続ける。

「俺じゃなくて、自分の過去に怯えてる」

「……………?」



ただ一真の言葉に耳を澄ますように、私たちは黙ったまま続きを待った。

「彼女が傷ついているのは、中学の時のある出来事がきっかけで…。それには俺は全く関係ない。だけど、中学時代の知り合いである俺に会ったことで…その時のことを全て思い出してしまったんだと思う」

マナミ先輩の…過去？そんな重大な何かがあるなんて、聞いたことがない。

いつも明るくて優しくて…タクミ先輩にだけは遠慮がなくてちょっと怖いけれど…傷を負った過去の影なんて感じさせない人なのに…。

「愛海先輩は、当時のことを思い出したくない余り…この高校に入学したんだ」

説明するように、一真はそう告げる。

その傷ついた過去を思い出したくなくて、その当時の知り合いにも会いたくなくて…。彼女は家から遠い、この高校を選んだんだと一真は続けた。確かに、タクミ先輩とマナミ先輩の家からこの学校は学区外だ。進学校だから受験はできるし通う許可も出るけれど、今までにその選択をする生徒はほとんどいなかった。タクミ先輩は前に、自分の中学からこの高校に進学する生徒はほぼ皆無だと言っていたっけ…。

「そんな愛海先輩が、隣にいてもいいと心を許したのは…拓巳先輩

「ただだった」

「……………」

「…もしかして…」

私の隣で、華江が小さく口を開く。

「その出来事のせいなの？あの2人が…付き合ってる理由」

華江の言葉に、ドキ、と一瞬胸がざわつくのを感じた。私も気になった…核心に触れる言葉。

だけど、どこか答えを聞きたくない気もしていた。

「…俺が話せるのは、ここまでだ」

私の胸の内を知ってか知らずか、一真は華江の問いには答えなかった。少しだけホツとして、私は内心で胸を撫で下ろす。

再び5人の間に訪れた沈黙を、今度は誰も破ろうとはしなかった。

「ホントに、うちじゃなくていいのか？」

あのまま気を失ってしまった愛海を抱きかかえ、俺は名取先生に車で家まで送ってもらった。家の門の前に着いたところで、名取先生はそう尋ねてくる。

「大丈夫です、すみません」

涙を流したまま疲れたように眠る愛海を車から降ろしながら、俺はそう応じた。

先生の家に連れて行って、つわり中の姉に迷惑をかけるわけにもいかない。何より、愛海自身が目を覚ました時に気を遣うだろう。

軽く頷いて納得してくれた先生は、足に使ったことに気分を害した様子もなく再び車に乗り込んだ。窓越しにお礼を言って、俺はただその車が走り去るのを後ろから見送る。

車が見えなくなつたところで、門を開けて玄関のドアへ向かった。気を失っているとはいえ、俺の首に巻きついた愛海の腕は無意識に力がこめられているようだった。ちよつとやさつとでは離れそうにないそれに、鍵を出すのさえ苦勞する。

「……………」

何とか鍵を開けて中に入った俺は、そのまま二階の自分の部屋へ

愛海を連れて行った。起こさないようにそつとベッドに横たえると、やはり腕だけ離すのが大変で…。ぎゅっとしがみついた腕をゆつくりとほどかせて、ベッドのすぐ傍に座り込んで俺は大きく息を吐く。

ベッドのフレームを背もたれにして、少しだけ顔をあお向けた。長く細い息が、ため息のように漏れる。

狂ったような愛海の悲鳴と共に思い出されるのは、茫然と立ち尽くした柴田の顔。そして、心配そうにそれを見守るしかなかったあの子の表情だった。

…こうなることがわかっていた。

だから、柴田と愛海を会わせたくはなかった。彼に何の罪もなくても…愛海を狂わせるには十分な存在だったから。

「……」

何度目かの息を吐き出した頃、不意にベッドの上で愛海が身じろぎした。ゆっくりと覚醒したらしく、薄く…徐々にその瞼が開いていく。丁寧にマスカラが塗られたその目は、やがて俺の方を向いた。

「…准…」

もちろん、さっきまでのことを忘れたわけじゃない。俺を呼ぶ声は少し掠れ気味で、瞳はどこか潤んでいた。

どれくらいぶりだろう。

愛海が、俺のことを下の名前で呼ぶのは……。どこか懐かしさすら感じたけれど、それは浸れるようなものでもなくて……。ただ、互いに昔負った傷を思い知らされるだけだった。

「……………」

愛海の眼差しはまだどこか虚ろで、覚醒しきっているようではなかった。頭をそつと撫でてやると、少し不安そうにこちらを見やる。その表情に少しだけ微笑んで、俺は安心させるために小さく呟いた。「…大丈夫、ここにいるから」

さっきの学校でと同じ言葉を告げると、愛海はどこかホツとしたのが再びゆっくりと瞳を閉じていった。

それから再び眠りについて、数時間。俺は何をする気にもなれず、ただ言葉通りそこに座っていた。

時折うなされるように小さく声を上げる愛海の手を握りながら。

階下で音がしたのは、20時を回った頃だった。

電気も点けずに真っ暗なままだった家の中に、パチッとスイッチの音と共に明るさが灯る。愛海を起こさないようにそつと部屋を出てから、俺はそのまま階段を下りた。

「おかえり」

玄関で靴を脱いでいた父親に、その声をかける。

「ただいま。…愛海ちゃん来てるのか？」

そこにある愛海の靴を見て、父はそう尋ねてきた。愛海がうちに  
来ることはさして珍しいことでもないのに、気にしている風ではな  
い。だけど小さく頷いて応じた俺の様子に今日の異変を読み取った  
のか、父は少しだけ眉を上げて俺を見つめ返した。

父は40代後半の、典型的なサラリーマンだ。昔から子煩悩で、  
俺と姉はかなりかわいがられて育ったと思う。かと言って甘やかす  
だけではなく、怒る時はこちらが萎縮するほど厳しい。厳格さと優  
しさを兼ね備えた、一般的には理想の父親像だと息子からしても思  
う。

だから、すぐに俺の様子に気づくのも早い。

元より隠し事をするつもりもなかったけれど…。

「…今日、またちょっと…。今は上で寝てる」

「…そうか」

その一言で全てを理解してくれたらしく小さく頷き返した父は、  
そのまま一階の一番奥にある自室へ向かった。それにまるで子ども  
のようだと自分でも思いながら…後について行って話を続ける。

「それで…夕飯の用意もできてないんだけど…」

「ああ、いいよ。今日は俺が作る。食べやすいものにしておくから、  
愛海ちゃんが起きたら食べさせてあげなさい」

ネクタイを外しながら、父は脱いだ上着は俺の方へ投げて寄越す。

それを俺がハンガーにかけていると、確認のために口を開いた。

「愛海ちゃんの家には連絡したのか？」

問われて、軽く頷き返す。それを見てから、父は「…そうか」とだけ呟くと、着替えを終えてリビングとキッチンのある方へと向かった。

その際に、自分の部屋である和室を抜ける前に…父はふと部屋の隅にある仏壇を振り返る。ここ数年かわらずに飾られた懐かしい笑顔の前で、両手を合わせた。日課であるそれを終えて、父は小さく言う。

「佳奈の命日ももうすぐだ。…愛海ちゃんも辛くなる時期だもんな」

「……………」  
その呟きに特に言葉は返さずに、俺は黙然とそこにある母の遺影を眺めた。

そんな俺の脇をすり抜けて、父はリビングへ向かう。後ろ姿を目で追ってから、俺はその部屋の電気を静かに消した。

\*\*\*\*\*

シャツと勢いよく開けられたカーテンの音と共に、朝の眩しい光が睨越しにさえ伝わってきた。ベッドの傍に布団を敷いて眠っていた俺は、その眩しさに思わず顔を顰める。

「おはよう、タクミ」

ベッドの傍らからカーテンを開けた態勢のまま、その声をかけてきたのは愛海だった。すっかりいつも通りに戻ったような表情の彼

女は、俺を呼ぶ名前も普段通りだった。

「昨日はごめんね。すっかり寝ちゃったわ」

肩を竦めて言いながら、愛海はこちらへ近寄ってくる。精神的にも疲れて…更に泣き疲れてよく眠ったせいか、今は少し晴れ晴れとした表情だった。…恐らく…目を覚ましてから、本人なりに気持ちの整理もつけたところだろう。いつも通りに俺に接しようと努力しているのがよくわかる。

「でも欲を言うとかさあ、スカートがグシャグシャなんですけど…。制服のまま寝させないでよねー」

「…よく言つよ。そう思ってた前の時、着替えさせたら散々怒ったくせに。『変態!』って」

「……そうだっけ?」

「そうだよ」

とぼけたように首を傾げる愛海に、俺は苦笑い気味に応じる。いつも通りのテンションの会話をして、いつも通りの表情を作る。お互いのそんな白々しい努力も、気づいているはずなのに…そうするしかなかった。

階下に下りると、父はもう仕事に行った後だった。2人分の朝食も用意しておいてくれているらしく、ダイニングのテーブルには小奇麗に皿が並んでいる。

「相変わらずおいしそうねー、タクミ父のご飯」

目を輝かせて言う愛海を、コーヒーを沸かす間にと浴室の方へ追いやった。シャワーを浴びさせて、その間に父の用意した朝食を皿に盛り付ける。



今日、土曜日が学校が休みの日で助かった。愛海も今は元気になった風を装っているけれど、きっとまだ精神的に本調子じゃない。思い出した傷というのは、時に当時よりも癒すのに時間がかかるものだ。

俺はというと、どうしてもまだあの子と平然と顔を合わせる自信もなかった。自分の中でああするしかなかったとは言え、あの子の目の前で愛海を抱きしめたのは事実だからだ。見られなくなかったという身勝手な思いと、一瞬見えた少し傷ついた顔をした彼女の表情が思い出される。

∴ だから、正直今日が休みでホッと安堵の息さえ漏れる。

「シャワーありがとう」

手早く終わらせたらしい愛海が、着替えも終わらせてダイニングへ戻ってきた。幼馴染なので幼い頃からよく泊まりに来ていた愛海は、俺の部屋に私服も何着か置いて行っている。それを身にまとってすっかり身支度を整えてから、テーブルに着いた。

「『愛海ちゃん、朝ご飯くらいはちゃんと食べなさい。∴ 父より』  
だっ」

テーブルに残されていた父親からの手紙を声に出して読み、愛海は嬉しそうに笑う。目の前の食事と手紙に「いただきます」と手を合わせてから、サラダにフォークを伸ばした。

「おじさんに悪いことしちゃった。お礼も言えないままで…」

「別に気にしてないよ。いつものことだろ」

ハムとレタスが挟まったベーグルサンドを口にしながら、俺は小さくそう応じる。

愛海が来た時には大体父親は「ベーグル」だの「サンドイッチ」だのを用意する。女子高生受けすると思っ込んでいるらしい。……とんでもない偏見だけれど。

「それもそつか」と俺の言葉に軽く答えて、愛海は肩を竦めた。それからしばらく沈黙して、ただ黙々と目の前の料理を口へ運ぶ。この言葉が途切れた時の少し重みのある空気が……今の俺たちの本当の空気だった。……少しでも気を緩めると……互いに物思いに耽ってしまつ状態だ。

「……………ねえ」

長い長い沈黙の後、やがて愛海がコーヒーに口をつけながら言葉を継ぐ。小さな呼びかけはどこか真剣味を帯びていたので、俺は不意に顔を上げた。目の前の愛海は、ゆっくりとマグカップをテーブルに戻す。それから、俺の方は見ないまま呟くように続けた。

「……柴田くん、ひどいことしちゃった」

昨日のことは、はっきりと覚えているらしい。続いたそんな言葉に、俺はただ耳を傾けた。

「いくらなんでも……化け物見たかのように叫ばれたら傷つくよね……」

返すべき言葉も見つからず、黙って愛海を見つめ返す。少し伏せ目がちの愛海は、マグカップを手のひらで包むようにしながら小さく息を吐いた。

「…タクミはさ、知ってたの？ 柴田くんが、うちの学校に転入してきたこと」

「……………うん」

静かに…だけどはっきりと肯定すると、愛海はようやく顔を上げる。

「…知ってて…私を守ろうとしてくれてんだ」

少し口元を緩めた微笑は、どこか切なさを感じるものだった。笑っているはずなのに…ただ悲しさしか感じ取れない表情。

…そして、静かに続ける。

「ありがとう、タクミ」

愛海がそんな言葉を口にしてから、2人の間には再び沈黙が訪れた。



マナミ先輩が壊れたようになったその日…。

結局私たち5人は学校で別れたけれど、夜になって急に華江が私の家を訪ねてきてくれた。

華江は、いつでも冷静沈着で周囲を見ている分、周りの人間の感情の変化に敏感だ。それできつと、私を心配してきてくれたんだろうということがあった。

「大丈夫？ハルカ」

辛いのは、きつとマナミ先輩本人とタクミ先輩。

そして…一真。

私なんか傷ついたりする資格なんてない話なのに、それでも私は落ち込んでいる。私の部屋に入ってきた華江は、それすらお見通しなようで、一番にそう尋ねてくれた。

「華江に隠し事はできないね…」

昔から、そう。華江はいつも私を気にしてくれていて…。良い友達に恵まれたなあ、常に思う。

「ホントはね、真帆もハルカの心配してて…今日も来たいって言うてたのよ」

「真帆が？…そっか。真帆の家、門限厳しいもんね」

「うん。だからこれ預かってきた」

そう言っつて華江が持ち上げて見せたのは、学校の近くにある有名なケーキ屋さんの箱だった。

高級ホテルで修行を積んだというパティシエが最近オープンさせたお店で、ちよつと高いけれどたまに奮発して食べに行ったりしている。私がこのミルフィーユを好きなのを知っているから、真帆は気を遣ってくれたんだろう。2人のそんな優しさが、なんだかやけに嬉しかった。

「ありがとう。…ね、華江、今日良かったら泊まって行かない？」

「え、でも急にじゃ迷惑でしょ？」

「華江だったらうちの家族も大歓迎だよー。久々にパジャマパーティーしよ」

ニツコリ笑って答えると、華江も「そうね、じゃあお言葉に甘えて」と笑顔を見せた。華江とは小学校から一緒なので、親同士も知らない仲じゃないから許可は簡単に下りるだろう。華江は家に電話をしてから私の家族と夕飯の食卓を囲んでくれた。その間、ずっと私は楽しくて笑っぱなだった。…それまでは家族には心配かけたくなかったから無理して笑おうとしていたけれど、華江がいてくれたおかげで自然と笑うことができた。

「…華江、私間違ってたのかも」

今私が考えていることをポツリと話始めたのは、お風呂に入っただけで寝るだけとなった時だった。ベッドの上に座って、私は急にその話かける。同じように少し居ずまいを正して、華江は下に敷いた布団の上に座って私を見上げていた。

「私が思ってたよりずっと…マナミ先輩とタクミ先輩が抱えてるものっていうのは大変なことだったみたい」

今日実感せざるを得なかったことを、私はそう口にした。

「私はタクミ先輩を想えるだけで幸せだったし…そう言ってたのは嘘じゃないよ。でも、あの2人が付き合ってるのは訳ありで…もしかしたらタクミ先輩も少しは私のこと気にしてくれてるのかもしれない…。そう思うと、やっぱりいつか振り向いてくれるかなとか、少し期待しちゃってた」

私の言葉に、華江は黙って耳を傾けてくれている。膝を折ってそこに顔を埋め、私は小さくなって続けた。

「いつか先輩が私に本当のことを話してくれるのを信じて、待ってようと思ってた」

それは、タクミ先輩本人にも誓ったこと。

でも……………。

「今日のあの2人を見て、きつと2人が抱えてる事実は私の想像以上に重いものなんだと思った。だとすると…私は、タクミ先輩を待ってちゃいけない気がする」

私がそう言った時、華江が少しだけ息を飲むのが感じられた。「ハルカ…」と、心配そうに呼びかけてくれる。

「一真が、私に言ったよね。『タクミ先輩は私にホントのことなん

て話さない』って。なんだか、その意味がわかる気がしたの」  
あの2人が抱えている事情というのは、きつとマナミ先輩の過去の傷で…。タクミ先輩は、ただマナミ先輩を守ってるだけ。そうだとしたら、確かにマナミ先輩のその「過去」をタクミ先輩が自ら私に話すはずがない。

「そうになると…きつと、私が待つてるとタクミ先輩の負担になる。それだけは絶対嫌なの。重荷にはなりたくないから…」

「でも…」

そこできつと、華江が私の言葉を遮った。口を挟んだ彼女に、私もゆるりと顔を上げる。珍しく、華江が少しだけ焦っているように見えたのは気のせいだろうか？

「タクミ先輩は、マナミ先輩じゃなくてハルカのことを好きかもしれないのよ？それならタクミ先輩だってハルカに待つてほしいに決まってるじゃない」

華江の私を励まそうとする言葉に、ただ私は首を横に振ってしまふ。それじゃダメなんだと、自分に言い聞かせながら…。

「もし…本当にタクミ先輩が少しでも私を想ってくれてるなら…」  
それなら尚更、待つていてはダメだと思ふ。

タクミ先輩は、マナミ先輩を突き放すことなんてできない。きつと、そうするつもりもない。



いつ終わるかわからない2人の関係を待ち続けるなんて…、私はよくても、きつとタクミ先輩にはプレッシャーにしかない。もしタクミ先輩が私のことを何とも思っていないければ、私が片思いしているようが勝手に先輩を待とうが、無視していればよかったんだらうけれど…。

言葉を濁した私だったけれど、華江もその続きは理解してくれているようだった。ただ口をつぐんで、私をまっすぐに見つめてくる。

「今日、2人を見て…決めただ」

胸にある決意を秘めて、私はそう呟いた。何か言いたそうだった華江は、それでも私の意思を尊重してくれたのか、それ以上問いたさそうとはしなかった。

\*\*\*\*\*

その後の土日の連休は、華江と遊んで過ごした。そして気づけば6月も半ばに差し掛かっていて、週明けには期末テストが2週間後に控えていることに気づかされる。

「…遊んでる場合じゃなかった…」

月曜日の教室で冗談まじりに呟くと、前の席で華江が苦笑いを返してくれた。

「よお」

HR10分ほど前に登校してきた一真は、わざと私の頭に鞆をぶ

つけて通りながらそう挨拶を降って寄越す。「痛いなあ」と抗議するような目で振り向くと、そこにはいつもの俺様な笑顔を浮かべた一真がいた。

…うん。一真も、連休中に気分を一新してきたみたいだ。

憂鬱そうな表情も傷ついた顔も、もうそこに浮かべてはいなかった。恐らく…無理していることに違いはないんだろうけれど…。

「おはよ、一真。もうすぐ期末テストだね」

「…なんだデメエ、その朝から憂鬱になる挨拶は。ケンカ売ってんのか」

「と、とんでもないです」

目を逸らしながら小さくなると、華江と一真が同時に声を上げて笑う。いつも通りのこんなバカなやりとりが、今は何だかホッとする瞬間だった。

真帆も向井くんも加わったけれど、誰も金曜日の出来事には一切触れなかった。一真の笑顔を再び曇らせたくなかったのもあるけれど、私たちがここで考えたって仕方がないことだからだ。

「期末テストと言えばさあ、終わったら七夕祭りだよー」

真帆も、そんな何でもないような話題を振る。そういえば、と頷くと、真帆は少し目を輝かせて私たち4人を見比べた。

「ねえねえ、皆で行かない？七夕祭り」

この地域では、毎年7月上旬に5日間ほどかけて七夕祭りを開催している。駅前の大きな商店街がその期間は驚くほど派手に飾りつけられ、毎年何万人という人が見物に押し寄せる。

「やだよ面倒くせえ」

真帆の提案を即座に切り落としたのは、言うまでもなく一真だ。俺様はこんな時にはノリが悪い。ぷうっと頬を膨らませた真帆の肩を、私が「まあまあ」と軽く叩く。

「理不尽大王は興味ないみたいだからさ、4人で行こうよ。楽しいよねー、七夕祭り」

そう言うのと、華江が合わせて頷いた。

「そうよね。テスト終わって丁度いいかもね。結構屋台も面白いしね」

「あ、俺射的やりたいかも」

向井くんも拳手しながら、ニコニコと笑顔で言う。

「残念だよねー、一人だけ来たくないらしいし」

「まあいいんじゃない？きつと七夕祭りなんて子どもが行くものだと思うてるのよ」

「いやいや、実は射的とか金魚すくいとかがヘタで見られたくないのかも……」

「あ、それありえるー!!」

わざと一真に聞こえるように4人でクスクスと嫌味ったらしく話していると、隣でブチッと理不尽大王の何かが切れる音が聞こえた気がした。

「…っ、やってやろうじゃねえか！射的も金魚すくいも！」  
キレてやけになった一真がそう言った瞬間、真帆と私は「やった  
ー」と手を合わせる。それを見て「…意外にノリやすいのね、理不  
尽大王」と華江が笑っていた。

テスト後の楽しみもできたところで、仕方がないのでしばらくは  
勉強に専念することにする。…でも、その前に私にはやらなきゃい  
けないことが残っていた。

その決意を胸に、私はその日の放課後を待った。

\*\*\*\*\*

放課後になって訪れたのは、もちろん数学準備室だった。いつも  
と気分が違うからかどこか緊張してしまい、私は扉の前で大きく深  
呼吸する。「よし」と気合を入れてそこを開けると、中には先に夕  
クミ先輩が来ていた。…名取先生は、不在のようだ。

「こんにちは」

ニコリと笑顔を作って、私はいつもの場所まで行く。先輩も笑顔  
を返してくれたけれど、私と違って作り笑いのようには思えなかつ  
た。だからそれが、余計に胸が痛む。

「名取先生はいないんですか？今日」

尋ねると、先輩は持っていたシャーペンをノートの上に置きながら頷いた。「臨時会議だった」と、答えが返ってくる。

「そうですね」と小さく頷いてふと顔を上げた瞬間、正面から先輩とばかり目が合ってしまった。至近距離で見る先輩の表情に、私は瞬時に金曜日に見た光景が脳内を駆け巡るのを感じる。…思い出したくない場面まで、思い出してしまった。

「…この前は…」

そんな私の心の内を知ってか知らずか、先輩は改めて口を開く。聞きたくなさそうな言葉が続きそうだったけれど、その話題を避けて通るのは無理だろうから私もそのまま耳を傾けた。

「迷惑かけてごめん」

無表情の先輩からは、何の感情も読み取れなかったけれど…。そんな風に言って、先輩は軽く頭を下げた。思わず大きく首を横に振って、「謝らないでください」と答えていた。

「私なら、全然気にしてませんから…。マナミ先輩はどうですか？」  
「…ああ、もう落ち着いている…かな」

気にしてない、なんて嘘をついた自分に、自分で嫌気がさす。本当は、思いつきり気にしてくせに…。

「良かったです」とニツコリ笑顔を返すと、先輩は少しだけ眉を上げて何かに気づいたように私を凝視してきた。…作り笑いが、バレたのかもしれない。

それはそうだ。私は先輩みたいに自分の感情を隠すのがうまくな

い。今でもうまく「何でもないフリ」を演じられているとは思えない。

「あの、それで先輩……。話は変わるんですけど……」

作り笑いに気づいて何か言われる前に、先輩の言葉を封じてしまおうと思った。改めて呼びかけて、相手に話す隙を与えないように言葉を継ぐ。

「実は、今日から華江たちと本格的に期末テストに向けて勉強することになって……」

昨日の夜から、考えていた嘘。口が渴きそうになる中、必死で声を絞りだした。

「だからしばらく、ここにも来れそうにないんです」

別に、約束していたわけじゃないけれど……。最近ではここで一緒にいることが多かったから、ちゃんと話しておかなければいけないと思った。

先輩は、そう言われても何を思ったのかはわからない完璧なポーカーフェイスだった。「そう。頑張つて」とだけ、普段通りの優しい声が返ってくる。その声音に一瞬だけ胸がズキッと痛んだ気がしたけれど、私はそれに気づかないフリをした。「それじゃ、さようなら」と頭を下げて、鞆を手に踵を返す。

嘘がバレないように…慌てず、落ち着いた動作で数学準備室の入口へ戻った。何でも無い風を装って、最後に少しだけ振り返って笑顔を見せて…。そうして私は、先輩にそれ以上追及させないままそこを出た。

後ろ手にドアを閉めたところで、一気にドツと疲れが押し寄せる。嘘なんて、慣れないことをするものじゃない。

それでも、タクミ先輩を待たないと決めた私にはそうするしかできなくて…。

「……………さよなら、タクミ先輩」

さっきとは違った意味で、私はそんな言葉を小さく呟く。誰にも聞こえることになかったその声は、ただ空気に吞まれて消えていった。

「あれ？」

一時間ほどの会議を終えて数学準備室に帰ってきた名取先生は、入ってくるなりそう言って眉をひそめた。

「…どうかしました？」

そちらを振り返らないまま、俺は答える。何のことを言っているのかはわかってはいたけれど、あえて気づかないフリをした。

「夏川は？来てねえのか」

想像通りの問いを投げかけてきながら、先生は一番奥の自分の椅子を引く。

「今日から期末テストに向けて友達と勉強するらしいですよ」

「ほー。そいつは次のテストが楽しみだ」

先生は、その話は何の疑いも持っていないようだった。感心したように呟いて、椅子に座ると同時に自分のパソコンを立ち上げる。

俺だって、恐らくその言葉だけなら信じていたと思う。だけど…彼女のその「ここへ来なくなる理由」は、嘘なんじゃないかと思っただ。確信を得ているわけじゃないけれど…あの子のいつもと違う違和感のある笑顔を見たせいで、そう思わされた。

いつも曇り一つない表情で笑うから…今日の笑顔は、作り笑いなんじゃないかと感じて…。そうしてそんな顔を彼女にさせているのは、他でもない自分なんだろうということにももちろん気づいている。



「准一」

そんなことを考えていた俺に、先生がふと向こう側から呼びかけてきた。ハッと我に返ってそちらを向くと、先生はパソコンに視線をやったまま言葉を次いだ。

「この前：何で春日はあんな状態になっちまったんだ？」  
尋ねられて、俺は「そういえば」とここ2日間の自分を振り返る。

あの後、先生には車を出してもらったお礼と愛海がすぐに落ち着いた報告はしたけれど、いきさつまでは話していなかった。

実は：と、金曜日の放課後に愛海が柴田一真と遭遇してしまったことを説明する。一連の流れを聞き終えた先生は、「…そうか」と小さく呟いた。その頃には、もうパソコンではなく俺の顔を見て話を聞いてくれていた。

「…全然気づかなかった。中学時代、春日に惚れ込んでお前を敵視してる奴がいるっていうのは聞いてたけど…。それが柴田だったのか…」

「まあ、先生には名前と顔は教えてませんでしたしね」

「知ってたらもうちょっと何とかできたかもしれないねえよな」

「ごめんな、と続ける先生の言葉に、俺は大きく首を横に振る。それはどちらにせよ、どうしようもないことだったと思う。」

柴田がこの学校に転入してきた以上、誰もその接触を避けられはしなかっただろう。それ以前に、柴田がわざわざこの学校を選ぶこ

とも…。恐らく、今回のことも…。全部、誰も止められないことだ  
つたに違いない。

そう、誰のせいでもない。  
誰が悪いわけでもない。

…あの日、愛海が傷ついた雨の日の出来事さえも…。

\*\*\*\*\*

翌日からは、何だかつまらない日が続いた。どこか世界が色あせて  
しまった気さえする。それに気づくと共に、その理由があの子の  
笑顔が近くにならないからだと自覚した。

思えば、先月彼女と和解して以来会わない日が続くことはほとん  
どなかったから…。いつの間にか、放課後の短い時間でも傍に  
いるのが当たり前になってしまっていた気がする。

そして、自分がどれほどその「当たり前」に幸せを感じていたの  
か…。それすら思い知らされて、胸が痛む。

…会いたい。でも、会えない。

彼女の吐いた「嘘」の原因が、あの日俺が愛海を抱きしめたことだとしたら…俺にその資格はないからだ。

愛想をつかされても、当然だった。彼女のことをどれほど好きでも、俺は愛海を拒むことができないから…。それが決して恋愛感情のものからでない人と同人同士が知りえていても、第三者からはただの二股にしか見えないだろう。そんな状況に、いつか光が差すことを望んでいた彼女が…諦めて俺に愛想を尽かしても仕方のないことだった。

「あ、七夕だー」

ボーっとそんなことを考えていた俺の隣で、愛海が声を上げた。どうやら呆けていた俺の前には、七夕祭りのポスターが貼ってあったらしい。その視線の先を追って、愛海はどこか目を輝かせて笑う。その声にハッと我に返ると、俺はその場から歩きだした。

「行こうよ、タクミ。テスト終わったらさ」

「…受験生なんだけど」

駅のホームの壁側を歩きながら、俺はそう苦笑いを返す。少しだけ頬を膨らませた愛海は、俺の後についてきながら抗議口調で続けた。

「この前新しい浴衣買いに行ったのにい」

「また？去年も買ってただろ」

「今年は違う色にしたかったの」

「……そう」

呆れたように曖昧に笑うと、愛海はねだるように腕をからめてくる。珍しく甘えるような態度で、下から俺を見上げてきた。

「……わかった、行くよ」

譲歩するように言うと、愛海は「やったあ」とご機嫌に笑う。相変わらず自分でも甘いなと思いつつも、そう答えるしかなかった。

昔から、そうだ。愛海が俺だけには高圧的になれるのも甘えてくるのも……。

そして俺が、それを全面的に受け入れられるのも……。

幼い頃からの、「家族愛」のようなものだった。

それが「恋愛関係」に形を変えたところで、うまくいかないはずはないと思っていた。

……そう、あの子に出会うまでは……。

「……………」

急に、どこか息苦しさを感じる。

会いたい気持ちが飽和状態になって、胸を軋ませたからのようだ

った。

「タクミ？」

不思議そうに俺を見上げる愛海の顔を、俺は振り返ることができなかった。

「おわったー！ー！」

期末テスト最終日、最後の古文の試験を終えて私は大きく伸びをした。

…タクミ先輩に会わなくなつて、早2週間以上。最近では、考えないようにしているからか、先輩のことを思い出さないように努力することがうまくなつた気がする。

それでもその努力に失敗した時は、会いたさと何とも言えない切なさが込み上げてきて、余計に自分の想いを自覚した。…それは、とても皮肉なものだった。

「今日何時に待ち合わせする？」

HRを終えた後、真帆がそんなことを尋ねてくる。前に5人で約束していた、七夕祭りのことだ。

「なんだよ、外で待ち合わせすんのかよ？このまま行きゃいいだろうが」

私の隣の席で、一真が若干不機嫌そうに眉を寄せた。一真は結構頭がいいらしく、どのテストも早く終わらせて残った時間はひたすら寝に入っていた。隣の席の私からしたら…憎らしい存在だ。

「女子には色々あるのよ！せっかくのお祭りだから浴衣だつて着たいしー！」

抗議するように真帆が一真にピシヤリとそう言い放った。そんな

言葉すら、一真はフンと鼻であしらう。

「お前らのそんな姿、別に見たくねえから無駄な努力すんな」

「どういう意味よっ」

容赦ない言葉を浴びせる一真の頭に、これまた容赦ない真帆の教科書での一撃が振り下ろされる。……クラスメイトたちに怯えられていた一真だけれど、真帆はすっかり一真とのやりとりの仕方を学んだらしい。

「向井は？」

急にくるつと、真帆は向井くんを振り返る。「え、俺？」と目を丸くした向井くんが、瞬きの回数を増やして小首を傾げた。

「向井は、見たいよねえ？華江の浴衣姿！」

真帆が尋ねた途端、向井くんは何を想像し何を照れたのか、飲んでいたカルピスを「ぶほうっ」と豪快に噴き出した。

「そそそそ、それは…っ」

どこまで純情なんだか、浴衣姿と聞いただけでこれだけの反応が返ってくる。なんだか面白くてニヤニヤ笑って見ていると、これまた容赦のない華江の言葉が降ってきた。

「あ、私浴衣パス。普通に私服で行くわ」

女王さまの冷徹な一撃に、向井くんはみるみる萎れるように頂垂れる。それに私と真帆は顔を見合わせて、思わず声をたてて笑ってしまった。

とにかく、お祭りは夜だしまだまだ時間があるということで一時的に解散することにした。夕方駅前で待ち合わせ、それまでに私と真帆は一旦家に戻って浴衣に着替えてくる。テストから解放された爽快感を噛み締めながら、私はウキウキと七夕祭りが出る準備をした。

実は誰もがそれなりに几帳面らしく、この5人の中に時間を守らない人はいない。5分前には自然と全員が揃い、並んで人の集まり始めた祭り会場へと足を運んだ。一真は言わずもなだけれど、向井くんも一真と同じくらい長身で、2人が並ぶとかなり目立つ。すれ違う女の子たちが振り返って行くのも、前を歩く私たち女三人からしたら視線が痛かった。それらを全く気にしてもいない男2人は、後ろで射的の屋台について何か熱く語っている。…一真は乗り気じゃないんじゃないか、というツツコミは、あえてしないで飲み込んでおいた。

「りんご飴食べたいー」

「あ、私チョコバナナ食べたいー」

屋台を眺めているうちに真帆が弾んだ声で言ったので、私もキヤツキヤと同調した。いつもの制服とは違う浴衣姿で、気分もかなり浮かれていた。忘れたいことは、忘れてしまえるくらいに…。

「直。な、こいつらはダメだろ」

私と真帆のやり取りを後ろで聞いていた一真が、不意に向井くんにそう話かけた。その言葉の意味はわからなかったけれど褒められていないことは感じ取れたので、私と真帆はムツと後ろを振り返る。「何、ダメってどういうことよ」

眉を寄せて一真に詰め寄ったけれど、もちろん答えるつもりはないらしい。仕方なく向井くんを一瞥すると、彼は私たちの勢いに圧されたらしく「…実は」と口を開いた。

「さっきここに来る前に、一真が言ってたんだ。『りんご飴』と」



チヨコバナナ』をアピールする女は男に媚びるタイプだから気をつ  
けるって」

「かーあずまーああ！」

向井くんの答えを聞いた瞬間に、私と真帆は揃って一真に詰め寄  
った。それすらケタケタ笑ってかわす一真を追い回していると、華  
江がそれを眺めながら小さく吐息を漏らす。「子どもじゃないんだ  
から」と呆れたような声で呟いていた。

「…あれ？」

私たちがそんな声で聞こえてきた。不意に、後  
ろからそんな声が聞こえてきた。

自分たちに向けられたらしいその声を振り返ると、そこには男の  
子が2人立っていた。スポーツマンタイプの、爽やかな感じの2人  
組。去年も同じクラスだった宮川さんと……その友達の、長谷川く  
んだった。

「夏川も、来てたんだ」

ニッコリと笑って、長谷川くんがこちらへ歩み寄ってくる。そう  
いえば長谷川くんとは…2年になってすぐに一度遊びに行っただけ、  
全然会っていなかったっけ…。

「うん。長谷川くんは……2人で来たの？」

苦笑い気味に遠慮して言うと、長谷川くんは「えっ」と少し慌て  
たようだった。そんな焦ったところも、なんだかかわいらしいタイ  
プだ。

「いや、ちがつ……。その先で仲間と待ち合わせしてて……」

「俺らが2人で来るわけねえだろー。気持ち悪い」

焦る長谷川くんの隣で、宮川くんも声をたてて笑う。

……それはそうか。確かに、宮川くんと長谷川くんが2人で七夕祭りを楽しむところなんて想像できない。

「…あの、夏川…」

じゃあね、とそのまま別れようとしたところだったけれど、ふと長谷川くんがどこか遠慮がちに私を呼び止めた。制服姿しか見たことのない彼が、なんだか今日は少し印象が違う。長身で短髪…どこからどう見てもモテそうな精悍さがあった。

「ん？」

と小声の長谷川くんに少し耳を傾けるようにすると、向こうもわずかにかがんでくれる。華江たちから少し離れて、彼はためらいがちに言葉を継いだ。

「最近、噂になってるんだけど…」

「？」

何が、という顔をして、私は彼の顔を振り返る。少し言いづらそうな彼は、私と目を合わせようとはせず、にわずかに下を向いていた。「…先月来た、あの転校生…と、随分仲が良いみたいだけど…付き合ってるの？」

「……………え？」

鏡があっただら驚いてしまうくらい、私は間抜けな顔をしてしまっていただろう。気の抜けたような返事をしてしまったけれど、尋ねた長谷川くんは真剣そのものようだった。その表情を見て、ふと思いつく…。

そう言えば、宮川くんから聞いた話では…。

長谷川くんは、私のことが気になってると言ってくれてるんだっ  
たっけ…。

「ううん、付き合っていないよ」

大きく首を横に振ると、後ろから「おい、お前」とドスの効いた  
ような低い声が降ってきた。長谷川くんと共に振り向くと、そこ  
はもちろん俺様な一真が長谷川くんを見下ろしている。「…はい」  
と若干萎縮しながら返事をした長谷川くんは、もしかしたらあまり  
のオーラに一真が同級生であることを忘れていたかもしれない。

「俺にだって選ぶ権利はある」

声を潜めていた私たちの会話も聞こえていたらしく、一真は眉間  
に皺を寄せて長谷川くんを見据えた。睨むほどではなかったけれど  
…その眼差しに、私でも少し後ずさりしてしまう。だけど、理不尽  
大王の口から続いた言葉は…。

「俺はこんな貧乳に興味はねえ！」

はつきりと言い切った一真は、「だから安心しろ」とでも言いた  
げに長谷川くんの肩を叩いている。

「かあずーまあー」

一瞬何を言われたかわからなかったけれど、その言葉の意味を理  
解した途端に沸々と何かが沸き立つのを感じた。地を這うような声  
でその名前を呼んで、私は一気に一真に詰め寄る。

「誰が貧乳よ！見たの！？あんたいつ見たのよ！」

「見るかなもん！大体お前が貧乳なのなんか制服姿からして丸分  
かりだろうが！」

「ぎゃーっ、セクハラ！あんたなんて理不尽大王じゃなくてセクハ  
ラ大王よ！」

思わず浴衣の胸の辺りをかばいながら、一真と果てしなくくだら  
ないやりとりを繰り返す。それに呆れた顔をしていたのは華江と  
真帆だけれど、宮川くと長谷川くんはどこかぽかんと呆気にとら  
れていた。

「そ、そっか。ならいいんだ。ごめん、変なこと聞いて」

それでも礼儀正しく謝る辺り、長谷川くんは紳士的だった。ハッ  
と我に返ってにっこりと慌てて笑顔を作り、私もそれに答える。そ  
れから仲間の方へと向かう2人に手を振って、彼らとは途中の道で  
別れた。

「…覚えてなさいよ、一真」

「さあて直、焼きそばでも食おうぜ」

長谷川くんたちの後ろ姿を見送った後にキッと振り返った私を、  
一真は口笛でも吹きそうなる素振りでもかわしてみせた。向井くんの肩  
に手を回しながら、焼きそばの屋台なんて指差している。…大体、  
人が気にしていることをズバツと言ってくれらんだから…！

全く怒りが収まらずに後ろから一真を睨み据えていた私は、ふと  
目の前を人が横切ったのに反応するのが一瞬遅れた。屋台の出てい  
るその道路は段々と人も増え、既に身動きを取るのが安易じゃない

くらいになっている。そのせいで気づいた頃には避けきれず、ドン、と肩がその誰かにぶつかってしまふ。

「ご、ごめんなさい…！」

「いえ、こちらこそ……」

謝って顔を上げた私は、そう言いかけた相手の顔を見て思わず目を大きく見開いた。相手の方も、私を見て驚きのあまり言葉を飲み込んでしまふ。お互いに、こんなところで会うはずがないと思っていたからだ。

「おい、何して……」

ついていけてない私に気づいたらしく、一真を始め4人がこちらを振り返る。その刹那、4人共も驚いてヒュッと息を飲むのが感じられた。そうして誰もが思い出しただろう、思い出さないようにしていたことを…。

あの、金曜日の放課後のことを……。

「びつくりした、こんなところで会うとは思わなかった」

でも、金曜日のあの時と違ったことは…。

ぶつかった張本人・マナミ先輩が、私たちに気づいてもそう言うてニッコリと笑ったことだった。

紫色の大柄の花が咲いた浴衣を身にまとい、マナミ先輩は見惚れるほどキレイだった。

瞬時に一真と会わせてはいけないと思ったけれど、それでも今日のマナミ先輩は何事もなかったかのように笑う。ぶつかつた時に少し崩れてしまった私の浴衣を、細くきれいな指で整えてくれた。

「皆で来たの？楽しそうね」

私だけじゃなく、マナミ先輩は後ろの4人も…一真をも、普通に眺めながら言う。戸惑いながらも小さく頷き返すと、少し離れたところから「愛海？」と彼女を探して呼ぶ声が聞こえてきた。その声に、ドクンと身体はどこかが瞬時に熱くなるのを感じる。

聞きたかつたのに…自分から遠ざけて聞けなくなっていた、懐かしい声だった。

人ごみに紛れた彼女を、タクミ先輩は探していたようだった。

「こっちこっち」

そんな彼に、マナミ先輩は少し声を大きくして応じる。人の流れを掻き分けてたどり着いてきた彼は、そこにいる私たちにも気づいて驚きの余り目をみはった。

「……………」

一瞬絶句したように立ち尽くしたタクミ先輩は、いつもとは違う浴衣姿だった。元々和服が似合う顔立ちだからか、それは思わず見惚れてしまうほど…。マナミ先輩の隣に立っているのがすごくお似合いに思えて、私は思わず胸の痛みに眉を寄せた。

いつもなら、学校ではタクミ先輩はマナミ先輩には似合わない

か言われているけれど…。今の彼なら、きっと誰もが釣り合っていると認めるに違いない。

「ハルカちゃんたち、皆で来たんだって」

タクミ先輩を振り返りながら、マナミ先輩はそう言ってニツコリ笑う。珍しくポーカーフェイスを崩して、タクミ先輩は「…そう」とだけ小さく答えた。だけどそれは一瞬のことで、すぐに彼は持ち直してしまう。いつもの、子どもの私なんかじゃ読み取れない無表情に…。

「ね、せっかくだから、私たちも一緒にいいかな？」

こちらを振り向いて続けたそんなマナミ先輩の言葉に、私たちが人は「え!？」と大きな声を上げてしまう。口に出しはしなかったけれど、これには無表情に戻ったタクミ先輩すら再び目を見開いた。「…あれ、ダメかな…」

少し残念そうに言うマナミ先輩に、真帆が「え、いいえ!」と慌てて首を振る。

「いえ、ダメなんかじゃないですけど…」

真帆は一真と私をチラリと一瞥したけれど、マナミ先輩がそれに気づいたのかどうかはわからない。真帆の言葉を受けて、彼女は「本当?」とニツコリ笑ってみせた。

…男なら、魅了されて止まない笑顔だったに違いない。

「ありがとう。こういうのは大勢の方が楽しいものね」

ね、とマナミ先輩に念を押されて、タクミ先輩は反対意見を述べることすら叶わないようだった。小さく吐息まじりの息を吐いただ

けで、彼は特に何も答えない。それでもマナミ先輩は自分の提案を退けさせる気もないらしく、真帆の腕を取って「じゃあ行くつか」と先にある屋台の並びを指差した。

「……………どういうこと?」

私の隣に並んだ華江が、こそつとそう尋ねてくる。そんなことを聞かれても、私にも答えられるわけがない。

マナミ先輩の真意が読み取れないまま、私は彼女の後についていくしかなかった。



愛海が何を考えているのか、この時は俺ですら読み取れなかった。小野寺さんの腕を取り、愛海と彼女は楽しそうに一番先頭を歩いて行く。完全にこの状況に戸惑った俺とあとの4人は、わずかに遅れてそれについて行くしかなかった。

柴田が、何とも言えない複雑な表情で黙然と歩いて行く。彼としては、愛海に会いたかった気持ちが大いなのだろうけれど、テスト前のあの日のことがあるから色々と思うところがあるに違いない。その後ろを、顔を見合わせてから片桐さんと向井くんがついていく。2人は何も言わなかったけれど、それでも愛海に対して疑問を抱いているのは明白だった。

そうして、自然と最後に俺とあの子が取り残される。意図せずに隣に並んでしまっただけから、彼女は少しだけ困惑したような表情を見せた。だけどそれも一瞬のことで、すぐに気持ちを持ち直したようだ。顔をまっすぐあげてから、わずかにこちらを振り返る。

…それから、少しだけニコリと微笑んでみせた。その笑顔に…テスト前に最後に会った彼女の、作り笑いと同じものを感じ取ってしまっただけ。

「先輩、浴衣なんですわねー」

「え？あ、うん」

短く答えると、彼女は「かつこいいです」と笑って付け足して、再び前を向いた。

そう言う彼女の方も、今日は浴衣姿だった。白い花を咲かせた赤地の浴衣で、明るい彼女にはよく似合っている。だけど…そんな彼女が浮かべる笑顔には、やはりこの前と同じ違和感を感じてしまつて…。一言で言うと、何か「壁」のようなものができた気がする。

それも…自業自得だとわかっているけれど……。

「…どうだった？テスト」

何か話題を、と思つてそんな話を振ると、彼女は「うーん」と少し考えてから笑う。

「まあまあ、です。でも多分いつもよりはできたかな」

「そう」

俺がそう短く答えた時、前を歩いていた愛海が「ハルカちゃん」と振り返った。

「チヨコバナナ食べない？じゃんけんで勝てば一本おまけしてくれるって」

「あ、食べまーす」

愛海の声に、彼女は挙手しながら笑顔で足早にそちらへ向かう。その後ろ姿を見送つて、俺はふと「不思議なものだな」と漠然と思つた。

俺が言えたことじゃないけれど、愛海と彼女の互いの立場は複雑

なはずだ。でも彼女は愛海を嫌っている素振りもないし、むしろ好意的なようにも取れる。

愛海に至っては好意的である以上に、かなり彼女のことを気に入っているようだ。…そう言えば前に、言っていたっけ…。

『あの子見てると、数年前の私見てるみたい』と…。

愛海が彼女をかわいがっているのは、それも理由なのかもしれない。

「え、春日先輩、2本とも食べるんですか？」

どうやらじゃんけんで勝ったらしい。チョコバナナを2本持って両方頬張るつもりの愛海に、小野寺さんが苦笑い気味に声をかけた。

「え？うん。ダメ？」

「いえいえ、ダメじゃないですけど…普通、カップルだったらああいう感じかな、と」

言いながら小野寺さんが指差したのは、向井くと片桐さんの2人だった。じゃんけんで勝って2本もらったらしい向井くんが、片方を片桐さんに手渡しているところだ。「まあ、うちら別にカップルじゃないけど」とサラリと片桐さんは受け流す。

その様子を見てから、愛海は大きく首を振って見せた。

「嫌よ。私のものは私のものだもの。食べたきゃタクミだって自分で買うでしょ」

「…いらないよ」

珍しくまるで子どものような言い方をする愛海に、俺は苦笑い気味に答えた。…恐らく、これは愛海が気を遣っているだけだ。あの子の前で、俺と恋人らしいことをしないように、と…。

俺たちのやりとりには笑った小野寺さんは、自分もバナナを口にしながら「あ」と急に声をあげた。それに首を傾げた愛海の浴衣の袖を、クイと引つ張る。

「先輩、あつちにおつきい笹がありますよー。お願いごと書きに行きましようよ！」

「あ、ホントだ。おもしろそう」

同じように目を輝かせて、愛海も小野寺さんと再びスタスタと歩き始めた。

…この2人のテンションの高さについていくだけで、今日は疲れそう。同じことを思っていたのか、柴田がため息まじりに2人の後ろをついていくのが見えた。

「タクミ先輩」

俺も歩きだそうとしたところで、隣から声をかけられる。いつの間にか傍に戻ってきていたあの子が、そこにいた。

「はい、先輩の分」

差し出されたのは、彼女が勝ち取ったらしい2本目のチョコバナナだった。「え」とわずかに目を見開くと、彼女は少し慌てたように続ける。

「せっかくじゃんけんで勝ったんですけど、2本も食べられないから…」

そう言った彼女の言葉に、断るのも逆に失礼だと思った。だから笑って、「ありがとう」とそれを受け取る。その瞬間、少しだけ安堵したような表情で…彼女はニコリと笑ってみせた。

それは…この前とさっきまでとは違う、いつもの微笑みだった気がした。

だけど彼女は、すぐに愛海たちの後を追って小走りに駆けて行ってしまふ。だからその笑顔の裏の感情を、それ以上読み取することはできなかった。

「くだらない」と呟いていた柴田でさえも、いざ短冊を前にしたら何か真剣に願うことを書いていた。大きな笹には、訪れた一般客がそれぞれ書いた短冊を吊るせるようになってる。

「片桐、お願いごと何にした？」

短冊を吊るして笹の前で全員で手を合わせた後、歩き出した頃に向井くんが片桐さんにそんなことを尋ねていた。「内緒」と答えた片桐さんは、意味ありげな表情で笑う。

「言ったら叶わなくなるでしょ」と。

「春日先輩は？何お願いしました？」

小野寺さんが、愛海に尋ねる。

「もちろん、『志望校合格！』」

「うわー、現実的」

力いっぱい答えた愛海に、小野寺さんがキャツキャと笑って手を叩いた。

「ねえねえ、一真はー？」

そのまま柴田の方を振り向いて小野寺さんが聞くと、彼は無表情のまま「さも当然」と言わんばかりに答える。

「世界征服」

「……うん、なんか君はもう色々ツツコミどころ大有りだね」

さらりと答えた柴田に、小野寺さんはそう言ってガクリと肩を落とした。そんなやりとりに、向井さんと片桐さんが声をたてて笑う。

七夕祭りは例年通り盛況らしく、人の流れに乗るとそのままどこかへ連れていかれそうなほどだった。屋台の数も数え切れないほどだし、商店街の各店が出した巨大な七夕飾りも目を奪うほどのものだ。

何を食べるにもどこの屋台にするか迷うほどだったけれど、何故か混雑する屋台というものが存在する。同じ「焼きそば」を売っている、客が一人もいないところもあれば行列ができるほどの店もあった。

「あそこのお好み焼き食べたい」

しばらくしてから愛海がそんなことを言って指差したのは、それなりの行列ができた屋台だった。ロコミか何かで広まるんだろうか？ 軒隣のお好み焼き屋は全くの無人なのに…。

「タクミ、並んできてえ」

「……」

言つと思つた。目を細めて愛海を見やると、合掌してわざとらしく目を潤ませてこちらを見る。

「あ、先輩、私の分も！」

今日は愛海の言動に乗っかることにしているのか、遠慮もなく小野寺さんが「はいはい」と挙手してそう言った。

「じゃあ俺も」

と、この中で一番理解がありそうな向井くんまで、ニッコリと笑う。「それなら私と一真の分も」

片桐さんまで、そう言いながら財布から小銭を出してきた。

…この年になって、下級生にパシリ扱いされるとは思わなかったな。

「…はいはい」と妥協して、手渡された小銭を受け取りながら俺は苦笑い気味にため息を漏らす。そんな俺に小野寺さんが、先を指差して言った。

「あつちに、ちょっとした休憩所みたいところがあるんです。そつちで待つてますね」

「わかった」

軽く頷いて、俺は片手を上げて踵を返した。

歩き出そうとしたところで、クイと袖を引っ張られる。

「？」

何事かと思つて振り返ると、あの子が少し申し訳なさそうな顔をしていた。

「すみません、先輩。皆が調子に乗っちゃって…」

先の休憩所へと歩き出した皆を見やって、彼女はそう言う。

「私も一緒に並びます」

続いた彼女の申し出に、俺は一瞬目をみはった後、笑ってみせた。

「大丈夫だよ。皆と先に行つてて」

「でも……」

「すぐに追いつくから」

重ねて言うと、彼女はそれ以上言うのも気が引けたのか、「……すみません」と深く頭を下げる。それから身を翻すと、急いで5人の後を追いかけた。

「……さて」

角にあるそのお好み焼きの屋台は、隣の路地沿いにまで並んでいた。その最後尾について、順番を待つ。意外に時間のかかりそうなそれに、小さく息をついた。

\*\*\*\*\*

「……？」

結局、順番が来て買ったのは20分後くらいだった。ましてや注文した数が数なので、さらに待たされてしまつて……。お好み焼きの入った袋を手に指定された場所に行くと、そこで待っていた皆が何やら騒然としていた。



「どうかした？」

愛海にそう聞くと、小野寺さんが慌てた表情でこちらを振り返る。

「ハルカが、いないんです！」

「……え？」

聞き返して眉を寄せると、小野寺さんよりは少し冷静な片桐さんが続けた。

「ここへ来る途中、一度私たちに追いついてきたんですけど…その後、急に姿が見えなくなってる」

「携帯も通じないんですよね…」

向井くんも、心配そうな顔で言う。

「大丈夫だろ」

柴田だけは平然としている。そう言いながら、彼は無表情のまま続けた。

「待ち合わせ場所はわかってるし、子どもじゃねえんだ。下手にこつちが動く方が混乱する」

「でも……」

柴田の言うことももっともだけれど、小野寺さんは尚も心配そうに眉を寄せる。

「こここの祭り会場、にぎやかだけど一本裏路地に入っちゃえば真っ暗だし…」

「最近変質者も多いって聞くしね」

片桐さんも頷いて同意し、俺はその瞬間にドクンと胸の中で何かが跳ねるのを感じた。

嫌な予感…とか、そういう類のもののようにだった。

「…っ」

持っていた袋を愛海に押し付けて、俺は何かを考えるより早く身を翻していた。

「ちょっと、タクミ…！」

驚いたような愛海の声を振り切って、俺は人ごみの流れに逆らうようにそれを掻き分けながら、元来た道を急いだ。

「わーん、最悪ー……………」

がつくりと肩を落として、私はそう呟いた。祭り会場から裏路地に入るとそこはもう真っ暗で、世界の表と裏のようにあちらとは全く違っていた。どうして今私がこんなところにいるのかというと、10分ほど前のことに遡る。

タクミ先輩と離れて皆の元へ追いついたところまでは良かったのだけれど、ふと下駄の鼻緒が切れてしまった。すぐに直せそうだったので道の脇に避けようとしたことが間違이었다。脇に逃れるにも人の波に流されて思うように行かず、気づくと相当離れたところにおいて…。その頃にはもう、先を行く5人の姿は見えなくなっていた。

すぐに追いつくつもりで、邪魔にならないようにと裏路地に入り、下駄を直した。それからさっき真帆が言っていた「休憩所」に向かおうとしたけれど、あの大変な人の流れに再び身を任せるのも嫌で、裏路地から近道をしようとした。休憩所の大体の場所は去年と同じだから分かるし、方向さえ合っていれば何とかかなると思ったからだ。

だけど…自分が自覚しているよりも、私は方向感覚が鈍かったらしい。裏路地を何回か曲がったところで、自分の目指す方向がさっぱりわからなくなってしまった。仕方なく一真にでも迎えに来てもらおうとしたところで、不意に手にした荷物の中に携帯電話がないことに気づく。そう言えば、家を出る時に玄関で帯を直そうとして

…下駄箱の上に携帯を置き去りにしてきた気がする。

「ついてないなあ…」

運が悪いというよりは自分が悪いのだけれど、責任転嫁してそんな独白を漏らした。仕方がないので、祭り会場の入り口辺りまで戻ろう。そこまで行けば、会場の案内図があるだろうから休憩所まで辿りつけるだろうし…。

…そう決めて、歩き出そうとしたところだった。

「キミ、どうしたの？」

軽薄そうな男の声が、後ろから聞こえた。振り向いて確かめると、声と違わないやはり軽薄そうな格好をした男が、2人立っている。大学生くらいだろうか。チャラチャラと音のするアクセサリーが耳障りだった。

「もしかして、誰かとはぐれちゃった？」

「…いえ、大丈夫です」

ペコリと頭を下げて、私は足早にそこを後にしようとする。もしかしたら本当に親切で声をかけてくれたのかもしれないけれど、警戒心の方が強かった。

「あれ、じゃあ一人で来たの？じゃあ俺らと一緒に遊ばない？」

「……いえ、一緒に来た人がいるんで」

はつきりと答えて、私は今度こそ本当に歩き出す。……やっぱり、ナンパだった。どうやら私の最も嫌いな人種みたいだ。

「じゃあやっぱりはぐれたんでしょ？探してあげるって」

「!?なにす…」

後ろからグツと手首をつかまれ、強引に引き寄せられそうになった。けどあまりの嫌悪からか拒絶の言葉ははっきりと声に出せず、ただ驚きで眉を寄せて相手を睨むしかなかった。

「あ、かわいいーい。俺、気の強い子好きだから」

意味不明なことを、気持ちの悪い男の唇が言う。ぞわ、と全身で何かが総毛立つ気がした。

「やめてください！人呼びますよ！」

「呼べばあ？まあ、祭りの音でうるさいから聞こえないと思うけど」  
もう一人の男も、ニヤニヤと笑っている。

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い…!!!

必死で相手の手を振りほどこうとしたけれど、力の差は歴然でビクともしない。本格的に危機感を感じた頃には、一人の男が私の手首を掴む男に恐ろしい一言を放った。

「そのまま無理矢理連れてっちゃおうぜ」と…。

「誰か…！」

目をギユツと瞑って大声で叫ぼうとしたその時、不意に「バシっ」と音が聞こえた。

「…?」

「いててて…！」

何があつたのかと目をゆっくりと開けると、そこにはさっきの男が私を掴んでいた手を捻り上げられている姿があつた。不意に自由になった手首を自分の方へ引き戻し、私はもう片方の手で掴まれていた辺りをさする。それと同時に、大きく目を見開いた。そこにい

て男の手を掴み上げているのは……他ならない、タクミ先輩だった。

「何すんだ、てめえ……！」

「！やめて……！！」

タクミ先輩の手を振り払った男が、仲間と一緒に激高する。肩を怒らせたまま、2人で一気にタクミ先輩に殴りかかるのが見えた。思わず制止の言葉を叫んだけれど、私が止めに入っても間に合いそうにない。そう気づいてしまって、私は思わず目を背けるように固く瞑ってしまった。

考えたくないけれど、一瞬血まみれになるタクミ先輩の姿さえ脳裏をよぎったほどだ。

「……………」

バシッバシッと、鈍目の音がする。だけど、想像していた拳の音よりも軽い気がして、私は恐る恐る目を開けた。それから、それを大きく瞪る。

「……………！」

タクミ先輩は殴られたわけではなくて……男2人の拳を、簡単に腕や手の平で受け止めて流していた。

「先輩……………」

驚いて私が思わず呟いた頃には、男たちが当たらない攻撃を出し続けて疲れたのか、一旦動きを止めて先輩を睨んだ。

「……………まだやる？」

吐息まじりに2人を眺める先輩は、一つも息を切らしていないし

冷静だった。反撃されたわけでもないけれど、先輩との実力の差を思い知ったらしい男たちは、チツと舌打ちだけを残して慌てて身を翻していく。走り去るその後ろ姿を見送ると、私は緊張の糸が切れたのかヘナヘナ…とその場にしゃがみこんでしまった。

「大丈夫？」

同じように座りこんで、先輩は私の顔を覗きこむ。男に掴まれていたところが少し赤くなっていて、そこを大きな手で優しく包みこんでくれた。

「…すみません、私…」

頭を下げて謝ったけれど、腰を抜かしてしまったのかしばらく立てそうにない。それが分かったからか、先輩は少しだけ表情を緩めた。どこか安心できる…そんな微笑みだった。

「で、何でこんなところにいたの？」

「…え、それが…」

言ったら怒られるかな、と思いながら、私は弱々しく事情を説明する。下駄の鼻緒が切れたことと、裏路地に入ったことと、迷ったこと…。果てには携帯電話まで忘れた大失態を。

「ただ先輩は聞き終わってから、「はあ」と大きく息を吐いた。怒るところか呆れられたかな、と思ったけれど、先輩は続けて小さく呟く。

「…良かった、無事で」

その一言に、胸がキュンと熱く締め付けられるのを感じた。

「…ごめんなさい、ありがとうございました」

もう少しで危なかったところだ。再び頭を下げて、首を振る先輩にニツコリと笑って見せる。

「知らなかったです。先輩、ケンカ強いんですね」

「ケンカ？俺は別に何もしてないよ」

とぼけるように先輩は言ったけれど、十分強いと思う。殴り合わずに、相手の攻撃を全部受け流すなんて普通できない。…どちらかというと…先輩はケンカなんて弱いタイプだと思ってただけだけど…。

それで、思い出した。前に鈴木くんが、万引きしようとしたお店でタクミ先輩に腕を掴まれた、って…。その時、少しだけ頭のどこかで違和感を感じたんだ。鈴木くんたちのグループの人とタクミ先輩を比べたら、明らかにあっちの方が強そうだったから…。

でも、強いだけじゃない気がする。相手の拳を受け流す先輩の姿が、とつてもキレイだったから…。それは思わず、見惚れてしまいそうなほどで…。

だから、尋ねてしまっていた。「先輩、昔何かやってたんですか？」と…。

「何かって何？」

聞き返されて、「え」と困ってしまう。

「たとえば…柔道とか合気道…とか？」

「昔姉に付き合っぴてピアノは習ってたなあ」



笑って言う先輩は、はぐらかして本当のことなんて答えてくれそうになかった。それ以上聞いても無駄そうだったので、私はその会話を諦める。その頃には大分落ち着いてきていて、ゆっくりとなら立ち上がれそうだった。

「そつだ、電話しておかないと……」

私を支えて立たせてくれながら、先輩は携帯電話を取り出す。マナミ先輩にかけているんだろう。相当心配をかけているのか、わずかワンコールで「もしもしっ」とマナミ先輩が出た。

「ハルカちゃん、見つかった？」

こちらにも聞こえてきてしまう大きな声。慌てたその様子が、電話越しにも伝わってきた。

「うん、無事」

短く答える先輩の返事に、マナミ先輩は向こう側で安堵の息を漏らしたようだった。

そこからは落ち着いたので、声をいつものトーンに戻して何かをタクミ先輩に伝えている。タクミ先輩は時折相槌を打ち、それ以外は尋ねられるままにさっきの男たちのことを説明していた。それを脇で聞いていると、不意に「…え？」とタクミ先輩が何かを聞き返した。

何か：あつたんだろうか？

顔を上げると、先輩はいつもの無表情だけれど少しだけ困惑したような顔をしている。

その顔を見上げてみると、やがて先輩が携帯電話を耳から離す。そうしてそのまま、それを私に差し出してきた。

「代わって、って」

「私ですか？」

意外そうに目を見開くと、先輩は大きく頷いた。

「はい、ハルカです」

先輩の白い携帯電話を握って耳に当てると、『大丈夫だった？』とこちらを労わる第一声が聞こえてくる。

「はい、すみません、ご心配おかけして…」

と、マナミ先輩には見えないのに電話のこちら側で頭を下げってしまった。

『良かった。あのね、ハルカちゃん、提案なんだけど…』

そう前置きして、マナミ先輩は続ける。

『今、ハルカちゃんを探しに行った組と待ち合わせ場所に残ってる組とで分かれてるの。それで、もうこのまま解散にしようかって…。私も向井くんと一緒にいるから送ってもらっし、真帆ちゃんたちも柴田くんが送ってくれるから』

「え!？」

思わず大きな声を出してしまい、私は傍にいるタクミ先輩を振り返った。さっき先輩が聞き返していたのも、このことだったに違いない。

「で、でも…せっかくお祭りに来たのに…」

『ハルカちゃん。変な男に絡まれて怖い思いしたんでしょ? 今日もう帰った方がいいわよ。タクミに家まできっちり送ってもらって』

マナミ先輩の言うことはもっともだし、確かに3組に分かれてし

まった皆がこの人ごみの中また待ち合わせるのは大変だけれど…。

チラ、とタクミ先輩を盗み見たけれど、彼は他のところを見ていた。しかも無表情…。全く気持ちが読めない。

「…わかりました…すみません」

再び見えないのに頭を下げてから、私はマナミ先輩との通話を終わらせた。

「ありがとうございます」

携帯電話を返すと、タクミ先輩はそれを受け取ってから少しだけ表情を和らげた。私に気を遣わせないようにしてくれただと思う。

「じゃあ、行こうか」

表通りの方を示して、先輩はそう言った。助けてもらった上に私のせいで彼女と別々に行動させられて…なんだかとても申し訳ない気がした。

だけど、ここ2、3週間、本当は会いたくて会いたくて仕方なかったから…。少しでも2人でいられて、嬉しいのも事実だった。…不謹慎だな、とは、自分でも思ったけれど…。

表通りに出ると、相変わらず人ごみでこった返していた。その中に再び溶け込んで歩いていると、先輩がふとこちらを振り返る。

「何か食べる？」と。

「え……」

てつきりまつすぐ帰されるんだと思っていたから、私は意外そうに目線を上げた。

「お好み焼き食べ損ねたから。2人して」

言われて、さっきタクミ先輩が並んで買わされていたお好み焼きのことを思い出す。それから、私は「はいっ」と慌てて返事をした。その様子にタクミ先輩は、「そっか、そんなにお腹空いてたんだ」と的外れなことを言って笑う。

「先輩、私力キ氷がいいです」

一番近くにある屋台を指差すと、先輩は「何味？」と尋ね返してきた。

「イチゴかなあ」

短く答えると、「わかった」と先輩は小さく頷く。買ってきてほしい、というつもりで言ったわけではなかったのだけれど、先輩は自ら買いに行ってくれるつもりのようなだった。

「ここで待ってて」

顔だけ後ろを向けて、先輩はそう言い残して行ってしまおうとする。

「……………」

取り残されるのがなんだか少し不安で、私は先輩を呼び止めたかった。でも我儘を言うわけにもいかなくてそれもできず、ただその後ろ姿を見送るしかない。だけど、2、3歩進んだところで、先輩は不意にピタリと足を止めた。

「……って、これでさっきはぐれたんだっけ」

苦笑い気味に、先輩は私を振り返る。こちらの気持ちは伝わったんだろうか。不安そうな顔をしていた私を見て、先輩は今度は優し

く笑って見せてくれた。

「はい」

そのまま、手を差し出される。

「え、え…」

「またはくれるでしょ、キミ」

笑って言う先輩は、至って普通だった。緊張しているのは…私だけなんだろうか。

先輩にとつては…面倒かける後輩と手をつなぐなんてこと…子どもと手をつなぐようなものなんだろうか…。

ドキドキしながら、私はゆっくりとその手を取った。冷たくて、気持ちの良い手。

さっきのあの男の時は、あんなに気持ち悪いと思ったのに…。

もしかしたら、今自分はものすごく赤面しているかもしれない。それがバレるのも嫌だったけれど、それを隠す術も持っていないかった。胸の高鳴る音が、先輩に聞こえてしまっんじゃないかということが心配で仕方がない。

ひどい緊張の中で、私はその時食べたかき氷の味さえはつきりと思いつけないほどだった。



ふわふわと、足元は浮ついたようにおぼつかない。まるで…夢を見ているようだった。

つないだ手はとても心地よくて、周りの喧騒すらかき消してしまうほど浸れるもので…。感じる体温に、胸は絶え間なく早い鼓動を刻み続ける。

マナミ先輩が何を考えているのか…とか。疑問はいくつでもあつたけれど、それを口にするのはためらわれた。言えば、きっとタクミ先輩は今の笑顔を瞬時に消してしまふ予感があつたからだ。

屋台で買った物を食べて、七夕飾りを見て。周りから見たらカッブルのデートに見えそうなことを先輩とできているだけで、幸せだった。だから、今だけは余計なことは考えないようにしたかった。

「そう言えば、短冊に何書いたの？」

一通り見て回った頃には、小一時間が経過していた。祭り会場の奥から、入口方向へと向かう。帰り道にさしかかった時に、先輩が不意にそんなことを尋ねてきた。

「内緒です」

つないでいない方の手の人差し指を口元に当てて、私はそう笑う。華江が言っていた「言つと叶わなくなる」というのを信じているわ

けじゃないけれど、私の願いごとを先輩に話すのは恥ずかしかったからだ。

今の私には、自分のことに関しては短冊に書きたいと思うほど強く願うことがない。皆で短冊に願い事を書こうという話になった時、そのことに気づかされた。「希望」とか「こうなったらいいな」と思うようなことはあるけれど、それはどれも現実的なもので自分の努力でどうにかなりそうまで…。

短冊をお願いするような、ロマンティックなものではなかった。タクミ先輩と結ばれることは現状で無理だとわかっている今、自分には強く願うことが何一つない。

だから…と言うと語弊があるけれど、自分のこと以外でお願いしたいことは一つしか思い浮かばなかった。

『先生と、理沙さんの赤ちゃんが元気に産まれますように』

タクミ先輩には、なんだか気恥ずかしくて言えない願いごとだ。

「そっか」

さつき取ってくれた金魚の袋を手に、先輩は短く答えて笑う。それ以上追求されなかったことに少し安堵の息を漏らして、私は隣の先輩を見上げた。

「先輩は？ 何お願いしたんですか？」



答えなかったんだから、答えてくれないだろう。そう思ったけれど、何となく振ってみた。

でも意外なことに…先輩は「内緒」とはぐらかしたりはしなかった。

「……………」

少しだけ何かを逡巡するように…視線を落ち着きなく動かす。それから、こちらを向かないまま…前を見据えたまま、彼は静かに口を開いた。

「俺は……………」

さっきまでの笑みを消して、真面目な表情の先輩。その表情に、咄嗟に「失敗した」と思ってしまう。先輩とはくだらない話でもいい、笑い合っていたかったのに…。真剣な話になれば、自分が傷つく気がしたから。

「昔から、願ってることは一つだけだから」

ポツリという呟きは、風に乗って消え入りそうなほど小さかった。

だけど、それを聞き逃すことはない。

それだけ、その言葉に先輩の心がこもっている気がしたから…。

先輩は、続ける。昔から願っているという…その、私にとっては

残酷な願いごとを。

「『愛海が、幸せになりますように』」

どうして…。

どうして、先輩は私にそんなことを言うんだろう。

できれば聞きたくなかった、その言葉。先輩が一番に想うのは、  
どうしても「マナミ先輩」なんだと思い知らされる。痛む胸は、こ  
の時は悲鳴を上げそうなほどに軋む音を立てた。

痛みをごまかす為に、グツと唇を噛み締める。それにつられてつ  
ないだ手にも力を込めてしまったらしく、痛みすら感じたのか、先  
輩が私を振り返るのが分かった。

…それでも、私は顔を上げることができなくて…。ただ俯いて、  
言葉を飲み込むことしかできない。噛み締めた唇から、微かに血の  
味を感じた気がしたほどだ。

そんな私を見てか、先輩が私の頭上で小さく吐息をもらした。呆  
れたのか、何なのか…感情の読めないため息だった。

「…勘違いしてる？」

だけど続いて降ってきた先輩の口調は、呆れたわけでも怒ったわけでもなさそう…。「え」と顔を上げると、苦笑いを浮かべた先輩が私を見下ろしていた。

「昔から俺は…愛海が幸せになってくれれば…と思ってきた。それだけが願いだっただけ」

再び前を向き直して、先輩はそう続ける。その頃には祭り会場の商店街を抜け、人も四方へ散って家路に着く。混雑は嘘のように緩和され、会場とは違って夜らしい闇が戻ってきた。

「…何でだと思っ？」

尋ねられて、私は困惑した表情のまま首を傾げる。眉を寄せて考えたけれど、答えなんてわかるはずもなかった。

「マナミ先輩のことが…一番大事だからじゃないの？」

それ以外に答えらしい答えなんて思い浮かばない。

「……………」

私が唯一思い浮かべた「答え」が読み取れたのか、先輩は無言で小さく首を振った。その私の考えを、否定するかのように…。

「『自分ではどうにもできないから』。…だから、願うしかないんだ」

淡々とした口調で…先輩の言葉からは、何の感情も読み取れない。ただ、それだけが事実であるかのように響くだけ。

「それは……」

意味が瞬時には理解できず、聞き返そうとした。けどその言葉も、先輩は小さく首を振って遮ってしまう。

「俺が…自分の手で幸せにしたいと思う相手だったら…神頼みや、ましてや短冊に書いて星に願ったりなんかしない」

前を向いていた先輩が、そう言ってこちらを振り返った。その視線にどこか射抜かれてしまいそうなほどの何かを感じて、私は思わず足を止めてしまう。同じように立ち止まった先輩は、今度は私から視線を逸らそうとはしなかった。見つめ返せば金縛りにあってしまいそうで…私の方が逸らしたかったけれど、それも叶わない。

そうして見つめ合って動けないまま、先輩は最後に一言告げた。

「…そう思う相手は…愛海じゃなくて、他にいるから」

ドクン、と、胸が大きく跳ね上がった。下手をすれば鼓動が聞こえてしまうんじゃないかというほどだ。

先輩の言葉の、意味は……。

驚きのあまり放心したように目を見開いた私だけれど、考えればわかるはずだった。

だけどこの時、私は考えることを放棄してしまった。瞬時に思い出してしまったからだ。

今日のこの七夕祭りが楽しくて…先輩といられることが嬉しくて、忘れてしまっていた「あること」を。

テスト前のあの時、私は自分から先輩を諦めようとしていたはずだった。どんなに私がタクミ先輩を好きでも、マナミ先輩を拒めない彼を苦しめたくなかったから。ましてやマナミ先輩との間に「付き合い合わせるをえない理由」があるにしても、周りから二股と取られるようなことを先輩にさせたくなかったから。…だから、引こうとしたんだった。

先輩の…負担になりたくなかった、それ一心で。

それでも、会って話して、笑顔を見れて…手をつなげて。それだけで、こんなに幸せを感じてしまっていた。

矛盾した想いだけれど、断ち切らなくてはいけないのは明白だ。こんなにもドキドキしている想いを、自ら捨ててしまうのは胸が痛むけれど……。

だけどきつとこのままでは、タクミ先輩のためにも、マナミ先輩のためにも……そして何より、私のためにもならない。

そう決意しての覚悟だったことを思い出し、私はあの日自分を奮い立たせた勇気をもう一度振り絞ることを決めた。

ごめんなさい、先輩。胸の中で一度謝ってから、口を開く。

「私……先輩に謝らなくちゃいけないことがあるんです」  
先輩がさっきの話の続きを告げてしまわないうちに、遮るように私はそう言った。立ち止まって見つめ合っていた視線は、絶対に逸らさない。逸らしたら、勘の良い先輩はきっと私の嘘に気づいてしまう。

だから、そう心に決めて私は続けた。

「……前に、私言いましたよね……。先輩が、いつか私の方を振り向いてくれるの待ってるって……」

「……」

先輩は、黙ったまま私を見つめ返す。私が言わんとしている先ま  
で読み取ってしまっているのかどうかは、定かではなかった。

「だけど、それも無理そうというか…」

言葉を濁し気味に言ってから、私はわざとそこでニッコリ笑って  
見せた。

「今、私のこと好きかも…って言ってくれてる人がいるんです」

出まかせを口にしたその時、不意に長谷川くんのことを思い出し  
た。本人に告白されたわけではないけれど、彼のことがあるからあ  
ながち間違いではないと自分に言い聞かせる。

「こんな「嘘」に、名前を出さずとも長谷川くんを持ち出すのは罪  
悪感があったけれど…」。

「それで私も最近その人のこと気になって…ちょっとイイかな、  
なんて」

「……」

「だから、先輩のことは待てそうにないです。嘘ついて、ごめんな  
さい。ずっと待ってるって言ったのに」

不思議と、胸は痛まなかった。これは自分とタクミ先輩のための  
嘘なんだからと言い聞かせたからだろうか。

先輩も、特別傷ついたり怒ったりしたような表情はしなかった。いつもの…感情の読めない無表情だ。

「……そう」

しばらくの沈黙の後、不意に先輩が小さくそう呟いた。やっぱり、声のトーンからはどんな気持ちも読み取れない。

「…すみません、私…」

「何でキミが謝るの？」

そう言っつて、先輩は笑う。ふわっとしたその微笑に、私は初めて胸が痛んだ気がした。そうして、自分が手放したものがいかに大きなものだったのかを思い知らされる。

「でも、今日はちゃんと送って行くよ」

「……すみません」

そう言っつた先輩は、再びさっきまでと同じように歩き出した。小さく謝っつて半歩後ろをついていく私も、さっきまでと同じ。

ただ違うのは、つないだお互いの手を…今度は離してしまったことだけだった。

一時は心までつないでくれた気さえしたその手を、先に離れたのは……私の方だった。



\*\*\*\*\*

家まで送ってくれると言った先輩に、それでは悪いからと断ろうとしたけれど…。祭り会場で変な男たちに絡まれてしまったこともあり、先輩がそこは譲ってくれなかった。すみません、と頭を下げながらその言葉に甘えるしかなくて。七夕会場の最寄駅から、電車に乗ろうと2人で改札を抜けた。

祭り客の帰宅ラッシュでごった返していたその駅で、不意に「タクミ！」と後ろから声がした。丁度ホームに差し掛かったところで私と先輩は同時に後ろの階段を振り返る。

そこにいてこちらに手を振っているのは…2人の男女だった。…ううん、正確に言うと手を振ってるのは男の人だけだけど…。

「梶」

私はその2人に全く見覚えはなかったけれど、先輩が隣でそう名前を呼んだ。どうやら、先輩の知り合いらしい。首を捻っていた私に、「地元の親友」と先輩が紹介してくれた。

「どうも、梶祐太です。えっとあなたは…確かハルカちゃん？」  
背は低い方だけれど、笑顔がとてもかわいらしい人だった。適度に日焼けした身体は引き締まっていて、何かスポーツをしているのかもしれない。私にも笑顔で挨拶をしてくれたその人は、とても好印象だった。

だけど……。

「夏川悠花です。…あれ？どうして私の名前……」

名乗る前に言われたことに気づいて、私は小首を傾げる。そこで梶さんは、「ああ」と満面の笑みで笑って見せた。

「そりゃ、それはタクミから色々……」

「梶……！」

珍しくそこで声を荒げたタクミ先輩に名前を呼ばれ、梶さんは首を竦めて舌を出す。悪びれないその表情に、思わず私も笑ってしまった。

梶さんが一緒だったのは、部活のマネージャーの女の子だったらしい。紹介されて、タクミ先輩と私は同時に会釈をする。野球部らしい梶さんとその彼女は、他の部員とも一緒に七夕祭りに来ていたらしかった。

「…それはそうと、タクミ」

マネージャーの彼女から少し離れながら、梶さんは内緒話をするようにタクミ先輩の肩に自分の腕を回した。私に聞かれるのも不都合があるかも、と思ったので、私も少し離れようとする。

だけど梶さんは、私の方は特に気にしていないようだった。距離を取る前に、タクミ先輩の耳元で口を開く。

「…お前たち、どうなってるの？」

「……え？」

その言葉の意味を理解しきれなくて、タクミ先輩は眉を寄せた。一瞬、私とタクミ先輩のことをからかっているのかと思ったけれど、どうもそうではなさそうだった。梶さんの表情は真剣そのもので、タクミ先輩をまっすぐ見据えている。

「何が？」と先輩が聞き返す前に、梶さんは小さく息をついた。

「さつき、七夕会場で愛海を見かけた」

あつちは気づいてなかったけど、と付け足して、梶さんは声のトーンを落として言う。そこでようやく、私もタクミ先輩も梶さんの言わんとしていることによく気づいた。タクミ先輩とマナミ先輩が別々に行動していることに違和感を感じたんだろう。

「ああ、それは…」

なんだ、と言いたそうな表情で、タクミ先輩が口を開く。

「はじめは大人数だったんだけど、色々あつてはぐれてから…そのまま解散したんだ」

間の出来事は省略して、先輩はそう説明した。だけど…意外なことに、梶さんは真面目な面持ちのまま大きく首を横に振る。

「そうじゃない」と、小さく口にした。

「愛海が、男と一緒にだったけど」

「ああ、それは向井くんについて同じ高校の…」

「あれ、柴田だろ」

説明しようとしたタクミ先輩の言葉を、梶さんが容赦なく遮った。その一言に、私もタクミ先輩も大きく目を見開く。

そんな…はずはない。

確かに、マナミ先輩はあの時、向井くんと一緒に言った。

「あの…っ」

もしかしたら、あつちは合流したんだろうか。そう思って、私は横から梶さんに声をかけた。

「マナミ先輩と一真の近くに…他に女の子とかいませんでした？」

真帆と華江も合流できたのだとしたら、一真がマナミ先輩と一緒にいたっておかしくはない。そう思ったけれど、振り向いた梶さんは「いや？」と首を横に振った。

「どう見ても、2人だったけど？」

「……………」

タクミ先輩の表情が、いつものポーカーフェイスを崩して色を変えていくのがわかった。少し青ざめたようにも見えたけれど、それはきっと私も同じことだろう。

…どういうこと？

マナミ先輩が…私とタクミ先輩に嘘をついた、ってこと？

考えても分かるはずなんてなかったけれど、どこか嫌な胸騒ぎだけは感じていた。



「そうそう、ハルカ見つかったんだってよ。…え？ブジだよブジ。心配すんなって」

電話の向こうの真帆は、安心したのか涙声になっていた。ハルカが無事見つかったと連絡があつてから、俺が真帆に電話をかけた。すぐに華江と直にも伝わったらしく、電話の向こう側で安堵の息を漏らすのが想像できる。

…大体、こいつらは必要以上に心配しすぎだと思う。まあ俺も、ハルカが実際変な奴に襲われそうになつてた話を聞いた時はさすがにびっくりもしたけれど…。

「だからさ、最初の予定通り、解散にしようぜ。お前らちゃんと直に送ってもらえよ」

そもそもなんでこんなことになつたのかというと、数十分前のことに遡る。

誰の言葉をも聞き入れずにハルカを捜しに走って行ってしまった誰かさんのせいで、真帆と華江も「行く」と断固として聞かず…。仕方がなく、直が同行することになった。

そうすると、ハルカが無事に待ち合わせ場所に戻ってきた時のために、誰かが残らなくてはならない。その役目が、自然と俺と愛海先輩に割り当てられたわけだ。

ハルカのこととなると目の色が変わる真帆と華江は、そうと決まるとすぐに駆け出して行ってしまった。唯一周りのことにもよく気配りする直が、俺と愛海先輩を振り返って少し心配そうな顔をしていた。それはそうだろう。テスト前のあの時…俺の顔を見ただけで、愛海先輩はあんな状態になったんだから…。

「こっちは大丈夫だ。あいつら頼んだぜ」

ポンと肩を叩くと、直はそれ以上は何も言わずに2人の後を追った。もし、ハルカが見つかった時…あまりにも全員が遠い場所にいるなら、そのまま解散にしようと思っただけから。

実際見つかったハルカはかなりきわどかったらしいが無事で、やはりかなり離れた場所にいた。直たちも祭り会場の入口の方まで探しに行ってしまったっていらしく、ここは予定通り解散するのが得策だろう。

そう思ったけれど、実際そうなるにあの男と愛海先輩が別々に行動するハメになってしまう。それはどうなんだろう…と思ったけれど、予定通りの解散を決めたのは他でもない、愛海先輩だった。

「ハルカちゃん。変な男に絡まれて怖い思いしたんでしょ？今日はもう帰った方がいいわよ。タクミに家まできっちり送ってもらって」

どうやら電話の相手は当の本人らしく、愛海先輩はそんなことをハルカに言っただけで聞いていた。それを脇で聞いていた俺は、思わず目を見開いてしまう。…まさか彼女が、そんなことを言い出すとは思っていなかったからだ。

…だって、ハルカは恋敵なはずだろう？

そう思ったけれど、すぐに思いなおす。

ハルカが見つかったと連絡があるまで、愛海先輩がどれほど心配そうにしていたか…。恐らく、恋敵とか問題はそんなことじゃなくて。ただ純粹に、愛海先輩はハルカのことか一人として好きなのかもしれない。

だから、怖い思いをしたハルカをそのまま早めに帰してやった方がいいと思っただらう。だけど…問題は、愛海先輩のまた別の一言だった。

「私も向井くんと一緒にいるから送ってもらおうし」と、彼女は確かにさつきそう言った。

…直が、どこにいるって？

思わず電話中の愛海先輩にツッコミそうになったが、ハルカにバシるとやっかいなので黙っておいた。そのまま納得したらしいハルカと通話を終わらせた愛海先輩に一連の事情を聞いて、俺は真帆に連絡を入れたわけだ。

…というのが、ここまでの話の大筋だ。



「せつかくだから、もうちょっと遊んで行こうか」

休憩所の椅子から立ち上がりながら、浴衣姿の愛海先輩は座ったままの俺を見下ろしながらそう言う。ニッコリと笑って見せるその笑顔は、どこか艶っぽくて彼女らしかった。

「……」

…「遊んでいく」って…そういう場合なんだろうか。言いかけたけれど、彼女は俺の返事を待たずに歩きだしてしまった。それを追うように椅子から立ち上がり、先輩の隣に並ぶ。さっきまでの心配そうな表情はもうどこにもなく、ハルカの無事がわかって晴れ晴れとした顔をしていた。

「…なんで、嘘ついたんですか」

ふと尋ねてみると、「…嘘？」と愛海先輩は心外そうに眉を寄せ、振り向く。小さく頷いて、俺は「さっきの電話」と続けた。

「直と一緒にいる、って…ハルカに言っただけでいい？」

言われて、愛海先輩は「ああ」とニコッと笑って見せる。

「だって、それでも言わないと納得してくれないでしょ？」

続いた言葉に、俺は思わず黙りこんでしまった。確かに…彼女の言う通りかもしれない。誰が、とは、聞き返さなくても拓巳先輩のことだとわかった。

…あの、愛海先輩を守るナイトさまが…俺と2人きりになることを許すはずがない。2週間ほど前に、あんなことがあったばかりだから尚更だ。

「こんな機会でもないよ……柴田くんと話もできないしね」

確かに、あの日から今日まで……愛海先輩とは顔すら合わせなかった。それが彼女の意志か……あの男がそうさせていたのかはわからないけれど。まあもとより、俺の方から会いにいけるはずはなかった。

「ホントはね……あの日からずっと、あなたと話がしたかったの……だから……だろうか。今日愛海先輩が、俺たちの中に混ぜてほしいと提案してきたのは。俺と話をする機会を……探していたんだろうか。」

……何のために？

ふと浮かんだ疑問は、顔に出ていたのかもしれない。俺の顔を見上げた愛海先輩は、少しだけ微笑んで見せた。あの時、俺の顔を見て悲鳴を上げた彼女とは……別人のようだった。

「謝りたかったの、あなたに」

小さな声が、確かにそう告げる。

『謝る』……？そうしなきゃいけないのは、俺の方じゃなかったか。

「あの日、ひどいことしてごめんなさい」  
パニックを起こして叫び声をあげたことを、彼女は謝る。だけど  
…俺の顔を見たらそうなることはわかっていたのに、抑えられな  
った自分の方に非があったんじゃないかったか。

放っておけば頭まで下げそうな彼女に、俺は慌てて首を横に振っ  
た。

「やめてください。あれは俺が……」  
全てではないけれど、先輩の事情なら少しは知ってる。ああなっ  
てしまうことは十分に予期できたことだった。

言いかけた俺の言葉を、先輩の方が首を振って遮る。それから、  
さっきと同じようにかすかに微笑んでみせた。中学の時から何も変  
わらない…あの時の笑顔だった。

その表情に、ギュッと胸が締め付けられる。呼吸がしづらい。胸  
が苦しい…。

ずっと、見たくて止まなかったその笑顔だったから。

「びつくりしたのよ、あの時…。まさか柴田くんが日本に帰ってき  
てるなんて思わなかったから」

さっき休憩所でもらったウチワで扇ぎながら、愛海先輩はそう続

けた。すれ違う人たちと肩がぶつかりそうになり、俺はそれを避けながら彼女の方を振り向く。前を向き直して、先輩は歩きながら言葉を継いだ。

「あの学校で、中学時代の人に会うなんて思ってた。…だから、ちよつとびっくりしただけ」

不意に見た懐かしい顔に、驚いたのだと彼女は苦笑い気味に言う。「柴田くんは、何にも悪くないのね…ごめんね」

先輩が最後にそう付け足した言葉に、俺は再び胸が痛むのを感じる。でもそれはさっきまでの「切なさ」に似たものではなくて…単純に、「痛み」でしかなかった。

『関係ない』と、言われたも同然だと思ったからだ。

俺は何も悪くない。でも、関係もないんだ、と…。

確かに愛海先輩が苦しんでいる『過去』に俺は全く関わっていないけれど。彼女を傷つけられるほど近くにも行けない自分。その現実にはやられそうになる。

……いや。

彼女を傷つけるほど近くに行ける人間なんて…、俺は、そもそもたった一人しか知らない。

「…先輩」

静かに呼びかけると、こちらを再び振り向いた彼女が、少しだけ首を傾げて見せた。浴衣に合わせた髪飾りが、少しだけ揺れる。目を合わせられないせいでそれを眺めながら…俺は、声を絞り出すように続けた。

「…俺じゃ、『あの人』の代わりにはなれませんか」

中学の時、何度口にしたセリフだろう。数えるのもバカらしくて、実際に指を折ったことなんてないけれど…。それを何度も耳にしてきたはずの先輩の方も、この時はわずかに目を見開いた。

それから、わずかに目を細めて微笑んでみせる。悲しいくらいに…切ない笑顔だった。

「…ごめんね」

これもまた何度も聞かされた言葉を、先輩は静かに口にしたり。そうやって何の変化も成長もないまま…俺たちは何度このやり取りを繰り返しただろう？

想う気持ちだけは、ここ数年で更に募って育っていったというのに…。

俺と彼女は、いつまで自分を変えることもできないまま立ち止まり続けるんだろう。

…この時ばかりは、状況と感情・相手の想いを考慮して臨機応変に自分を変えられるハルカが…少しだけ羨ましかった。

「柴田くん」

改めて呼びかける彼女は、自分の頭の上に飾られている七夕飾りを見上げる。けど瞳に映ったそれすらも…今の彼女には「見えて」はいないようだった。

「…本当は…うちの学校に転入してきた、すぐに剣道部に入りたかったでしょう？」

胸の内を見透かしていたかのように、先輩はそう意外な言葉を続けた。

「……………」

黙ったままいると、彼女はやはり少し困ったように笑う。

「いきなり会ったら私がパニックを起こすって分かってたから…私がいる剣道部には来なかつたんでしょ？」

中学の時は、俺も愛海先輩と同じ剣道部に所属していた。アメリカに行くと同時に辞めたけれど…日本に戻ってきたら、すぐにも

やりたかったのは事実だ。だけど、愛海先輩にすぐに会いに行けず  
にいたから、始められずにいた。

「私なら、大丈夫だから」

先輩は、そう言う。…恐らく、俺の顔を見てももう『過去』に囚  
われて悲鳴を上げたりはしないだろう。

「柴田くんがうちの部に入ってくれたら、真帆ちゃんも喜ぶと思っ  
わ。男子の主将が頼りないって愚痴ってたし」

そこまで言って、先輩は少し笑う。つられて笑みを見せようとし  
たけれど、うまくいったかはわからなかった。

不意に、思う。

俺たちの…いや、先輩と拓巳先輩…そしてハルカの関係は、いつ  
変化するんだろう…と。

その鍵を持っているのは他でもない拓巳先輩だけ…それを開  
けようとしなければいけないのは、愛海先輩の方だ。だけど…「変  
われる」のだろうか？この2人が。偽りの恋人という関係を…それ  
でも4年も続けられているこの2人が？

「……」

ギリと唇を噛み締めて、俺は先輩にバレないように力をこめる。  
「変わらなきゃいけない」、そう一番分かっているのは俺なはずなのに……その俺が、一番無力だ。

そんな自分に憤りさえ感じて、口の中に広がった血の味の苦さに眉を寄せた。



七夕祭りの翌日は、梅雨明けしていないのが嘘のように快晴だった。

風がなくなればじっとりと汗ばむほどの湿気。本格的な夏の到来を感じつつ、その暑さに嫌気がさす。…いや、何よりうんざりなのは、そんな気候のせいじゃなく自分自身に…だ。

「……何を言っただ、俺は……」

誰もいない校舎の屋上で、俺は手すりに寄りかかって独白のように呟いた。思い出すのは昨夜の七夕祭りでのこと。無意識のうち…というと語弊があるけれど、自分でも意図せずにあの子にとんでもないことを言いかけた。彼女に遮られなかったら、どうなっていただろう。抑え切れないままに…告白、してしまっていたかもしれないかった。

他に好きになりそうな人がいる…と、あの子が口にした瞬間。俺はやっと我に返って、それと同時に後悔した。自分の想いを口にしてしまいそうになったことに…じゃない。…ただ、自分のしようとしたことが愛海への裏切りだと自覚したからだった。

「……」

ため息が、漏れる。我に返って後悔した後、俺はあの子の言葉に少なからずショックを受けたけれど…。それでもどこか、ホッと

た部分が大きかった。結果的に、愛海を裏切らずに済んだ…と。だからこそ、その後会った梶の言葉に驚いてしまったんだった。

「なあに、話って」

屋上のドアがギョッと開いたかと思うと、入口からそんな声が聞こえてきた。振り返ると、そこには小さく小首を傾げた愛海の姿。

長い黒髪をなびかせて近寄って来る愛海は、何食わぬ顔でいつも通りの様子だった。

「話なら別にこんなところに呼び出さなくてもいいのに」

「……誰にも聞かれなくなかったから」

「変なタクミ。電話かメールでいいじゃない」

苦笑いを浮かべる愛海に、俺は口に出しては反論しない。その電話に昨日出なかったのは誰だ、という抗議は飲み込んでおいた。

「で、何？」

ゆっくりとこちらへ歩み寄ってきた愛海は、俺の隣で同じように手すりにもたれかかる。少し首を傾げてこちらを覗きこんでくる愛海の表情は、後ろめたいことなんて何もないかのようだった。それが、演技なのか…素なのか。情けないことに、俺には計り知れない。

「…何で嘘ついたの」

俺の表情から張り詰めた空気を読み取ったのか、愛海は少しだけ浮かべていた笑みを消す。真剣な表情になりながら…「嘘？」と俺の言葉を復唱した。

「昨日。向井さんと一緒だって言ってたのに、実際は柴田と一緒にだったんだろ」

そう続けた途端、愛海の動きがピタリと止まる。それでもやはり悪びれる様子もなく……ただ、口元だけを上げて俺を見つめ返した。

「そうだけど……何で知ってるの？」

「梶に会った。愛海と柴田が一緒にいるのを見かけたって言うてたから」

「……あいつ……」

梶に目撃されていることは本当に気づいていなかったらしい。少しいだけ目を見開いた後、愛海はそう言うて恨めしそうに呟く。

どこか冗談めかして笑い話にでもしたかったのかもしいれないけれど、俺はそうじゃなかった。ただまっすぐに愛海を見据えると、向こうも観念したのか首を竦めてみせる。

「だって、柴田さんと2人だって言ったらタクミ絶対あのまま解散にしなかったでしょ？」

「……」

当たり前だ、と怒鳴りたいところを、俺は何とか押しとどめた。

2週間ほど前に……あんなことがあったばかりなのに……。愛海を狂わせる『過去』を思い出すのに十分な人間と、一緒にいさせるわけがない。

そんなこちらの思惑も全て読み取ったのか、愛海は小さく息を吐いた。「あのね、タクミ」と吐息まじりに呼びかけてくる。

「柴田くんは、何にも悪くないでしょ？私はただ謝りたかったの。彼に」

「だから七夕祭りも一緒に回ろうなんて言い出したわけ？」

「…そうよ」

「だったら何で俺とあの子を2人で帰したりした？」

「だから、それは言ったでしょ！？ハルカちゃんが心配だったからよ！」

俺の追及にイラついたのか、愛海が声を荒げる。いつもはここで愛海を宥める方に回る俺だけれど…この時は、こちらも引く気はなかった。正面から対峙するように向い、手すりを握る手に力をこめる。

「…愛海が今何を考えてるのか、俺にはさっぱりわからない」

目を逸らさないまま言うと、愛海もグツと顔を上げた。睨むように見据える目が、面倒くさそうに光る。

「言った通りよ。私は柴田さんに謝りたかったし、ハルカちゃんは心配だから早く帰してあげたかった…ただそれだけ」

「……………」

「変な連中に絡まれたとしたって、私たちが全員でついているよりもタクミが一人いれば十分。そうでしょ？あんな強いんだから」

「……………」

愛海の言葉に、確かに間違いはない。だけど……………。

「もういいでしょ」

納得できずに尚も言葉を次ごととした俺だったけれど、愛海のそんな言葉に遮られた。片手を振ってそれ以上の追求を拒む素振りをして…愛海は吐息を漏らす。

「誰も損してないんだから、別にいいでしょ」

「……何？」

眉を寄せて聞き返した俺に、愛海は再び肩を上げた。怒りなのか、何なのか…今愛海を取り巻く感情が、俺には読み取れない。

「タクミだってハルカちゃんだって、2人つきりになれて嬉しかったでしょ？ だったら結果オーライじゃない！ 感謝してほしいくらいよ！ どうして私が怒られなきゃいけないの!？」

吐き捨てるように叫んだ愛海の言葉に、俺は頭の中で何か弾け飛ぶような感覚に襲われた。自分でも無意識のうちにガンっと手すりを力いっぱい叩きつけると、愛海がビクリと一瞬だけ肩を震わせる。

「…愛海」

静かに…だけど低く呼びかけると、愛海は睨むように視線だけをこちらへ返してみせた。

「…悪かったと、思ってる」

俺が小さく言うと、愛海は少しだけ眉を寄せる。イラつきを抑えようと深呼吸した俺の言葉の続きを、小首を傾げてただ待っていた。「バレてるから嘘はつかないけど…俺は、確かにあの子のことが気になってた」

「……」

俺の言葉を受けて、愛海が小さく唇を噛む。本当は「気になってた」程度の想いじゃなかったけれど…そう言う以外に術がなかった。

「…だけど…あの子のことはもういいんだ。今まで通り、俺はあの時の愛海との約束を守りたいと思ってる」

勝手な言い分ではないけれど、そうとしか俺は伝えられない。

愛海もそう思ったのか、俺を睨み据える目には段々と涙が浮かんで

きていた。

「だから、愛海にも今まで通りにしてほしい。あの日の自分の言葉に、責任を持ってくれ」

言いながら、俺は4年前のあの日の…愛海の悲鳴に似た叫びを思いつく。俺の腕で泣き崩れながら…叫んだ言葉を。

『准一だけはずっと私の傍にいて！私のことだけ想ってて！勝手にどこにも行かないで！』

…同じことを思い出したんだろう。愛海の瞳から、とろとろ雫が頬を伝って落ちた。

「愛海が望む限り、俺は傍にいるから」  
手を伸ばして、長い髪に触れる。幼い頃から、愛海が泣いた時はそうしてきたように…。ただ、違うのは今日の涙は俺が流させているということだけだ。

「それと…もう一つだけ」  
梳くようにして髪を撫でながら言うと、愛海が少しだけ顔を上げた。この時にはもう、互いに瞳から怒りの色は消えていた。

「あの子は…もう俺のことなんて好きじゃないよ」

「……………え？」

「ここですよ、早く、愛海が俺の言葉に対して声を返した。唇を少し開いて、目を瞠る。」

信じられない、とでも言うような表情だった。

「昨日、言われたんだ。気になる人がいるらしい」

「……………う、そ……………」

「嘘じゃないよ」

驚いたのか、何なのか…愛海はそう言ったきり、口をつぐんでしまった。…そう、彼女にそう言われたのは嘘ではなかった。

そのあの子の言葉が真実なのか、否か…。

そんなことは、俺にとってはどうでも良かった。

彼女に本当に好きな奴ができたのか、それとも嘘だったのか。問題は、そこじゃない。

それが嘘だったとしても、そんな嘘を彼女に吐かせたという事実が問題なんだ。どちらにせよ、彼女が俺に見切りをつけたというのがたった一つの真実だった。

「タクミは、それでいいの…！？」

俺の腕を両手で掴みながら、愛海が再び声を荒げた。だけどそれはさっきまでの怒りではなく…どこか焦ったような、必死な声だった。どうして愛海がこんな顔をするのか…。その意外なりアクションに、俺は少なからず面食らってしまう。

「絶対、そんなの嘘よ！ハルカちゃんが他の人を好きになるなんて、絶対ない！」

「……………愛海……………」

「いいの！？タクミはそれでもいいの！？」

「愛海！」

縋りつくように俺の腕を掴んで力いっぱい抗議してくる愛海を、俺は止めるように大声で名前を呼んだ。ビクリと動きを止めた愛海が、俺を掴む手を少しだけ緩める。

「さっき言っただろ。自分の言葉に責任を持ってっ」

愛海の手からゆっくりと腕を引き抜きながら、俺は静かにそう続けた。自分でも、自嘲の笑みがこぼれそうだった。昨日愛海を裏切りそうになった俺が…偉そうに言えることじゃないはずなのに。本当に自分の言葉に責任を持たなきゃいけないのは、俺の方はずなのに。

「愛海が俺に傍にいろって言っなら、そうする。だけどそれなら、俺とあの子のことなんて考えなくていい」

「…タクミ…」

これ以上話したところで、きっとお互い平行線だろう。俺が自分の想いに蓋をしても愛海の望むままにしてやりたいと思うのは本当だし、愛海が俺に傍にいてほしいと思いつながらあの子の気持ちを犠牲にしきれないのも本当だからだ。

そうやって、人はいくつ矛盾した想いを抱えて生きていくんだろ  
う。

……今も、あの時も…。



踵を返して、俺は先に屋上を出ようとした。取り残された愛海が、自分の中で沸き起こる葛藤と戦っているのだろつということは安易に想像できた。…だから…最後に、一つだけ。愛海が間違っただけ抱いている想いを、打ち消す言葉を口にした。

「愛海」

静かに呼びかけると、後ろで愛海がゆっくりと顔を上げる。

「あの子と、愛海は違う」

肩越しに振り向いただけなので、愛海の表情までは読み取れなかった。ただ、俺の言葉にどこかハツとしたように息を飲んだのはわかった。

「愛海が過去の自分とあの子を重ねて見ていることはわかってる。だけれど…あの子は愛海じゃない」

「……………」  
愛海は、答えなかった。だから俺は、そのまま青空の広がる屋上を後にした。

扉は重い音を立てて開く。明るいとところから暗いところへ…目が順応しきれずに小さく眩暈を感じた。それが今の自分の頭痛と相まって、俺はわずかに眉を寄せる。

「…だから、言ったんだ」

扉が閉まり、そんな暗い空間に目がようやく慣れてきた頃…。そのまま階段を下り始めようとした俺に、後ろからそんな低い声がか

かった。

驚いて振り返ると、そこには黒い一つの影。随分前から扉の隣に立っていたらしいその姿に、俺は入ってきた時全く気づかなかった。

「あんたは偽善者だって」

続く言葉を吐くように告げながら、そこに立っていた柴田一真は一步だけ俺に歩み寄った。秀麗なその顔立ちに刻まれたのは、あざ笑うような歪んだ笑み。中学時代から俺にだけ向けられる、彼の特別な表情だった。

「結果なんてわかってた。恋愛感情のない偽りの恋人ごっこなんて、ずっと続くわけがない」

「……………」

「だったら最初から、愛海先輩を甘やかさなければ良かったんだ。嘘でもいいから恋人でいてくれなんて提案：呑んだあんたは偽善者以外の何者でもない」

俺をまっすぐに断罪する瞳。逃げるわけでもなかったけれど、俺はすぐにその視線から目を逸らした。∴今柴田に何を言われても、反論する意味も理由もなかったからだ。身を翻してそのまま階段を下り始めた俺は、振り返ることもなくそこを後にした。

後ろで柴田が何かを続けたそうに口を開くのが空気で読み取れたけれど、俺は意図して自分の意識を深くに沈めてしまった。



私の今の気持ちと裏腹な天気が、少しばかり恨めしかった。真っ白い大きな雲を、絵に描いたような快晴。クーラーのない教室では、下敷きで扇がないと汗が滲んでくる。こんな時に、近くのお金持ちな私立高校が本気で羨ましくなったりした。

「ハルカ、今日放課後なんかある？」

昼休みになつて、お昼を食べ終えた頃に真帆がそんな声をかけてきた。

「んーん。何も無いよ。なんで？」

「じゃあさ、駅前のカフェ寄つてかない？」

そう言う真帆の瞳が、キラリと光った気がする。…何となく嫌な予感がして、「……何かたくらんでる？」と聞いてみた。

「だって、まだ昨日のこと何も聞いてないもん」

真帆がはつきりとそう言うと、前の席で華江が「そうねえ」とニッコリ笑顔で同意した。

「あれから2人で消えちゃってさ。何かあつたでしょおー」

嫌なニヤニヤ笑いで続ける真帆は、漫画ならまるで悪役のようだった。そんな2人の様子に肩を竦めながら、そ知らぬ顔で私は食べ終えたお弁当の箱を片付け始めた。…大体、『2人で消えた』って人聞きの悪い言い方をしないでほしい。そのまま解散、って言ったのは皆の方なのに。

「別に、特には何も…」

「うそばかり！ハルカが行方不明になったって知った時のタクミ先輩の慌てぶりっからして、何も無いわけないもん」

「……」

時々、妙なところで真帆は鋭い。観念して、私は大きくため息を漏らした。元より、今すぐには説明するのが面倒だっただけで、隠すつもりはなかった。

それに、私の方にも2人に聞きたいことはあった。結局、マナミ先輩が一緒にいたのは一真だったのか、とか。そもそもどうしてそういう状況になったのか…とか。

「わかった、今日の放課後話すよ」

約束して、私はお弁当の包みを鞆の中に戻した。

「ハルカちゃん」

そんな私に、クラスの女の子が声をかけてくる。そちらを振り返ると、一番廊下側に近い席の子がそこに立っていた。名前は知っているけれど、それほど話をしたことはない相手だ。

「廊下で、ハルカちゃんのこと呼んでる人がいるけど…」

続いた彼女の言葉に、私はドキと胸が一瞬跳ねるのを感じた。…タクミ先輩なわけはないけれど、前にこういうシチュエーションがあっただけに、一番に先輩の顔が浮かんでしまったんだ。

……そんなわけ、ないのに。

先輩が私を訪ねてくるなんてこと、きつともう2度とない。私から会いに行かなければ、もう顔を合わせることもほとんどない。前

に先輩から『迷惑だ』と言われて…一度疎遠になってしまった時、全然会えなくなってしまうように…。

でもそれも今回は私自身が選んだ道なんだから、後悔することはないけれど。

「……あ」

廊下に出た私の姿にそんな声を上げたのは、長身のシルエットだった。それが誰なのかを認識して、私はタクミ先輩じゃなくて残念なようなホツとしたような…不思議な感覚に襲われた。

「ごめん、急に呼び出して」

少し慌てたように言って、隣のクラスの長谷川くんはニッコリ笑って見せた。

教室のドアのところで話していても邪魔になるだけなので、数歩だけ横に移動する。それについてきてくれた長谷川くんは、「どうしたの？」と尋ねてみた。

「あ、実は…良かったらこれ、一緒にどうかなと思って…」

そう言って長谷川くんが出てきたのは、映画のチケットだった。前から私が見たかった…というか、明らかに女子高生受けしそうな恋愛もの。それが長谷川くんとは接点がなさそうなものだったので、私は思わず瞬きを繰り返してしまった。

「いや、あの、無理には言わないんだけど…これ、人からもらったやつだからせっかくだし…」

少し赤面しながら言う彼は、かわいらしい感じがした。クールなタクミ先輩とは違う…全く別の男の子だ。

「前のカラオケも、昨日の七夕祭りも…俺、夏川とあんまり話できてないから」

「……」

そう続けた長谷川くんは、私はどう返事をしようかと思いつきながらも不意に顔を上げた。だけど、差し出されたチケットから彼の顔を見上げる瞬間…長谷川くんの後ろに、ちょうどそこへやってきた人影が目に入る。

「！」

その姿を両の目で捉えて……私は思わず、大きく息を飲んだ。

長谷川くんの声が、聞こえてしまっていただろうか。いつもの無表情…むしろ視線は私たちの方を見ようとはしないタクミ先輩が、そこにいた。

私の驚いた顔を見て、長谷川くんも後ろを振り返る。タクミ先輩の姿に気づいて、彼は何かを言おうとしたのか口を開きかけた。

長谷川くんはタクミ先輩の弓道部の後輩だから…もちろんお互い知らない仲じゃない。挨拶でもしようとしたのかもしれなかった。だけど、それもタクミ先輩の行動に遮られる。長谷川くんが何かを言うより前に、タクミ先輩はちょうどそこにある教室のドアから出ていこうとした人物を見つけて、声をかけた。

「向井くん」

呼びかけられた向井くんの方は、そこにタクミ先輩がいるのに少なからず驚いた顔をしたけれど、すぐに笑顔を浮かべて見せた。

「タクミ先輩、こんにちは。昨日はありがとうございました」

礼儀正しく頭を下げる辺り、向井くんは律儀だと思つ。つられて少し笑い返したタクミ先輩が、「こちらこそ」と言いながら何か持っていたものを彼に差し出した。何かの資料なのか…数枚の束にな

った紙だった。

「来週からの風紀委員の登校指導、当番だから渡してくれって頼まれたんだ」

「あー、そっか。そうですね。そろそろ回ってくるなあとは思ってたんです」

受け取りながら、向井くんはそう相槌を打った。

「あれ？そう言えば当番は各学年縦割りだから…タクミ先輩とは一緒ですよね」

「そうだね」

同じF組だから…だ。向井くんの言葉に軽く頷いたタクミ先輩は、「それじゃ」と身を翻そうとした。

「わざわざありがとうございます」

お礼を言う向井くんに、タクミ先輩は笑って首を振る。そのまま歩いて行ってしまいそうになった彼に、「タクミ先輩」と声をかけたのは他でもない、長谷川くんだった。

呼び止められた先輩が振り向くと、長谷川くんは「こんにちは、お疲れ様です」と体育会系の部員にふさわしい挨拶をする。「お疲れ」と笑って応じた先輩は、それでもそのまま踵を返して行ってしまった。

…私の方は、見ないままに。聞かれてしまったのかもしれない。長谷川くんとやり取りを…。昨日、タクミ先輩に嘘まで吐いて拒んだ私が「聞かれたくなかった」なんて言うのは身勝手だってわかっているけれど…。

それでもやっぱり、聞かれたくなかった。

「好きになりそうな人がいる」と嘘をついたけれど…それが長谷



川くんなんだろうとか、具体的な勘違いをされなくなかった。本当に、自己中心的な思いだ。

「長谷川くん」

タクミ先輩への挨拶を終えてこちらを向き直った彼に、私は呼びかける。自分を見下ろす優しそうな彼をまっすぐ見つめてから、私は頭を下げた。

「ごめんなさい。映画は行けません」

ここでタクミ先輩への想いを失った痛みを、長谷川くんが癒せたならどんなに良かったろう。だけどそんなのは彼に失礼だと思っ  
たし、何より今の私に他の男の子と遊びに行くなんて精神的余裕はない。

昨日、七夕祭りでないだ手を離れたのは私だけ……。でも、長谷川くんとデートしたところで、思い出すのはきつとあの時のタクミ先輩の手の温かさだろうから。

だから私は、はつきりと断る以外にどうすることもできなかった。

長谷川くんは本当にイイ人で、「そっか」と呟くと笑って「ごめん、時間取らせて」と言ってくれた。そのまま去って行く後ろ姿に、申し訳なさはもちろんあったけれど……。どうすることもできずに、私はそれを見送るしかない。

「賢明な判断だな」

不意に頭上から声が降ってきたのは、その数秒後のことだった。

ちやうど長谷川くんが角を曲がって、その後ろ姿が見えなくなった頃。頭の上からのそんな一真の声に、私は仰向くように上を向いた。

「どこ行つたの。お昼先に食べちゃったよ」

言つと、一真は「お前は俺の女か」と苦笑い気味に言った。

「ちよつと屋上で休もうと思つただけだな」

「うん？休めなかつたの？」

「……まあ、それは後だ。それよりお前、意外にちゃんとしてんだな」

『意外に』という言葉が引つかかったけれど、一真が言わんとしているのは恐らく長谷川くんにきつちり断りを入れたことだろう。盗み聞きしてたの、とか、色んなツッコミはしたかつたけれど一真が真顔だったので敢えて言わないでおく。

「それより、屋上がどうかしたの？」

「お前、今日の放課後時間あるよな」

私が尋ねると、一真がそんな質問返しをしてくる。…いや、質問というよりは…有無を言わさぬ確認と言つたところだ。

「放課後はダメだよ。真帆と華江と約束があるもん」

はつきりと言つと、私は教室の中へ入る。自分の席へ向けて歩き出すと…一真もそれについてきた。

「そんなもん明日でもいいだろうが」

また始まつた、と思ひながらも、私は「今日は何」と眉を寄せて尋ね返す。

一真の俺様発言にはもう慣れてる。一応聞くだけ聞くこととして

尋ねると、そこにいた真帆と華江も何事かとこちらに興味を示した。

「今日、ちよつと付き合つてほしいところがあるんだと」

「……誰が？」

第三者のことを指し示すような言い方だったので、私は眉を上げて一真を見た。互いに隣同士の自分の席に座りながら、一真が続ける。

「愛海先輩が」

と、意外な一言を答えとして寄越してきた。

「……マナミ先輩が？ 誰に？」

思わず目を見開いて聞き返すと、一真は「俺とお前」と指を指しながらはつきりと答える。ますます意味がわからなくて首を傾げたけれど、一真はそれ以上詳しい話はしてくれそうになかった。

何となく空気を読み取ってくれたらしい華江と真帆が、「うちらのことは明日でいいよ」と遠慮して言うしてくれる。それに頭を下げて謝っておいて、私はふとマナミ先輩のことを思った。

マナミ先輩が…私と一真に、何の用があるんだろう？

考えたってわかるわけはなかったけれど、どうしても頭の中から離れない。そんな疑問符を抱きながら、私は放課後までの長く感じられる時間を過ごすことになった。



七夕祭りの翌日、多分俺はひどい顔をしていたと思う。眠りにつけたのは明け方で、それまで寝ようとする頭の中を駆け巡るのは愛海先輩の切ない笑顔だったから。

…フラれたのは、何度目なのかわからない。それでも、その「痛み」に慣れるわけなんてない。軋む胸の痛み在眉を寄せ、膝を抱え込むようにしてベッドの中でただ時間が流れるのを待った。

そんな俺の顔を見て何かを読み取ったのかはわからない。翌日教室で会ったあいつらは、特に何も問いただしてきたりはしなかった。隣で真帆たちとはしゃぐハルカの空元気っぷりも、恐らくあの後拓巳先輩と何かがあったんだろうと思わせる。けれど誰もそれに対して何かを言うこともなく…昼休みになった。

俺は、こいつらのこういうところは嫌いじゃない。知りたい欲求もあるかもしれないけれど、相手が話せる状態になるまでちゃんと待ってくれる。この時も、例外ではなかった。

いつもは教室で弁当を広げるハルカたちの横で、購買で買ってきたパンを食べるところだけだ…。その日はその頃になってようやく眠くなってきてから、俺は屋上へ向かった。昼寝をするにはもってこいの天気だし、俺はあの場所が結構気に入っていたからだ。だけどそんな屋上の扉の前に辿り着いた時、そんな好天気の不似合い

な会話が聞こえてきてしまう。

…誰だ、こんなイイ条件の中ケンカしてる奴らは。

チツと舌打ちして引き返そうとした。人の修羅場になんて興味はない。しかし、そんな俺の耳に聞こえてきた声の主は…よく聞くと愛海先輩のものだった。

思わず、その場に立ち尽くしてしまう。盗み聞きをしたいわけじゃない。やなかつたけれど、棒のように動かなくなった足に意志は働かない。聞こえてくる会話が、途切れ途切れでも確実に内容を伝えてくれる。それを最後まで聞いてしまった後、俺は壁にもたれかかって大きく吐息を吐き出した。

その数分後、バン、と乱暴にならない程度に開かれた扉。先にそこに現れたのは、拓巳先輩だった。

俺に気づいていない様子だった彼に、声をかける必要なんてなかったはずだ。それでも俺は、先輩が俺を抜かして階段を下りようとした時に…声をかけてしまっていた。

「嘘でもいいから恋人でいてくれなんて提案…呑んだあんたは偽善者以外の何者でもない」

そんな、言葉を…。

もちろん俺の正直な感想に他ならなかったけれど。

ふい、と俺から目を逸らした拓巳先輩は、そのまま足早に階段を下りていく。俺の言葉から逃げたわけではないだろう。ただ、あの

人には昔から俺と正面きつて話をする気なんてないはずだった。

拓巳先輩が去った後、俺は屋上への扉を開いた。そこにいたのは、当たり前だが愛海先輩だ。俺の気配に気づいて振り向いた彼女は、驚いたように目を丸くした。その瞳に、涙が浮かんでいる。

「…聞かれちゃった？」

涙目になりながらも…いや、雫を零しながらも…彼女は、苦笑い気味に俺を見上げた。

「…すみません」

立ち聞きしてしまったことを謝ったが、愛海先輩は首を横に振る。小さく息を吐き出して、彼女は手すりに手をかけて大きく腕を伸ばした。

「ねえ柴田くん、聞いてたなら一つ質問してもいいかな」

「…何ですか？」

「ハル力ちゃんは…本当にタクミのことを好きじゃなくなったんだと思う？」

先輩の隣に立った俺を、彼女は真っ直ぐに見上げてくる。どう答えればいいのか逡巡したが…嘘や偽りは何のためにもならないと思っただから、正直に答えた。

「それは…ないと思います」

ハル力が、拓巳先輩を諦められるわけがないと思う。あいつの想いがどれほどのものなのか…ほんの1ヶ月ちよつとの付き合いだとはいえ、俺もよくわかってるからだ。

「そう…よね」

一瞬だけ目を伏せて、彼女は呟く。長い髪が、サラリとそれに合わせて流れ落ちた。

「ごめん、やっぱりもう一つ質問」

「はい」

「じゃあ何でハルカちゃんは…他に好きになりそうな人がいるなんて嘘を、タクミについたのかな」

「……」

まっすぐに見つめ返すと、少しだけ困ったように彼女は視線を逸らした。外に広がる校庭を見るでもなく眺めながら、言葉を継ぐ。

「いつまでたつても私と別れないタクミに、嫌気がさしたのかな」

「……違うと思います」

「じゃあ、タクミと別れない私のことが嫌いになったからかな。私とタクミの関係に関わりたくないと思ったからかな」

「それも違うと思います」

同じように外の風景を漠然と眺めながら、俺ははっきりと否定する。…違う。ハルカの思いはそんなもんじゃない。

「じゃあ…」

『どうしてだろう』。そう続けそうな先輩の言葉を、俺は右手を上げて制した。

本当の答えは、愛海先輩だってきつと分かっているはずなのに…。それでも、彼女は誰かに「答え」を示してほしいんだろう。だからこそ、俺はその「答え」を口にする。

「愛海先輩と拓巳先輩を、傷つけたくなかったからです」



「……………」

思った通りの答えだったんだろう。彼女は、表情を動かさないままそれを聞いていた。

ハルカの想いは、きっと言葉では表せないくらい深い。普通だったら自分の利益ばかりを優先させそうなものだけけど、あいつの想いはそれをはるかに超越している。…俺には、いつまでたっても真似できそうにない。

「…柴田くん」

俺の回答をどう受け取ったのかはわからない。長い沈黙の後、愛海先輩は再び顔を上げた。

伏せ目がちだったさっきまでとは違って、俺をまっすぐに見上げる瞳。そこには、もう涙はなかった。代わりに、何か強い意志のようなものを見つける。

「今日の放課後、時間あるかな」

「…？はい」

首を傾げながらもそう短く答えた。

「柴田くんとハルカちゃんに…付き合ってほしいところがあるんだけど」

何かを決意したような眼差し。それは…中学の頃のあの『出来事』の前に見たつきりだった、他の誰でもない…愛海先輩のものだった。力強い、迷いのない瞳。

「…俺と…ハルカに？」

聞き返すと、先輩は大きく頷いた。

「昔から何度も私を支えようとしてくれた柴田くんと…私のためにタクミを諦めようとしてくれたハルカちゃんに、もう嘘はつきたくないから」

「……………」

「今日、全部聞いてほしいの。私と…タクミのこと」

俺ですら一部しか知らない…いや、多分本人たち以外に誰も知らない…2人の『事情』。それを曝け出す決心をしたという先輩は…まっすぐなキレイな目をしていた。

「その後、タクミとは別れるわ」

続いた言葉は少なからず意表をつくものだったので、俺は思わず目を見開く。瞬きを忘れて彼女を見つめ返すと、俺を見る目が少しだけ細められた。微かなほほ笑みをたたえて、彼女は俺を見つめ返す。

「もう、決めたの」

そう続けた先輩の、揺ぎ無い瞳が俺をただ映していた。

\*\*\*\*\*

複雑な想いを胸に、俺は愛海先輩と放課後の約束だけをして別れた。拓巳先輩と別れると決意をしたと聞いても、もちろん手放しで

喜べるわけもない。ため息まじりに屋上から教室へ戻ると、ドアの近くの廊下で何やらハルカが誰かとやりとりをしているのが見えた。

少し遠目からでも、相手の男が持っているのが映画のチケットだと分かる。…随分と堂々とした誘いだな、と思いつながら何気なく眺めたが、どうやら相手は昨日七夕祭りで会った男だった。

しかし俺が驚いたのはそれだけではなく…。

教室の方から直と話した後に身を翻してこちらへ向かってきたのは、拓巳先輩に他ならなかった。

…ハルカも、タイミングが悪い。あいつのことだ。ハセガワくとやらに誘われているところを拓巳先輩に見られたくなかったに違いない。

すれ違いざま、拓巳先輩は俺に気づいて少し眉を寄せた。その表情がいつものポーカーフェイスとは違い、複雑な色を宿している。もちろん俺に会ったことだけでなくて、ハルカとハセガワくんのやりとりを聞いてしまったせいだろう。

「……………」

一瞥だけを返して、俺はそのまま彼とすれ違い、ハルカたちに近寄った。その途中、はつきりと断って頭を下げるハルカの姿が目に入る。ハセガワくんはどうやら誰かさんとは違って爽やかな好青年のようで、「ごめん、時間とらせて」と謝って去って行った。

「賢明な判断だな」

デートの誘いを断ってハルカが吐息を漏らしたところで、俺は頭上からそう声をかける。それに驚いたハルカが、一瞬だけ目を瞠った。

だけどそれも刹那のことで、すぐにいつも通りの表情に戻ってみせる。そこからはいつもの軽口の応酬で、俺たちは並んで教室へ入った。

愛海先輩が俺とハルカに用があることを伝えると、当たり前だがハルカは首を捻っていた。だけど、とりあえず先輩が拓巳先輩と別れるつもりらしいということは伏せておく。そうだった話は、愛海先輩本人の口から語られないと意味がないと思ったからだ。

午後の授業なんて、身に入るはずもない。それは隣のハルカも同じらしく、気づくと並んでボーッと窓の外を眺めていた。

その日の放課後、どれほど衝撃を受ける話を聞かされるのか、想像もできないままに……。

放課後に会ったマナミ先輩は、いつもよりもどこか明るかった。それが偽りの明るさなのか、心からのものなのか…釈然としない。けれど、どこかすっきりとした表情でいることに違いはなかった。

「ごめんね、ハルカちゃん。呼び出したりして」

昇降口のところであってすぐに謝られて、私は慌てて首を振る。

「こちらこそっ、あの、昨日はご心配おかけして…すみませんでした」

ペコリと頭を下げると、マナミ先輩は首を振ってニッコリ笑い返してくれた。…その笑顔に、やっぱりこの人は美人だなあ…なんて場にそぐわない感想を抱いてしまう。

「ちょっと遠いところまで付き合わせちゃうけどいいかな」

確認されて、私は「はい」とはつきりと答える。隣の一真は何も答えない辺り…どこに行くのか知っているんだろっか？無言のまま、マナミ先輩についていくつもりらしく革靴に履き替えている。

マナミ先輩につれられるままに行く先は、電車を乗り継ぐところだった。窓の外に映るのは、見覚えがある風景。それは駅を下りても同じだった。学校から1時間以上かかるその駅…それは、以前に一度訪れたことがあった。

今年の3月3日…タクミ先輩の誕生日に、先輩の家にお邪魔した

時に来た場所だった。

「ハルカちゃんに、私とタクミの話を全部聞いて欲しいの」  
それまで黙っていたマナミが、駅に着いた頃にようやく口を開いた。その言葉に一瞬驚いてしまって、私は目を瞪る。隣の一真はそれを知っていたのか、無表情のまま私たちの半歩後ろをついてきていた。

「でも……」

私はもうタクミ先輩のことは好きじゃないんです、とか。言いかけたことはいくつかあったはずなのに……。それらは全て、マナミ先輩の真剣な表情に飲み込まれて消えた。

「……ごめんね」

それが分かったからか、先輩は少し悲しい微笑みを浮かべる。それを目にする、断る言葉なんて口から出てくるわけがなかった。

この地域には一度来ただけだったけれど、タクミ先輩の家だったから道のりははっきり覚えている。前にタクミ先輩に案内されるまま着いていったのと同じ道を、マナミ先輩の後に続いた。記憶と同じ場所に、「拓巳」と書かれた表札の一軒家を見つける。マナミ先輩はそれすら通り過ぎて、更に5件ほど奥へ行っただころでようやく足を止めた。

「……」

私のこれまでの人生で、驚きの余り顎が外れそうになったのはこれが初めてだ。チラリと一真を振り返ったけれど、もちろん一真は知っていたんだろう。何食わぬ表情だった。

「ここ、私の家」

マナミ先輩が立ち止まって指し示したのは、絵に描いたようなものすごい豪邸だった。

背の高い門が、厳かに開く。長い庭を抜けた先に、そのお屋敷があった。昔漫画やドラマで見たような…大きな家。子どもの頃憧れたような、キレイな洋館だった。

「愛海お嬢様、お帰りなさいませ」

玄関のドアを開けると品の良いおばさんが出てきて、そうマナミ先輩に声をかける。

「『お嬢様』！」

まさに漫画の中のイメージ通りの呼び方だったため、私は感心して同意を求めるように一真を見上げてしまった。それに苦笑いを返すだけで、一真は応えない。…そうだ、一真だって中学の頃はこの近くに住んでいたんだから…もちろん知っていたんだろう。

「ただいま」

マナミ先輩が、その家政婦さんらしき人に短く答える。そのままスリッパに履き替えて、先輩は玄関を上がってすぐの階段に足を伸ばした。家政婦さんは私と一真を見て、「こんにちは」と笑顔で挨拶をしてくれる。

「お邪魔します」と頭を下げると、家政婦さんは階段を上り始め

たマナミ先輩に声をかけた。

「今日は准一坊ちゃんとは一緒じゃないんですね」

『坊ちゃん』！衝撃に目がくらみそうになったけれど、きっとこんな豪邸では普通なことなんだろう。庶民の私が内心で感心していると、マナミ先輩がいつもより低い声で家政婦さんに言葉を返す。

「もし連絡があっても、いないって言っというて」

「……かしこまりました」

一礼をして、その家政婦さんはそのまま下がっていった。

階段の上に付けられたシャンデリアも……。手すりについた装飾品も、私の家では考えられないほどの豪華なもので。その一つ一つに感動していると、階段を上がった先の奥の部屋に通された。

恐らく、そこがマナミ先輩の部屋なんだろう。どんな部屋なんだろうと胸を高鳴らせて入ったけれど、中は意外と普通の女子高生の部屋だった。『お嬢さま』の部屋というと、フリルやレースのちりばめられた部屋を想像したけれど……。そこはやはり、『マナミ先輩』に他ならないらしい。

広さはあるけれど、シンプルに片付けられた部屋。

それが逆に先輩らしく、私は何だかそれが少し嬉しかった。豪邸に住むお嬢様、じゃ、何だか私の知らない先輩みただから。やっぱりマナミ先輩らしさを見ると、少し安心してしまふ。

勧められるまま低いテーブルの周りに腰を下ろした頃、部屋をノックする音がした。「どうぞ」とマナミ先輩が声を返すと、遠慮が



ちにドアが開けられる。

「こんにちは」と挨拶しながらそこから顔を出したのは、さっきの家政婦さんではなかった。肩くらいまでの髪を緩くパーマで巻いた、上品な女性だった。年は40歳くらいだろうか…。

一真と揃って頭を下げると、その女性が私たちの前に紅茶を出しながらニツコリ笑う。「愛海ちゃんがいつもお世話になってます」と言う仕草も気品漂うものだった。

…もしかしくなくても…先輩のお母さんだろうか。若々しくてもすごく美人で、豪邸の「奥様」というのがピッタリな感じだったから…。

「こちらこそ」と慌てて挨拶を返すと、お母さんはそのままマナミ先輩を振り返る。だけどその表情はどこか遠慮がちで…マナミ先輩の顔色を探るかのような目をしていたのが気になった。

「愛海ちゃん、今日はお父さんが久しぶりに帰っていらっしやるから…夕飯は家族揃って食べましょうね」

そう声をかけたお母さんの言葉に、先輩が勢いよく振り返る。その時の表情が普段の先輩らしくなくて…私は思わず目を見開いた。それから、驚くほど大きな音をたてて机を叩く。

「お客さんが来てる時に、そんな話しないで！どこまで無神経なの！？」

「…じ、ごめんなさい…」

怒鳴るマナミ先輩の声に、驚いたのはお母さんだけでなく私もだ。一真だけは、相変わらず黙ってそれを見ていた。

「お2人も、ごめんなさいね…」

「いえ、気にしてませんから…」

小さくなつて弱々しく謝ってくれるお母さんに、私は首を振つて  
そう答える。驚きを何とか押し込めつつ応じた私にもう一度頭を下  
げて、お母さんはそのまま部屋を出て行った。

「…ごめんね、ハルカちゃん。びっくりさせて…」

目の上辺りを右手で覆うようにしながら、マナミ先輩は吐息まじ  
りにそう言う。「いいえ」と首を振ると、先輩は大きく息を吐いた。  
複雑な表情だけれど…お母さんに向けられる怒りは消えて、いつも  
の先輩に戻っている気がする。

「…うまくいつてないのよ、あの人は」

ポツリと呟くように言つて、先輩も私と一真の向かい側に腰を下  
ろした。お母さんが置いていった紅茶とお菓子を私たちの方へ寄  
せて、呟く。

「そうね…その辺の話から聞いてもらおうかな。…私の、過去」  
伏せ目がちの先輩が、そう何かを決意したように話し始めた。

\*\*\*\*\*

「…あの人はね、父の後妻なの」

先輩の第一声に、私は少しだけ目を見開いた。…どつりで、似て  
いないと思つた。お母さんも先輩も美人だけれど、質が違う気がし  
て…。

一真はやはり知っていたんだろう。無言のままあぐらをかいて先輩の話に耳を傾けていた。

「私ね、こんな家に育ったから…昔から何不自由なく育てられた。

……『愛情』以外は」

ありがちな話だけどね、と、マナミ先輩は自嘲するように笑う。

「父も本当の母も、どうしようもない人だった。父は仕事ばかりの人で、家庭を顧みようともしなかった…。元々母とは家同士が決めた結婚だったから。でも母の方は、そうじゃなかった。父のことが好きだったんでしょね。父の気を引くために私を産んだ。…だけど、そんなことで父が母を振り向くわけがない。思い通りにいかない母親の私への態度は、悪魔のようだったわ」

そこで言葉を切ったマナミ先輩は、当時のことを思い出したのか少し苦々しい表情を浮かべた。

「父が振り向かない苛立ちを、全部私にぶつけてきた。…八つ当たりね。さすがに殴られたりすることはなかったけれど…言葉の暴力は凄まじかった。『死ねばいいのに』『何で産まれて来たんだ』『あんたなんか産むんじゃない』『あんたなんて必要ない』…。幼稚園に上がる前の、ほんの2、3歳の子どもによ？」

そんなひどい言葉を、口にできる人間がいるなんて…。私は、怒りと悲しみで目の奥がカアツと熱くなっていくのを感じた。

「家政婦さん…さっきの、岡田さんというんだけど…昔からよくしてくれたから、母はそれに甘えて育児放棄していた。私の世話もしない、母親らしいことなんて何もしてくれなかったことがない。それで

も幼い私には… たった一人の母親だった」

つないでもらえない手を、それでも伸ばして渴望するのにどれほどの勇気が必要だっただろう。 たった3歳の幼い女の子の苦しみは、想像を絶するものがあつた。 自分を見てくれなくても… 先輩にとつては大好きなお母さんだったんだ。

「幼い頃から、母の顔色ばかり伺っていた気がする。 こうしたら私を見てくれるかな。 こうすれば喜んでくれるかな。 …それは、母が父に求めたものと同じだったのかもしれないわ」

「……………」  
「だけど、そんな私の必死さが報われることなんてなかった。 やはり母にも私にも関心を示さない父に、あの人はやがて嫌気がさすようになった。 父が自分を見てくれないことを私のせいにして八つ当たりするのにも疲れたのかもしれない。 あの人は… 縋りつく私を突き飛ばして、この家を出て行ってしまった」

伏せ目がちの先輩を見つめる私のそれが、何かで滲んでくる。 それがつまりは涙だと認識する頃には、視界が揺れるほど潤んでしまっていた。

「母が出て行った後、私はずっと家の門のところで待ち続けた。 いつか帰ってくるかもしれない。 いつか私を抱きしめてくれるかもしれない。 …叶わない、そんなバカな夢を見ながら」

「……………」  
「一ヶ月ほど、朝から晩までそこに立つてたかしら。 ある雨の日…、傘も差さずに立ち尽くしていた私に、一本の傘がかけられた。 顔を上げたそこにいたのは… 母より少し年上の、キレイな女の人だった」

『アナタ、最近ずっとここに居るわね。 ここのおうちの子なの？』

『……………』  
『風邪引くわよ。おうちに入ったら？』  
『……………』

「そう言った女の人は、私と同じくらいの男の子を連れていた。それに答えずにいた私から、何か訳アリだと悟ってくれたのかもしれない。ニツコリ笑って、小さな袋を差し出してくれた」

『それじゃ、ちょっと時間ある？おばちゃん今買い物してきたんだけど買いすぎちゃってねー。荷物が重くて大変なの。家、すぐそこだから、運ぶの手伝ってくれないかなあ？手伝ってもらえたらお礼にホットミルクご馳走しちゃうけどな』

『……………おばさん、大変なの？』  
『そうよー。重くて重くて』

「袋に入ってたのは、小さなお菓子が一つだった。重いはずなんじゃないの。でも子どもの私には、その女の人がホントに困ってるんだと思ったのよね」

手伝わなきゃ、と思ったんだと、マナミ先輩は苦笑いを浮かべる。

『マナミ、手伝う』

『ありがとうー。マナミちゃんっていうのね、よろしくね』

「優しい笑顔と、頭を撫でてくれる温かい手は、今でも忘れられないわ」

それはきつと、マナミ先輩が自分の母親に求めてやまないものだったからに違いない。

『さて、じゃあ行くうか。准一、しっかりマナミちゃんと手つなくのよ』  
『うんっ』

それがタクミ先輩と、先輩のお母さんとの出会いだったんだと…  
マナミ先輩は続けた。

\*\*\*\*\*

「母親の育児放棄で、私は親と公園に遊びに行ったりっていう当たり前のことをしたことがなかった。だから友達もいなかった。他の家に遊びに行ったのもそれが初めてだったわ」

言葉通りホットミルクをご馳走になり、タクミ先輩と遊んで…そんな子どもなら当たり前の体験が、きっとマナミ先輩には当たり前じゃなかったんだろう。

「私を連れて帰ってすぐ、タクミのお母さん…佳奈さんは屋敷にもちゃんと連絡を入れてくれたみたいだった。日が暮れる頃に、岡田さんが迎えに来たわ。謝る岡田さんに、佳奈さんは首を振って答えてた。』  
『どうして謝るんですか？マナミちゃんはうちの息子の遊び相手になってくれただけですよ』  
って「

「……………」  
「それから佳奈さんは、私にも言うてくれたの。』  
また遊びに来てくれる？』  
って「

マナミ先輩の話聞いていただけで分かる。タクミ先輩のお母さんは、とっても素敵な女性だったんだな、と……。タクミ先輩の家に一度行かせてもらった時に、仏壇に飾られた写真だけは見せてもらった。確かに、マナミ先輩が話す女性像とイメージが違わない。

「今思うと、うちの屋敷は地域でも目立ってたから……。どんな家かなんて噂は皆耳にしていたんだと思う。それで、佳奈さんは私のことも気にかけてくれていたのかもしれない」

「……………」  
「それから、私は何度もタクミの家に遊びに行った。そこはとても居心地が良かったから……。優しくて厳しくて、子どもに愛情たっぷりのお父さんとお母さん。年の離れたしっかり者の理沙さん。そしてタクミ……。私の理想を、絵に描いたような家族だった」

父親が仕事ばかりでろくに戻らず、母親は実の娘を捨てて出て行ってしまった家よりも……。そのタクミ先輩の家族に憧れを抱いたのは、当然と言えば当然だったのかもしれない。

「本当に、私はずっと入り浸りだったわ。おかげでタクミとは兄妹のように育った。だけど、温かい家庭に包まれて育ち始めた私は……。やがて自分の中に今までと違う感情が芽生え始めるのを感じた。それが、自分自身が大きくなって色んなことが分かるようになってきたからなのか、タクミの家で得られる温かさが大きすぎたせいかわからない。けどどはつきり言えるのは、その感情というものがない。父と母に対する『憎しみ』だったってこと」

「……………」  
「妻に家を出られても、全く気にしない父。そして、実の娘を平気

で突き飛ばして捨てて行ける母。タクミの両親と比べれば比べるほど…憎しみは募っていくばかりだった」

それはきつと、タクミ先輩のお母さんがマナミ先輩に注ぐ愛情が、同情や偽りのものじゃなかったからだろう。血は繋がっていなくても本当の愛情を知った先輩は…実の親でさえ恨むしか術がなかったのかもしれない。

「そんな時、私とタクミは揃って幼稚園に入園した。そこで待っていたのは、残酷な大人たちの言葉だった。私が母親に捨てられたという事情は皆知ってる。大人の反応は様々だったけれど、どれもひどいものだった。『あの子とは関わっちゃダメ。遊んじゃダメよ』。そんなことを平気で自分の子どもに言える親がいる。逆に、『あの子は親に捨てられたかわいそうな子なんだから優しくしてあげなさい』。そんなことを言う大人もいる。多種多様だったけれど…どれも、私にとっては耳を塞ぎたい言葉だった」

一真が初めて、あぐらの上で握った拳に力を込めたのがわかった。私と同じ…行き場のない怒りを感じていたんだろう。

「それから、私は人が怖くなった。誰にも心が開けなくなった。子どもだから分らないとも思ってたのかしら？幼い私の前で、大人は誰だって残酷だった。だから…誰も信じないし、信じられない。関わりたくないし、関わってほしくない。…そう思った。タクミの家族以外は」

「……………」  
「心を許せるのは、タクミの家族だけだった。私を愛してくれるのは…私が愛せるのは、あの人たちだけだった。それが…中学まで続いたわ」



「……………」

マナミ先輩の言葉に、私はふと首を傾げる。

『中学まで』…ということとは…。

「中学で、何かあったんですか？」

尋ねると、先輩は緩く笑った。懐かしむような…悲しむような、複雑な微笑み。

「ある出会いがあったの。…須田先輩っていう、一人の先輩との一真も知っている人なのだろう。」

その名前を聞いた途端に、一真が少し目を伏せたのがわかった。

「私が、大好きだった人」

遠い目をする先輩は、目の前の私ではなく過去の何かを見ているようだった。そんな先輩の一言に、私はわずかに目を瞠る。

「……………」

開けていた部屋の窓から、タイミングよく私たちの間を温かい風が駆け抜けていった。

「佳奈さんは…実は、空手道場の師範だったの」  
一呼吸置いた後、マナミ先輩は再びそう話始めた。窓から吹き込んでくる風が、彼女の髪を撫でていく。

「タクミは小さい頃からずっと、佳奈さんに空手を教わってきた。タクミだけじゃない…近所の子がたくさん、佳奈さんの道場に通ってたわ。子どもが大好きで誰にでも分け隔てなく優しくかった佳奈さんは、皆に好かれてた」

マナミ先輩はそう言っつて、喉を潤すために紅茶を一口飲む。正座した足を崩さないままそれを見ていた私は、そこでふと思いついた。た。

…それで、だ。

七夕祭りで、チンピラみたいな相手の拳を全部受け流すなんて芸当ができたタクミ先輩に合点がいく。それは、お母さん譲りの強さだったんだ…。

「私はさすがに空手はやらなかったけれど、タクミについていつも道場に遊びに行ってた。…そこで中学に入ったばかりの頃、出会ったの。須田先輩に」

マナミ先輩が好きだったというその須田先輩は、タクミ先輩のお母さんの教え子だったのだ。そう納得しながら話を聞いていた私の前で、ふとマナミ先輩が立ち上がる。部屋の隅にあるクローゼットを開け始め、一番奥の方から何かを取り出した。

『アルバム』…？

「これが、須田先輩」

めくったアルバムの最初のページ。今より幼いマナミ先輩とタクミ先輩、そして、優しいような笑顔で笑う男の子がいた。

それを指差しながら、マナミ先輩は複雑そうに目を伏せる。少し埃っぽいそれは…ずっとマナミ先輩がこのアルバムを開けずにいたことを物語っていた。

「頭も良くて、運動神経も良くて…空手をやってる姿なんて惚れ惚れするくらいだった。性格も良かったから、誰からも好かれてた。うちの中学でも、須田先輩を知らない子なんていなかったくらいよ」  
須田先輩は、マナミ先輩たちより2つ年上だったらしい。

「その頃の私は、幼稚園の時とは少し状況が変化してた。幼稚園の頃って、まだまだ少しは親の交友関係に子どもも左右されるでしょ？ けどさすがに小学校に入った頃からは子ども同士で友達を選べるようになってたし、あからさまに私に同情や優越感なんていうものを露にしてくる大人はいなくなっただけだ。だから友達もできたけれど、それはとても表向きなもので…誰にも本当に心を開けない性格は変わらなかった。何でも話せるのも、いつでも隣にいてくれるのも…全部、タクミだけだった」

「……」

「でも、そうやって頑なに閉ざしてしまっていた私の心の中に、ひょいって簡単に飛び越えて入ってきてしまった人がいた。…それが

……須田先輩」

渡されたアルバムをめくると、そこにはどれも楽しそうな笑顔の3人がいて。どれだけその時間が幸せだったのか、私にも安易に想像できる。

「不思議な人だった。優しくて、包容力があって…。何も口に出さなくても私の閉ざされた心なんて全てわかって、何も言わずに傍にいてくれる…。そしていつしか、その凍った心すら溶かしてしま…う…。そんな温かい人だった」

中学で須田先輩のことを知らない人がいなかったということはもちろん、一真も知っているんだろう。横目で私が持つアルバムの写真を一瞥しただけで、一真は再びマナミ先輩の方を見据える。それにつられるように私もマナミ先輩を見上げると、彼女はそれに気づいて微かに笑った。

「生まれて初めて、人を好きになった。タクミに対する家族愛とは違う…。そんな想いを自覚してからは、私はいつも先輩を追いかけたわ」

『せんぱーい』

『？』

『私と付き合おうよ。色々とお買得だよ』

『却下。もうちょっとお前が大人の色気持ったらな』

『ええっ？同級生の中では大人っぽいって言われるんだけど』

『「お買得」とか言って自分を安売りするうちはまだまだイイ女にはほど遠いぜ』

そう言っただけでニヤリと笑ったという須田先輩の笑顔が、彼に会ったことのない私にも簡単に想像できた。

「中1の時にすぐ好きになったから…一年以上片想いしたかな。今思うとそう長い期間でもないんだけど、思春期の頃に一人の人を思うのに1年って結構な月日よね。その間何度も告白したけど、どれも先輩は笑顔でかわしてたわ」

…そこまで聞いて、思い出した。まだマナミ先輩とこれほど話ができるようになる、もっと前。…そう、あれは確か、今年のホワイトデーの日だった。

『あなた、数年前の私にそっくりだから』

確かにあの時、マナミ先輩は私にそう言った。

須田先輩を追いかけていた、マナミ先輩。

タクミ先輩を追いかけていた、私。

きっとそこに、マナミ先輩は自分の影を重ねてしまったのだろう。

「ハルカちゃん自身がイイ子だっていうのももちろんあるけれど、私はどうしてもあなたに昔の自分を見てしまった。…だから、憎めなかったのよね。あなたのこと」

…先輩…」

「私は、先輩とのそのやり取りすらどこか楽しんでた。先輩の方はどう思ってたかわからないけれど…彼女にはしてもらえなくても、かわいがってもらってたのは本当。先輩は一人っ子だったし、タクミと私のことを弟と妹みたいに思ってたのかもしれない。色んなところに連れていってもらって、色んなことを教わったわ。2歳離れてるとはいえ、同じ中学生とは思えないくらい大人びた人だったから…」

確かに、アルバムの写真の背景は、どれも海や山や…レジャーに

出かけた時のものようだった。満面の笑顔の3人は、本当の兄弟のように仲が良さそうだった。

「でもそんな幸せも、予期せぬ一瞬に全て奪われてしまったの」

再び視線を落としたマナミ先輩の言葉に、私はただならぬ何かを感じてゴクリと息を飲む。思い当たることがあるらしく、一真は先輩と同じように目を伏せた。

「4年前の7月下旬、雨の日だった。その日は一日大雨で…。タクミの直前の仕事が終わるのを待ってから帰っていたら、余計に雨がひどくなっていたわ」

『もうー、准一のせいで遅くなっちゃったじゃない』

『だから先に帰っていいって言ったのに』

『だって、今日は道場行く日でしょ？私も一緒に行くー』

『はいはい。先輩目当てね』

「そう言っただけで肩を竦めたタクミと並んで、いつもの通学路を足早に下校していた。商店街を抜けて大通りへ出たところで、私は交差点の向こう側に見慣れた傘を2つ見つけた。それは、先輩と佳奈さんのものだった」

その時、もう須田先輩は高校生になっていたらしい。

学校帰りにそのまま道場に行こうとしていた先輩は、ちょうど出かけていた佳奈さんと偶然会ったんだろうとマナミ先輩は言う。恐らく、2人で道場へ向かっていたんだろう、と…。

「あ、先輩と佳奈さんだ」

声を上げたマナミ先輩の隣で、「ホントだ」とタクミ先輩が応じたらしい。そのすぐ後、マナミ先輩は周囲が振り向くほどの声で先輩を呼び、大きく手を振った。

「せんぱーいーいー!!」

ブンブンと振った手に、やがて先輩と佳奈さんが振り向いたという。

「交差点の向こう側でこちらに気づいた先輩は、『おう』と手を振って応じてくれた。それから笑顔で、信号を渡ってこっちに来てくれようとした……その時、だった」

キキキキイイいと、凄まじい音を響かせた大きなトラックが視界の片隅に映ったと、マナミ先輩は続ける。

それはきつと一瞬のことで、マナミ先輩もタクミ先輩も……きつと瞬時には何が起こったのかわからなかっただろう。

「信号は確実に、青だった。何が起ころうとしているのか……刹那では判断できずに目を見開いていた私が見たのは、交差点の向こう側で飛び出した猫、その猫を避けようとしてハンドル操作を誤ったトラック、

そのトラックの前で驚きの余り固まってしまっていた先輩、……そして……」

「……」

「先輩をかばおうとしたのか、咄嗟に交差点に飛び出した佳奈さんの……姿だった」

一瞬のことなのに、冷静になって思い返すとそれはスローモーションのようだったとマナミ先輩は言う。ストロボで撮影されたように断片的なそれが、全てつながった頃にマナミ先輩が見たのは…。

「トラックに轢かれて血の池の中で倒れていた…佳奈さんと先輩の姿だった」

それは、壮絶な光景だっただろう。

教え子を守ろうとして須田先輩をかばおうとした佳奈さん。それと、その腕に守られながらも共に轢かれてしまった先輩…。吹き飛ばされてしまって折れた傘が、事故の凄惨さを物語っていたかもしれない。

「周りの人たちが集まってきても、私は足がすくんで動くことができなかつた。救急車が到着してもパトカーが来ても、何が起ったのかなんてわからなかつた。ただ…隣のタクミの手を、震えたそれで握り返すことしかできなかつた」

封印したかつたはずの記憶を全て思い出したのだろう。マナミ先輩の声は、段々と掠れていきその目には涙が溢れていた。

「須田先輩は…病院に運ばれた数時間後に、そのまま亡くなつてしまった」

「!……」

思わず口元を手で押さえて、私は漏れそうだった言葉を押し込める。一旦はおさまっていたはずの涙が、再び視界を潤ませていった。



「そして、佳奈さんもその翌日に……。でも、佳奈さんは亡くなる数時間前に一度だけ意識が戻った。先輩を喪って、抜け殻のようになつていた私に……佳奈さんは言つたわ」

『マナミちゃんの好きな人、守つてあげられなくてごめんね……』

「それが、私に向けられた佳奈さんの最期の言葉だつた」

「……………」  
「ぶわ、と、溢れてきた涙で瞳が揺らぐ。ボロボロと零れるのを拭う余裕なんてなかった。それを見てなのか、マナミ先輩の目からもこらえていたはずの雫が零れ落ちた。」

「誰も、悪くなかった。トラックの運転手だつて、飛び出してきた猫の命を守ろうとしてハンドルを切つたのだから……。それが結果的にはもつと悲惨な事故を生み出したからと言つて、誰も責めることはできない。……少なくとも、先輩とタクミの家族はそう言つたわ」  
「……………」

「でも、それなら私は？ 私は悪くないの？」あの時、先輩を呼ばなければ『。』あの日、日直のタクミを待たずに言われた通りに先に帰つてれば『。』あの頃、私が先輩のことを好きにならなければ『……………考え出すと、キリがなかった』

「……………」  
「わかつてる。誰も私のことなんて責めるはずがない。だけど、遺された者はどうしても自分を責めてしまう。『あの時こうしてれば』  
……………」

それは…きつと、大好きな人を喪えば誰もがそうだっただろう。きつと、タクミ先輩も。タクミ先輩の家族も。そして、須田先輩の家族も…。

「明らかな悪者がいるなら、話は簡単だったかもしれない。その人を恨めばいいんだもの。でも、そういうわけにもいかなかった。誰のせいでもなかった」

誰かのせいにできたら、楽だったのかもしれない。だけどそれもできなければ…人はそれぞれ、自分自身を責めるしかない。

「その後の私は、数ヶ月泣いて暮らしたわ。先輩と佳奈さんを同時に失った悲しみは、癒えるはずもなかった。その頃から少しおかしくなった。再び誰にも心が開けず、自分の殻に閉じこもってしまいがちになった。…その辺りのことは…柴田くんも知ってたの通りだと思っけれど」

地域で有名なほど人気者だった須田先輩のことだ。中学でもすぐに話が回ったに違いない。そうしてそれをきっかけに変わってしまったマナミ先輩のことも、皆もちろん気づいていただろう。

「毎日悪夢を見る。目の前で2人がいなくなる夢…。半狂乱になって叫んで飛び起きることだって少なくなかった。やがて学校にも行けなくなって…部屋に引きこもった。だけどそれも長く続かなかつたわ。…タクミが、私に言ったの」

『いつまでそうしてるつもり』

『……………』

『学校で、皆待ってるよ』

『行きたくない』

『…愛海』

『なんで准一は平気なのよ!?!なんで平然と学校に行けるのよ!?!』

『……………』

『何であれから一滴も涙を流さないのよ!何で泣かないのよ!』

『……………ら』

『…え?』

『……………先輩と母さんが、悲しむから…かな』

『!……………』

『泣き暮らすことが悪いことだとは言わない。その気持ちもわかる。だけど…ずっとそのままじゃ先輩は怒ると思う』

『……………』

「確かに、先輩の『バーカ、何やってんだよ』なんて声が聞こえてきそうだった。そのタクミの言葉に私は揺れ動いた。何とかしなきゃいけない。でも、怖い。再び自分が動き出して…また何かを失うのが怖い。もう、その『何か』はたった一つしか残っていないなかったけれど…」

それは、聞かなくてもわかった。

マナミ先輩に残された最後の『大切なもの』…。それは……………。

「母親に捨てられ、母親代わりに慕った人を亡くし、初恋の人を失い…私に残されたのは、もうタクミしかいなかった」

兄のような、弟のような…。親友のような、恋人のような…。き

つとマナミ先輩にとってのタクミ先輩は、そういう存在だったんだろ。幼い頃から傷を負った自分を、隣で全て受け入れてくれる…大きな存在だったに違いない。

「だから、タクミだけは失いたくなかった。縋るしかなかった。『准一だけはずっと私の傍にいて！私のことだけ想ってて！勝手にどこにも行かないで！』…って」

遠い目をして、マナミ先輩はその時のことを思い出す。それから、少し表情を変えた。自嘲めいた笑みを…口元に浮かべる。

「そこから、なの。私の我儘が始まったのは…。どうしても失いたくなかったから…どうしても一人になりたくなかったから、タクミを『彼氏』として縛りつけた」

「……………え…？」

「『幼なじみ』や『男女の友情』なんて、いつ壊れるかわからない。ましてや、互いに恋人ができれば脆いでしょうね。そんな不確かな関係じゃ、タクミは私の元からいつかなくなる気がしたの」

「……………」

「だけど恋人同士なら…『付き合いましょう』『別れましょう』って始まって終わる分、友情よりも関係性が明確だと思った。だから…もちかけたの、タクミに。『私がいいって言うまで私の彼氏でいて。ずっと傍にいて』って」

優しいタクミ先輩は、マナミ先輩の負った傷がどれほどのものなのかきちんと理解していただろう。…だから…呑んだんだ、そのお願いを。マナミ先輩が、その傷を癒して再び一人で立ち上がれるようになる時まで…。

「……………」  
返す言葉もなく、私はただ口を結んでいた。横で一真も、何も声にできずにマナミ先輩を見つめている。

「ハルカちゃん、今までごめんなさい」

そこで不意に、マナミ先輩が頭を下げる。「え」と驚いて慌てて顔を上げさせると、マナミ先輩は申し訳なさそうに瞳を揺らした。

「ハルカちゃんがタクミのこと好きだって知ってて…ううん、タクミもハルカちゃんのこと好きになっているのに気づいてて…それでも、私はタクミを失うのが怖くて別れることができなかつた。…ごめんなさい」

言われて、私は勢いよく首を横に振る。「やめてください」と慌てて声をかけると、マナミ先輩の涙に濡れた瞳と目が合った。

マナミ先輩の話聞いて、私は理解できた気がする。タクミ先輩の深い優しさと、マナミ先輩の底のない苦しみが。実際に大切な人を亡くしたことがない私だけれど、その先輩の悲しみは痛いほど伝わってきたから…。

「今日タクミから、ハルカちゃんがもうタクミのこと好きじゃないって話を聞いたの」

「……………」

「ね、ハルカちゃん、私には本当のことと言って。それは…嘘よね？」  
真正面から尋ねてくるマナミ先輩は、どう言っただってごまかせる

はずなんてなかった。それになにより、ここで尚も嘘をつくのは失礼な気がした。…タクミ先輩にも、マナミ先輩にも。

「はい」

そう思ったから、正直にそう答えた。すると、この時初めて、マナミ先輩の表情からどこか少しホツとしたような…安堵の色を感じる。

「…そう、なら良かった。ハルカちゃんがタクミのこと好きじゃなくなっただって聞いて…私もようやく気づいたの。ハルカちゃんの想いを無駄にしちゃいけないって…私の二の舞にはさせちゃいけないって」

そこで、一度マナミ先輩は息を整えた。ふう、と小さな深呼吸をして、再び顔をまっすぐ上げる。

「だから、私はタクミと別れることにしたの」

思わず驚きの余り、私は大きく目を見開いた。返すべき言葉を失って絶句した私に、先輩は微笑みかける。

「勘違いしないでね、ハルカちゃんのためでもタクミのためでもなく…これは私のためなの。私が…今後後悔せずに生きていくための…そこまで言い切った先輩の瞳は、まだ涙で濡れていたけれどどこか力強さを感じた。まっすぐに、迷いのないきれいな瞳。こんな目をした人に、私はかつて出会ったことがあるだろうか？

「…本当はね…あの時からわかってたのよね…」

「…え？」

独白のように呟いた一言に、私は思わず首を傾げて先輩を見た。

何のことを言っているのかわからなかったけれど、先輩が緩く笑う

からつられるように眉を持ち上げる。

「今年のタクミの誕生日のこと。ハルカちゃん、覚えてる？」

聞かれて、私は一瞬目を見開いた。もちろん、忘れるわけがない。そんな意味を込めて大きく頷くと、先輩は満足そうに笑った。

「タクミの誕生日の少し前…私、あなたの前でタクミとケンカしたでしょ」

それもはつきり覚えている。タクミ先輩についていった数学準備室で。誕生日当日には、お母さんのお墓参りに行くと言ったタクミ先輩にマナミ先輩が怒っていたっけ…。

「あれね、実は毎年のことなのよ」

苦笑まじりに、先輩は続ける。

「毎年、タクミは自分の誕生日当日は佳奈さんに『ありがとう』を言いに行くの。でも私は、それを認めたことがなかった。だって、認めたら私だけ置いていかれる気がするから…」

「……『置いて』…？」

「そう。先輩と佳奈さんの死を受け入れられずに、過去から逃げようとする私。タクミはそれと対照的だった。佳奈さんの死を受け入れて、ちゃんと自分の生を佳奈さんに感謝してる。…過去から目を背ける私には、真似できそうになかった。…だけど……」

そこで一度言葉を切ったマナミ先輩は、まっすぐに私を再び見つめてきた。それから、ニコリと微笑を浮かべる。過去を思い出して切なく苦しそうに浮かべる笑みとは、正反対なものだった。

「ハルカちゃんは、タクミのその話に涙を流してくれたんでしょ？そして、一緒に佳奈さんのお墓参りに行ってくれたのよね。…本当は、その時からわかってた。タクミが、私じゃなくてあなたを選ぶこと」

「…マナミ先輩…」

何だか胸がいつぱいになってきて、私はキュンと切なく締め付けられる痛みを感じた。だけどそれは決して不快なものではなくて…今ここにいない先輩の笑顔を思い出した時と同じものだった。

「それともう一つ、きっとハルカちゃんが一度は疑問を持ったと思うことへの答え」

「…?」

首を捻って、私はマナミ先輩の続く言葉を待った。そんな私を見て、マナミ先輩は唇の端だけを持ち上げて微かに笑う。

「『どうして私が、タクミのことを苗字で呼ぶのか』」  
「……」

確かに、それは以前から頭の片隅で気になっていたことだった。

しかし昔の話を聞いた限りでは、マナミ先輩はタクミ先輩のことを『准一』と呼んでいなかっただろうか？そう思って不思議そうに表情を歪めると、マナミ先輩が軽く頷いて応じてくれた。

「そう、私はずっと『准一』って呼んできたんだけどね。…偽りの恋人ごっこを始めるまでは」

「……?」

その『恋人ごっこ』がきっかけということとは…その時に何かがあったのだろうか？再び小さく首を傾げると、先輩が少しだけ顔を俯かせる。

「…名前で呼ぶと、そのたびに思い出しそうだったから」

わずかに声のトーンを落としたマナミ先輩だったけれど、それでもはつきりと聞き取れた。



…思い出す……？

何、を…？

理解できずに眉を少しだけ持ち上げた私に、先輩は続ける。

「須田先輩の名前もね、淳一だったの。字は違うけれど…タクミと同じ名前だったから…」

タクミ先輩を今まで通り『准一』と呼ばば、どうしてもその度に須田先輩を思い出してしまいそうだったことを告げて、マナミ先輩は力なく笑う。

全てのパズルのピースが、音をたてて完全に填まっていくのが感じられた。今まで疑問だったこと、想像もつかなかったこと…全てが繋がりを見せる。それは決して弱々しいものではなく、確かな強さを持った糸のようだった。

「私の話は、これでおしまい。…聞いてくれてありがとう、2人共」  
最後にニツコリと笑って見せた先輩。その笑顔に微笑み返そうとしたけれど、うまくいかなかった。

話を聞いている途中から…私の胸に、一つだけひっかかっていたことがあったからだ。そしてそれは恐らく、マナミ先輩の誤解を解く鍵になれる気がする。

「マナミ先輩」

呼びかけると、すっかり冷め切った紅茶に手を伸ばしていた先輩は顔を上げてこちらを見た。居ずまいを正すように姿勢を直して、私はその目をまっすぐに見据える。

「先輩は、一つだけ間違っているとあります」

はつきりと告げると、マナミ先輩の両の目がゆっくりと見開かれた。それと同時に、隣の一真が訝しげに私を振り返るのがわかった。

「さつき、先輩言いましたよね。タクミ先輩に昔、『何であれから一滴も涙を流さないのよ！何で泣かないのよ！』…そう言ったって、尋ねるように言葉にすると、マナミ先輩ははつきりと大きく頷いた。

「ええ、言ったわ。それに対するタクミの答えが『先輩と母さんが悲しむから』だったってことも」

「……すみません、それは違うと思います」

「…え？」

言つと、マナミ先輩が眉を寄せて私を見る。意味が分からずに首をかしげて、まっすぐに私を見据えて続く答えを待った。

「正確に言つと…それだけじゃないと思うんです。きっとタクミ先輩は、『泣かなかった』んじゃないと思います」

そこで一度言葉を切って、私は少し深く息を吸う。それと同時に、最後の答えを吐き出すように告げた。

「『泣かなくてすんだ』んだと、思います」

「……」  
こちらの言葉を受けて瞠目したまま動かないマナミ先輩に、私は  
畳みかけるように続ける。

「タクミ先輩だって、兄のように慕っていた人と実のお母さんを亡  
くして、悲しくなかったわけがない。それでも泣かなかったのは…  
泣かなくてすんだのは、先輩の隣にマナミ先輩がいてくれたからだ  
と思います」

タクミ先輩の性格を考えれば、きっとそうだ。泣かなかったわけ  
でも、泣けなかったわけでもなく…。ただ、同じように大切な人を  
失って同じような痛みを感じてくれる人が、隣にいたから。

つないだその手から感じられるぬくもりが、マナミ先輩だけでは  
なくタクミ先輩をも救ってくれたに違いない。

「マナミ先輩が、一方的にタクミ先輩に依存していたわけじゃない  
と思うんです。…きっと、マナミ先輩の存在もタクミ先輩の救いに  
なっていたと思います。…だから…さつき先輩が自分のことを『我  
儘』って言ったのは、違うと思います」

「……………」  
そこまで言ったけれど、マナミ先輩は固まったように目を見開い  
たまま動かなかった。返事がないことに少しだけ不安になって隣の  
一真を仰ぎ見ると、あいつは唇の端を持ち上げて笑い返してきた。  
それを見て、私はやはり自分の予想はずれていないんだらうと自  
信さえ持つ。

きつと、それがマナミ先輩の知りうる最後の「真実」だらう。

「…ありがとう」

長い沈黙の後、再び目に涙を溜めたマナミ先輩が、そう呟くように言う。

その一言に微笑み返して、私はただ小さく首を振った。

「…お前、やっぱりすごいな」

愛海先輩の家を、夕方、日が沈む前に後にした。駅までの道のりは少し遠く、来た時と同じ道を並んで歩いていたハルカに俺はふとそう声をかける。隣で何事かを考え耽っていたハルカは、「え」と小さく声を漏らして俺を見上げた。

それには詳しい説明を返してやらず、俺はふいと視線を逸らす。前を見据えて歩きながら…心の中で嘆息した。

…実際、こいつは本当にすごいと思う。

あれほど誰も変えられなかった愛海先輩を…簡単に変えてしまったのは他でもないこいつだと思ったからだ。

俺が知っていた愛海先輩の過去というのは、彼女の家庭環境が複雑であることと、好意を寄せていた須田先輩が亡くなってしまったことだけだった。そのすぐ後にタクミ先輩と付き合い始めたから、2人の間で何かがあったんだろうということは想像できていた。恐らく、偽りの恋人関係を築いているのだろう…と。

それは俺だけじゃなく、地元の連中なら皆が分かっていることだった。…だからこそ、2人は地元の奴らが進学しない遠い高校を選んだのだろう。

俺は、その程度の事実しか知らなかったから…。愛海先輩の口から紡がれる真実に、驚きの連続だったのは言うまでもない。彼女を深く傷つけた大人たちの言葉には本気で怒りを覚えだし、須田先輩を失った悲しみには本気で胸が痛んだ。

だからこそ、どうして愛海先輩が変わったのかが分かる気がした。

ハルカは、愛海先輩の話聞いて本気で涙を流した。そして、極めつけにあの一言…。だ。

拓巳先輩までもが愛海先輩に救われたんだと…今まで誰かが言えただろうか？誰にもできなかった当たり前の事実気づけたのは、唯一ハルカだけだったんだ。

「マナミ先輩は…」

さっきの呟きの答えは得られそうにないと思ったのが、ハルカが改めて話を変えた。恐らくこいつだって、複雑な思いもあるのだろう。どこか苦々しい感情を噛み締めるように眉を顰めたまま…前を見ながら続けた。

「家族とは…どうなるのかな」

小さな問いに、俺はわずかに目を瞠る。恐らく、さっきの継母とのやり取りも気になっているんだろう。愛海先輩のことを深く心配しているらしいこいつに、俺は本気で頭が下がる思いだ。

…さっきまで恋敵だった相手を、ここまで思いやれる人間なんてそうはいない。しかもハルカのそれは、偽善や同情なんかじゃなく

…いつだって本気の想いだ。

「多分：大丈夫だろ」

俺の答えを根拠がないと捉えたのか、ハルカは眉間の皺を深くして俺を見上げる。それを一瞥して返してから、俺は小さく息をついた。

「噂で：聞いたことがある。愛海先輩の父親は：若い頃から実業家で仕事一筋な人だったけれど、ある時我に返ったんだ、って」

「…『我に』…?」

「そう。自分の他を省みない生き方に、疑問を持ち始めたらしい。そうして家族と向き合わなきゃならない：そう気づいた時には、もう奥さんとはつくに家から出て行ってしまっていたって」

妻がいなくなったことに気づかなかったわけじゃない。ただ、その事実を重大なことだと認識できたのが遅かったただけだ。

「そして、せめて残された娘とは正面から向き合おう：そう思った時には：娘の方が完全に心を閉ざしていたって…」

その時の父親の後悔の念は一体どれほどのものだっただろう。反抗期を迎える年代ではあるけれど、愛海先輩のそれはそんな生半可なものじゃなかったはずだ。

「やがて再婚したい人ができても、娘が心を開くわけはなかった…  
…らしい」

地元の情報網というのは空恐ろしいものがある。うちの母親は「噂話」があまり好きなタイプではないけれど、顔が広すぎるのが難点だ。入ってくる周りからの情報を拒むわけにもいかなかったから、自然と俺にだってそれは漏れ聞こえてきていた。

「ま、つまりだ」

黙って俺の話の話を聞いているハルカに、俺は少しだけ声のトーンを上げて続ける。

「父親と継母は何かして娘と仲良くしようと思ってる。後は…娘の方が心を開ければ万々歳、だろ」

「……開けるかな、マナミ先輩」

前を見据えたままのハルカは、今その瞳に何を映しているだろう。目の前の住宅街ではない…もっと遠い何かを見つめているようで、少しだけ目を細めた。

「お前が、そうしたんだろ」

唇の端を持ち上げて、俺はそう言う。…そう、きっと愛海先輩はまだ変われる。家族とも、本当は向き合わなきゃならないことはわかってはいるはずだから。それに気づけたのも…やはりハルカのおかげに他ならない。

「私、そんな大それたことしてないよ」

ため息まじりに言うハルカに、俺は「それでいい」と思う。こいつが自分の強さを誇示し始めたら…全ては無意味で無価値になるに違いない。偽りのないハルカの想いが…人を救うのだから。

「…一真はさ」

小さく俺の名前を呼びながら、ハルカは話題を変える。少し遠慮がちなのその声に、俺は再びそちらを横目で一瞥した。

「どうして…あんなにタクミ先輩を敵視してたの？」

「……わかんねえ？」

「わかんない」



はつきりと答えたハルカに、今度は俺が吐息を漏らす。そんな俺に、ハルカは頭を振って応じた。

「マナミ先輩のことが好きだから……ってだけで、タクミ先輩を敵視するほど一真は子どもじゃないと思う。だけど……」

「だったら尚更わかんねえって?」

尋ね返すと、ハルカはコクリと大きく頷いて見せる。それに口元だけを歪めるように笑い返して、俺は肩を竦めた。

「前に言っただろ、あの男が『偽善者』だからだ」  
「……」

ハルカの目が、「どこが」と言わんばかりに少しだけ光る。睨むわけでもないけれども強さのあるそれに冷笑を返して、俺は唇の端を持ち上げた。……もちろん、その我ながら嫌な笑みの対象はハルカではなくてここにいない男へのものだ。

「実の母親に捨てられ、須田先輩を失って……愛海先輩がそれ以上傷つきたくなくて拓巳先輩に縋ったのは、『逃げ』だ」

俺が続けた言葉に、ハルカが再び眉を寄せたのが分かる。訝しげに視線を上げて、俺の真意を探るようにこちらを見る。

「それは……でも、私は仕方のないことだったと思う。人間なら逃げたくなくて当たり前でしょ?」

抗議するように向けられる視線を受け流して、俺は頭を振って吐息を漏らした。

「その通りだ。だからこそ、俺はそれを受け入れてしまったあの男が許せない」

はつきりとそう言い切つて、俺は苛立ちからなのかわずかに自分の歩く速度が早くなったのに気づく。半歩後ろで、ハルカがそれに遅れないように着いて来ようとわずかに小走りになった。

「逃げるのを甘やかすのが本当の優しさか？逃げたつて、愛海先輩の為にならないのに」

「……………」  
「本当に愛海先輩のことを思うなら、思い切つて突き放すべきだったんだ。…突き放した上で、フォローしてやるのが優しさだろ？全面的に甘えさせてどうするんだ」

「……………」  
「なあハルカ、俺の言ってること間違ってるか？」

早まっていた足を止めて、俺はハルカを振り返つた。それに合わせて立ち止まったハルカは、まっすぐに俺を見上げる。真剣な眼差しで見つめ返してきて、あいつはわずかに首を振つた。

「間違つてないよ」  
はつきりと答えた後で、「でも」と力強く続ける。

「タクミ先輩も、間違つてないと思う」  
続いた言葉に、今度は俺が眉を顰めた。

睨むように目を細めたけれど、ハルカはそれくらいで動じたりしない。まっすぐに見つめ返すあいつは、一歩も引かない目をしていった。

「一真の言いたいこともわかる。でも私は、タクミ先輩は偽善者なんかじゃないと思う。だつて先輩は、マナミ先輩を甘やかすだけじゃなかったもの。偽善者だったら、4年もマナミ先輩がそれ以上傷つかないように守ってあげることなんてできない。せいぜいその場しのぎで甘やかすことくらいしかできなかったはずよ」

「……………」

「タクミ先輩の覚悟は、相当なものだつたと思う。それは2人を中学の時から近くで見てきた一真なら…私よりよくわかるでしょ？」

「…わかんねえな」

「……………」

ギリ、と唇を噛み締めると、わずかに血の匂いがした。尚も俺を正面から見据えるハルカは、強い眼差しのままこちらを見ている。「結果的に、お前に惚れてることを愛海先輩に感づかれて傷つけたじゃねえか。十分中途半端なことしてんだろ」

「……………」

この時初めて、ハルカは俺から目を逸らした。自分でも言いたくない言葉なのか、少し息を吸い込んでから声を絞り出す。

「タクミ先輩は……………途中で迷っても、最終的にはマナミ先輩を選んだはずだよ」

「……………」

わずかに目を見開いた俺に、ハルカは少しだけ悲しそうに微笑んで見せた。

「人間だもん。迷うことだってあるよ。でもタクミ先輩は……………最終的にはマナミ先輩を裏切ったりしない。葛藤はあったかもしれないけど……………最後までマナミ先輩を見守る覚悟はあったと思うよ」

「……………」

返す言葉を失って、俺はただ黙りこむ。そんな俺を横目で見上げながら、ハルカは今度はいつも通りの笑みを口元に浮かべた。

「本当は、わかってるんだよ」

続いたハルカのそんな意外な言葉に、俺はピクリと眉を持ち上げる。わずかに目を見開くと、ハルカは手にした鞆を少し持て余すようにしながら言った。

「一真が、本当に許せないのはタクミ先輩じゃなくて……………誰なのか。自分でわかってるんでしょ？」

「……………」

念を押されるように言われ、俺はそれを黙殺する以外に術がなか

った。

…そう、本当に俺が許せないのはずっと自分自身で…。

好きな人を助けられる位置にすら立てていないことに、腹をたてていたはずだった。

毅然と真正面から拓巳先輩を責めることでしか自分を守れなかったのは、己の弱さ故だ。けどそうでもしないと、俺は自分の無力さに押しつぶされそうだったから。

「一真は、悪くないよ」

俺の心の内のどす黒い感情なんて、こいつには全部お見通しなのかもしれない。黙ったままの俺にそう告げて、ハルカは少し速度を緩めて再び歩き出した俺を、半歩分だけ追い越して行く。

「一真がずっと好きでいてくれたから…何があっても支える覚悟をしていたから、マナミ先輩は自分の過去を全て曝け出す決心ができたんだよ」

そう言ったハルカは、ニッコリと笑って斜め後ろの俺を振り返った。その晴れやかな笑顔に、少しずつ頑なに凍りついた自分の中の何か音が立てて溶けていくのが感じられる。

「…やっぱりすげえよ、お前」

苦笑混じりにそれだけ答えた俺に、あいつは「？」と疑問符の浮かんだ表情を返したけれど…。それでも俺は、そう嘆息せざるを得なかった。

一体、この件で何人の人間がこいつの一言に救われただろう？

愛海先輩と、俺と……。

そして、最後に救われるべきあの男。

願わくば、あの人が救われる時にはハルカ自身がその隣で笑っていられたらいい。

俺はこの時、初めて本気でそう思った。

…痛い。

苦しい。

何度も叫び声を上げそうなほど締め付ける胸を、俺は思わず手で押さえた。そうしたって痛みが和らぐことはないと思っていたが、そうすることではしか耐えられそうになかった。

愛海を、二度と裏切るようなことはしないと自分が誓ったはずなのに…。その後に、長谷川があの子を誘う場面を目撃してしまったせいで胸が軋む。

今までどれくらい、俺には胸を痛める資格すらないと自分を責めてきただろう？今回だって例外ではなかったけれど、そんな考えに全て払拭されるほど自分の心は単純ではないようだった。

「……………」

学校から帰ってきて、どれくらいそうしていただろう。制服のまま転がったベッドの上、すぐ傍の窓はすっかり夜の闇しか映し出さない時刻になっていた。

「あ、いたんだ。真っ暗だからいないのかと思った」  
不意に部屋のドアが開けられ、そんな声が俺に投げかけられる。  
寝転んだ態勢のまま視線だけをそちらへ返すと、そこには一つの影  
が立っていた。俺に断りもなく電気を点け、微かに苦笑いを浮かべ  
ている。明るさの灯った照明に照らされた愛海は、そのまま一步部  
屋に踏み込んだ。

「鍵くらいかけなさいよ、無用心よ」  
肩を竦めながらの言葉に、俺は「ああ」とだけ小さく返す。…そ  
う言えば、鍵すらかけた記憶がない。…というよりも、どうやって  
ここまで帰ってきたかもあまり覚えていなかった。

「ちょっと話したいんだけど…いい？」  
遠慮がちに言う口調から、恐らく明るい話ではないだろうという  
ことが想像できる。けれど愛海の表情はどこか晴れやかで…何かを  
吹っ切ったように笑っていた。

「いいよ」  
短く答えて、俺はベッドの上の上体を起こした。足を外へ出して  
腰かけるだけの態勢に移し、愛海がいつもそうするように隣を勧め  
てやる。だけど今日の愛海は、わずかに首を横に振ったまま「ここ  
でいい」と部屋の入口に立ったまま俺を見下ろした。

「今日ね、ハルカちゃんと柴田くんにうちに来てもらったの」

急にそう話を切り出した愛海に、俺はわずかに目を見開く。だれどそれくらいで動揺するわけにもいかなくて、「そう」と努めて無表情に戻した。

「うん、それでね。…全部、聞いてもらった。私の家のことも……」  
一度言葉を切った愛海が、少しだけ目を伏せる。

「須田先輩のことも」  
少しだけ俯いた愛海は、それでもここ数年一度も口にしなかったその名前をはつきりと告げた。

「……」

「全部話せて、すつきりしたわ。それに…ハルカちゃんに救われた。あの子の一言…すごいのね」

笑って言う愛海は確かに、須田先輩が亡くなる前に見せていた明るい笑顔をしていた。彼がいなくなっただけからは…愛海は、笑っていてもどこか陰が差していた気がするから…。

「たった一言の重みが、なんだか嬉しかった」  
何を言われたのかまでは言わなかったけれど、愛海がどれほど救われたのかは理解できた。

「…そう」  
小さく呟いて返すことしかできない俺に、愛海は笑顔のままコクリと大きく頷く。

「准一が、好きになるのが分かる気がした」  
続けて、愛海は長い自分の黒髪を少しだけかき上げた。その動作を見るとはなしに目に映しながら、俺は愛海が4年前までと同じ呼び方で自分を呼ぶのを聞く。



「……だから、ね」

顔を上げて、今度は愛海は俺から目を逸らさなかった。まっすぐに見据えて、それでも口元には微かに笑みを浮かべたまま……。真正面から、俺に告げる。

「別れましょう」

……そんな、一言を。

「……………」

今日学校の屋上で、愛海とあいつの話をした時から……。いつかはこんな日がくると思っていたのかもしれない。俺は意外と冷静に、その言葉を聞いた。

小さく細くため息を吐き出すと、俺はベッドに座った態勢のまま足を組む。そしてまっすぐに愛海を見つめ返すと、「……俺は……」と口を開いた。

「別れないよ」

それは、もう決めていた答えだったから……。愛海があの子への俺の想いに遠慮しているなら、呑むことのできない提案だった。

返ってきた答えが意外だったのか、愛海が大きく目を瞪る。零れ落ちそうな瞳で俺を見つめ、その真意を確かめるように探るような眼差しを送ってきた。

「約束が、果たされてないままだから」  
短く答える俺の言葉に、愛海はただ耳を傾ける。

…そう、まだ何も解決していないのに。

あの子と柴田に自分の過去を話せた…それだけでも、愛海は一步を踏み出せたかもしれない。それでも…何も傷がすぐに癒えるわけじゃない。親に捨てられて先輩を失って…そんな傷、すぐに癒えるわけがない。

ついこの前だって、柴田に会ったせいで中学時代の過去がフラッシュバックしてパニックを起こしたばかりなのに…。そんな状態の愛海と、別られるわけがなかった。

愛海の傷が癒えて…愛海自身が「もういい」と言うまで、俺は傍にいる約束だったんだから。

「……准……」

小さく俺を呼ぶ声は、どこか切なさを秘めたような響き方をした。何かを噛み締めるように…愛海は笑顔を消して眉を寄せる。

「私…あなたに一つだけ言ってないことがあるの」

「……………」

首を傾げて、俺は立ったままの愛海を見上げた。艶やかな黒髪を揺らして、愛海はゆっくりと話し始めた。

愛海が隠していたという…最後の「真実」を。

\*\*\*\*\*

「先輩が亡くなったのは悲しいし、あの時の光景は思い出したくない。母親に捨てられたことも傷ついたし、振り払われた手を思い出すと今でも胸が痛むわ。でも……本当は、思い出したくなかったそんな過去も……徐々に受け入れられるようになってきてた気がするの」  
4年も経ったからね、と、愛海は微かに笑って見せた。それでもその笑顔からは無理をしていることは明らかだし、俺からしたら「まだ4年」だ。

「……でも……この前、柴田に会った時に昔を思い出して悲鳴を上げたくらいだろ」

そう指摘すると、愛海は今度は少しだけ苦笑を浮かべる。「そうね」と俺の言葉を肯定してから、小さく首を振った。

「でもね、違うの。あの時は確かに、瞬間的に色んなことを思い出したわ……。だけどそれも、全く傷が癒えていないからじゃなくて……いるはずがないと思ってた柴田くんに不意に会ってしまったからだわ」

柴田が悪いわけじゃない。それでも、不意打ちで当時の人間に会えば心が乱れてしまった。会う覚悟があって会えば、結果はまた違ったのかもしれないけれど……。そう続けて、愛海は少しだけ目を伏せた。

「先輩がもういないってこと……悲しいことに変わりはないけれど、その事実から目を逸らすほど私はもう弱くない。そうなのは……他でもない、准一のおかげよ」

「……」  
「多分…今なら、一人でも大丈夫。私には力になってくれる友達だ  
って、あんなにいい後輩だっている。彼女じゃなくなったって、准  
一は変わらず幼馴染でいてくれるはず。…そうでしょ？」  
愛海の問いに、俺は答えなかった。

「……」  
黙したまま、わずかに視線を愛海から逸らす。

「だから…准一は十分、あの時の私との約束を果たしてくれたのよ」  
悲しい微笑みを浮かべて、愛海ははつきりとそう口にした。

だから、もう自分から解放されていいんだと言っように。

でも…。

「それなのにどうして、今まで私があなたと別れなかったか分かる  
？」

俺がちょうど疑問に思ったことがわかったのか、タイミング良く  
愛海が俺にそう尋ねた。…恐らくその答えが、愛海が俺に隠してい  
たという「最後の事実」なのだろう。

小さく首を横に振ると、愛海はフツと再び笑って見せた。

「段々と自分の過去を受け入れることができても…別れられな  
かった。一番近くについて守ってくれるその手を、失いたくなかつた

から」

「……愛海？」

名前を呼ぶと、愛海はもう一度まっすぐに顔を上げる。俺を正面から見つめて、少し深く息を吸った。

「…准一、私ね」

最後の言葉を紡ぎ始めた愛海から、俺ももう目を逸らしてはいけない気がした。

「あなたのことが、好きなの」

それが、愛海が最後まで秘めていた「真実」。決してそれは俺が思っていたような「家族愛」のようなものではなかった。

それを口にして笑った愛海は…さっきまでとは違い、最初ここへ来た時のような晴れやかな笑顔に戻っていた。

「……………」

意外な一言に、俺は思わず瞠目した。瞬きすら忘れて、言われた言葉の意味を噛み砕こうと頭をフル稼働させる。

「…だから、ね」

俺が今の状況を理解しきる前に、愛海は先に言葉を継いだ。

「もう可哀想な過去から守ってあげなきゃいけない対象じゃないの。ただ、私があるたと離れたくなかっただけなの」

愛海の唇が、わずかに持ち上がって笑顔を見せる。

「守る対象じゃなくて…一人の女として見た時、准一はさっきと同じ言葉を私に言える？」

「……………」

俺は、返すべき言葉がすぐに見つからなかった。そんな俺に…愛海は、決定的な質問を投げかける。

愛海自身…答えなんてわかっているという風に。

「一人の女としてハルカちゃんと比べた時、それでも准一は『別れない』って私に言える？」

マナミ先輩の衝撃的な話を聞いて、その夜安眠できるはずもなかった。体の疲れは感じるのに目が冴えてしまっているこの状態を、ここ最近でどれだけ経験しただろう。

眠りにつけたのは明け方近くになってからで、せつかく訪れたそれもどこか浅い。やっと本格的に意識を手放した時には、枕元に置いた携帯電話がけたたましいメロディーを奏でた。

相手を確認するより早く、そこに浮かび上がっている時間を見てしまふ。お昼前を指し示すそれに内心で驚きながらも、意外に自分が思ったよりは深く眠れていたことに安堵する。今日が休日であった。学校のある日だったら遅刻どころの騒ぎではない。

「…はい」

寝ぼけながらも通話ボタンを押して、電話を耳にあてた。時刻を確認するのに気をとられて、相手の名前は見ないままだ。

『おはよう、お寝坊さん』

それでも休日に似合う爽やかすぎる声の主が誰なのか一瞬で気づいて、私は思わず全身を悪寒が駆け巡るのを感じた。

「休みの朝から気持ち悪い」

思わずといった感じで呟くと、電話の向こうで一真は「…なんだ」といつもの声色に戻して凄む。

『お前が昼まで寝てやがるから爽やかに起こしてやったんだろっが』

ありがたくもない親切を押し付けられて、私は苦笑い気味にため息を漏らした。

「何か用？珍しいね、休みの日に電話してくるなんて」

『まあ1時間くらい前から電話もメールも何回もしてるんだけどな』

「えっ、嘘っ！全然気づかなかった」

『……お前、昨日の今日でよく眠れるよな』

「……これでも明け方までは眠れなかったんだから」

答えると、電話の向こうで一真が声をたてておかしそうに笑う。

何がおかしいのかこちらにはさっぱりだったけれど、あえてそこには突っ込まずに本題を切り出した。

「それで？どうしたの？」

『お前、今からうちに来いよ』

相変わらず突拍子もない男だ。平然と何でもないことのように言っつて、こちらの返事を待つ。…いや、『待つ』という言葉は正確じゃないかもしれない。どうせ有無を言わさないに決まっているんだから…。

「何で？」

代わりに、理由を尋ねてみた。正当な返事が返ってくるとは思えなかったけれど、私だっていつでも言うことを聞くわけじゃない。

『まさかお前、警戒してんのか』

理不尽大王は鼻で笑うように、そんな問いを投げかけてきた。

だから、私も言い返す。

「当たり前でしょ」

ベッドから床へ足を下ろして、ゆっくりと立ち上がった。



「いくら友達でも、男一人暮らしの家に行くわけないでしょ」  
そう続けると、電話の向こう側からは今度こそ本格的な笑い声が聞こえる。その声に思わずムツとしたが、一真にそれが伝わったかどうかは定かじゃない。

『俺がお前に手出すとも思うか？』

「万が一ってことがあるでしょ」

『お前がAカップのうちには安全だから安心しろ』

「失礼ね！これでもBはあるわよ！」

挑発されるように大声で言い返してから、私はハツと我に返る。マズイと思った時にはもう、一真は見えない向こうで大爆笑していた。

『じゃあな、今から30分後にお前の家の近くまで直に行かせるから』

「さ、30分で用意できるわけないでしょ！？しかも何！？向井くんがいるなら最初からそう言いなさいよ！」

『直だけじゃねえよ。うちには真帆と華江もいるし』

「最初からそれ言えばさっきの会話必要くない！？」

ああ、ダメだ。これじゃ完全にあっちのペースだ。わかつてはいるのだけれど、私は叫ぶのを止められない。喚くように言い捨てて、私は電話を切ってから猛スピードで着替えと身支度を整え始めた。

\*\*\*\*\*

奇跡的に30分で全ての用意を終わらせた私は、家を飛び出して少し行った先で向井くんと合流した。そこから一真の家までは電車

で一駅乗ればすぐだった。私は行ったこともないその場所に、向井くんは何度も訪れたことがあるらしく慣れた調子で案内してくれる。

「そもそも、何で今日皆が集まってるの？」

私の歩く速度に合わせてゆっくり歩いてくれてる向井くんを仰ぎ見ながら、私はそんなことを尋ねていた。

七夕祭りは例外だったけれど、休日に5人が勢ぞろいしたことは今までにない。女同士や男同士で遊びに行ったりしたことはあるし、向井くんと華江が一緒に出かけたりすることはあるみたいだけれど、全員が揃うことはなかった。

どう説明しようか考えめぐらせたのか、しばらく目を所在なげに動かしていた向井くんがやがてこちらを振り返る。

「それは後で一真に聞いて」

答えにならない答えを返されて、私は小さく吐息を漏らした。

一真が住んでいるというマンションは、高校生が一人で住むとは思えないような高級マンションだった。…前から気になっていただけけれど、一真は結構なお坊ちゃんなんだろうか。金銭的に裕福さを感じさせるところが今までにもあったから、そんなことを漠然と思っ。

元より、昨日マナミ先輩の家に驚いたばかりなので、今の私はちよつとやさつとくらいの金持ちじゃビックリもしないかもしれないけれど。

オートロックをエントランスで開けてもらって、向井くんに促されるまま8階へと向かう。5部屋しかないうちの一番奥まで行くと、鍵を開けてくれてあったらしく向井くんがそのままドアを引いた。

「意外に早かったな」

玄関に踏み入ると、奥から顔を出した一真が俺様口調でそう言う。  
「おかげさまで」

プウツと頬を膨らませながら短く答えて、私は玄関で靴を脱いだ。短い廊下を抜けた先に、一人暮らしにしては贅沢なりビングがある。入った瞬間に少し焦げたような香ばしい匂いがして、私はその元を視線で追った。

「こ、焦げた！華江！」

「あら、どうしようかしら」

どうやらそこにあるカウンターキッチンで、真帆と華江が何やら昼食の用意をしているらしい。後ろから近寄ってそこを覗くと、裏面がびつちり焦げてしまったお好み焼きにパニックになった真帆とそれでもものんびりしている華江。

どうしようもなにも焦げてしまったものは仕方ないだろうし、そもそもどうもできないと思う。後ろから真帆の手にしたフライ返しを奪い取り、私はその無残なお好み焼きをひっくり返してみた。

「これくらいなら大丈夫でしょ」

裏面を下に戻して隠しながら、私はそれをそのままお皿に盛り付ける。

「あら、ハルカ早かったわね」

「ええっ？でも真っ黒だよ！？」

どこまでもマイペースな華江のセリフと、お好み焼きの焦げにこだわる真帆の言葉が同時に重なった。そのどちらにも頷いて返して、私はニツコリ笑って見せた。

「大丈夫大丈夫。これくらいの焦げ、人間なら無理でも理不尽大王様なら……」

「聞こえてんだよ、ハルカ」

近くにいないと思っていた理不尽大王が、いつの間にか戻ってきて後ろにいたらしい。冷たい声音で私にそう吐き捨ててきたので、思わず私は肩を竦めて見せた。…大体、お昼時だからってこの2人に料理をさせる辺りが間違っていると思う。そもそもこの「お好み焼き」というチョイスがよく分からない。

不器用な2人に代わって手早く人数分のお好み焼きを作るのを引き受けると、お皿に移し終えた頃には全員から「おおー」と賞賛と拍手をもらった。お好み焼きくらいでこれほど褒められるとは思わなかったけれど…。

「で、今日は何なの？」

テーブルについて、いただきます、と手を合わせた後、私はそこにいた全員を見比べながら尋ねた。ダイニングテーブルは狭いので女三人で占領し、一真と向井くんはソファの前にあるローテーブルで箸を進めている。当の一真は答えそうにないと思ったのか、私の目の前で真帆が「実はね」と口を開いた。

「今日一真に呼ばれてさ、話、全部聞いたんだ」

「…話？」

小首を傾げながら尋ね返した私の手からソースを取りながら、真帆は小さく頷く。

「春日先輩の、話」

返ってきた言葉に、思わず私は隣のテーブルの一真の方を振り返った。

マナミ先輩の話……というところ、昨日私と一真が聞いたというあの話だろう。

彼女の傷すら全て曝け出してしまったのかと思うと少し複雑で、私は眉を寄せて一真を見る。だけど理不尽大王の方は、その視線に気づきながらも何食わぬ顔で焦げたお好み焼きを口に運びながら答えた。

「頼まれたんだよ」と、短く。

怪訝な表情をして、私は無言で続きを促した。

それがわかったからか、一真もまっすぐにこちらを見つめ返してくる。

「昨日の夜、愛海先輩から電話があった」

持っていた箸を一旦そこへ置いて、一真はそう続けた。

「できれば、真帆たちにも自分の話をしてほしい……って。ちょうど今日は休みだし、誰か聞いてるかもわからない学校でするよ。うな話じゃなかったからな」

……だから、真帆たち3人をここに呼んだ……ということだろうか。

それにしてもどうしてマナミ先輩が真帆たちにまで昨日の話を聞かせたかったのかわからない。本当なら、誰にでも話せる話じゃないと思うのだけれど……。

「七夕祭りで迷惑かけたから、って言ってたな」

私の疑問なんてお見通しなのか、タイミングよく一真がその言葉を継いだ。

「あの時、俺たちの中に入ってきたことと、そのせいで色々気を遣

わせたことを気にしてたみたいだ」

「……………」

「…まあ、それだけじゃねえと思うけどな」

続いた一真の言葉に、私だけでなく真帆たちも首を捻りながらそちらを振り返る。

「本当は、ハルカに気を遣ったんじゃないかと思う」

「……………私？」

「だってお前、今までタクミ先輩のこととか真帆たちに相談してたのに、今回全てがはつきりしたからってこいつらに全部話せたか？」

「……………」

尋ねられて、私は思わず口ごもった。

確かに、私は今まで感謝しても足りないくらい真帆たちには相談に乗ってもらってきた。できれば自分の状況を全て報告していきたいところだけど、今回はかりはそうもいかないと思っていたところだ。マナミ先輩とタクミ先輩の関係の真実がわかって、それを全て私が話してしまうのはどうかと思ったから。

いくらなんでも人の過去を晒すのは気が引ける。

マナミ先輩は、そんな私の考えもお見通しだったのかもしれない。だからこそ、真帆たちには全てを話してもいいと言ってくれたのかもしれない。

もちろん、真帆たちが決して口外しないことも先輩はわかっているんだろう。

「…で、お前はとうするんだよ」

不意に、一真がそう話をこちらへ振る。恐らく、私をもここへ呼んだのはそれが聞きたかったからなんだろう。

「『とうする』って…とういうこと？」

聞き返さなくても分かっていたはずだけれど、私はこの時こう返す以外に術がなかった。

「昨日、別れたらしいぜ、あの2人」

続いた一真の言葉に驚いたのは、私だけでなく真帆たちもだった。全員が箸を止めてバツと顔を上げる。そこにいた全ての視線を受けながらも、一真はピクリとも表情を変えずに続けた。

「愛海先輩が電話で言ってたから間違いないよ」

「……………」

瞬時に胸の中を何かが駆け巡っていく感覚に襲われ、私は目を見開いたまま動けずにいる。受けた衝撃のあまりの大きさに対応できれず、そのまま一真をまっすぐに見つめ返すしかなかった。

「お前はとうするんだ？」

2回目の、同じ質問。

尋ねられて、私は思わず視線を逸らしてしまう。自問するように、一真の問いを胸の内で繰り返した。

「……………どうもできないと思う」

逡巡した拳句、そんな情けない一言が口から零れ落ちる。そう言った途端、一真がスウツと目を細めたのがわかった。

「私には、どうする資格もないと思うから」

「……拓巳先輩が愛海先輩じゃなくてお前のこと好きなのはもういい加減分かっただろ？」

私のセリフに言葉を重ねてきたその問いに、小さく首を振るしかできない。

「それでも…私、先輩に嘘をついたから」

まだ4人に話していなかったことを、私はポツリと口にした。華江がどこか心配そうに、真帆が少し驚いているように私を見ているのが分かる。

「七夕の時…私、先輩に嘘をついたの」

その時のことを思い出して、ズキリと胸が痛んだ。先輩が言おうとした「何か」と…それを遮ってついた嘘を。思い出すだけで、胸が悲鳴を上げて軋む。

「他に、好きになりそうな人がいる、って」

まっすぐに私を凝視する一真の前で、向井くんが私に気を遣ってくれたらしくこちらからわずかに視線を逸らした。今の私は、自分で思うより相当ひどい顔をしているんだろう。それだけ胸の痛みは肥大して止まない。

「だから、先輩のこともう待てないって…先輩のこともう好きじゃないって、言った」

私の痛みを感じ取ったのか、真帆が泣きそうに顔を歪めた。



そう、全てが遅すぎたんだ。今マナミ先輩とタクミ先輩が別れたところで、既に私にはどうすることもできない。不本意とはいえ、あの嘘でタクミ先輩を傷つけたのは事実だ。そんな私が、今更どうやって「嘘でした」なんてまた彼の前に出られると言っのだろう。少なくとも、そうできるほど私は神経が太くない。

だけど、後悔はしていない。

だってあの時はああいう以外自分には方法がなかったから。ああやってタクミ先輩を遠ざける以外、自分は器用には立ち回れなかっただろうから…。

「だから、仕方ないの」

私の言葉の強さから決意のようなものを感じ取ったのか、誰もそれに意義を唱えることはなかった。ただ、一真がポツリと呟く。いつもの俺様口調ではなく…どこか深い静かな声で。

「…バカだな、お前も拓巳先輩も」

その一言に、私は悲しい表情で苦笑いを浮かべるしかなかった。

期末テストが返却され、それについての解説講義を終えればもう終業式が近づいていた。最後の3日間は昼前までの短縮授業になり、周囲はもう夏休み気分だ。私の周りも例外ではなく、真帆と一真が珍しく意気投合し部活にやる気を出している。

どうやら先日的一件を終えて剣道部に入部したらしい一真が、いきなりうちの学校の代表選手の座を射止めたらしかった。圧倒的に男子の方が弱かった剣道部が活気付いたのか、女子の主将である真帆もご満悦というわけだ。

「夏の大会に間に合って良かったよ。一真がいたら団体戦も勝てそう」

嬉しそうに言う真帆に、華江が「ふうん」と頷く。

「そんなに強いんだ、一真」

「そりゃもう、びっくりしちゃったよ私は！さすが、中学の時から春日先輩の後輩やってるだけあるね」

アメリカへ行ってる間のブランクなんて感じさせないらしく、一真は即戦力になるようだった。…しかも胴着姿の一真を一目見ようと剣道場に群がる女子生徒の数がものすごいらしい。

…そうやって、確実に日々は流れていた。しかし私だけが、いつまでもそこに取り残されたままな気がする。

あの後、マナミ先輩とタクミ先輩が別れたことはすぐに噂になっ

て学校中に回った。そもそも校内でも人気者のマナミ先輩だから、皆が注目しているのも分かる。最近一緒にいないことを見咎めたクラスメイトに尋ねられて、マナミ先輩が別れたことを認めたらしい。そこから学校中にその話が広められるまで、時間はそれほどかからなかった。：人間の噂話ほど怖いものはないと、本気で思う。

「春日先輩の彼氏ってさ、あんな人だったっけ」

遠くにタクミ先輩を見つけたらしい女子生徒がそんなことを友達に言っているのが聞こえたことがある。

「あ、私も思ったー。今までは春日先輩が目立ち過ぎてたから気づかなかったけど、結構かつこいいよね」

「今までも陰で好きな子はちらほらいたらしいけど、フリーになつてたから好きになつて即行で告げた子もいるらしいよ」

聞きたくもない、そんな噂話。露骨に耳を塞ぐわけにもいかなかった、私は足早にその場から離れるしかなかった。それでもそういった類の話を耳にしたのは一度や二度じゃなくて。

そのたびに胸を痛めている私を見て、一真がデコピンをしながら言った。

「お前にそういう顔する資格はねえだろ」

はつきりと言われて、私は眉間に皺を寄せる。：確かに、タクミ先輩に対してもう頑張れないと言った私は：彼女たちが彼に告白しようがなんだろうが、気にする資格なんてないはずだった。

「生まれつきこんな顔なんですー」

嫌味ったらしい敬語で言うと、一真は鼻で笑う。「そいつは失礼」嘲るように笑って言い、それから「そういえば」と何かを思い出したように呟いた。

「A組の…誰だったっけな、うちの学年で一番美人って言われてる女」

「白石和美？」

一真の前の席に座っていた向井くんが、助け舟を出すようにその名前を出す。

「そうそう、そいつ。そいつも今日拓巳先輩に告つたらしいぜ」

そんな続いた一真の言葉に、私は思わず目を見開いた。

白石和美さん…と言えば、去年同じクラスだったロングの髪の人さんだ。女の私でも見惚れることがあったし、性格だって優しい。うちの学年だけじゃなく、3年生男子にも人気があることは耳にして知っていた。

「まあそんな美人に告られればなあ…拓巳先輩だってその気になるかもしれないなあ」

どこかわざとらしい口調で、一真は遠い目をしながら嫌味っぽく続ける。

「ま、どっかの誰かさんはそんなの気にする資格もないみたいだけど？」

そこまで言われて思わずムツとして、私は「何が言いたいのよ」と地を這うような声で尋ね返した。

「別に」

自分が振ってきた話題のくせに、一真はそんな中途半端なところで短くそう切り捨てる。それに言葉にならない怒りを覚えて、私は思わずプウツと頬を膨らませた。

…ちよつと、その時だった。

「夏川」

教室の入口にいたクラスメイトの男子が、私のことを呼ぶのが聞こえた。何事かとそちらを振り返ると、ドアに近い席に座っていた彼が「廊下で隣のクラスの奴が呼んでる」と教えてくれる。誰だろう、と首を捻りながら立ち上がると、同じことを思ったのか向井くんが「誰かな」と小さく疑問を口にした。

「隣のクラスでハルカのこと呼ぶなんてハセガワくんしかいねえだろ」

さして興味なさそうに呟く一真が、私から視線を外してそれまで読んでいた雑誌を再び捲り始める。そんな言葉を耳にしながら、私は思わず吐息を漏らしてしまった。

だけど予想とは違いそこにいたのは、一人の女子生徒だった。シヨートカットのボーイッシュな女の子で、去年同じクラスだった川村さんだ。

「あ、ハルカちゃん」

ニッコリと笑った彼女とそれまで特別仲が良かったわけではないが、悪い印象を持ったことはなかった。教室から顔を出した私に、彼女は「ちよつといいかな」と申し訳なさそうに告げる。

休み時間は残り少なかったけれど、私は小さく頷いて彼女の後に続いた。

\*\*\*\*\*

「ごめんね、呼び出して」

川村さんはすまなそうに、苦笑い気味にそう言った。場所を廊下の突き当たり…誰も来ないようなところまで導かれて、私は言われるままについてきたところだ。

…何を言われるのか、全く見当もつかない。去年だって彼女との接点はほとんど数えるほどしかなかったくらいだから。

「あのね、急にこんな質問失礼だとは思っただけど…」

そんな風に前置きして、彼女は前髪を直しながら言葉を選ぶように口ごもる。髪を触りながら話すのは、彼女の以前からの癖だと認識していた。

「ハルカちゃんって、今フリーだよな？」

想定していたいくつかの話題を全て一蹴され、私は耳に届いたそんな言葉に思わず瞠目する。鳩が豆鉄砲を食らう、とはきつとこんな時のための言葉なんだろう。

「…そうだけど」

先の見えない話に警戒心を抱きつつ、私は小さく頷いた。途端に、彼女の顔がパアツと晴れ渡る。

「あのね、うちのクラスの長谷川…知ってるよね？」

尋ねられて、私は「…そっちな」と内心で呟いた。大きく漏らしたいため息をなんとか堪えて、私は軽く肯定して彼女の続きを促す。「あいつが…ハルカちゃんのこと好きなのも知ってるよね？」

それもはぐらかすわけにもいかなそうだったので、私はまた軽く頷き返して見せた。

「実は…私、昨日長谷川にフラれちゃって」

続いた彼女の言葉に、私はまた不意打ちを食らって眉を持ち上げる。「え？」と疑問符のついた声が口から漏れたけれど、川村さんの方はそれを受けて尚も微笑を返してきた。

「ハルカちゃんのことが好きだから、って」

はつきりと言われたわけではなかったけれど、長谷川くんのその想いには確かに気づいていた。意外に行動派らしく映画にも誘われたし、七夕祭りで遭遇した時の様子から私だけでなく一真たちだって彼の気持ちには気づいている。うぬぼれるわけではなかったけれど、自然と認識していたのは事実だ。

私がそれを知っているのがわかったからこそ、彼女はこんな話をしに来たのだろう。少しだけ寂しそうな目をしていたけれど…川村さんは続けた。

「それでね…筋違いなお願いなのはわかってるんだけど…」

少し伏せ目がちに、彼女は言葉を継ぐ。

「長谷川と付き合っか…友達付き合いから始めてあげられないかな」

彼女のそんなセリフに、私は再び目を瞠った。

思いもよらなかった、そんな提案。だって彼女はまだ長谷川くん  
のことが好きはずだ。

それでもフラれた相手の幸せを願えるほど…川村さんの想いは深い  
のだろうか。

「……ごめんなさい」

「だけど、私はその要求を呑むわけにはいかなかった。だって、そうしたら余計に長谷川くんに申し訳がないから。」

「……どうして？」

「悲しそうに小首を傾げながら、川村さんはそう尋ね返した。」

「だって、ハルカちゃんフリーなんでしょ？付き合ってみたら、長谷川のこと好きになるかも……」

「好きな人がいるんだ」

「川村さんの言葉を遮って、私ははっきりとそう告げる。」

「頑張るつもりはないし、多分両想いになることなんてない人なんだけど……それでも、好きな人がいるから」

「……………」

「私の言葉を受けて、川村さんはしばし黙り込んだ。」

何かを思案するように口元に手を当てたまま考え込み、やがてゆつくりとその整った顔を再び上げる。まっすぐに私を見つめながら、瞳はどこか懇願するようだった。

「両想いになることはないんだよね……？それだったら、長谷川のことも考えてあげて」

「彼女は、本気で言っているんだろうか？彼女は、それでもいいのだろうか？」

「心の中で肥大する疑問はつきなかつたけれど、私はそれを表すように訝しげに彼女を見つめ返した。」

「……………それでも……私が長谷川くんを好きになることは、きっとこの先ないから」

「タクミ先輩と両想いになれないからと言って、今すぐこの想いが」



消えるわけじゃない。長谷川くんのことを好きになれるかどうか……そんなことは自分ならよくわかってる。タクミ先輩以外に、あれほど誰かを好きになれるなんてことないに決まっているのだから。

はつきりと答えて、私は自分の言葉で、あることに気づかされる。思い出したのは、「好きでいるだけでも許してほしい」と言った私に、タクミ先輩が二度目に『迷惑だ』と言った時のことだった。

……今なら、わかる。理沙さんのあの時の言葉の意味が。

『他の告白してきた女の子にははつきり『ごめんなさい』って断ってるんでしょ？でもハルカちゃんの場合は、一度は拒まなかったわけよね？本当に迷惑だったら、一回目で拒絶してと思うけどな』  
『ああ見えて、迷惑なら『迷惑』ってのはつきり言える子なのよ』

その、言葉の意味が。

自分で気づいた今更な事に、私は思わず大きく目を見開いた。

「……………」

……全てが、遅かったんだ。

理沙さんの言う言葉の意味を、私はあの時理解しようとしていなかった。でももしかしたら……理沙さんの言うように、タクミ先輩は

もうあの時には既に私のことを想ってくれていて。マナミ先輩との事情でそれを表に出せない苦しみを、抱えていたのかもしれない。そのことは頭のどこかで淡い期待として抱いていたはずなのに、実感するまでには至らなかった。自分の単なる希望でしかないと思っ  
ていて、現実とは遠く感じていたから。

でもそれは…理沙さんと名取先生があれほど私に言ってくれていた事実。それを聞いているようで脳まで到達させていなかったのは、私の弱さ故だ。

傷つきたく、なかったから。淡い期待を抱いて、裏切られる時が来るのを怖がったから。

真帆に言われて私に「迷惑だ」と告げ直した先輩が、その嘘をつくの  
にどれだけ自身を傷つけたのだろう。それを撤回してもマナミ先輩の元を離れられない葛藤と戦っていた先輩は、どれだけ苦しんだ  
のだろう。七夕祭りで言いかけた言葉を私のひどい嘘で遮られて…  
…どれだけ悲しかったのだろう。

「……………」  
考えると、涙が出てきた。どう話を終えていたのか、川村さんはもう目の前にはい  
なかったけれど。

「…っ」

想起するのはタクミ先輩の柔らかい笑顔ばかりで、私は堪えきれずに涙を流し続ける。そんな自分の胸に刻まれたのは、今更彼の元に行けるはずもないという改めた戒めだった。

\*\*\*\*\*

ここ数週間の寝不足が祟って、涙を流したせいかわれがドツと押し寄せてきた。貧血気味なこともあり、こんな顔で授業に参加できるわけもなく…仕方なく保健室へ向かう。

「あなた、前にもここに運ばれたわよねえ」

苦笑い気味の恰幅のいい保健室の先生は、大きな手で私の頭をポンポンと軽く撫でた。母親のような安心感があるこの先生が、私は前から好きだった。

「どうせ短縮授業で今日最後だし、ここで寝て行きなさい」

一番奥のベッドを用意され、私は頭を下げてその言葉に従った。タイを外しスカートに皺が寄らないように横になる。「熱はないわね」とおでこに手を触れさせながら、先生はそう呟いた。

「私はこれから職員室に所用があるからちよつと外すけど…ゆつくり寝てていいわよ」

ありがたい言葉を残して、先生はベッド脇のカーテンを引くと静かな足音を残して保健室を後にする。

それにしても忙しい先生だ。私もそれほど保健室にお世話になったことはないけれど、来た時は大体先生が不在の時が多かった気が

する。そんなことを考えながら横になっていると、静かなその室内がやけに寂しいものを感じられてきた。

「……」

先ほどまでの想いがぶり返してきて、胸がズキンと痛む。その逸る鼓動に慣れることもなく、私は再び視界がぼんやりと滲んで行くのを感じた。だけどその瞬間、ガラツと保健室のドアが開かれる音がして私は驚いて肩を震わせる。ビクリと跳ね上がりそうになったそれを何とかこらえると、やがて入ってきた誰かは私のベッドのあるカーテンの向こう側で立ち止まったようだった。

「ハルカ」

低い、声。

「……一真？」

小さく呼びかけ返すと、シャツとカーテンが左右に開かれてそこに予想通り一真が立っていた。

「……どうしたの、こんなところに」

「どうしたのはこっちのセリフだ。隣のクラスの女に呼び出されたと思ったら帰ってこねえし。機転利かせた直が『保健室行ってます』って名取に言ってたから安心しろ」

「……そっか、今、名取先生の数学か……」

時間割を頭のどこかで思い出しながら、私は小さく呟いた。

「それで、一真は何でここに？」

尋ねると、一真はポケットに両手を突っ込んだまま偉そうな態度で私を見下ろす。

「もしかしたら本気で保健室行ってんのかな、と思ったから」

答えになっっているようななっていないような……曖昧な言葉を返して、一真はわずかに目を逸らした。……それはつまり……私のことを心

配してくれたということだろうか？そう気づくと何だかくすぐったくて、思わずヘラリと締まりない顔で笑ってしまった。

そんな私の笑みに「気持ち悪い」と冷徹な一撃を返しながら、一真は冷たい視線を送る。

「で、一真はどうやって教室を抜け出してきたの？」

話を換えようと、私はベッドの上にゆっくりと上体を起こした。

一真はそれを手で遮ろうとしたけれど、私は構わず起き上がる。友達の顔を見て少し安堵したのか、さっきほど眩暈もしなくなっていた。

「頭痛と腹痛と腰痛がひどいから保健室行くつつった」

「……よく名取先生がオツケーしたね」

呆れ気味に答えた後、それでも私は思わず笑ってしまった。だからこそ、一真には笑顔で言える。

「一真」

小さく、呼びかけて一言。

「ありがとう」

言つと、ガラにもなく照れてしまったらしい理不尽大王様は肩を竦めて視線を逸らした。

「ま、とにかくお前はここで寝てる。授業終わったら真帆たちと迎えに来てやるからよ」

「……一真は戻るの？頭痛と腹痛と腰痛は？」

「戻ったら戻ったで名取がうるせーからフケる」

ニヤツと笑って、一真は踵を返す。去っていくとするそんな後ろ姿を見るのが何だか心寂しくなって、私は思わず眉を寄せてしまった。

「ねー、一真」  
だから、最後にもう一度呼びかけてしまっていた。そしてそれまで思ってもみなかったことが、口から無意識の産物のように零れ落ちる。

「私、何で一真のこと好きにならなかったんだろう」  
「はっ!？」

いつも余裕をかましている理不尽大王が、この時ばかりは驚いたようにこちらを振り返った。

だって、一真はルックスは抜群だし頭も運動神経も良い。口は悪いけれど実は友達思いで優しいし、人の気持ちを汲み取れる奴だ。

…そして、それは長谷川くんにだって言えることだった。  
「何で長谷川くんのこと好きになれないんだろう」  
お人よしなほど優しく、温かみのある人なのに。

「…タクミ先輩のことが好きだからかな。だから他の人が目に入らないのかな」  
自問するような言葉を口にしていた私に、しばらく黙って見下ろしていた一真が小さく息をついたのがわかった。  
「違うだろ」

やがてもたらされた答えに、私は顔を上げる。珍しく眉を顰めていない…真剣な眼差しだった。

「拓巳先輩のことが好きだから俺らのことを好きになれないんじゃない。俺らが拓巳先輩じゃないから、俺らのことを好きにならないんだろ」

続いた一真の言葉に、私は彼にバレないように目を瞞った。

…そうかもしれない。そう、それだけ、私にとってはタクミ先輩じゃないと恋愛をする意味がないということなのかもしれない。

「とにかく寝てろ。お前言うてることがメチャクチャだぜ」

私の頭からバツと布団を被せて、一真は今度こそ「じゃあな」とカーテンを閉めて去って行ってしまふ。その後ろ姿を見送って、私は布団を被ったせいでグシャグシャになった髪を撫でつけながら直した。

…胸の痛みは消えなかったけれど…。それでも、幾分かは気分が少し澄んだ気がした。

「……」

だけどそれも、次の瞬間には再び翳りが差すことになる。一真が去った方とは反対側のカーテンを開くと、そこはグラウンドに面した窓だった。外で授業をしているクラスのことをよく見てとれて、私は何気なくそれを眺めてしまふ。その隅で長距離走をしているらしいクラスがあって、その輪の中にいる人物を見つけてから思わず胸が早鐘を打った。

…そこにいたのは、ストップウォッチを持って楽しそうに友達と笑い合っているA組の白石さんの姿。学年一の美人、そしてタクミ先輩に今日の朝告白したらしいという…彼女本人だった。

一欠けらほどの闇も感じさせない、明るい笑顔。タクミ先輩に朝告白したとして、もしフラれていたら…こんな風に笑えるはずがない気がする。

「……………」

そう気づくと、ズキ、と再び胸が痛んだ。小さく…だがはつきりと刺すような痛みが胸中を支配する。眉を寄せてそれをやり過ぎるうとしたけれど、うまくいかなかった。

…一真に、言われたばかりなのに。白石さんほどの美人に告白されたら、タクミ先輩だって気持ちが悪くかもしれない。そしてそれを気にする資格も…自分にはない。

なのに、痛みはどんどん大きくなっていく。意識でコントロールすることも叶わず、私は苦しい胸を必死で耐えるように抑えるしかなかった。

…どれくらいの間、そうしていただろう。

やがて私を覆う重い空気が外界のそれに破られたのは、再び保健室のドアが開いたからだだった。



静かな足音がしたけれど、どうやら先生のそれとは違う。窓のカーテンを閉め直して、私はその人物は気にしないように再度ベッドに横になった。

足音は少し保健室の中を歩いた後、どこかで立ち止まる。カチャカチャと消毒液やら何やらを開けるような音がして、どうやら怪我をした生徒が訪れたらしかった。分析するわけでもなかったけれど、自然と耳に入ってくる。気にしていたわけではなかったのに、次の瞬間には私は嫌でも意識をそちらに集中するハメになった。

「おい、大丈夫かあ？」

ガラツと保健室の窓が外から開かれたようで、校庭から男子生徒の音が保健室の中に響いた。私のベッドはカーテンで仕切られているから、向こうの様子は見えない。だけど声の調子から、怪我をしたクラスメイトを気にして顔を出したようだった。

「なんだ、先生いねえの？俺が手当てしてやるうか？」

からかうような声を受けて、保健室にいた方の人物が「いいよ、遠慮しとく」と笑って答えている。その声に、私はベッドの中で大きく目を見開いた。

「……………タクミ……………先輩？」

カーテンの向こうに聞こえない程度の小さな囁き声で、私は思わず呟いていた。



どれくらい切望していただろう、その声を。

数えたってキリはないのがわかっていたから、実際にそうしたことはないけれど。

それでも今カーテンの向こう側にいるのは紛れもなくタクミ先輩で…。私は胸がドクンと跳ね上がるのと共に、泣きたい気分にならされている自分に気づいた。

「タクミ、ごめんな。やっぱり俺そっち行って手当てするよ」

また違う人の声が外側から聞こえてくる。話ぶりからして、どうやらその人が原因でタクミ先輩が怪我をしたようだ。

「だーいじょうぶだって、幸田。タクミがあれくらいでどうかなると思うか？」

「いや、だって結構血出てるし」

「大丈夫大丈夫。あんなもん自分で舐めてりゃ治る」

「……利き腕のしかも後ろ側をどうやって自分で舐めればいいのかわかんないけど？」

幸田先輩という人を庇ってなのか軽口を叩くもう一人の人に、タクミ先輩が笑いながら中から応戦していた。そのタクミ先輩の軽い物言いが、言外に「気にするな」と幸田先輩に言っているようにも聞こえる。それに安心したのか、彼らは「じゃあな、早く戻って来

いよ」と言い残して保健室の窓を閉めていった。

そして再び訪れた、保健室内の静寂。道具の音だけが、カチャリと響く。

その音に耐え切れず、私はそっとベッドを抜け出した。物音をさせないようにカーテンを少しだけ開けると、そこにこちらに背を向けたタクミ先輩がいる。

2週間ぶりくらいに見るその背中が、何だか胸を締め付けてきた。そしてその次に目に入ったのは、さっきの先輩の言葉通り、右腕の後ろ側の大きなすり傷。確かに自分では手当てをしづらいところらしく、別段不器用ではないはずの先輩も少し苦戦しているようだった。

その姿に、何かフラッシュバックする。…いや、そう言うと言葉は正確じゃないかもしれない。あの時、怪我をしていたのは私の方だから。

「……」

そう思った瞬間、私はそっとカーテンから外へ抜け出ていた。静かに物音も立てずに先輩に近づき、大きく深呼吸する。再び息を吐き出してから、私は決心を固めて声を出した。

「…やりましたよ、それ」

かけた声にギョツと驚いた先輩が、振り向いて更に私だと気づいて目を見開く。

私の気配には、全く気づいていなかったらしい。しばらく思考が停止したように静止していた彼は、やがて頭の中で何かを処理したらしく目の色を驚きから正常に戻した。

先輩に最後に会ったのは、私が長谷川くんに映画に誘われていたところを見られた時。あの時先輩は、私の方は完全に見ないまま背を向けて去っていった。

…あの時みたいに、無視されるんじゃないかと怖かったのも事実だ。

「……」

だけど先輩は、私の決意に満ちた顔から氣迫負けでもしたのか、フツと柔らかく笑って見せた。

「お願いするよ」

手にしていた消毒液を私に差し出しながら、先輩はそう呟く。

身長差があるから、先輩はそこにある椅子に座った。その後ろ側から消毒液を塗り、滲んだ血を拭き取る。そうしながらも内心では逸る鼓動を抑えるのが必死で、先輩にその音を聞かれなくなかった。

できるだけ平静を装いながら、私は手当てに集中する。そんな空気を感取ったのか、先輩がふと小さな呟きを漏らした。

「逆かな」

「…？」

言葉の意味が瞬時には汲み取れず、私は先輩の後ろで小さく首を傾げる。それが分かったのか、少しだけ口元を持ち上げて先輩は続けた。

「いつかの」

「！…」

先輩も、覚えてくれていたんだ。初めて先輩と出会ったのが、この保健室だったということ。そして自分での手当てに苦戦していた私を、先輩が助けてくれたこと。

あの時に先輩のさりげない優しさに触れて…私は好きになった。それからずっと追いかけてきたことが思い出されて、私はまた泣きたくなる。

「ありがとう」

手当てを終えて大きなガーゼを貼ると、先輩は使った道具を私の手から回収しながら片づけを始めた。それを手際よく元の場所に戻しながら、ふとこちらを振り返る。

「で、何でこんなところにいたの？具合悪い？」

聞かれて、私は自分が貧血気味でここへ来たことをようやく思い出した。先輩に会えた緊張で…そんなことどこかへ吹き飛んでしまっていた。

「あ、あの…さっきまでちょっと貧血で寝かせてもらってたんです」  
「そう。大丈夫？」

「はい」

笑って答えて元気をアピールすると、先輩も少し微笑み返して

くれる。その笑顔に、また胸がどこかで痛んだ気がした。

「じゃあね、ありがとう」

片付け終えた先輩は、もう一度礼を言って片手を上げて私に向けて笑う。そして呆気なくそのままドアを開いて、廊下へと踏み出した。

ガラ、とドアを静かにスライドさせて、ゆっくりとそれが閉められる。遠ざかっていく先輩の足音を聞きながら、完全に遮断された別世界に取り残されたようで…私は気づくと両の目から大きな雫を零していた。

そんな胸を締め付けるのは、先輩の優しい笑顔。そしてそれがもう特別な意味で私に向けられることは二度とないのだという切なさ。それと同時に、さっきの白石さんの笑顔を思い出す。

今日の朝タクミ先輩が彼女にイエスの返事をしたのなら…先輩の笑顔は、もう彼女のものなのだ。

「っっ」

そう気づいた時には、涙はもう自分では止められなかった。嫉妬したって羨ましがったって、彼が自分のところへ来てくれることはもうないのに…。

後悔していないと言いつつ、あの七夕祭りで彼の言葉を遮ったことを私は一生傷として癒せないままなのかもしれない。全ては、もう遅すぎたのだけれど。

できれば、先輩が私の目の前で誰かの手を取るところなんて見たくない。それでも彼が卒業するあと一年弱の間に…私は確実にそれを見ることになるんだろう。白石さんが彼女になったのなら、尚更だ。

「……いや」

それだけは、絶対に。自分にはそんな資格はないと言い聞かせてきたくせに、やっぱり私は先輩には誰の手も取ってほしくない。我儘だということはわかっている。  
それでも……。

「……っ」

考えるより先に、体が動いていた。先輩が出ていったドアの方へ、勢いよく走り出す。そうしてそのドアを横へ開いた時、私は零れ落ちそうなくらいに目を大きく見開いた。

「……先輩……」

丁度戻ってきたところだったらしい先輩も、ドアを開けようとした瞬間だったらしく驚いたように目を瞠っていた。

\*\*\*\*\*



「忘れ物…ですか？」

ボロボロ泣いている顔を見られてしまって、私はそれを拭いながら尋ねた。

「うん？…うん」

よく掴めない曖昧な返事をしながら、先輩は小首を傾げる。それから、少しだけ心配そうな表情で眉を寄せた。

「君は？具合悪いのに勢いよく飛び出そうとしてたみたいだけど」

「…私…忘れ物…みたいなものです」

口ごもるように答えると、先輩は更に「ふうん？」と訝しげに首を捻る。それはそうだろう。今の私の返事は自分でも意味不明だ。

そんな曖昧さをごまかすように、私は「それより」と再び一步保健室の中へ戻った。

「先輩の忘れ物って、何ですか？」

取ってあげようと思えば保健室の中を見渡したけれど、どこにもそれらしい物はない。

「？」

返事のない後ろを再び振り返ると、先輩はいつもの読めない無表情で廊下側からこちらへ一步踏み入ってきた。後ろ手にドアを閉めながら、「…実は」と小さく切り出す。

「話しておきたいことがあったから」

続いた彼の言葉に、私は思わず目を丸くした。…それは…私に、だろうか？当たり前のことなのに、あえてそんな疑問が頭をよぎる。

そして予感した、その先輩の「話」…。もしかしたら、白石さんと付き合うことにした…とか言われるのだろうか。

(嫌だな…)

それは、嫌だ。内心で苦い思いを噛み潰しながら、私は顔を俯かせた。

「俺の話なんてもう聞きたくないかもしれないけど…」

俯いた私とは違い、先輩はまっすぐこちらを見ているのが分かる。だからこそ、私は顔が上げられずにいた。

「最後に、聞いてほしいんだ」

そんな言葉に、「ああ、やっぱり」と漠然と思う。

最後に、ちゃんと報告してくれるということなんだろうか。マナミ先輩と別れて、白石さんと付き合うことにした…って。

「ずっと、君に謝りたいと思ってた」

耳を塞ぎたいくらい気分だったけれど、先輩の言葉なんだからそうもいかない。目を固く閉じて耐えるように、私は最後通告のような言葉を聞いた。

「曖昧な態度を取り続けたせいで傷つけたこと」

「……」

「ごめん」

その一言は、もう聞きたくないってあの時言ったはずなのに。や

っぱり先輩は、私にはその言葉しかくれないんだ。

そう思ってたどん底まで沈みかけた気分だったけれど、「でも」と先輩が言葉を継いだ。

「今なら、分かる気がするんだ。君が『振り向いて欲しいなんて期待はしないから好きでいる』って言ったこと」

「……え……？」

白石さんのことを言われるだろうと身構えていた私は、続いたそんな言葉に思わず顔を上げる。聞き返すように怪訝な表情をした私と目が合うと、先輩は私が好きなあの苦笑いを浮かべて見せた。

ああ、やっぱり好きだな、と、思わず実感してしまうほど。見惚れるくらいに胸中を熱い想いが込み上げてくる。

「いつか振り向いてくれるかも、なんて、期待をする資格はないと思う」

何の話をしているのか分からなかったけれど、私は口を挟まずに先輩の声に耳を傾けた。

「君が『好きになりそうな人がいる』って言った相手のことも、仕方ないと思ってる。目の前で君がその人の手を取ろうとしても、祝福できる気がする」

「……先輩……？」

やはり先が読めずに、私はここでようやく先輩に呼びかける。私の目をまっすぐに見つめ返して、先輩は今度は苦笑いじゃなく…本当に笑ってくれた。柔らかく、優しい笑顔で。

「それでも、俺はずっと君のことを好きでいると思う」

清々しいほどの笑顔で言い切って、先輩は笑う。

「……え？」

身構えていた言葉と随分と正反対な言葉を受けて、私は思わず混乱する頭で小さく声を絞りだした。脳がついていけない。グルグル回る思考回路が目に見えたかのように、先輩はもう一度笑った。そして、今度ははっきりと私の目を覚まさせる一言を口にする。

「好きだよ」

ずっと、切望してやまなかったはずのそんな一言だった。

「言いたかったのはそれだけ。ごめん、体調の悪い時に」

じゃあね、と再び言い置いて、先輩は踵を返した。再度去って行くこととするその後ろ姿。さっきと違うのは、私の足が今度はすぐに動いてくれたことだった。

「先輩！」

勢いよく床を蹴って、私はその後ろ姿を引き止めるように抱きつく。

「！」

驚いたらしい先輩が、よろめきながらも何とか持ちこたえてくれた。

一度、駅のホームで抱きしめられた時と逆だった。今度は私が背中から抱きついて、先輩を離せなかった。

「…ごめんなさい」

一番はじめに零れ落ちたその言葉をどう受け止めたのか、腕の中で先輩がピクリと反応したのが分かった。

「私、嘘ついてたんです」

「……嘘？」

前を向いたまま先輩が、静かに尋ね返す。大きく頷いて、私は泣きそうな顔を先輩の背中に押し付けた。

「『好きになりそうな人がいる』って…あんなの、嘘です」

先輩に絡めた腕に、ギュツと力を込める。

「先輩以外に、誰も好きになれるわけないんです」

さつき一真にも示された真実。どうしたって先輩の代わりなんて、私にとつているわけがない。

「……」

私の言葉を受けて、驚いているのか…それともその他の反応なのか…。言葉を返さない先輩からは、それが読み取れなかった。けどどしばしの沈黙の後、やがて先輩の前に回された私の手に、先輩が大きな手を重ねる。そしてゆっくりとそれを解かせてから、先輩はこちらを振り返った。

「ありがとう」

一番、私が好きな言葉を。

この時先輩は、一番私が好きな笑顔で囁いてくれたんだ。

「……え？」

「はあっ？」

「ホントに!？」

結局授業を終えてから迎えに来てくれた4人が示した反応は、全く様々なものだった。さっきまでのタクミ先輩とのやり取りを話し終えた私を、4人が一様に凝視する。

華江はただ目を見開いて。

向井くんは無言でニッコリ笑って。

真帆は、驚いたように大声を上げて。

そして一真は……思いつきり眉を顰めて。

その反応を目の当たりにし、私はニコニコとさっきまでとは打ってかわった表情で見つめ返す。華江が持ってきてくれた鞆を受け取りながら、「えへへ」と照れ笑いを浮かべた。

「良かったね!ハルカ!！」

驚きから一番に立ち直った真帆が、私の手を取ってそう嬉しそうに言ってくれる。いつでも本気で私の心配をしてくれていた真帆と華江は、自分のことみたいに喜んでくれているようだった。「うんと頷き返すと、それを隣で一真が「けっ」とかなんとか悪態つくように鼻であしらっている。

「何が『良かった』だよ。ほんのさっきまでは俺に……」

「あーっ!!!!それは言わない!!!!」

一真にすっかり弱い部分を見せきってしまったことは、自分でも真つ赤になるくらい思い出しても恥ずかしい。

しかも妙な言葉を口走ってしまった自覚もある。だからこそ自分でもいたたまれなくなつて、私は慌てて一真の口を塞いだ。

そんな私たちの様子を不思議そうに見やる3人に、「へへ」と適当に笑つてごまかしてみせる。深追いをすると思つたのか、意外にも真帆たちは特に突っ込んで何かを尋ねてくることもなかった。ただ「あ、でもそれじゃあ」と華江が何かに気づいたように声を上げる。

「せつかく付き合うことになつたんだつたら、今日一緒に帰つたりしないの？」

華江の問いに、真帆が「ああ」と横で頷いてみせた。

「そうだよねえ。そういうところ重要だよね、女子高生としては！」  
いつだつて恋愛体質で漫画のようなシチュエーションを夢見ている真帆は、力いっぱい同意してそう続ける。使わせてもらったベツドを簡単に整えながら、私はそんな2人を見比べて答えた。

「うん、先輩も具合悪いんだつたら家まで送つてくつて言つてくれただけど…」

「『けど』？」

一真が眉間の皺を深くして、私の言葉尻を繰り返す。

「体調もよくなつたし、一真が授業終わつたら皆で迎えに来てくれるつて言つてたから…」

「えつ、断つたの！？」

この上なく驚いたよつで、真帆がびっくりするくらいの大声を上げた。



「…え、うん…」と思わず弱気になりながら肯定すると、真帆だけじゃなく華江まで大きくため息を漏らす。

「そこはさあ、ハルカ、彼氏に甘えるところでしょ!？」

抗議するような真帆に肩を掴まれながら迫られ、私は気迫に負けて何だかよく分からないまま「ごめんなさい」と謝ってしまっていた。

「…まあ、そこで恋愛一直線になって友達放り出したりしないところが夏川の良さかな」

それまで黙って私たちのやり取りを眺めていた向井くんが、床から立ち上がりながら笑う。

「今から急げばタクミ先輩だってまだ帰ってないだろうし、間に合っくんじゃない？」

華江まで、苦笑気味にそんなことを言った。…呆れているわけではなく、私の頭の固さに苦笑いを漏らしたようだ。

「でも…」

言い淀んだ私に、真帆は「ああーもうっ」とドンと背中を押して促した。

「行っといで!こちらは別にこのまま4人で帰ればいいしさ」

「そうしろそうしろ。変に気遣われても気持ち悪い」

真帆に同調するように言った一真が、自分の鞆を持ち直しながら立ち上がる。ちょうどその時、私の後ろで真帆がポンと何かを思いついたかのように手を打った。

「そうだ、駅前のボウリング今日カップルで行くと半額じゃなかった?ちょうど2対2だし、寄って行こうよ」

真帆がそんな提案をすると、一真が思い切り顔を顰めて見せた。

「ちょっと待て。カップルってどういう組み合わせだよ」

「えー、別に男2女2で行けばどういう組み合わせかなんて関係ないよ」

「そんなこた分かってるけどよ、なんか納得いかねえだろ!？」

「えー、一真めんどくさいー。そりゃ向井と華江はカップルだろうから、私と一真がカップルごっこするしかないじゃん」

「…やっぱり俺、納得いかねえ」

「ホントめんどくさいなあキミは。別に誰も本当に付き合ってるかなんて興味ないって」

いつも通り始まった真帆と一真のやり取りに、私は思わず吹き出してしまふ。

恐らく、こんな軽口の応酬も私に気を遣わせない為にして呉れることなんだろう。そう思うと、私は自然と笑って甘えることができた。

「ありがとう、皆。また明日ね」

「うん、気をつけてね」

華江と向井くんが笑って言いながら、見送ってくれる。まだ何かいがみ合いながら（私にはじゃれ合いにしか見えないけど）、真帆と一真も「早く行け」と言わんばかりに手をヒラヒラと振ってみせた。

\*\*\*\*\*

保健室を後にしてすぐ、廊下で保健医の先生に出くわした。もう

随分体調が良くなったこととお礼を言っ、挨拶をして別れる。そうして長い廊下を抜けて、私は鞆を持ち直しながら「さてどうしようか」と足を止めた。

HRを終えて30分は経っているから、恐らく先輩はもう教室にはいないだろう。行くだけ無駄かもしれないと判断して、私はそのまま足を数学準備室の方へ向けた。いつもの通りなら、先輩はそこへ行っている可能性が高いと思ったから…。

一番近くにある階段を、私は足早に上がる。最近はずっかり訪れることもなくなっていた数学準備室の前で、一つ深呼吸をした。そしてそれから、軽くノックをする。「どうぞ」と返ってきたのは当たり前だけれど名取先生のもので、その声に促されるままに扉を開いた。

「おう、夏川か」

何やら書類を片付けていたらしい先生は、顔を上げてこちらを一瞥しながらその声をかけてくれた。

「お前、具合悪かったみたいだけど大丈夫なのか？」

続いた先生の言葉に、そういえばさつき休んだ授業は名取先生の数学だったことを思い出す。

「はい、貧血だったんですけどもう大丈夫です」

笑って答えると、先生は「そうか」とだけ答えて再び手を動かした始めた。

そんな先生から周囲へと視線を移して、私はさほど広くはない数

学準備室をぐるりと見渡す。そこに、先輩の姿はなかった。予想が外れたことにかっかりした瞬間、名取先生がその思考回路を読んだかのようなタイミングで口を開いた。

「准一なら今日は来ねえぞ」

「…そうですか…」

「俺が今日はもう帰るから、ここ使えねえって言うてあるから」

返ってきた答えに、確か前にもこんなことがあったな…と漠然と思う。

「先生もう帰るんですか？今日は早いんですね」

いつもなんだかんだで遅くまで仕事しているから、HR後にすぐ帰ってしまうことが意外だった。尋ねると、先生は大きな鞆に書類とノートパソコンをしまいこみながら「ああ」と小さく頷く。…持つて帰って家で仕事をする気のようにだ。

「午後から病院に付き添いなんだ」

「え？」

「うまくいけばそろそろ性別が分かるらしくてな」

何でもないことのように言っただけの先生の言葉が、頭の中を数回駆け巡るような感覚に襲われる。

そうしてその意味が理解できた時には、私は「ええ！」と大声を上げてしまっていた。

「赤ちゃんの性別、分かるんですかっ？」

「だから、うまくいけばな」

念を押すように言っただけ、先生は持ち帰る物を鞆に詰めた後、机の上に残された書類を片付け始める。

「先生、分かったら教えてね」

「…ああ」

短く返事をして返した先生は、そこでふと顔を上げた。それから、その視線が私の顔を少しだけ探るように眺めていく。

「？」

その視線にわずかに首を傾げてみせると、先生は再び書類に目を戻しながら言った。

「いやに機嫌いいけどよ、なんかいいことあった？」

手元にあつたボールペンで何やら紙に文字を連ねながら、そう尋ねてくる。…いや、「尋ねる」というよりは、先生の声音は「確信」に近かった。

「そっぴい最近ここに来なかつたけど…何かあつたんじゃねえの？」

そう言えば、テスト前にここに来なくなつてから先生とは教室以外で顔を合わせていなかった。それも教室で会つたつてプライベートルな話をするわけもなく、ただ担任と生徒として授業とHRで会うだけだ。落ち着いてこんな話をするこゝとなんて、最近では久しくなかつた気がする。

「そのこゝとなんですけど…」

先生にも、色々迷惑をかけたし心配もしてもらつたと思う。精神的には協力してもらつた気がするし、感謝してもし足りないくらいだ。これまでのこゝと今日のタクミ先輩とのやりとりを聞いてもらおうと、私はこれまでは重かつたはずの口を開いた。

ただし先生も急いで帰るところだつたのだから、片づけを終えるまでの間…できるだけ手短かに話す。それでも先生は迷惑そうな表情を見せるこゝもなく、時折相槌を打ちながら真剣な顔で耳を傾けてくれた。

「…へえ」

聞き終えた先生が漏らした第一声は、そんな感嘆だつた。

「良かつたな」

他人事のような呟きだつたけれど、それでも真面目にそう思つて

くれているのは伝わってくる。

「はい」

ニツコリ笑って答えると、先生もそんな私の表情を見てから微妙に苦笑いを浮かべて見せた。

「この前までグズグズメソメソ言ってたのになあ」

「ひどい先生！私そんなにメソメソしてません」

「どうだか」

言われて、うっと言葉に詰まってしまう。確かに、先生には泣き言を言っただけだった気がする。

「まあでも、やっぱり収まるところに収まるってことか」

感心したように言いながら、先生は机の上の片づけを終えて鞆に手に立ち上がった。それにつられるように私も準備室を出る為に、机に置いてあった鞆を持ち上げる。

「先生、ありがとうございます」

ペコリと改めて頭を下げると、先生は無言でこちらを見下ろした。「……」

しばらく黙然と何かを思案するような表情を見せた後、「かわいい弟のためだからな」と苦笑いして言う。

そんな先生と一緒に数学準備室を後にし、出た廊下ですぐに別れた。先生は、一旦職員室に戻るらしい。私はというと、これ以外にタクミ先輩がいそうなところに心当たりもなくて、仕方なく昇降口の方へ向かうことにした。

真帆たちももう帰ってしまっただろうし、追いかけても無駄だろう。ため息まじりに長い廊下を歩きながら、急ぐこともなくゆっくりとした足取りで歩みを進める。

そしてそのまま、廊下の一番端まで歩いていった時だった。

「…！」

階段にさしかかろうとしたところで、角を曲がった瞬間に誰かにぶつかった。

「ご、ごめんなさい」

ぶつけた鼻を手で抑えながら、私は顔を上げて相手を見やる。その人物を両の目で確認してから、ドクンと大きく胸が跳ね上がるのを感じた。

「白石さん」

ぶつかった相手は、あの白石和美さんだった。A組の…学年一の美人。そしてタクミ先輩に今朝告白したって人…。浮かれていて今まで忘れていたけれど…体育の時間の彼女を見た時、どう見てもフラれたようには見えなかったんだっけ…。

「ごめんね、ハルカちゃん。大丈夫？」

私より背の高い彼女は、こちらのように鼻をぶついたりはしなかったようだ。痛さで涙目になりそうになった私を気遣って、少し心配そうに声をかけてくれる。コクコクと頷くと彼女は安心したように吐息を漏らして、ニツコリ笑った。その笑顔に、やっぱりキレイな人だなあと思わず見惚れてしまう。こんな表情を向けられたら、男ならコロツと堕ちてしまふに違いない。

でも、タクミ先輩は確かに私に「好きだ」と言ってくれたはずだ。それでも彼女がフラれたとしたら、こんなに明るい空気をまとっていられるだろうか…？

「じゃあね、ハルカちゃん」

ボーっと考えごとをしているうちに、白石さんはヒラヒラと手を振って私の横をすり抜けていった。

「……………」  
「……？」  
思わず、眉を寄せて小首を傾げてしまう。…理解できないことばかりだった。

「……………」  
白石さんが角を曲がってとつとつその後ろ姿が見えなくなるまで見送った後。

「…あれ？」  
すぐ傍の階段から下りてきたらしい誰かが、私の後ろから声を降らせてきた。

「…！」  
すぐにその声の主に気づいて、私は勢いよく振り返る。階段を下りてきながら、タクミ先輩は「まだ帰ってなかったんだ」と私を見下ろして言った。

「…タクミ先輩」  
もう帰ってしまっているだろうとがっかりしていたところに、不意に会えて思わず驚いてしまう。それでもその事実が嬉しくて、私は白石さんのことを一旦頭から追いやって頬が緩むのを感じた。

「友達と一緒じゃなかったの？」  
私のところまで階段を下りてきて、先輩はこちらに目線を合わせ私につられるように笑ってみせる。

「…ちよつと、予定変更で…」  
言葉を濁して曖昧に笑った私に、先輩は「そう」とそれ以上追求しようとはせず小さく頷いて返した。

「で、一人で帰るところ？」



尋ねられて、私はもう一度頷く。

「先輩を探してたんですけど…数学準備室にもいなかったから」

口ごもるように答えると、先輩は少しだけ目を丸くしてみせた。

そのリアクションに微かに首を傾げると、彼はふつと柔らかく笑う。

「電話かメールかしてくれれば良かったのに」

言われて、今度は私の方が大きく目を見開いた。

…そっか…。

もう気軽に電話やメールしてもいいんだ。

誰に遠慮するわけでもなく…自分がそうしたいと思った時に。

なんだか今朝までとの自分の境遇の違いを感じて、思わず浸ってしまう。随分、この数時間で変わったなあと思わされた。

「…どうかした？」

歩き出していた先輩が、一步以上遅れ気味の私を振り返る。

「…え？」

聞き返した私に、先輩は唇の端を持ち上げて続けた。

「ボーっとしてる」

「え！」

浸りすぎて自分の世界に入りかけてしまっていた自分に気づき、慌てて私は大股で歩いて先輩に近づく。隣に並んだ私を見てもう一度笑った先輩は、「そういえば」と言葉を継いだ。

「さっきも、階段の前でボーっとしてたみたいだったけど」

「…え」

「何かあった？」

…恐らく、白石さんの後ろ姿を見送っていた時だ。それで瞬間的に思い出してしまった。さっきまで、彼女の笑顔の意味がどんなものなのか…不安で仕方なかったことを。

「…さっき、そこで会ったんです」

黙っていたって仕方がない。タクミ先輩本人に、聞いてみるしかないと思った。

この先疑問と不安を抱えたまま先輩と付き合っていくわけにもいかないし、それは何より本意じゃなかったから。「誰に」と、先輩は聞き返さなかった。…ただ、私が自分の言葉を紡ぎ終えるまで待つてくれているようだった。

小さく、深呼吸する。それから私ははっきりと聞こえる声で続けた。

「白石さんに」

言い切ってから、私は鼓動が瞬時に早まるのを感じる。先輩の反応を見るのが怖くて、胸がドキドキする。

先輩が、私にくれた言葉を嘘だとは思わない。だけど白石さんがフラれた表情をしていたようには思えない。…でも、先輩が二股をかけるような人にはもっと思えない。

つまり、それは……？

「……」  
ゴクリと息を飲んで、私は恐る恐る先輩を上目遣いに見上げた。  
そんな私と目が合った、彼の反応は…。

少し何かを考えるように瞬きを繰り返した後、小首を傾げてみせる。それから、小さく呟いた。

「…『白石さん』って?」

「!?!」

一番想像していなかったリアクションに、私は思わず目が零れ落ちそうなくらいに見開いてしまった。

…まさかとぼけられるとは思っていなかった。…いや、先輩がとぼけるような人とも思えないから…実は素なんだろうか?それか、白石さんの名前は知らなかった…とか。

一瞬で色々と考えたけれど、どれも考えて答えが出るものではない。私は何故か力説するかのように拳を握り、「白石さんです!」  
ともう一度大きく声を上げて言った。

「うちの学年で一番美人って言われてる…」

「…『一番美人』っていうのは客観的には判断が難しいね」

「ええっと…髪の毛が真っ黒の艶々ロングで…」

「………結構いない?そういう子」

…これは…本気でとぼけられているんだろうか。本気で不安になってきて、私は更に両方の拳に力を込めて握った。そして、言い逃れできない決定的な言葉を口にする。

「今朝、タクミ先輩に告白したって女の子です!」

言ってから、私は力をこめすぎていたのか脱力したように肩を落とした。妙な緊張と不安から呼吸が難しかったらしく、息をするのも胸を大きく上下させる。

「……………」

当のタクミ先輩の方はと言うと目を見開いて驚いたような顔をした後、何かを少し思案するように口元に手をやった。そしてやがてまっすぐに私を見下ろしながら…「それ」と再び静かに口を開く。

「誰に聞いたの？」

「…誰に…」

口ごもった私を見る先輩の目が、いつもより少し真剣味を帯びていた。一真の名前を出しているものかどうか迷っていると、先輩は小さくため息を漏らす。

「聞くまでもないか。…柴田かな、そんなデマ吹き込むのは」

「…それは……………って、えええ！？」

一真のことをかばっておいた方がいいかもしれないと思って言い訳しようと思った私は、先輩の続けた最後の言葉に驚きの余り大声を上げてしまった。反応するのが、余裕で一拍分遅れてしまった自覚がある。

「で、デマ…ですか？」

「デマだよ。俺は『白石さん』を知らないし、何より今朝誰にも告白なんてされてないし」

苦笑い気味に、先輩は肩を竦めて見せた。

その表情に…嘘はない、と思う。それに何より、それがデマだとしたら白石さんがフラれたように見えなかったのも当たり前のことだと納得できる。

「第一、そんなにモテないし」

笑って続けた先輩は、そう言って再び廊下を歩き出す。…でも、それは嘘だと思う。マナミ先輩と別れてから、タクミ先輩のことが気になっている子が多いのは私でもわかるから…。

「…なんだ…」

少し開いた距離を追いながら、私はホッと安堵の息を漏らした。…それにしても…そうだとしたら、どうして一真はそんな嘘をついたりしたんだろう。そんな嘘が一真にメリットをもたらすはずもないのに。

「私なんて、その話信じきって色々考え込んだのに…」

独白のような呟きは、先輩にも聞こえたようだった。肩越しに振り返った先輩と、再び目が合う。

それから、先輩はもう一度唇を持ち上げて笑ってみせた。

「そっか。じゃあ俺は柴田に感謝しないといけないかな」

返ってきた先輩の言葉に、私は少しだけ目を丸くする。…確かに、白石さんの話を聞いて色々考えこんだおかげで…先輩の後を追いかける気になったんだっけ。

もしかしたら…あの理不尽大王様はそうなることもわかっていたのかもしれない。私の性格が分かっていたからこそその、嘘だったの

だろうか。

「私も、今回ばかりは大王様に感謝することにします」

「『大王様』？」

私の言葉にプツと噴き出して、先輩はそう復唱した。

「理不尽なことばかり要求してくる大王様なんです」

言っと、先輩は珍しく本格的に声をたてて笑う。その様子に、私はまたホツと胸を撫で下ろした。先輩と一真の関係も…以前とは違う、少しは良い関係になっていくのを予感したからだ。それは「予想」とか「期待」よりも…「確信」に近かった。

…まあそもそも、この2人が険悪だったのは一方的に一真の方が敵視していたことに問題があったんだけれど…。

そうやって、確実に時間は流れている。私たちの思いも関係も、確かに一つの結末を迎えようとしていた。

マナミ先輩だって、一真ともタクミ先輩とも…きつと新しい関係を築いていけるだろう。それは今までの出来事の終着地点であるけれど、同時にこれからの私たちの始まりの場所でもあるんだ。

これだけのことを乗り越えてきて繋がり合う想いは、恋愛であるうと友情であるうと…きつと壊れることはないだろう。

「…また、ポーっとしてる」

数歩先を歩いていた先輩が、ふと振り返って笑っていた。その声に我に返った私は、苦笑を浮かべて「すみません」と小さく謝る。

そんな私に、ゆっくり歩いてきた為にさっきより開いてしまっていた距離の向こう側で…。先輩が、「はい」と左手を差し出してきた。「……………」

放っておけば子どものようにどんどん離れていくと思われたのかもしれない。それでも先輩が出してくれた手が嬉しくて、私は満面の笑顔でそれを握り返した。

繋いだ手は先輩の体温なのか少し冷たかったけれど、心の方はじんわりと温かくなっていく。だから、不意にあの七夕の時にないだ手を思い出してしまった。

そうして、胸の奥で誓う。

あの日自分から離してしまったこの手を、私はきつとこの先何があっても離さないだろう…、と。

Link 27 side: Haruka (後書き)

ハルカとタクミの長い話をここまで読んでくださり、ありがとうございます！

この話はオリジナル小説サイトで数年前に連載していたもので、今回修正してこちらに投稿させていただきました。

とりあえず完結という形は迎えています。今後番外編もちょこちよこと載せて（書いて？）いこうと思っています。そして続編も書くつもりです。どうぞこれからもよろしく願います。



## はじめりは君の声（前書き）

「Sweet & amp; Cool」の番外編、タクミサイドです。  
本編より数ヶ月前、2人の出会いの話になります。

## はじまりは君の声

彼女のことを知ったのは、そう最近のことでもなかった。

2年生の3学期に入り、それまで体育館で行っていた体育の授業が運動場での競技に変わった頃のことだ。俺のクラスがグラウンドで陸上競技を始めた時、一学年下の彼女のクラスはその近くのコートでサッカーをしていた。それが、初めて俺が彼女を見ることになったきっかけだった。

「女子がサッカーってのも逆にそそられるねえ」

クラスメイトの浜名が、短距離走の順番待ちをしている時にニヤニヤと笑いながらそんなことを言った。

「こんな真冬じゃなくてジャージじゃなきゃもっといいんだけどな」と、他の連中まで同意している。

そんな会話にさして興味もなくて、俺は聞こえないフリをしてただ前を見据えていた。絡まれるとろくなことがないとわかっていなかった。

でも……、

「なあタクミい」

浜名が俺の真後ろから、ガシッと肩に手を回してくる。やっぱり

来たか…と内心で首を竦めながら、俺は「ん？」と振り返らないまま応じた。

「お前、どの子がかわいいと思う？一番右？それともあっちのグループの…」

「あー、無駄だつて」

言いかけた浜名に俺が何か答えるより早く、反対側にいた幸田が遮る。

「タクミはそういうの興味ねえつて。あんだけ美人の彼女がいるんだし」

言いながら、幸田はスニーカーの紐を結びなおしていた。…他の連中よりは、少しは短距離を真面目に走る気があるらしい。

「下級生の女子見て浮かれるのと、彼女とは別もんだろつが」

よくわからない理屈を、浜名は膨れっ面になりながら呟いている。そんな彼に肩を竦めて応じつつ、幸田は紐を結び終えて立ち上がった。

「じゃあお前はどの子がいいんだよ？」

聞かれた浜名は、そのセリフを待っていたかのようにパツと表情を明るくする。尋ねた幸田の方も、興味が無いわけではないらしい。

「俺は絶対あの一番右の子がかわいいと思う！」

浜名が指差した先では、ロングの髪を一つに束ねた女子が交代待ちをしていた。高校1年にしては少し大人っぽい雰囲気を持っている、言うならば正統派美人。不意に印象が愛海と被った。それを同じく感じ取ったのか、幸田が「…タクミの彼女にそっくりだな」と少し不満そうに呟く。

「なんだよ、幸田。だったらお前はどの子がかわいいと思うんだよ」  
そんな幸田のリアクションに、浜名は眉を寄せて抗議した。「俺の和美ちゃんをバカにしゃがって……」と相変わらず意味のわからないことを呟きながら。……一体いつの間に相手の名前まで調べるんだろ。

「俺はあそこで今ボール蹴ってる子が断然好み」

言った先を、浜名が目で追っている。

「かわいいだろ、夏川悠花ちゃん」

ニヤツと笑いながら、幸田はそんなことを言っただけで浜名の肩をバンバンと叩いた。

そんな声を聞きつけたのか、俺たちより少し後ろで談笑していた連中が「あ、夏川の話？」と話に入ってくる。

「かわいいいな、なんか明るくて性格良さそうだし」

幸田に同調しながら、奴らは何をわかりあっているのか「うんうん」と互いに頷きあっていた。その真剣な表情が、話の内容の軽さと矛盾すら感じさせる。しかしここまで行くと、皆よく下級生の女子に詳しくなれるものだと思わせる感心させられた。

「なあタクミい」

数人が幸田の味方をしたことで不利だと思ったのか（そもそも何の勝負なのか俺には理解できないけれど）、浜名は少し情けない声で俺にすがり付いてくる。

「タクミは和美ちゃんの方がかわいいと思うよな？」

「さて、100メートル走るか」

「タクミい」

伸びをしながら浜名の言葉をスルーして、俺はもうすぐ回ってくる短距離走の順番の方に思考を戻した。

…夏川、悠花。

知るとはなしに知った彼女のその名前と、見るとはなしに見た彼女の笑顔。

それが、あの子との出会いだった。

\*\*\*\*\*

「タクミい」

今日何度目だろう、この浜名の情けない声に呼ばれるのは。

「保健室連れてって」

さっき3度目の100メートル走で、見事に前転しそうなほどの勢いで転んだ浜名。砂だらけになったジャージの下で、膝から血が出ている。それでも痛みには慣れているのか、大して痛そうな顔はせずに俺のところへやってきた。

何で俺が…と言いかけて、その時に初めて自分が保健委員だったことを思い出す。ため息まじりに立ち上がって、担当教師に保健室へ行く旨を伝えて浜名を連れて歩きだした。

「お、試合でもやってんのかな」  
サッカーコート脇を通る時に、浜名がそんなことを言ってそちらを眺めた。怪我をしても、女好きの性格は当たり前だが直るはずもない。

そんな言葉につられて俺もそちらを不意に振り返った……その時だった。

ドリブルをしていた女子のボールを取ろうとした子が、スライディング気味にそこへ足を伸ばしたのが見えた。しかしそれが捕らえたのはボールではなくてドリブルをしていた相手の足で……。思い切り足を払われた彼女の方は、そのままそこに勢いよく転ぶ。

「ハルカっ、大丈夫!？」

周りの女子が慌てて駆け寄って行くのが見える。派手に転んだ方の彼女は、一度は倒れながらも元気に立ち上がってみせた。さつき幸田たちが「かわいい」と騒いでいた、夏川悠花だった。

「大丈夫だよ、これくらい」

ニコツと笑って、彼女は自分の足を払った相手にも手を伸ばす。

「ハルカ、ごめん……」

転ばせてしまった張本人の方は、わざとではなかったけれども責任を感じて青ざめているようだった。差し出された手を掴んで立ち上がりながらも動揺しているのがよく分かる。

「大丈夫だって!気にしないでよ」

ポンと相手の肩を叩きながら、彼女は声を立てて笑う。

「でも血が出てるし……」

手のひらの辺りを指差しながら、相手は涙声になっていた。

「あ、ホントだ。一応保健室行ってくるね。ちょっとサボれてラッキー」

ペロ、と舌を出してウィンクをしながら言う彼女に、相手もそこでようやくホッとしたようだった。

「一緒に行くよ、ハルカ」

保健委員らしい他の女子がそう声をかけたけれど、彼女は笑ったまま首を横に振る。

「大丈夫。同じチームから2人も抜けたら負けちゃうよー」

そう言って、彼女はクラスメイトたちに手を振ってコートの外に出た。

「……………タクミ？」

その一部始終に気を取られていた俺を不審に思ったのか、不意に隣の浜名が声をかけてくる。

「あ、ああ、なんでもない」

視線を前に戻して、俺はそのまま浜名を連れて保健室へと向かった。

\*\*\*\*\*

保健医の先生は、丁度不在だった。

浜名の怪我也ジャージだったおかげで大したことはなく、少しすりむいた程度だった。一通りの怪我の手当てくらいはできるつもり

だから、仕方なく俺が消毒液とコットンを手に取る。

遠慮なく怪我をしたその膝に液を浸したコットンを押し当てると、浜名が声にならない悲鳴を上げた。

「…もうちよつと優しくしてくれたって…」

「気持ち悪いこと言うな」

笑いながら答えて、俺は道具類の並んだ中から絆創膏を取り出す。丁度その時、カラカラと保健室のドアが遠慮がちに開けられた。

「…失礼しまゝす」

さっきの、あの子だった。保健室に入ってきてすぐに俺たちに気づき、肩に届くかどうかというくらい髪の毛を揺らしてペコリと軽く会釈をする。それから室内をグルリと見渡して保健医がいないのに気づくと、小さく吐息をもらしてから俺たちとは少し離れた場所にある椅子に座った。

そちらにも、道具が一式揃っていたようだ。消毒液を手繰り寄せて、右手の手のひらにコットンを使って塗る。すり傷に染みるのか、一瞬だけ眉を寄せた。

「浜名、先に帰ってて」

浜名の膝に絆創膏を貼りながら、俺はそう告げる。手当てを終えてまくりあげていたジャージを下ろしながら、浜名は首を傾げた。

「お前は？」

尋ね返されて、俺は使ったばかりの消毒液やらといった道具を指さす。

「これ片付けてから行く」

「そっか。サンキューな」

礼を言っ、浜名は言われた通り先に保健室を出て行った。後ろ手に閉めたドアがピシヤンと音を立ててから、俺は自分が使ったも



のを片付ける。」

それから、近くにあった湿布と、包帯代わりになるサポータータイプのガーゼを手にした。右手を怪我している為に左手一本で手当てに苦戦しているあの子に、そつと音を立てずに近寄る。

「…右手出して」

近くまで寄ってからそう声をかけると、俺の気配に気づいていなかったらしい彼女が驚いて顔を上げた。それから、「え、え？」と一瞬何なのか理解できないまま、言われた通りに右手を俺の方へ差し出してくる。この至近距離で見る彼女は、確かに幸田たちが騒ぐのもわかる気がした。

彼女の左手から消毒液を受け取り、不器用にやりかけた消毒を無言で終わらせる。言われるがままに手を出していた彼女は、その頃にはようやく状況が理解できたらしく肩をすぼめて恐縮しているようだった。

「…すみません」

小さく謝る彼女に、続けて俺は湿布を取り出す。

「さっき、転んだ時…」

「…?」

言いかけた俺の言葉に、彼女が小さく首を傾げた。大きな目で俺を見つめているのが分かったので、あえてその目は見ないように湿布から透明のフィルムをはがす。

「周りはすり傷にしか気づいてないみたいだったけど…手首、捻ったよね」

言つと、手当てをするために支えた俺の手の中で、彼女の右手がビクリと反応した。

あの転んだ瞬間、手のつき方が悪かったのが見えた。恐らく相当痛かったはずだ。それでもすり傷のことしか言わなかったのは、彼女を転ばせた張本人にそれ以上の罪悪感を抱かせたくなかったせいだろう。

「見られてたんですか」

小さく苦笑いを浮かべて、彼女は俺を見る。手首にはすり傷がないことを確認してから、俺はそこに湿布を貼った。

多分、この子は他人に気を遣わせないように振舞うのが上手いんだと思う。そこに、一般的な「優しい」とか「思いやりがある」という言葉では言い尽くせない何かを感じてしまった。

だから、そんな彼女に合わせて湿布の上から抑えるのはガーゼのサポーターにする。これならジャージで隠れるだろうし、仮に見えてもそれほど気にならないだろう。仰々しく包帯でも巻けば、彼女の気遣いが無駄になるように思えたからだ。

「……ありがとうございます」

俺の考えがわかったんだろう。手当てしてあげたことに加えてそれも含め、彼女は深々と頭を下げた。「どういたしまして」と返して、俺は手近のゴミ箱にゴミを捨てる。

そうして後片付けを始めると、慌ててそれを手伝おうとした彼女

が「…あの」と遠慮がちに口を開いた。

「…先輩、お名前何て言うんですか？」

手当てしてあげただけで、恩でも感じたんだろうか？その義理堅さと真面目さに少し笑って、俺は「…タクミ」と短く答える。

「……タクミ先輩……」

何かを考えるように復唱した後、彼女は再び顔を上げた。消毒液を元の場所に戻しながら、もう一度尋ねてくる。

「あの、苗字も教えてくださいっ」

言われて、俺は思わず彼女の顔を振り返ってしまった。

「……」

それから、彼女の真剣な顔に思わず頬がほころんでしまう。

「苗字だよ、タクミが。拓巳准一」

そう答えると、彼女は「えっ」と声を上げた。そうして少しだけ気まずそうに、頭を下げる。

「す、すみませんっ。失礼しました……」

「いえいえ、よく言われるよ」

片付け終えて棚を閉め、俺は「じゃあね」と保健室のドアの方へと向かった。そんな俺の後ろ姿に、「本当にありがとうございました」と彼女が一礼する。首を振って応じて、俺は先にそこを後にした。

\*\*\*\*\*

そんな出来事の翌週のことだった。

その日も空は晴れ渡っていたので、予定通りに校庭で体育の授業があった。教師が来るのと授業が始まるのを待つ間、相変わらず飽きもせずの下級生の女子を眺めては騒ぐ連中がいる。浜名と幸田も変わらずその一員で、俺はそれを呆れるわけでもなかったがただ興味なさそうに眺めていた。

そんな中、不意に一带が騒がしくなった。何かと思つて顔を上げると、その連中の視線の先は1年生女子の集団の中。向こうもまだ教師が来ていないらしく、サッカーコートの外からあの子がこちらに大きく手を振っているのが見える。

周りの男連中は、「え、俺？」とか「お前じゃねえだろ」とか大騒ぎで……。2年の男子連中に人気らしい彼女のその行動に、周囲が沸き立っているようだった。

「誰に振ってんだろ」

幸田も気になるのか、そわそわしたように俺に尋ねてきた。

「…さあ？」

適当に返して首を傾げながら、俺は先日の幸田と同じように短距離走に備えて靴紐を結びなおす。顔を逸らした瞬間、視界の片隅に彼女がムツと眉を寄せたのが映った。

そして、次の瞬間……。

「タクミせんぱーいー!!」

耳障りにならないほどではあったけれど辺りに響きそうな大声で、向こうの方から彼女が叫んだ。

「…!?!?」

驚いて顔を上げた俺と同時に、クラスの連中も目をみはって俺を振り返る。

「何でタクミ？」

ざわざわと周りが俺と同じ疑問を口にした。まさか手を振っている相手が自分だとは思わなかったもので、思わず目を見開いてしまう。先週のおんな些細なことだけで、彼女がこんなに人懐っこく笑顔を見せてくれるとは思っていなかったから。

「……………」

周囲が訝しげに見守る中、俺は無言のまま彼女に向けて片手を上げて返した。それを見て満足そうに笑うと、彼女は嬉しそうにクラスメイトたちの輪に戻っていく。その満面の華やかな笑顔に、ギュッと胸のどこかが何か音をたてた気がした。

そう、きつと全てが始まったのはその瞬間で……。

後に彼女が俺のことを好きになったと言っていたその時、囚われたのは彼女の方だけじゃなかったんだ。

俺を呼ぶあの声と笑顔から、自分の中の何かが音をたてて変わっていく。

……そう。

はじまりは、そんな君の声。

はじまりは君の声（後書き）

本当はハルカだけじゃなくタクミも、出会った時から何かしら惹かれる部分があったんだろうなあと書いてみました。

この数日後から、タクミはハルカに追いかけるわけですね（笑）

華（前書き）

ハルカの友達、華江と向井くんの出会いの話です。

時系列としては「cool」「birthday」辺りと同じく  
らしい時期です。



「俺とさあ、付き合っただけじゃあないかね」

目の前の男が発したそんな一言に、私は思わず相手にバレない程度に眉を顰めてしまった。

彼の名前は、金村隼人といった。

他人にあまり興味がなくクラスメイト（特に男子）の名前を半分も覚えていない私は、それでもこの男の名前はしつかりと覚えていた。高校に入ってから同じクラスになったことはなかったが、何の縁からか小学校から同じ学校に通っている男だった。小学校・中学校の頃は、何度も同じクラスになったことがあったはずだ。

「片桐さあ、すげえ美人になったじゃん。ちょっと見直したっつか」

金村は私の内心になど気づく様子もなく、ただ笑いながらそう続ける。少し照れながらのその言葉が…声にならないくらい私にとっては気持ちが悪い。

「ごめんなさい」

間髪入れずに、私はニッコリ笑ってそう答えた。神妙な面持ちで返事をする気になんてなれず、むしろ顔には極上の笑顔を浮かべてやる。そうすると今度は、相手が眉を寄せる番だ。

「私、今誰とも付き合うつもりはないの」

はつきりと言い切って、私は少し首を傾げてみせる。「それと」と言葉を繋げて、思ってもみない返事を受けて面食らった彼をまっすぐに見上げた。

「興味ないから、あなたに」

自分でも残酷なセリフを吐いて、私は身を翻してそのまま歩き出した。

誓っていうけれど、普段はこんなに手ひどく人をフツたりしない。いつもなら申し訳なさそうに、丁重にお断りをする。そうすれば後腐れを起こすことも、変な行動に出る男もいなかった。だけど今回は、私の中では勝手が違っていたのだ。

…金村は、小学校の頃から私をいじめていた主犯格だった。

その頃の私は、子どもにしてもかなり太っていた方だった。それが原因にもなつて性格も内向的、いじめられる格好の的だったに違いない。誰かが始めたそのいじめは、やがてクラス内に伝染していった。

もちろん味方になってくれた子たちもいたけれど、それはごく少数だった。新しい標的が現れるまで…私は何年も、それに耐えなければいけなかった。

今思い出しても、苦い過去だ。負わされた傷は癒えることはないし、忘れることもできない。助けてくれた人たちの笑顔に幾分か救

われることはあっても、それで全て帳消しになるわけもなかった。

それが、高校に入って環境がガラッと変わった。中学の途中から、県内でも有名な進学校へ進むための受験勉強によって、私はストレスで急激に痩せた。人よりあつた体重は女子高生の平均よりも少なくなり、街を歩けば男の子に声をかけられるようになった。決してうぬぼれるわけじゃないけれど、周りの私を見る目がかなり変わったのがわかった。

私の内面は、全く変わっていないのに…。

見た目が変化しただけで、私に対する評価や印象は以前のものと180度違った。

そんな人たちは決まって、私の本心や本当の性格になんてきつと興味がない。外見から受ける印象だけで、こちらの全てを理解した気になっているだけだ。

だからこそ、私はごく一部の友人を除いては他人を信用することはおろか、興味すら持てないでいる。

金村も、例外ではなかった。

高校に入ってからやたらと好意的に話かけてくるこの男に、私は内心でうんざりしていた。そして1年の3学期に入った今、彼は私が嫌がっていることに気づきもせず告白をしてきて…。

…ほら、それがいい証拠。私がどう思っているのかなんて考えようともしていない。

金村はルックスも良い方だし、頭だつて運動神経だつて良い。恐らく、断られるなんて思っていなかったんだろう。

私からしたら、あんなことをした相手によく告白できるなど逆に感心させられるのだけれど…。恐らく、金村にとつたら私をいじめていたことなんて大したことじゃなかったのかもしれない。

「……………」

愛を告白されたはずなのに、気分は憂鬱を通り越して不愉快だつた。顔を顰めて、私はそのまま呼び出された裏庭を後にした。

\*\*\*\*\*

気分を害したまま家に帰ると、母親が待っていましたと言わんばかりに出迎えてきた。いつもなら「お帰り」の一言で済まされるはずのそれがやけに丁寧なので、何となく嫌な予感がする。

「何？」

苦笑い気味に聞くと、母は「お願いがあるのー」とやはり予想通りに両手を顔の前で合わせた。

「今日の夜お父さんの会社の人がうちに来るから、その準備してるだけだね…」

父は、よく急に同僚やら後輩やらを連れてくる。料理が得意な母もそれを嫌がることもなく、いつもお客様をきつちりともてなしていた。しかし、母が完璧にもてなせばもてなすほど、私にとっては迷惑なこともある。居心地をよくした彼ら客人が、何かというと集まる場所のうちを選ぶのだ。静かに部屋で過ごしたくても、階下から聞こえてくるドンチャン騒ぎが迷惑なことも少なくない。

「部屋に飾るお花がなくなつてね」

「花なんか別にいらないでしょ。どうせ夕飯食べに来るんだから」

「そういうわけにはいかないわよお」

最近お客様なんて来ていなかったから、家の中はキレイに片付けられてはいるが殺風景だった。それがどうしても気になるらしく、母は「お願いっ」とエプロン姿のまま少し甘えたような声を出す。

「…仕方ないなあ」と呟くと、パアッと顔を明るくした母に財布を持たされた。

「町のお花屋さん、電話で頼んであるから取ってきてね」

言いながら準備よく用意されていた店までの地図を手渡され、私は思わず顔を顰める。

「『町』！？結構遠いじゃない！」

「大丈夫よー、自転車で行けば15分くらいでしょ」

「花なんか近くで買えばいいのに」

「その花屋さん、安いしキレイだしサービスいいのよねえ。お母さんいつもそこで買ってるのー」

もつすぐ40歳になるくせに、母は時折こうして甘えた声を出す。

しかしそれがわかっていても断れないのも私の常だった。ため息まじりにその地図も受け取り、再び玄関を出る。

「華江、よろしくねー」

笑って手を振る母に吐息まじりの一瞥を返して、私は休む間もなく自転車に乗った。

母が書いた地図は少し分かりにくく、5分ほど近くをさまよってしまった。それでも何とか辿り着いた花屋さんは、確かに言われた通りとてもおしゃやかな店構えだった。それほど大きくはないけれど、木の造りに温かみを感じさせられる。結構繁盛しているらしく、店の名前とメモに書かれたそれを見比べている間だけでも何人かのお客さんとすれ違った。

「ありがとうございますー」

出て行くお客さんと入れ違いにドアを開けると、中から男の店員の声が聞こえる。男の人の声がするのがどこか意外で何となく顔を上げると、そこにいた店員と目が合った。180センチ以上はありそうな長身が、かわいらしいこの店とのギャップを感じさせる。それでもそのギャップは決して嫌なものではなく、逆に客を引き付ける印象があった。

「あれ」

そんなことを思いながらその店員を観察していると、向こうがニッコリ笑ってその声を上げた。

「いらっしゃいませ。片桐、うちの店に来るの初めてじゃない？」

人の良さそうなの…いやむしろお人よすぎるほどイイ人そんな顔をした彼は、人好きのする笑顔でそう続ける。その言葉にわずかに目を見開いてみせて、私は小さく首を傾けた。

「…ごめんなさい、どこかで会ったことあったかしら」

瞬間的に観察しながら、私は相手の気分を害さないようにできるだけ控えめにそう尋ねる。私の苗字を呼んでいるのだから、会ったことのない人物なはずはないのだろうけれど…。

「同じクラスなんだけど…やっぱり知らなかった？」

私の問いに彼は気を悪くした様子もなく、再び笑う。言われて、そういえばと思い出す。名前はやっぱりわからないけれど、同じ教室で見た顔だった。それによく見れば、彼がエプロンの下に着ているのは私の学校の制服だ。

長身ではあるけれどもガタイが特別いいわけでもなく、ひ弱な感じでもなく…ごくごく普通の男子高校生といった感じだ。多分、クラスでもとりわけて目立つ方じゃないんだろう。いい意味でも悪い意味でも、目立つ存在ならさすがの私も顔と名前くらい一致する。

「やっぱり、片桐ってクラスメイトの名前あんまり覚えてないんだ？」

悪びれもせず、こちらの痛いところをついてくる。曖昧に笑って返すと、彼は「…それ」と苦笑いを浮かべた。

「教室で、いつつも思ってた。片桐はいつも笑ってるけど、心から笑ってない気がする」

思わぬ言葉を続けられて、私は自分でも無意識のうちに笑顔が消してしまふ。無表情に戻り、「…作ってるって言いたいのか？」と小

さく口にした。

尋ね返された彼は、笑って小さく頭を振る。

「そうは言わないけど。夏川とか、仲の良い子とは本当に笑ってるように見えるし。…ただ、『作ってる』というより、『武装』してる感じ」

エプロンの中に手を突っ込んで、彼はそう続けた。

「『私の中に入ってこないで』ってね」

彼はそこで冗談っぽくウィンクして見せたけれど、私は笑えなかった。凶星を突かれて、ただ言葉を失う。

いつの間にかうまくなっていた仮面の笑顔の正体を、面と向かって暴かれたのは初めてだった。

「ごめん、変なこと言って」

私がただ表情を消して立ち尽くしたのに気づいて、彼はまたフツと柔らかい笑みを浮かべて見せた。それから、「それより…」と一度店内をぐるりと見渡してから視線を再び私の前で止める。

「どういう花、買いに来たの？」

尋ねられて、私はようやく我に返ったようにハッと目を見開いた。

「…あの…母が電話で予約をしていると思うんだけど…」

「ああ！あの常連の『片桐さん』って、片桐のお母さんだったんだ！すぐに分かってもらえるくらい、母はよくここに来ていたんだろうか。意外にミィーハーなところのある母のことだから、この花屋さんで「安くてキレイ」という理由だけで買いに来ているわけではないんじゃないかと今なら思う。」



「待つてて」と言い置いて、彼は店の奥に用意しているらしい花を取りに行った。その間に店内を見回してみたが、数人いる店員さんは皆接客中なくらい取り込んでいる。彼がこういうカワイイお店をバイト先に選ぶ辺り、なんだかおかしくなつて私は口元を緩めてしまった。

思わず笑ってしまったその瞬間、戻ってきた彼がそれに気づいて小首を傾げる。

「何か面白いことあった？」

聞きながら、彼は私に合わせているのか笑っていた。

「うん。こういうカワイイお店でバイトするんだな、と思つて」

正直に思ったことを言うと、彼は「ああ」と小さく頷いてみせる。

「中にはバイトの人もいるけど、俺はこの店の跡取り息子だから」

「えっ、そうなの？」

「うん」

素直に驚くと、彼は笑つてコクリと頷いた。それから、母が予約していたらしい大きな花束をカウンターに置く。

言われた金額を財布から出して払うと、彼は店の出口まで促してくれた。扉を開いたところで「ありがとうございます」と花束を手渡される。終始笑顔で見送ってくれる彼に「こちらこそ」とよくわからない返事をしてしまいながら、私は再び自転車に乗った。

「あの…」

自転車を漕ぎ出そうとしたその瞬間、少しだけ思いとどまって私は遠慮がちに声を出す。

「？」

相変わらずニコニコ顔の彼が無言で先を促した。改めて言うには  
勇気が必要な一言を…私はなんとか絞り出す。

「…あなたの、名前…」  
それだけ言うと、彼は「ああ」と声を出して頭上の看板を指差した。

それを見上げて、私はそこに書かれた店の名前を読み上げる。

「『むかい』…くん？」

「そう。向井直です」

そう言って笑う彼の表情は、作り物の私とは違う…本物の笑顔だった。

\*\*\*\*\*

家に帰って、花束と一緒に財布と地図を母親に返した。そのまま  
部屋へと戻り、私はベッドに倒れこむ。

…不思議な男の子だったな、と、感じた印象と共に脳裏をあの手  
顔がよぎった。

過去に受けた傷から、内面を他人に曝け出さないと決めてうまく  
なったはずの「作り笑い」を…。難なく暴いてしまった彼に、少し  
興味を持ったのかもしれない。

翌日の学校、私はいつも通り余裕のある時間に登校した。昇降口で上履きに履き替えてから、教室までの道のりを歩く。その間に何人かに声をかけられて、私は笑顔でそれに応えた。

…あの彼に、「武装」と言われた作った笑顔で…。

教室に着く数メートル手前で、逆に教室から出て行く男子数人とすれ違う。HRまでまだ時間があるから、どこかへ行くのだろう。その中に昨日のあの向井くんの姿を見つけて、私はふと視線で追った。

男友達と話しながら、彼は昨日の笑顔で笑っている。そして私の視線に気づいたのか、一瞬だけ目が合った気がした。「おはよう」と声をかけられるだろうか、と思った。あの、人の良い温かい笑顔で…。

「……………」

だけど彼は、そのままふと視線を逸らして行ってしまふ。友達と笑い合いながら、私とすれ違って背を向けてしまった。

…何で…？

ズキリ、と、自分のどこかが痛んだ気がした。昨日は、あんなに優しく笑って話してくれたのに……………。

そう思った瞬間、私は自分でも無意識のうちに後ろを振り返っていた。

「向井くん！」

大声で呼んだ私の声に、彼と同時に彼の友達も驚いてこちらを振り向いた。

\*\*\*\*\*

呼び止めたはいいもののギャラリーがいると話が切り出せない私に気づいたのか、向井くんは誰もいない裏庭に私を連れて行った。

「何か話？」

こちらの思いになんて気づいていないのか、彼は小さく首を傾げながら尋ねてきた。

「…どうして…無視したの」

言いにくい言葉を絞りだすように言うと、向井くんは「無視？」と怪訝な表情で私を見つめ返す。真正面から見据えられて、私は何だかいたたまれない気分になってきた。昨日の件で少し近づけたと思ったクラスメイトだったのに…突き放された気分だ。

「さつき、目が合ったのに挨拶もしないで行っちゃったから…」

言いながら、私は何となく向井くんの顔を見れずに視線を逸らしてしまう。だけれどそんな私の頭上に、「片桐」と柔らかい響きを含んだ声が降ってきた。

「片桐から挨拶されてたら、ちゃんと返してたよ」

そんな言葉に顔を上げると、少し苦笑い気味の彼と目が合う。言われてから、気づいた。私だって挨拶もしないですれ違っただけだ

ったことに。

「…嫌かもしれないと思ったから、俺からは声かけなかった」

続いたそんな言葉に、私は眉を寄せる。1月の冷たい風が髪をかき乱していったけれど、それを撫で付ける余裕も今の自分にはなかった。

「…どういうこと？」

聞き返すと、向井くんは再び少しだけ笑ってみせた。さっきの苦笑よりは…昨日の優しい笑顔に近い。

「片桐は、他人と深く関わるのが嫌なんだろ？」

尋ねるというよりは確信した様子で、向井くんはそう口にした。

「本当の自分を知られるのが怖い？他人を遠ざけようとするのはそういうことだよな」

「……」

私より20センチほど高い顔を見上げて、黙したまま私はそんな言葉を聞く。

「誰にでも笑顔で、誰にでも好かれて…だけどそうしてでも他人と関わりたくないのは、傷つけられたくないから？」

凶星を指されて、私は更に口ごもった。確かに、他人と関わりたくないだけなら冷たい態度を取ればいい。そうすれば嫌われて、誰も私になんて寄り付かなくなるだろう。だけど私は…他人を信用できないいくせに、やっぱり嫌われるのは怖がってる。それは昔いじめを受けていた「傷」に他ならなかった。

「うぬぼれるわけじゃないけれど、そんな片桐に気づいた人間は多

分少ないと思う。…だからこそ、片桐は俺と関わることを嫌がるんじゃないかと思った」

「……そんな…」

そんなことない、と言いたかったけれど、私はそれを言葉にできなかった。彼の言うことは本当だったからだ。

私は、たった2人の親友以外に素を曝け出すことはできなかった。むしろ、「武装」に気づかれるわけにはいかなかった。

過去の傷から自分を守るためには、それしかなかったからだ。

だから、それに気づいた人とは関わりたくないと思っただろう。

気づいたのが、この人じゃなかったなら…。

「……」

そんな自分の中を満たす思いに、私は気づいてしまった。

…そうだ、この人じゃなかったら…私は自分の全てを暴いてしまう人間とそれ以上付き合いたいとは思わなかった。

それでも向井くんに対してそう思わなかったのは…彼の優しさに触れたからかもしれない。

この人は、私のことをよく分かっている。分かった上で、私の望むように接しようとしてくれている。だからこそ自分からは声をかけなかったんだろうし、私が二度と関わりたくないと思えばきつと二度と話かけてなどこなかっただろう。

今まで、こちらの本音など見向きもせずに関わってきた人たち

とは完全に異色だった。

「向井くんは……別よ」

ようやく言えた一言は、そんな気の利かない答えだった。その言葉に、向井くんが少しだけ眉を持ち上げて私を見下ろす。

「……これからは……声かけるわ」

言つと、向井くんは「そう」とニッコリ笑ってくれた。

「それにしても……どうして私のこと、そこまで分かるの？」

洞察力が鋭いだけじゃない気がする。頭の回転が良いのもあるかもしれないけれど、ここまで空気を読んでくれる人も珍しい。

「『どうして』？」

まるで自問するように、向井くんは私の言葉を復唱した。それから、フワツとした柔らかい笑顔を浮かべる。

「ずっと見てたからかな」

言われて、「え」と私は大きく目を見開いた。その言葉の意味がよくわからず……理解しようとする中を色んなことがよぎる。それでも核心に触れる答えが自分で得られず、「それって……」と彼に聞きなおそうとした。そうして顔を上げた……その時、だった。

「片桐！」

向こうの方から、一つの影がやってくる。向井くんと共にそちらを振り返ると……こちらへ向かってくる影はあの金村隼人のものだと

気づいた。

「探したんだぜ。こんなとこにいたんだ」

何でこんなところにこいつが…と私が思うより早く、行動したのは向井くんだった。私と金村を見比べて、何事かを察したように視線を移動させる。

「…じゃあ、俺は」

金村のただならぬ雰囲気を読み取ったらしく、向井くんはそこを離れようとした。気を遣ってくれたのは分かったけれど、この時ばかりは嬉しくない。

「なあ、やっぱり俺と付き合いおっせ」

向井くんがその場を後にするより早く、聞かれても構わないと思っただのか金村が私に近寄ってきた。途端に湧き上がる嫌悪感。昨日と同じ黒い感情が、渦を巻いて自分の中を駆け巡っていく。

「あれから考えたんだけど…俺に興味がないなんて、ちょっと強がっただけかな、って」

…吐き気がする。どこまで自信過剰なのか。どこまで自分本位なのか。どこまで私のことを理解していないのか。

いつも張り付かせる笑顔を作る余裕なんて、なかった。ただ目の前のこの男を、過去のいじめられて耐えるしかなかった辛い思いと共に完全に拒絶する。

「冗談じゃないわ」

気づくと、自分でも無意識のうちにそんな言葉がポロリと零れ落ちていた。

「…なに…？」

金村が、目を剥く。サッと表情が変わるのがわかったけれど、私



はそれに臆することなく彼を睨み上げた。

それから、吐き捨てるように続ける。

「どこまで自意識過剰なの？私があなたに興味を持つてるとでも思った？あなた私に昔何をしてきたか自分でわかっているの！？」

まくしたてるように言うと、金村がカツとなったように眉を吊り上げた。ついにあちらも何かの糸が切れたのかもしれない。

「…調子に乗んなよ」

呟く声が地を這うように低い。

「人が下手に出てりや調子に乗りやがって」

金村の言葉に、私は「やっぱり」と心の中で思う。最低な人間は、どんなに取り繕ったって最低でしかなかったんだ。

「お前何様？デブでブスで救いようがなかったくせに。俺が付き合ってたやると言ってるのに『冗談じゃない』って？ちよつと外見が良くなっただけで調子に乗ってるじゃねえよ」

どうして、こんなセリフが吐けるんだろう。いじめられていた時もそう、彼らは、どうしてこんな言葉を人に突きつけられるんだろう。相手に心があることを、もう既に失念してしまっているのだろうか？

「…くだらない」

金村の長いセリフに私が返せた言葉は、唯一それだけだった。ただそれが、私のこいつへの本心を端的に表した言葉だった。

「っ」

それを聞いた金村の行動は早かった。瞬間的に拳を振り上げるのが、私の目に映る。そしてそれを振り下ろされると思った刹那、私は思わず目を固く瞑ってしまった。

「…っ」

ガツと鈍い音がして、金村の拳の重さを物語った。



彼の手を引つ張つて立たせ、私はまだ保健医も出勤してきていない保健室へと向かった。

\*\*\*\*\*

向井くんを椅子に座らせ、私は手際よく手当てに使う物を揃えた。消毒液を浸したコットンを血の流れる口元に押し当てると、彼が「いてて」と眉を寄せる。

「歯くいしばらなかつたの？」

ケンカ慣れなんて当然してなさそうな彼に、私はそう尋ねた。

「そんなこと考えてるヒマなかつた」

答えて笑う彼の様子から、私をかばってくれたのも頭で考えてのことじゃなかつたのかもしれないと思う。無意識に、動いてくれていたんだろうか。この優しい彼のことだから、それは十分ありえることだった。

「……………」

そう思うと、自然と目の奥が熱くなつていくのがわかつた。泣きたくなんかないのに、自分の意志に反して視界が潤んでいく。消毒液を手にしたまま雫が零れ落ちた瞬間、向井くんが少し驚いたように目を見開いた。それから、少し慌てたように立ったままの私を見上げる。

「あ、さっきの金村…？」

少し見当違いなことを言っても、彼はそれでも私を気遣う目をしていた。

「あいつの言つてたことなんて気にすることない」

なぐさめてくれていているらしい向井くんは、真剣な面持ちで私を見

上げている。それを見て、私は泣きながらだけど少しだけ笑ってしまっただ。

「違うの」

小さく首を振りながら、私は否定する。

涙が出たのは、金村に言われた心ない一言なんかのためじゃなくて…。私のせいで代わりに殴られてしまった向井くんの優しさに触れたからだ。でもそれを言葉にして伝えようとすればチープなものになってしまいそうで、うまくいかない。

声にならないまま具体的な答えを返せずに、私は変わらず零れ落ちる涙を止めることもできなかった。

「……………」

そんな私の手をクイと向井くんが引いたのは、その一瞬後だった。泣き止まない私は引つ張られて、ごく至距離に彼の目を見た。まっすぐに見つめてくるその眼差しに射抜かれそんな感覚に陥ったその次の瞬間、何かが唇を掠めていく。

「……………」

消毒液とわずかに残った血の匂いがして、つまりはそれが彼の唇だったのだと気づくには少し時間がかかった。

少し触れるだけのキスをして、向井くんは私の手を離した。

「……………なんで……………？」

混乱しそうな頭でやっとそれだけ声にすると、彼は小さく首を傾げてみせる。

「『なんで』？」

私の言葉を復唱して、その答えを自分の中で整理しているようだ

った。

「好きだから、かな」

まるで何でもないことのようにサラリと言われて、私は瞬間的に自分の顔が赤くなるのを感じる。それを見て、向井くんは「はは」と可愛らしい笑顔で笑ってみせた。

その表情に、気づかされる。きっと私も、この人のことが好きなんだと…。

そしてそれも、敏いこの人のことだから気づいてくれているのかもしれない。

「向井くん、あのね…」

頬が熱くなるのを感じながらも、私はそれを手で押さえて口を開いた。気づくと涙はすっかり止まってしまっている。

「私には昔自分を救ってくれた親友がいて…、彼女は今、幸せになるうとして頑張ってるの」

急に話を変えた私だったけれど、向井くんはそれでも面食らった様子もなくただ私の話に耳を傾けてくれる。

「くだらないと思われるかもしれないけど…彼女が幸せになって好きな人と笑える日まで、私は誰とも付き合わないって決めてるんだ」  
はつきりとそこまで告げると、向井くんはただ私を見上げていた。その真摯な眼差しに…一瞬不安になる。

「バカみたいでしょう？彼女の幸せと自分の幸せは別物なのに…」

それでも、自分はそういう生き方しかできないんだ。自分を救ってくれた彼女の幸せを一番に願う、そんなやり方しか知らない。他人から見たら呆れられる考えかもしれないけれど。

「…いや」

しばらくの沈黙の後、向井くんは静かに口を開いた。それから、あのいつもの笑顔を向けてくれる。

「俺はそういうの…なんかイイなと思うけど」

その一言に、少しだけ私は安堵した。いつでも彼は、こちらの欲しい言葉をくれるんだ。

「だから…それまでは……」

言いくくって言葉を濁らせた私に、彼は変わらない笑顔のまま小さく頷いてくれた。

「うん。待ってるよ」

その温かい微笑みに、自分の中を今まで知りえなかった感情がゆっくりと満たしていくのを感じる。決してそれは嫌なものではなく…むしろ、私の心を包み込むように広がっていった。

こうして、私と彼の少し不思議な関係が始まったのだ。

華（後書き）

ハルカがタクミを追い回して（？）いる間、実は裏ではこんなことがあったのではないかと…。

ちなみにハルカも真帆もこの事実は全く知りません（苦笑）

華江と向井くんの、お互いがお互いのことを好きだと分かかって、恋人同士みたいな空気感を出してるのにそれでも付き合っていないという関係性がなんだか気に入っていたりします。

つぼみの花 1 side・hanae(前書き)

本編「Link」後の華江と向井くんの話です。番外編「華」の後日談(?)にもなっています。



つばみの花 1 side:hanae

8月上旬という暑い時期の教室も、夏休み中で誰もいないせいか風通りが良かった。カーテンを揺らしながら吹き込んでくるそれが、窓の近くに立っていた私の髪もなびかせていく。眼下に広がるグラウンドでは野球部が、その向こうのコートではサッカー部が夏の大会に向けて練習に励んでいた。

長い夏休みも、あつという間に2週間が過ぎてしまった。課題はもうほとんど終えてしまったけれど、読みたい本はいくらでもある。一日の時間をもっと長ければいいのに、と毎日思ってしまうけれど、そう言うとき「彼」は決まって「私らしい」と笑った。

そんなことを考えながらただ窓の外を眺めていると、やがて教室のドアがカタンと開けられる音がした。

「あれ？華江」

同時に私を呼ぶ声がして、ゆっくりとそちらを振り返る。

「どうしたの？今日なんかあった？」

部活の途中で忘れ物でも取りに来たらしい真帆が、そこにいた。汗を長いタオルで拭きながら室内に入ってくる。自分の席まで行って机の中に手を入れながら、私を見上げた。

「うっん、ちょっと静かに本が読みたくて」

「ふーん…あれ？」

実際に私が文庫本を手にしていたので、真帆は一瞬納得したように見えた。けどすぐに、少しだけ顔を傾ける。

「今日、なんかメイクがいつもより気合入ってない？」

「……え？」

思ってもみなかったことを言われたので、私は思わず訝しげに真帆を見た。意識してはいなかったけれど…そう言えばいつもより時間はかかっていたかもしれない。そう思い出した瞬間に、真帆は勝手に自己完結したのか「ほーおお」と妙な声を出した。

「なんだ、この後デートか」

ニヤリと笑いながら言う真帆に、私は自分でも珍しいと思いつながら「ちが…っ」と声を上げる。その反応が真帆ですら意外だったのか、「華江が動揺するの珍しいなあ」と苦笑いした。

「…違うの、別に『デート』とかそういうのじゃなくて」

「はいはい、お相手の彼によろしくね」

ニッコリ笑って受け流しながら、真帆はあえて丁寧な口調でそう言った。

それだけ言い置いて、今度はこちらが反論する間もなく真帆は教室を出て行く。

「…そんなのじゃなくて…」

もう聞こえないと分かっているのに、私は自分に言い聞かせるかのように小さく呟いた。

「……」

丁度その時、スカートのポケットに入れていた携帯電話が鳴った。細かく振動するそれを取り出して画面を見ると、メールが一通届いている。開いたそれはこの後ここで待ち合わせをしている張本人からで、私はメールを開くボタンをゆっくりと押した。

『ごめん、一つ用事ができたからもうちよつと待ってて』

ディスプレイに浮かんだそんな文字を読んで、私はすぐに返信ボタンを押す。まだ時間がかかるなら図書室で待っている旨を返して、再び携帯をポケットに戻した。

どちらかというところ、私は図書室の方が好きだ。本だっただくさんあるし、夏休みでもクーラーは効いているし。待つことすら、そこなら何時間でも飽きることなく耐えられる気がする。

図書室は別校舎なので、渡り廊下を通っていかななくてはいけない。教室から一番近いそこに向かいながら、私は鞆を手にゆっくりと歩いていった。

「あの…っ、私、ずっと前から好きだったんですっ」  
やがてそんな声が聞こえてきたのは、渡り廊下にさしかかろうとしたところだった。すぐその角の向こうからそんな切羽詰ったような声が聞こえてくる。

…いくら夏休みで人気がないからと言って、こんなところで告白なんてしないでほしい。そこを通れるわけもなく、大回りをしなきゃいけないってしまっじゃない。

そう思って踵を返そうとしたけれど、その瞬間に角の向こうに見えた人影に私は思わず目を瞠った。

…見慣れた、後ろ姿。背の高いそのシルエットを私が見間違えるわけがない。

そしてその向こうに見えたのは、何度か見かけたことがある一年生の女子だった。…そうか、彼の近くで彼女を見かけたのはそういうことだったんだ。

盗み聞きをしたいわけではないけれど、私は棒立ちになったようにそこから動けなくなった。角の壁に身を潜め、息を殺す。バレないように気をつけていても、胸を刻む鼓動は耳につくほどうるさかった。

「…ありがとう」

やがて届いたのは、そんな柔らかい声。私の好きなその声は…でも、今はその彼女に向けられているのが何だか嫌だった。

「でも、…ごめん」

そう彼が答えるのも、私は分かっていた。恐らく彼女も同じだろう。傷ついた顔はしていたけれど…驚いてはいなかったから。

「先輩、好きな人がいるんですよ」

「……」

彼女の問いに、彼は答えなかった。ただ黙ったまま、彼女を見下ろしている。後ろ姿で表情までは分からないけれど…恐らく、申し訳なさそうな顔をしているだろう。

「それ、片桐先輩ですよ」

そこで出てきた自分の名前に、私は再び息を飲んだ。

「…それくらい見てれば分かりますから…」

言いながら、彼女は小さく吐息を漏らす。それから、伏せ目がちに呆れたような声で呟いた。

「…向井先輩、可愛いそう」

『可愛いそう』？

彼女が続けた言葉に、私はわずかに目を見開いた。

「うちの部活の人たちも皆、向井先輩が片桐先輩のこと好きなのくらい気づいてますよ。だつてずっと一緒にいますもんね。でも……」  
悔しそうに、彼女はぐつと唇を噛む。キツと睨むように上げた目は、彼をまっすぐに見据えていた。

「でも、片桐先輩にはそんな気ないじゃないですか！向井先輩を振り回してるだけじゃないですか……！」

叫ぶように声を荒げた後、彼女は肩で息をする。

「…先輩、かわいそう……」

最後にはもう一度、弱々しくそんな言葉を口にした。

私は結局、彼がその言葉に何と答えたのかも聞かないまま身を翻すしかなかった。

\*\*\*\*\*

どうやって図書室まで歩いてきたのか、あまり記憶がなかった。ただフラフラと歩いてきた気がする。思ったよりもあの女の子の言葉がショックだったのが、自分でもらしくないと思つてしまった。

図書室に来たつて、本を読む気になんてなれるわけもない。当番の図書委員以外誰もいないその部屋の隅の机に腕を置き、顔を伏せた。

『でも、片桐先輩にはそんな気ないじゃないですか！向井先輩を振り回してるだけじゃないですか…！』

ふと思い出されるのは、そんなあの子の言葉。

私は…そう見えるんだろうか。自分ではそんなつもりもなかったけれど。でも、どこかで自覚はあった。振り回しているつもりはなくても、完全に彼に甘えきっている自分に。

だから、彼女の言葉が突き刺さったと同時に自己嫌悪にすら陥りそうになった。

「…片桐」

どれくらいそうしていたら。やがて、頭上に静かな声が降ってきた。

「寝てる？」

続いた言葉に、私は顔を腕に乗せたまま横向きにずらしてそこに立った向井を見上げた。

「起きてる」

上体を起こしながらも、今の顔を見られたくなくて目を逸らし気味に答える。私の隣の椅子を引きながら、「遅くなってごめん」と向井は謝った。小さく首を振って、私は目を伏せる。

「終わったの？部活と、『用事』」

尋ねると、向井は「うん」と小さく頷いた。

そして、訪れる沈黙。

向井の方は意識してのことではないのだろうけれど、私は何を話せばいいのか分からなくなってしまっていた。

向井は、「部活」と言っても実際は同好会に所属している。しかもそれも廃部にされそうになった囲碁同好会とかで、人数あわせのために頼まれて入ったものだ。だから、部員であつても囲碁のルールはほとんど理解していかないらしい。こうして活動に参加することは稀で、今日は珍しい方だ。

そしてさっきの話から察するに、彼女は囲碁同好会の後輩のようだった。

「俺のせいで遅くなっちゃったから、予定してたやつは無理かな」  
携帯電話を開いて今の時間を確認しながら、向井がふとそう呟く。  
「片桐、一本遅らせてもいい？」

黒いそれを閉じながらこちらを振り返ったその声は、いつも通り優しい響きを持っていた。

今日はそもそも、映画を見に行く予定だった。私と向井はこういうところの趣味は合うようで、夏休み前から一緒に見に行く約束をしていたのだ。たまたま今日という日を選んでいただけけれど、急に向井に同好会に出る予定が出来てしまって。本でも読みながら教室で待っていることにして、待ち合わせをしていたんだった。



「……ごめんなさい」

とてもじゃないけれど、映画なんて見れる気分じゃない。

「……ちよつとさつきから具合悪くて……また今度にしてもらってもいい？」

「え、大丈夫？」

私の顔色が悪いのは本当らしく、向井が少し驚いたように目を瞠った。そして、不意に私の額に手を伸ばす。

「熱はないか」

意図してじゃない辺り、天然な向井の怖いところだ。

「……大丈夫、睡眠不足だと思うから」

「家まで送るよ」

「ううん、駅まででいい」

向井は私が下りる駅で更に乗り換えるため、いつも一旦は一緒に改札を出る。そう告げた私が一步も譲らなそうだと思ったのか、それ以上食い下がることもなかった。

手を引かれて立ち上がり、歩き出した向井の後をついて行く。

「……」

いつもなら流れでそのまま繋いだままかもしれない手を、ふとこの時私は自分から離してしまった。

「……片桐？」

肩越しに振り返った私を、少し心配そうに向井が見やる。

「……………」

答えずに顔を伏せたまま、私はゆっくりと歩き出した。

つばみの花 2 side:hanae

私と向井の関係は、不思議なものだった。一度好きだと言われたこともあるし、私が向井のことを好きなのも向こうは知っている。ただ、それでも付き合っているという関係ではなかった。

そもそも私は昔自分を救ってくれた親友第一で過ごしてきたから、彼女が本当に幸せになるまで自分は誰とも付き合うつもりはなかった。別に彼女にそうしてくれと頼まれたわけでもないし、そんな風に義理だてることが何の役にもたたないことは知っていたけれど。何となく、自分の中での一種のけじめと感謝の気持ちの表れだったんだろうと思う。

向井もそれは知っていたから、私が付き合う気になるまで待つてくれると言ってくれた。一緒に出かけたりと、していることは普通のカップルと変わらないと周りからは言われるけれど、当人同士の気持ち全然違う。「付き合いますよ」とちゃんと告げて始まった関係ではないから、それは特殊なものだった。

でも今から2週間ほど前に、状況が少し変わった。親友のハルカに、彼氏ができたんだ。ずっと片想いして苦しい思いをしてきた彼女が幸せになったことは心から嬉しかった。

でも、だからと言って結局それをきっかけに私と向井の関係がす

ぐに変わるわけではなかった。

その原因は、多分私だ。

私から切り出した条件だったので、私が何かを言わない限り二人の関係は変わらないだろう。多分、向井からは付き合いを催促するようなことは言わない。だけど私は結局未だに何も言えずじまいだった。

「今更」という気持ちもあつたし。

何より元々過去に受けた傷から人をあまり信用できなくなっている私にそんな勇氣はない。今の不思議な関係に甘えきっていた分、変わることで逆に何かを失うことが怖かった。

向井を信用していないわけではない。ただ、いつか来るかもしれない別れを想像すると身は竦んだ。そんなことを言っていたら誰とも付き合えないのは分かっているけれど……。でも恐らく今の関係を変えることに臆病になっている私にすら気づいている向井に、全力で甘えてしまっているのだろう。

だから、彼女の言葉が突き刺さった。

決して彼女の言うように、『私にその気がない』わけではない。でも、『振り回している』ことに変わりはないと思つた。

「華江ー、入るよ？」

急に自室のドアをノックする音がして、私は思わず目を見開いた。机の上の時計に目をやると7時を回る頃だった。どうして今ここに、という思いがあつて驚きを隠せないまま、私は寝転がっていたベッドの上に上体を起こした。

「いたいた。ケーキ食べる？」

母親が通したのだらう、こちらの返事を待たずに開いたドアの向こうにはニコニコ笑つたハルカがいた。

ハルカとは小学校からの付き合いなので、幼なじみのようなものだ。家もそれほど遠くないので行き来はよくあること。持参したケーキはもつすぐ夕飯だからと階下の母に預け、ハルカはローテーブルの前に座つた。

「どうしたの？急に」

わずかに首を傾げて尋ねると、ハルカは「ん？何となく」と屈託なく笑つてみせる。

「タクミ先輩は？」

最近できたハルカの彼氏の名前を出して、私はそう尋ねた。

「今日は受験勉強の日ー」

クッションを胸に抱きしめてくつろぎながら、そんな答えが返ってくる。

先輩は3年の夏という重要な時期なので、付き合い始めたばかりとはいえハルカもきちんと遠慮しているところもあるようだ。

「華江は？今日は向井くんと映画じゃなかったっけ？」

「…具合悪いから延期してもらったの」

「具合悪いの？」

「ちよつとね。大体、映画行ってくつて知ってたら何で来たの？」

「ん？何となく」

「？」

笑って言うハルカの歯切れの悪い答えに、私は眉を寄せる。それでもそれ以上追及する気もなかったため、私もハルカの向かい側に座った。

「具合悪いって、風邪？」

「……」

尋ねられて、私は思わず返事に詰まる。良いタイミングにも思えた。…正直に、話してみようか。

普段自分の心の内を曝け出すことのない私は、大親友を前に重々しく口を開いた。

\*\*\*\*\*

ハルカは、私がハルカがタクミ先輩と付き合い合うようになるまで誰

とも付き合う気がなかったということをもちろん知らない。そんなことを話して恩を着せるつもりもなかったので、その部分は黙っておいた。ただ、自分の気持ちがあつていかなかったから向井に待ってもらっていること。

それと、やはり勇気がなくて現状を打破できないことを全て話した。

「…なるほど」

聞き終えたハルカは、真剣な顔で私を見つめていた。相槌を打つ程度で途中で口を挟まなかったのは、彼女なりの配慮だろう。一通りの話を終えた時に小さく頷いた。

「正直、彼女の言葉もショックだったけれど…」

クツシヨンに顔を埋めて、私は続ける。

「もしかしたら、向井が告白されてたこと自体がショックだったのかも…」

ハルカに話をしている今になってようやく思い当たったそんな感情を、小さく呟いた。

「向井くん、結構モテるよ？」

「…そうなの？大体『イイ人』止まりだと…」

「優しいから、好きになる子はいるよ」

苦笑い気味に言つて、ハルカは私の頭をポンポンと軽く叩く。どうやら慰めてくれていているようだ。

「彼女が言うように…向井を振り回してるのは事実だと思うの」「  
……」  
「けどそれを指摘されると…ちょっと苦しい」  
「うん」  
「分かるよ、というようにハルカは一つ頷いた。」

「でも私は、華江がそこで無理をする必要は一つもないと思う」  
「言い切るように言っつて、ハルカは今度は私の頭を撫でた。」

「…っでも、向井のこといつまでも振り回すわけには…」  
「それがダメって誰が言ったの？その後輩の女の子？それとも向井  
くんと言われた？」

「……ううん」  
「向井くんは知ってるよ？華江が苦しんでること、勇気が出ないこ  
と」

「……」  
指折り数えながら言うハルカの横顔を見つめっていると、涙が浮か  
んできた。

「本当は信用したいのに怖くなってしまふこと、それと…」  
一度言葉を切つて、ハルカは私をまっすぐ見つめる。少しだけ笑  
つたその目は、とても優しい光を灯していた。

「華江が、失うことを恐れて臆病になってしまっくらい向井くん  
のこと好きだつて」と



言って口元をほころばせたハルカの言葉に、ついに瞳から雫が零れる。

「……………うん」

小さく頷いた時には、零れた涙がラグマットを濡らしていった。

「華江がするべきことは、無理することじゃなくて。そういう自分が考えてることを、ちゃんと向井くんに話すことじゃないかな」

「……………『話す』?」

「そう。ただ待つてもらっただけじゃなくて、今はどっという気持ちなのかとか、話せたら向井くんも安心すると思う」

「……………そうかしら……」

「そっだよ」

笑って言うハルカの言葉が、胸に染み入っていく。

彼女に救われたのは、これで何度目だろう。指折り数えたことはないけれど、きっとそれは自分では数え切れないくらいなんだらう。

\*\*\*\*\*

翌日、ハルカに言われた通り私は向井と話をするつもりだった。今自分が不安なこととか、考えていることとか……。全てを聞いてもらっつもりで、彼の家の前に来ていた。

向井の家はお花屋さんをしていて、結構繁盛している。確か今日は店でバイトの日だと言っていたので…ここにくれば確実に会えると思った。メールや電話で約束をしてからするような話ではないと思ったので、来ること自体を告げてはいなかった。

「あら、華江ちゃん」

お店に入っただけ、お花の手入れをしていた向井のお母さんが振り返った。前に何度かお店に来たことがあって、その時向井に「クラスメイト」だと紹介してもらった。ただし鋭いお母さんのことから、何となく私たちの関係に気づいてはいると思う。

「直に用事？ごめんね、今ちょうど配達に行つてて…すぐに戻ってくると思うんだけど」

「あ、はい、すみません。急にお店にまで…」

「ううん、いいのよ。でも約束してないなんて珍しいわね？」

「…はい、ちよつと…」

言葉を濁した私を見て、お母さんはニコリと笑う。

「2階が上がって待つて？」

「あ、いえ、外で待たせてもら…」

「あーっ、華江ちゃんだっ」

慌てて手を振った私だったけれど、すぐに言葉を遮られてしまった。自分と呼ぶ声に、後ろを振り返る。

そこにいたのは、こちらをニコニコと見上げた2人の女の子だった。

「華江ちゃん、遊びに来てくれたのっ？」

「わーい、お2階行こっ」

2人が私の両手を、それぞれぎゅっと引つ張る。それを見てお母さんが、申し訳なさそうに苦笑いして私を見た。

この2人は優衣ちゃんと麻衣ちゃんと言って、向井の双子の妹だ。確か小学2年生だったと思う。いつもお揃いの洋服を着て、とてもかわいらしい。以前来た時に私を気に入ってくれたようで、今日もなかなか離してくれそうになかった。

「優衣、麻衣っ。華江ちゃんはあんなたちと遊びに来たんじゃないんだよ」

住居になっている2階へ上がると、そこにいたもう一人の妹・亜美ちゃんが呆れたように声をかけた。どうやら左右に引つ張られるようにして来た私を見て、状況を察してくれたらしい。亜美ちゃんは中学3年生で、とてもしっかり者。もしかしたら長男より頼りになる性格をしているかもしれない。

リビングのソファに座らせてもらった私にお茶を持ってきてくれたのも亜美ちゃんだった。「ありがとう」とお礼を言って受け取ると、亜美ちゃんは向かいに座って私を見ていた。その顔が少しニヤニヤしていたように見えたので、私は小さく首を傾げる。

「華江ちゃんさ」

今日は部活でもあったのか、帰ってきたばかりだったようで亜美ちゃんはまだセーラー服を着ていた。そのスカートのお太腿のところに肘をつき、頬を両手で包むようにしながら笑っている。

「昨日、直くんとなんかあった？」

「えっ？…何かって…？」

「映画行ってくつて出てったからってつきり華江ちゃんかと思っただけだ」

「……」

「ゲーセンで男友達と一緒にいるところ見かけたから、華江ちゃんとかあつて映画がダメになったのかと思っ」

「……」

「ついにフラれたかと思っ、ついつい笑みが……」

「亜美」

ぐふふ、と兄の不幸を笑う亜美ちゃんの後ろから、厳かにそんな彼女を呼ぶ声がした。

振り返った私たちの目に映ったのは、お店のエプロンを脱ぎ捨てながらため息を漏らす向井の姿。本気で兄の不幸を喜んでるわけではないのだろうけれど、「やば」と肩を竦めて亜美ちゃんは立ち上がった。早々に退散しようとした亜美ちゃんに、向井が改めて声をかける。

「亜美、優衣麻衣も連れてって」

「えー、私これから受験勉強」

「どうせしないだろ」

「やだー、優衣、亜美ちゃんより華江ちゃんがいいー」

「麻衣もー」

小さな双子まで加わってああだこうだ始まったその騒ぎに、向井はもう一度吐息を漏らした。

「いいや、俺らが上行く」

2階のリビングから更に上に伸びる階段を指し示して、そう言っ  
て私を促した。

\*\*\*\*\*

「相変わらずさくてごめん」

3階にある自分の部屋に通して、向井は私に一番にそう謝った。

「ううん」と笑って首を横に振ると、少し安心したように息をつく。  
3姉妹が元気いっぱいなのは来るたびいつものことで、私はそれが  
楽しくて好きだった。何より懐いてくれているのが嬉しい。

気づくと向井の部屋に入るのは初めてのことで、そう意識すると  
急に緊張してきた気もする。気を抜くと優衣ちゃんと麻衣ちゃんが  
乱入してきそうだからと鍵を閉めたことが余計に緊張感を増した。

失礼にならない程度に見渡した室内は、びっくりするほどシンプ  
ルで向井らしいと思った。机とベッドと、オーデイオを置いたラッ  
クくらいしかない。観葉植物はさすがに丁寧にお世話されているよ  
うだ。

「びっくりした、片桐が来てるって聞いたから」

「…うん」

「どうかした？」

さつき亜美ちゃんがお茶を入れてくれたカップを私に手渡しながら、向井も自分のものに口をつける。受け取ったそれからは、まだ温かい熱が伝わってきた。

「…話…したいことがあって」

「うん」

今度は向井が頷いた。私をベッドに座らせて、自分は机にもたれかかった態勢で立っている。

「昨日…のことなんだけど」

「うん？」

少しだけ疑問系になった返事に、私は一瞬だけ深呼吸するように息を吸った。

「昨日、実は…向井が告白されているところを見てしまった」

「…え？」

さすがにそれには全く気づいていなかったらしく、大きく目を見開く。それを見上げながら私は続けた。

「あの女の子の言っていたことが自分の中で引つかかって…それで映画も…」

「…」

「ごめんなさい」

「…」

謝罪の言葉に、向井は特に何も答えなかった。ただ、私の言いたいことがそれで全てではないと分かっていたから、続きを待っているようだった。

「引つかかったのは…その言葉が、私自身、身に覚えのあることだったからで…」

「……」  
気を抜くと涙が出そうになり、それをこらえようと思うと言葉が途切れ途切れになる。

「向井を振り回している自覚は、きつとどこかにあって…」

「……」

「…でもっ、私は…まだやっぱり勇気が出なくて…」

涙はまだこらえられているけれど、鼻の奥がツンとなるのがわかった。

「向井が信用できないわけじゃなくて…心を許せないわけでもなくて…」

顔が見れずに、私は言いながらも下を向いてしまう。そのせいで、今彼がどんな顔をしているのかは分からなかった。

「ただ私は…まだ自分に自信が持てないから…」

言葉の続きを飲み込んだと同時に、ついに涙が零れ落ちた。膝の上で握った拳にポトリと冷たさを伝える。

「……」

その時、向井が無言のままこちらに近寄ってくるのが分かった。

その静かな足音にそれでもビクリと肩を震わせた瞬間、私はふわっと彼の腕の中に包まれていた。ぎゅっと抱きしめられて、思わず目を睨る。

「…いいんだ、それで」

静かな声が、耳元でそう囁いた。

「俺は、振り回されてるなんて思ってたない。第一、今の状況が嫌で片桐に嫌気がさすくらいならとっくにそう言ってる」

いつも優しく他人に合わせる事が上手な向井からは、意外なほどの意志を持った声音。

それに比例するかのようになり、私を抱きしめる腕にぎゅっと力がこもった。

「…向井…痛い…」

「ごめん、ちょっと怒ってるから」

力を緩める気はないらしく、そう言う。

「片桐、俺、待ってるって言ったよね」

私の髪に顔を埋めて、向井はそう続けた。それは…以前、彼に好きだと言われた時のことを指していた。

「片桐が俺と付き合う気になってくれるまで、待ってるって言ったつもりだったけど」

「……うん」

「痺れを切らして待てなくなるほど、俺の気は短くない」

「……うん」

「それくらい、本気なんだ」

「うん」

向井のシャツの肩口が、私の涙で濡れていくのがわかる。ぎゅっとしがみつくように背中に腕を回した私は、まるで子どもみたいだっただろう。

「でも…」



頭を撫でるようにして、向井は少し顔を上げた。至近距離で私の目を見つめながら…微かに笑う。

「待ってる間も、その時不安なこととか考えてることとか…こつやって全部話してくれると嬉しい」

「……うん」

泣きながら返事をした私に、向井は満足そうに笑うとコツンと額をくつつけた。

ハルカの、言ったとおりだった。

全てを話せば受け入れてくれる…向井はそんな人だから。自分の気持ちを素直に曝け出せて、良かったと思う。

いつか、自分に自信が持てて彼の気持ちに正面から応えられる日がくるだろうか。

でもきつと、今の私にはそれはそう遠くない将来のような気がしていた。



つぼみの花 3 side:nao

一人暮らしにしては贅沢な広さのあるマンションの一室。その部屋にあるソファに転がって、俺は既に20分ほどはボーっとしていた。

「お前さあ、何しに来たんだよ」

テーブルでノートパソコンを広げて何やら課題をやっているらしい一真が、そんな俺にそう声をかけてきた。

「そもそも今日は華江と映画に行くっつってなかったか？」

「…うーん…」

答えにならない声を返して、俺はまたゴロンと向きを変えて転がった。

そう、映画に行く予定だった。

でも待ち合わせをした片桐に具合が悪いと言われてキャンセルになった。青白い顔をしていたのでその言葉を嘘だとは思わなかったけれど、不意に繋いだ手を離された時に何か嫌な予感がした。

…もしかしたら、具合が悪いのではなくて何かに落ち込んでいるんじゃないか、と。

「なあ、直」

答えない俺に尚も呼びかけてくる一真。ふと顔だけをそちらへ向

けて、「…邪魔？」と尋ねてみた。

「…っ、そういうこと言ってるじゃねえだろ」

的外れな質問返しをしたせいで、一真は今度こそ大きなため息を漏らした。呆れたようにパソコンに向き直り、驚くほどのスピードで何やら文章を打ち込んでいるようだ。

落ち込んでいるだけならまだしも…傷ついているなら放っておけない。そうは思いつけれど、片桐はそもそも俺に弱音を吐くようなタイプでもなかった。

「分かった、ケンカしたんだろお前ら」

まだ聞き出すことを諦めてなかったのか、ディスプレイに視線を向けたまま一真が言った。

「…ケンカするように見える？」

「……………お前があいつに言い返すわけねえか」

「そうそう」

そもそも、俺と片桐じゃケンカになんてならないだろう。一真もそう納得したらしく、頷きながらマウスを手に画面をクリックしていた。

「お前がついに華江に愛想つかしたか」

…一真しつこい。そう言いかけたけれど、代わりに俺はため息を漏らす。

「そんなことあるわけないだろ」

「だよなあ」

苦笑いを浮かべて、一真はもう一度頷いた。

「じゃあ、逆にお前が愛想つかされたか」

「……それはシャレにならない」

「マジで？」

驚いたように眉を持ち上げた一真が、少しだけ肩を竦めて見せた。

……ないとは思いたいけれど、言い切ることはできない予想だ。

「ま、それもねえだろうけどな。……おい、出かけるぞ」

PCの電源を落として、一真は椅子から立ち上がる。

「……どこに」

「暗い顔するくらいならパーツと遊びに行こうぜ」

「一真と2人でカラオケは嫌だ」

「お前ホントに失礼だな。ゲーセンだゲーセン」

手近に置いてあった携帯と家の鍵を拾って、一真は無言を言わせぬ口調で玄関へと向かった。

\*\*\*\*\*

駅前のゲームセンターに着いた時、もう時刻は夕方を迎える頃だった。それでも真夏なのでまだ外は明るい。遊んでいる高校生たちもまだこれからといった感じだ。

一真と2人の時は、バッティングセンターやらゲーセンやらに來ることが多かった。この日もいつもの場所にやってきたため、うちの学校の生徒も多い。

「さすがに夏休みは混んでんな」

肩を竦めながら入っていきこうとした一真は、ふと入口付近で誰かにトンとぶつかった。

「あ、すみませ……」

相手は女子同士でプリクラを撮りに来ていたうちの生徒らしかった。一真とぶつかった女の子が、謝りながら顔を上げる。だけと言いかけた言葉を、飲み込んだ。一真の後ろに立つ俺に気づいたからだ。

「……………」

目が合って、俺も少しだけ眉を持ち上げた。気まずそうな顔をしたら彼女は、今日俺に告白してきた同好会の後輩だった。

どうやら友達の方も事情を知っているらしく、俺をキッと睨むと「行こう」と彼女の腕を引っ張っていった。ため息まじりにそれを見やっていた俺だけど、鋭い一真がその空気に気づかないはずもない。

「何？あの女」

お決まりのUFOキャッチャーの方へ移動しながら、一真はそれほど興味なさそうに尋ねてきた。

「…ちよっと…今日色々あって」

「ふうん」

一番近くの台を物色しながら、一真は呟く。

「お前も結構隅におけねえな」

ニヤリと言う辺り、大体の事情は察したらしいところが怖い。

自分でも、らしくないと思う言葉を彼女には返してしまった。

そもそも俺は一真みたいに告白されることなんて多くないし、そういう場に免疫があるわけでもない。「ありがとう」と「ごめん」だけで済ませるつもりだったけれど、珍しく熱くなってしまった自分がいた。

「片桐先輩にはそんな気ないじゃないですか！向井先輩を振り回してるだけじゃないですか…！」

「向井先輩、かわいいそう…」

そう言われた瞬間に、自分らしくもなく言い返してしまっていた。

「そんな気がないかどうかなんて、片桐にしか分からないよ」

言った俺に、彼女は涙目を丸くしてこちらを見上げた。

『振り回されてるかどうかは、俺が決める。周りにどうこう言われることじゃないから』

『…先輩…』

『片桐以外の人間に憐れまれるのも不本意なんだ』

大人げなかったことをしている自覚はある。だからこそ、言った直後に申し訳なくなった。それでも謝ろうと思ったり後悔の念を抱くことはなかったけれど。

「…つちつ、おい直、代われよ」

俺が考え事をしているうちに既に何百円か費やしている一真は、ついに諦めたのか俺にそう声をかけた。一真より、こういうことは俺の方がうまい。交代して台に向き直った俺は、そこにある景品を見て小さく首をかしげた。

「……なんでタコ焼器？」

てつきりもつと取りやすそうなものに挑戦しているんだと思っていた。

「なんでって…タコ焼するだろ、家で」

「男の一人暮らしじゃ必要ないよ一真」

大体、一真の腕前じゃ買った方が安い。思わず笑ってしまって、俺はそれでも友人のリベンジに乗り出そうとした。

…その時だった。



「…わっ」

そんな大きな声と共に後ろからドンと押されて、俺と一真はビクツと飛び上がりそうになった。振り返ると、俺達を驚かせようとした張本人が笑って立っている。

「えへ、ビツクリした？」

ニツコリ笑って、そこにいた夏川は悪びれもせずに行った。

夏川ハルカ。片桐の親友で、俺達もいつも大体一緒にいるクラスメイトだ。特に一真とは馬が合うようだ。

「なにすんだよ、てめえつ。びつくりして百円落としただろうがっ」  
「がなりながら言う一真は、そんな夏川の隣にもう一つの影が立っていることによく気がついた。」

「…なんだよ、ゲーセンでデートかよ」

「シヨボイ、と言いながら再び台に向き直った一真の言葉に、俺は「こら」とその頭を小突いた。」

「すみません、タクミ先輩」

夏川の隣にいたタクミ先輩に一真の非礼を詫びると、先輩は首を振っておかしそうに笑っていた。

「大体ゲーセンでデートじゃありませんー。2人を見つけたから声かけにきたの」

「余計ダメだろ、デート中に他の男に声かけんな」

「大丈夫、君たちは大丈夫」

男として見てないから、ということなのか。おかしそうに笑いな

がら夏川はそんなことを言った。

「何取ってんの？一真うまいの？」

言いながら台を覗いた夏川は、次の瞬間思い切り眉を寄せた。

「…何でタコ焼器？」

「それは俺も疑問」

夏川の言葉に同調して、俺も軽く頷いた。大きな口を開けて笑う彼女は、更にその隣の台に視線をやる。そしてすぐにその両目を輝かせた。

「あーっ」

それは女子に人気のキャラクターのぬいぐるみだった。

「先輩っ、これかわいくないですかっ？」

「……………なにそれ、シカ？」

「先輩っ、何言ってるんですかっ、トナカイですよっ！」

漫才のような会話に「このバカツプルが」と一真が舌打ちしながら悪態をつく。一連の流れに笑ってしまった俺を、ふと夏川は「そっういえば」と見上げてきた。

「向井くん、今日華江と映画じゃなかったっけ？」

言われて、俺はふと思い出す。それまで考え込んでいたはずのことまで全てが蘇ってきて…「…ああ、うん」と弱々しく答えた。

「具合が悪いからって、今日はやめたんだ」

「華江が？大丈夫かなあ」

親友が心配らしく眉を寄せた夏川は、わずかに首を傾げる。そん

な彼女を見下ろしていると、俺は無意識のうちに「…あのさ」と改めて呼びかけてしまっていた。

「うん？」

再び俺を正面から見上げた夏川と、目が合う。

「…俺が言うことじゃないと思うんだけど…」

「うん」

「片桐の様子が、少し変な気がするんだ」

「華江の…？」

少し考えるような顔をして、夏川は眉を顰めた。

「…夏川なら、何か力になってやってもらえるんじゃないかと思うんだけど…」

「……」

口元を手で覆うように考え込むような仕草をしてから、夏川は少し笑う。

「私より向井くんの方が頼りになる気がするけど」

「…そんなことないよ」

伏せ目がちになった俺に、夏川は表情を戻して真剣な目をした。

「もしかしたら、その片桐が何か悩んでそうなのも…俺が原因かもしれないと思うし」

「…どうしてそう思うの？」

「……」

尋ね返されて、俺は少し沈黙する。UFOキャッチャーの台に向かっていていた一真も、手を止めてこちらを見つめていた。

「……勘？」

まさか繋いだ手をさりげなく離されたなんてことは言えず、俺は自信なさそうにそう答える。一真は「何だそれ」と呆れたように言っただけで、夏川は真面目な顔をしたまま小さく頷いてくれた。

「分かった、私でできることがあつたらやってみる」

「ありがとう」

ホッと安堵の息を漏らした俺に、彼女は今度は柔らかい笑顔を向けた。

「でもね、向井くん」

「…ん？」

「もし向井くんの言うように…華江の元気がないのが向井くんが原因だったとしても、だよ？」

「うん」

「明日にはきつと、そういうの全部うまくいっちゃうよ」

言い切った夏川の笑顔は、言葉で表現するなら「キラキラ」していた。恐らく、今まで何人もこの笑顔に救われてきただろう。それを知っているから、俺は自然と笑うことができた。

「根拠は？」

笑顔を返しながら尋ねた俺に、夏川はガッツポーズを見せながら元気に答える。

「勘!!!」

彼女のそんな言葉に、一真は心底呆れた顔をし、タクミ先輩は顔を背けて吹き出すのを必死でこらえていた。だけど俺は…そんな一言に救われた気がしたんだ。

「ありがとう」

不思議と、心が軽くなった気がする。夏川が大丈夫だと言うと本当にそんな気がするから不思議だ。

そして、結局この翌日には彼女の予言が当たることになる。

だけどそれが分かるのは、この時の俺にとっただけだ。少し先の話だ。

名もない花（前書き）

「COOL」本編「Link」後、夏休み中の一真の話です。

## 名もない花

友人からの着信音で起こされたのは、まだ朝の7時を回った頃だった。寝ぼけた仕草で手元の携帯電話を手繰り寄せると、そこに浮かび上がる名前は中学時代のクラスメイトのもの。

そういえば昨日、久々にメールを試してみたけれど夜遅くのことだった。その返事を打つタイミングを逸していて、早朝に電話をかけたのだらうと思う。

「：なんだよ」

起こされて不機嫌きわまりない声で出たが、相手はそんなことには慣れていいのか気にした様子もない。

『つつか「なんだよ」はこっちのセリフだっつーの』

どこか興奮した様子その友人：瑛人は朝に似つかわしくない高いテンションでそう言う。：まったく、起こされなければ後数時間は寝られたつていうのに。：せつかくの夏休みの朝を台無しにされた気分で、俺は携帯を耳にあてたままカーテンを左右に開いた。まだ7時だというのに既に外は昼間のように明るい。差し込むその日差しに眩しそくに眉を寄せていると、瑛人はまくしたてるように電話の向こうで続けた。

『久々にメール寄越したと思ったら：「もう日本に帰ってきてる」う？ そういうことは早く連絡しろって！』

中学卒業と同時にアメリカに発っていた俺は、一年と数ヶ月をあちらで過ごした後単身で日本に戻ってきていた。編入するのに選んだ高校は中学時代の地元からは相当離れた場所にあつたので、今で

は高校近くで一人暮らしをしている。だから中学時代の連中に偶然会うなんてことはなかったし、連絡するのも何もかもが後回しになってしまっていた。

当時一番仲の良かった瑛人にメールするのさえ、やっと昨日の夜になって思いついたくらいだ。

『しかもいきなり「明日会えるか」って…急すぎだろ』

そう文句を言いながらも、瑛人は嫌そうな口調ではなかった。それに笑って応じながら、俺はベッドから立ち上がる。

『ちょうど今日、克義たちと会う約束があるからお前も来いよ、一真』

これまた中学時代のクラスメイトの名前に、俺は「ああ」と二つ返事で頷いた。懐かしい…とは思うが、恐らく日本にいたとしても高校が離れてしまえばこれくらいたまにしか会わなかっただろうとも思う。

『ああ、でも…』

「？」

俺が返事をした途端に何かを思い出したかのように、瑛人は何かを洩るような声を出す。少し逡巡した後、「実はさ」と言葉を継いだ。

『今日みんなで集まるのは、ちょっと行くところがあるからで…』

「…？ 俺が行ったらずいのか？」

『いや、そういうわけじゃない。一真さえよければ一緒に行こう』

そう言う瑛人だったけれど、どこへ行くのかは電話の中では明言しなかった。ただ「来れば分かる」と曖昧な言葉だけ残して、時間と待ち合わせ場所の約束を取り付けると早々に電話を切った。



\*\*\*\*\*

「なるほどね……」

集まった連中に待ち合わせ場所でその後の予定を聞いて、俺は小さくそう呟いた。そこにいたのは俺や瑛人が仲良くしていた連中ばかりで、どいつも1年ちよつとの月日ではあまり変わった様子もない。懐かしいと思うと同時に、それよりもその後訪れる場所を聞いたことでやはりどこか複雑な感情が渦を巻く。

「悪い、一真。言ったら来ないかと思ったから」

「……いや、別にいい」

全員で揃って乗った電車の窓側にもたれた俺に、瑛人は申し訳なさそうにそう謝った。

連中がこれから向かうのは、墓参りだった。

須田先輩という……俺たちの小、中学では有名すぎた先輩の、だ。

誰からも好かれていて、誰からもその死を惜しまれた人だった。だからこそ瑛人たち後輩も、今でも彼の命日に墓参りに訪れるんだ。

「俺らは毎年来てたんだけど……さすがに一真は誘えなかった」

正直に、瑛人が嘘のない言葉を口にする。それは、須田先輩のことですつと苦しんでいる愛海先輩に、俺がずつと片想いをしていたからの配慮だろう。

「だけど……そろそろお前も解放されてもいいんじゃないかって、今日電話しててふと思って」

「……………」  
そういう瑛人の屈託のない笑顔は、いつもその笑みで誰かの救いになる「あいつ」のそれと似ている気がした。

「一真が日本に帰ってきて編入したっていう高校…確か愛海先輩と同じところだろ？」

「……………ああ」

「どうだった？ 会えた？」

「会えたよ」

電車がそれなりに混んでいたせいで、他の連中とは少し離れた場所に乗ったためか、瑛人は遠慮なく尋ねてくる。

「わざわざ家族と離れてでも愛海先輩の近くにいることを選んだってことだろ？ でもお前のことだから、きつと愛海先輩に自分の好意を押し付けるなんてことしなかったんだろ？ もう、そろそろ須田先輩への気兼ねとか愛海先輩への想いとか…お前のそういうの全部報われていい頃だと思う」

「……………」

そうだろうか。少なくとも俺は、自分の感情を優先させたただけで須田先輩に「気兼ね」をしていたわけじゃなかった気がする。

そう口にしたけれど、瑛人は苦笑いを浮かべて続けた。

「お前は結局、他人の思いを優先して自分の感情だけを押し切ったりするタイプじゃねえよ」

「……………どちらにせよ、報われることはねえな」

「……………それはまだ…タクミ先輩が？」

「いや、あの2人はもう別れたけど」

窓にもたれかかったまま、俺はふと外を見やる。駅近くになってきて徐行し始めたその速度の向こう側に、初めて見る景色が広がっていた。

電車を下りると他の連中がまた近くに来たため、瑛人はそれ以上俺とその話を続けるのをやめた。それぞれの高校の話や、俺のアメリカ滞在中の話で盛り上がりながら、墓地までの道を歩く。7月下旬のうだるような暑さの中、途中で墓に供える花も買った。

瑛人は、中学時代からずっと俺の愛海先輩への想いを見てきた。だからこそ「報われてもいい頃だ」と言うんだろう。

だけど多分、俺はもうこの時知っていた。自分の想いが報われることは、この先ないだろう、と。それは投げやりになったわけでも「諦め」でもない。

ただ、本当に「知っている」だけだ。

「あれっ？」

墓地に着いた時、誰か一人が不意にそんな声を上げた。そうしてその目線を全員で追った先に、一つの墓の前で佇むスラッとした影を見つける。

「…愛海先輩!？」

連中の誰もが驚いて、何人かの声が重なった。日傘をさして、俺たちの目当てでもあったはずの墓の前にいた彼女は、ゆっくりとこちらを振り返る。

……泣いているかと思った。だけど意外にも、彼女は振り向いてそのまま俺たちに向けてニッコリと笑顔を見せた。

「皆も来たんだ？ 私もさっき来たところ」

「そうなんですか！ お久しぶりです」

「うん、久しぶりー」

屈託なく笑う彼女の表情は、最近学校で見るものとまた違って見える。こいつらに会ったせいか、それとも彼女の中での意識改革のせいか。その笑顔は、中学時代のそれと被る。

「ただ須田先輩やっぱり人気みたいで、もう花もお菓子も飾るところがあんまりないのよー」

笑って言いながら、彼女は目の前の墓を振り返る。確かにそこには、もう既にたくさんの方が訪れたのだろう物が所狭しと並んでいた。

「あ、俺たちやりますよ」

「ありがとう」

自分たちの持ってきた花を掲げて見せながら、誰かがそんな風に言った。それに軽く礼を言って、愛海先輩も自分が手にしていた花を託す。

そうしてあいつらは、もう既に今日どれほど水をかけられたか分からないその墓をそれでも掃除し始めた。持ってきた水をかけ、線

香をたく。それを後ろで眺めていた俺の隣に、日傘を持ったまま愛海先輩が並ぶ。

「柴田くんも来てくれたんだ、ありがとう」

「……………いえ」

「こんなに皆が来て賑やかにしてくれて、先輩もきつと喜んでるだろうね」

笑う彼女の方を、俺は振り向かなかつた。ただ前を凝視して、あでもないこうでもないと言葉を飾るのに四苦八苦する連中を眺める。そんな俺に気づいていないのか、彼女はそのまま言葉を継いだ。

「…私、去年まではここにも来られなかつた」

独白のようなその言葉は、確実に俺に向けられたものと分かっているのに。

「でも、今年はやつと来ることができたわ」

どうして、こんなにも胸に空しく響くだけなんだろう。

「ありがとう」と、愛海先輩は最後に続けた。

俺とハルカのおかげだ、と。

でも…それは違う。

きつかけはハルカかもしれない。あいつと一緒に愛海先輩の話を聞いたのは確かに俺かもしれない。それでも、最終的に愛海先輩を前へ進ませたのは、他でもない彼女自身だ。

「愛海先輩ー、これどうしたらいいと思いますー？」

結局うまく飾ることができなかつたのか、瑛人が彼女を呼んだ。

「どれどれー？」

楽しそうに笑いながらそちらへ再び向かう彼女は、もうきつと泣かないんだらう。凜とした後ろ姿は見とれるほど眩しくて、俺は思わず目を細めた。

ずっと来ることができなかつたここに、今彼女が立っている。直視できずにいた須田先輩の死を乗り越えて、今笑っている。そうして自分の足で立ち上がった彼女に、俺ができたことなんてきつとほとんどない。

…だから、「知ってる」んだ。

彼女の傍に、俺の居場所がこの先もできるはずがないってことを。俺がいなくなつて、彼女には何の影響も及ぼさないことを。

何年片想いしただらう。

それでも、年月の長さは関係ない。今すぐに気持ちが悪くなるわけでも、諦めるつもりでもない。ただ、彼女にとって俺が必要な存在かそうでないか…直感的に感じ取ってしまった。

どうしてだらう。理屈じゃない、頭で考えるよりも胸の方が先にそう予感してしまっているんだ。

「…変な感じだな」

首を捻って呟いた俺のそれは、胸の痛みをごまかしたただけだった

のかもしれない。

\*\*\*\*\*

まだこの後用事があるという愛海先輩とは駅前で別れ、俺も、これから遊びに行くという連中を見送って家へ帰ることにした。

誰もが俺に気を遣ったのか、それを咎められもしない。ただ夏休み中にまた何回か会う約束をして、笑ってその場で別れた。

陰鬱な気分も、遊びでごまかせるようなものでもなかった。だから、帰った方があいつらにもそれ以上気を遣わせない最善の策だっただろうと思う。

606

「……」

途中で、気分転換も兼ねて一駅分早く下りた。そこは住宅が多くて騒がしさもない小さな駅の駅だ。この気分だと人の喧騒は余計にうるざりしそうだったから丁度いい。一駅一駅の区間が広い路線だから歩く結構あるけれど、今の自分にはそれが逆に好都合のようにも思えた。

「……つと、もうちょ……っ」

住宅街を抜けて自宅マンションへ向かおうとしていた途中で、人のほとんどない角の向こうからそんな声が聞こえてきた。曲がる

とそこにいたのは一人の女で、何やら必死に背伸びをして高い木の枝に張り付いている紙に手を伸ばしている。どうやら手にしていたその紙を風に飛ばされてしまったようだ。150センチちょっとくらしいの身長で必死で背伸びしても、「もうちょっと」「も何もないだろうと思うんだが…」。

「……………」

黙ったまま後ろから手を伸ばし、スツとその紙を取ってやる。こんな時に自分の長身が役に立つとは思っていなかった。取ったそれをそのままその女に差し出そうと振り返って、俺は思わず目を瞠る。向こうも顔を仰向けて俺を見上げ、「あっ」と声を出した。

「か、一真くん！」

「……………」

後ろ姿では分からなかった。正面から見るその女は、同じ学校の生徒だった。

名前は、野崎茜。ハルカたちを除いてほとんど親しい女子のいな  
い俺が、珍しく話をする女だった。同じクラスでもない彼女と転校  
生の俺がそもそも知り合ったきっかけは、上級生の陰湿ないじめに  
あっていたこいつを流れて助けたからだ。

「ありがとう。…もう、全然届かないからどうしようかと思ってた  
ところで…」

「お前『もう少し』って言ってなかったか」

「…うっ、聞いてたの？ あれはほら…『全然無理』って思うより、  
『もうちょっと』って言った方が本当に届きそうな気がしたとい  
うか…」



「何だそれ」

意味の分からないことを言う野崎に、俺は思わず笑ってしまった。その妙な前向き加減は嫌いじゃない。

「一真くんは？ 出かけるところ？」

俺から紙を受け取りながら、野崎はそう言って見上げる。

「…いや、出かけてきたとこ」

答えながら目に入ったその紙は、どうやら部活で使う重要なものらしく家庭科部の名前が入っていた。

そんな重要なものを飛ばすか？ そう思って目を細めて野崎を見やると、あいつは「え？ な、何？」とビクついたように肩をすぼめる。

「お前ホントにトロいよな、色々と」

「……うっ、そんな正面から本当のこと言わなくても…」

自分でも認めているらしくあまりにも弱気な返答をするので、俺は「ハハハッ」と今度は声をたてて笑ってしまった。

そしてそれから、ふと思う。

「…お前はあれだな、確実に一人じゃ生きていけねえタイプだよな」  
思ったことを正直にそう口にしてしまっていたのはなぜか…。  
自分でも分かったのは、同時に頭をよぎったのが愛海先輩の凜とした姿だったってことだけだ。

脳裏に浮かんだ彼女のその姿は、目の前の野崎とは全く正反対だ。

どうしていきなりそんなことを言われたのか理解できていない野崎だったけれど、一瞬目を丸くした後苦笑いを浮かべてみせる。

「うん、それはもう自分でも自信ある」

「自慢げに言うな、自慢げに」

笑いながら言った瞬間、なぜかさっきまでの鬱々とした気分が自分の中から消えているのに気づいた。

それと同時に思わず胸に抱きかけた感情にハッと我に返り、慌ててそれを奥底へと押しこむ。

愛海先輩の隣に俺の居場所がないことを直感的に感じ取ってしまったように…。

この時一瞬だけ理屈もなく感じた想いに、名前をつける日がいつか来るのだろうか。

改めて礼を言い、手を振って去っていく野崎の後ろ姿を見送りながら、俺は漠然とそんなことを考えていた。

## 名もない花（後書き）

どんなに好きでも、「縁がないな」っていうのを漠然と感じ取っちゃう相手っていると思うんですね。

…でもこれで2人の話が終わるわけではないのですが…。

一真が愛海と茜との間でどういう決断をするかは、今後「cool」の続編を書く時に重要な話になるかなと思います。

「cool」を読んでくださっている人の中にはもちろん茜のことが分からない方もいらっしゃると思います。

もしよろしかったら「bitter」シリーズの「akane」という番外編をご覧ください

## ONE (前書き)

向井くん目線の日常的(?)な番外編です。

たまには男2人の友情話なんてものも。

「そう言えばお前、よくあんな奴と一緒にいられるよなあ」

ある日の放課後、教室に残ってクラスの連中と談笑していた時に誰だかが不意に俺にそんなことを言った。言われた言葉の意味がわからずに、俺は小さく首を傾げる。「あんな奴？」と復唱すると、彼らはため息まじりに「柴田だよ」と答えた。

「あいつ偉そうだし、転校初日からうちのクラスの女たちに暴言吐いたりしたしさ」

「そうそう。なんかすげえ俺様で、俺らのこと見下してるよな」

「性格悪いっつーか…あれはそんな次元じゃねえな、人間として最低な域だろ」

「夏川とかも仕方なく構ってやってんだろーな。あ、向井、もしかしてお前も同情で付き合ってる？」

口々に続いた彼らの言葉は、留まることを知らないように淀みなく出てくる。その勢いに気圧されるように面食らった俺だったけれど、その発言一つ一つを頭の中で咀嚼すると、自然と小さくため息が漏れた。

「一真はそんな奴じゃないけどなあ」

呟くように言ったが、彼らの発言を否定する意味では十分だったはずだ。その一言に、その場にいた全員がこちらを振り返る。

「確かに偉そうなところあるけど言うことって正論だし。転校初日のあの発言も、まあ周りが騒ぎ立てたからっていうのもあるし…」  
続けて言うと、彼らは互いの顔をそれぞれ見合わせてから揃って

「はあ」と大きく息を吐き出した。それから、「向井い」と情けない声で俺を呼ぶ。

「お前、もうすっかり洗脳されてんだな」

「……『洗脳』？」

「騙されてるって、絶対。お前人がイイからさあ、利用されないように気をつけるよ？」

本気で心配しているような「フリ」で、そのうちの一人がそう告げた。俺はこの時、初めて眉を寄せた。そして再び反論しようと口を開きかけた。その瞬間、だった。

「直」

他に誰もいなかった教室のドアが半ば乱暴に開けられて、そこに一つの影が立っていた。顔を上げてそちらを見やると、そこにいた一真が「帰るぞ」とこちらに一言投げかけてくる。「やばい」と言わんばかりに彼らは目を見開いていたが、一真はそれを気にする素振りもなくそのまま廊下を歩き出して行ってしまった。

「…聞かれたかな」

誰かがボソリと小さく呟く。当たり前だ、と内心で毒づいて、俺は鞆を持って一真の後を追った。

「一真」

少し先を歩いていた一真は、呼びかけると肩越しに振り返る。

「名取の用事、何だった？」

さっきのことは敢えて口にしなない方がいいかもしれない。そう思っ  
て、俺は全然関係ないそんなことを口にした。HRが終わって今  
まで担任の名取に呼び出されていた一真は、内容を思い出したのか

少しだけ不機嫌そうに眉を寄せる。

「…別に。単にこの前のテストのことでちょっとな」

短く答えて、一真は「それより」と更に顔を顰めて再び口を開いた。女子たちが歓喜の悲鳴を上げそうなくらいの整った顔立ちが、機嫌悪そうに歪む。

「直、お前な、ああいう時は放っておけばいいんだよ」

敢えて振らなかつた話題を、一真の方から口にしてきた。『ああいう時』が何なのか、尋ね返さなくてももちろんわかる。

思わず小さく肩を竦めた俺に、一真は帰るために昇降口へ向かいながら続けた。

「あんな奴ら正面から相手にしたって仕方ねえだろ」

「…まあ、そうなんだけどさ」

確かに、別に相手にする必要はなかった。一真の良さは俺や夏川たちが分かっていればいいはずのことで、分かるうともしない連中に説く必要もない。

…だけど…。

「でもやっぱり、気分悪いからさ」

友達のことを悪く言われて、黙っていられるほど俺も人間ができていないからだ。

続けた俺の言葉に、一真が「はあ」と大きくため息を吐く。

「お前、真面目すぎんだよ」

「…そうかな」

苦笑いを浮かべて、俺は隣の一真を横目で見やった。

でも、俺じゃなくても…。

たとえばさっきあの言葉を耳にしたのが夏川や片桐、小野寺でも、皆、俺と同じように反論したんじゃないだろうか。

そう思ったけれど、敢えて一真にそれを告げるのはやめておいた。

\*\*\*\*\*

翌日、ある異変を感じ始めたのは昼休み頃からだった。

朝から食欲はなかったが、どうも胃の辺りがキリキリ痛む。意識すればするほど痛みが増しそうだったので、俺は気づかないフリをすることにした。だけどそんな風に自分を騙すのが、うまくいったとはとても思えなかった。

その痛みがHR後には「キリキリ」なんてかわいいものじゃなくなった。机に突っ伏してしまいたくなるくらいの痛みと、壮絶な吐き気。でも後は帰るだけだから、家に着くまでの間、もう少しだけの辛抱だ。そう思って、何でもないフリをしてクラスメイトたちと挨拶を交わした。

…ちょうど、その時だった。



「向井い」

昨日教室で話していた連中の一人が、後ろから声をかけてきた。昨日のことの気まずさからか、連中と話をするのは今日が初めてだ。向こうからは、何となく話しかけづらかったのかもしれない。

「何？」

胃の辺りを押さえながら立ち上がった俺は、後ろを振り返った。そんな俺の様子に気づいた素振りもなく、彼は言葉を継ぐ。

「実は今日さあ、俺掃除当番なんだけど…どうしても外せない用事があるから変わってくんねえかな」

「…え……」

「頼んだぜ、じゃあな」

一度顔の前で手を合わせた彼は、こちらの返事を待たないまま踵を返してしまう。

…はつきり、断ればいい。自分でもそうちゃんとわかっている。でも今の俺には、行こうとしている彼を呼びとめ、自分の状況を説明する方が気力を必要としていた。その方がよっぽど面倒くさい。

適度にモップがけだけして、帰ろう。そう思ったけれど、胃は更に痛みを増した。

昨日は俺に「一真に利用されるな」とか言った奴が、よくも掃除当番なんて押し付けられたものだ。油汗すら出てきそうなほどの体調の悪さを感じつつも、俺は心の内でそう吐き捨てた。

「あれ？向井……」

モツプを持って廊下に出たところで、俺に当番を押し付けたあいつが仲間とそこで談笑していた。おそらく、これから揃って遊びにも行くんだろう。行こうとした時に俺を見て、ふと足を止める。

「なんかお前、顔色悪くねえ？」

俺の様子によろやく気づいたらしいそいつは、少し覗き込むようにして俺を見た。

「……吐く」

モツプにもたれかかるようにしていないと倒れてしまいそうな俺は、口元を手で覆って呻くようにそう言うのがやっとだった。けどその一瞬、そこにいた連中がバツとそれぞれ少しずつ後ろに後退したのがわかった。

「だ、大丈夫かよ、お前。あんま無理すんなよ」

『無理するな』？ お前が当番を押し付けたんだろう。もつと他に言うことはないのか、とか、色々瞬時に思ったことはあつたけれどそれを口にする余裕なんてあるはずもなかった。

「直？」

連中の声を聞きつけたのか、教室から一真が顔を覗かせた。そうして俺の顔を見て、瞬時に表情を変える。

「お前……っ」

相当青ざめた顔でもしているんだろうか。俺の様子に、一真は慌てて廊下へ飛び出してきた。

「保健室行くぜ。歩けねえんだつたら掴まれ」

一真とは同じ身長なので、肩を借りるのも楽じゃない。それでも一人で歩くのも辛かったので、俺は言葉に甘えて一真の肩に腕を回

した。

「おい、お前」

俺を支えて歩き出しながら、一真は前にいたあいつに声をかける。顔を上げた彼を、一真は誰もが怯みそうな視線で睨みつけた。

「なんで掃除当番のお前が帰ろうとしてて、当番じゃねえ直がモツプ持ってんだよ」

「…そ、それは…向井が変わってくれらって…」

「…お前、昨日俺のこと何て言ってたっけなあ？」

白々しい口調でそう言う一真に、あいつは本格的に怯えているようだった。青い顔をして、唇を少し震わせて一真を見上げている。

「…とりあえず今はこいつを保健室に連れてくけど…」

俺を連れて彼の脇をすり抜けながら、一真は最後に横目で一睨みする。

「後で、覚悟しとけよ」

当事者である彼だけじゃなく、彼の仲間もすっかり一真の視線に硬直してしまっていた。

「おい、直」

お前がもうちょっと小さかったらかついで行けるんだけどな、とか何とか文句を言いつつ、一真は俺を呼んだ。

「大丈夫か？ 気分悪いんだったら吐いちまえよ」

「……」

一真の肩にぐったりと寄りかかって歩きながら、俺はえづきそうな口元を何とか押さえて堪える。

「…今吐いたら…一真にかかる」

それでも小さく答えると、隣で一真は「はああ？」「とわざとらしいほどに眉を寄せた。

「かかったからって何なんだよ、死ぬわけでもあるまいし」  
大げさに話を飛躍させながら、一真はそう言う。…いや、そういう次元の話じゃないだろうとツッコミを入れたところだったけれど、今の体調ではそれも叶わない。普通の人間なら、さっきのあいづらみたいに一歩退きたいところだと思っただけだな。

「吐けるなら吐いちゃった方が楽だぜ」  
続いた言葉に、俺は虚ろな目で一真の横顔を見据えた。

……そう、こういうところなんだ。  
俺や夏川たちが、一真に惹かれてしまうのは。

漠然と思いながら、俺は遠くなりそうな意識を何とか繋いで歩き続けた。

\*\*\*\*\*

保健室まで何とか無事に辿りつき、結局俺は吐かずに済んだ。

保健医にもらった薬を飲んでベッドに横になっていると、少しずつ痛みも吐き気も和らいでいくのがわかる。即効性のある薬なのか、はたまた俺が単純なのかはわからないけれど…。

「ストレスね、きつと」

胃の痛みをそう解釈したらしく、保健医はそう俺に告げた。一真から一連の流れを聞いて駆けつけてくれたらしい夏川たちは、それを聞いて少しだけ目を丸くする。

「ストレス？」

小野寺が、意外だと言う風に眉を持ち上げてそう復唱した。

「向井でもストレスなんて感じることもあるんだー」

続けた彼女の頭に、一真がゴンッと遠慮なく拳を落とす。…いや、女の子だからさすがに少しは手加減してるかもしれない。

「お前のそういう無神経な一言が直の胃に穴開けんだよ」

「ええっ、無神経だった？」

救いを求めるように尋ねられた片桐と夏川は、「うーん」と苦笑いを浮かべて互いの顔を見合わせる。俺はベッドに横になったまま、そのやりとりを見やって笑ってしまった。

「少し顔色も良くなったみたいだし、私、名取先生のところに行ってくるわ」

俺を見て、片桐がそう言って椅子から立ち上がる。

「帰れそうだったら車で送ってもらった方がいいでしょ」

担任を足に使う気にいるらしく、片桐はそう言ってそのまま踵を返した。

「あ、じゃあ、私は向井くんの鞆取ってくるね」

夏川もそう言って立ち上がり、それに同調した小野寺も一緒に保健室を出て行く。その3人の後ろ姿に「ありがとう」と力なく礼を言い、俺は再び天井を向いた。

「…騒がしい奴らだな、全く」

彼女たちを見送った一真は、呆れたように言いながらも口元は綻んでいる。上を向いたまま、俺はそんな一真に「なあ」と小さく呼

びかけた。こちらを振り返った一真に、「ありがとう」と改めて礼を言う。それを受けて、一真は少し照れたのか尊大に椅子に座りなおしながらぶっきらぼうに言った。

「ま、お前はとりあえず早いところ良くなるんだな」

こんな時にまで俺様な口調なその一言に、俺は思わず笑ってしまふ。

「お前さ、昨日も言ったけど真面目すぎるんだよ」

説教じみた言い方で、一真は続けた。

「俺みたいに適当に力を抜け、力を」

言われて、俺は「…うん」と真面目に頷く。予想外の素直な答えだったのか（多分ツッコミを入れて欲しかっただけなんだろう）、

一真は「…だからそれが」と続けようとした。

その続きを遮って、俺は自分の言葉を継ぐ。

「俺も、一真みたいになりたかったな」

本気で言ったそんな一言に、一真は驚いたらしく目を丸くした。

恐らく、惹かれるということとはそういうことなんだ。これが異性なら恋愛感情になるのかもしれないけれど。同性だからこそ、「自分もあんな風でありたかった」と。そんな風に憧れるのかもしれない。

「……………」

俺があまりに生真面目に答えすぎたので、一真はしばらく沈黙した。それから、肩を大きく竦めて唇を持ち上げて笑う。

「ま、ホントにお前が俺みたいになつたら方々から苦情が止まない  
だらうけどな」

特にあいつらとか、とさつき3人が出ていったばかりのドアを顎  
で示して、一真はそう言った。

「…そうかな」

「そうだろ。真帆なんか悲鳴あげて嫌がるぜ、絶対」

笑う一真に、つられるように俺も口元を緩める。

「個性つてのは、そういうことだろ。俺だってお前が羨ましいと思  
うからな」

続けた一真の言葉に、今度は俺が目を瞞った。

「…そう？ どこが？」

「『どこ』？ 改めて聞かれると難しいけどな」

はぐらかすように答えて、一真は小さく首を捻る。

「でも、そういうもんだろ。友情にしろ恋愛にしろ、人と付き合っ  
つてことは」

「…語るね」

「ま、たまにはな」

ベッドの傍らの椅子に座った一真は、長すぎる足を組んで窓枠に  
肘を置いた。その横顔を見据えてから、俺は小さく頷いて見せる。

「…そうかもしれない。俺、結局一真も夏川たち3人も、それぞれ  
羨ましいと思うところあるから」

つまりは、そういうことなんだ。

きつとそれくらい思える相手じゃないと、本当の友達付き合いな  
んでできないだろう。世界でたった一人しかいないその個人を尊重  
できなければ、きつと表面上の付き合いしかできない。

「やっぱり、すごいと思うよー」真は  
言っと、一真は数回瞬きを繰り返した。

自己完結した俺の言葉に、一真は「わけがわからん」と肩を竦める。

それを見やって、俺はすっかり胃の痛みが和らいだのを実感しながら、声をたてて笑った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4144v/>

---

Sweet&Cool

2011年10月13日11時49分発行